

東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 9

東京大学本郷構内の遺跡

# 浅野地区 I

情報基盤センター 変電室 1 地点

工学部風工学実験室地点

工学部風工学実験室支障ケーブル地点

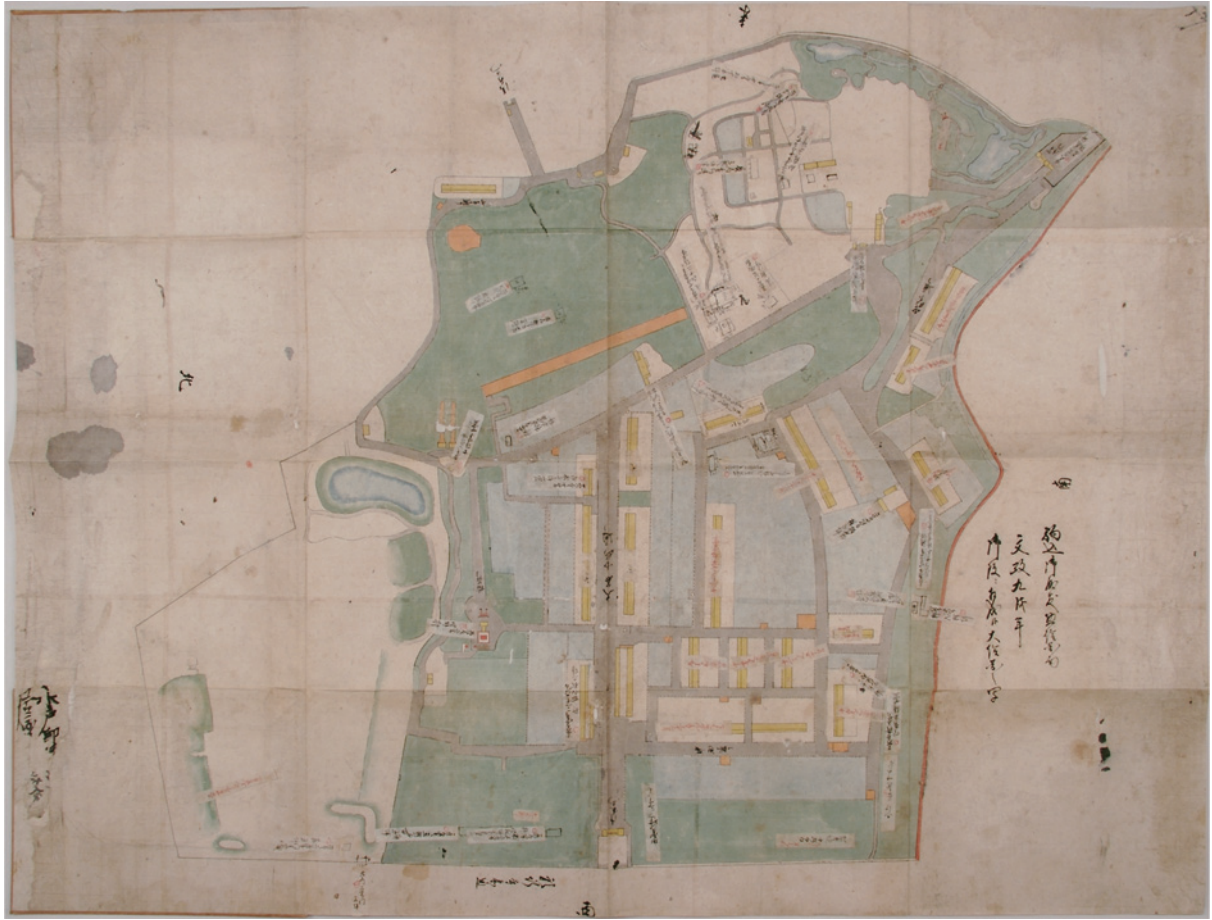
工学部風環境シミュレーション風洞実験室地点

工学部武田先端知ビル地点

2009

東京大学埋蔵文化財調査室





『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』(個人蔵)



航空写真 東京大学本郷地区・浅野地区・弥生地区2007年9月8日撮影  
(東京大学本部保全グループ提供)



武田先端知ビル地点 方形周溝墓



浅野地区出土 弥生土器

## 例 言

1. 本書は、情報基盤センター 変電室1新営、工学部風工学実験室改修、工学部風工学実験室支障ケーブル移設、工学部風環境シミュレーション風洞実験室新営、工学部武田先端知ビル新営に伴う発掘調査報告書である。
2. 各調査地点は文京区弥生2丁目11番16号、東京大学浅野地区に位置している。
3. 各調査地点の発掘調査は、東京大学埋蔵文化財調査が担当し、情報基盤センター 変電室1地点、工学部風工学実験室地点、工学部風工学実験室支障ケーブル地点を三浦工業㈱、工学部風環境シミュレーション風洞実験室地点、工学部武田先端知ビル地点を加藤建設株式会社に現地調査に関して助力をいただいた。
4. 各地点の遺跡番号、略号、調査期間等は以下である。

遺跡番号	遺跡名	工事種別	調査担当	旧遺跡名	遺跡略号	調査面積	試掘調査	事前調査	整理作業
本郷29	情報基盤センター 変電室1地点	新営	篠原（鮫島）和大、 現静岡大学	大型計算機センター地点	ACC	78㎡	1995.6.27	1995.7.18 ～7.31	2007.5～ 2009.4
本郷40	工学部風工学実験室地点	改修	篠原（鮫島）和大、 現静岡大学	工学部全径間風洞実験室地点	AFL	252㎡		1996.1.22 ～3.7	2007.5～ 2009.4
本郷30	工学部風工学実験室支障ケーブル地点	移設	篠原（鮫島）和大、 現静岡大学		AFC	63㎡		1995.8.22 ～9.6、9.22 1996.2.19 ～3.7（補 足地点）	2007.5～ 2009.4
本郷53	工学部風環境シミュレーション風洞実験室地点	新営	原祐一		AFV	300㎡	1998.12.22～ 12.23	1999.1.7～ 1.25	2007.5～ 2009.4
本郷61	工学部武田先端知ビル地点	新営	原祐一		TS	740㎡	2001.5.7	2001.6.4～ 8.7、11.28 ～12.28	2007.5～ 2009.4

5. 本書の編集は、原祐一、堀内秀樹、香取祐一を中心に執筆者の協議の上行った。
6. 執筆はⅠ章が原祐一、Ⅱ章以降は各報告に掲載した。
7. 遺物写真は青山正昭が行った。
8. 遺構の浄書は、香取祐一、田中美奈子が行った。
9. 遺物の実測は、今井雅子、大貫浩子、坂野貞子、加藤理香が行い、実測図の浄書は、加藤、山田くりかが担当しデジタル化と版下の作成を行った。
10. 工学部武田先端知ビル地点検出の方形周溝墓の移築保存、同地点と工学部風工学実験室支障ケーブル地点から出土した弥生土器の保存修復は、武蔵野文化財修復研究所、府中工房に依頼した。
11. 工学部武田先端知ビル地点の土壌分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
12. 工学部武田先端知ビル地点の方形周溝墓出土ガラス小玉、明治時代の弾丸の材質分析は、小泉好延氏（武蔵野文化財修復研究所）、原祐一が、東京大学大学院工学系研究科原子力国際専攻タンデム加速器研究施設のPIXE分析法（荷電粒子励起X線分析Particle Induced X-ray Emission）によって行った。本報告の成果は、東大MALT平成13年度下半期共同利用採択課題14 E 02等の成果である。
13. 本書に添付したCD-ROMには、検出遺構一覧表・出土遺物一覧表、遺物組成表（xls形式）、遺構写真・遺物写真（jpg形式）、電子報告書（pdf形式）を収録している。

14. 発掘調査に伴う図面・写真・出土文化財は東京大学埋蔵文化財調査室が東京都目黒区駒場4-6-1駒場リサーチキャンパス、茨城県新治郡八郷町柿岡412東京大学柿岡教育研究施設内において、運用、保存、管理している。

発掘調査及び報告書作成にあたり下記の諸氏・機関よりご協力・御教示を賜った。記して謝意を表す。

(敬称略)

青木誠 青木哲 浅野長孝 池田悦夫 石川日出志 石原道知 磯村照明 伊藤博之 今村啓爾  
岩淵令治 丑野毅 仰木ひろみ 大竹完治 大塚達朗 岡田靖雄 岡山輝明 小野田恵 小俣悟  
風祭元 梶原慶子 加藤元信 川越美穂 川原理子 菊池力 菊池徹夫 君嶋俊行 小泉好延 後藤直  
小林紘一 小林善行 小林達雄 斎藤忠 齋藤洋一 佐々淳行 塩原都 鈴木暎一 鈴木啓介  
鈴木政治 春原陽子 蓼沼香未由 谷川章雄 垂水桃 知念理 徳川斉正 徳川眞木 戸田宏之  
永井博 中野忠一郎 橋本真紀夫 春成秀爾 福雅彰 藤尾隆志 藤本強 藤森照信 細谷恵子  
堀江武史 堀切重明 松岡克治 松崎浩之 水谷仁 林純子 峯田元治 宮崎勝美 森田信博  
森まゆみ 森本幹彦 山崎範子 山田しげる 山本實 横山淳一 吉田邦夫 米川裕治 渡辺貞幸  
渡辺延志 渡部森哉 蔵俊夫 蔵由美

鹿児島市立鹿児島玉龍中学校 東京都立向丘高校 財団法人水府明德会彰考館徳川博物館  
東京都公文書館 文京区教育委員会 文京ふるさと歴史館 松戸市戸定歴史館 茨城県立歴史館  
東京都立松沢病院日本精神医学資料館 集落研究会 日本石造文化学会 谷根千ウロウロ  
さわらび通信 大洗町の歴史と自然を楽しむ会 谷根千工房 東京大学教職員組合  
東京大学工学部教職員組合 弥生町会 里 朝日新聞 東京新聞 読売新聞 財団法人東京大学新聞社

加藤建設株式会社 株式会社パレ・オラボ 株式会社芳文社 小林石材株式会社  
特定非営利活動法人文化財保存支援機構 (JCP) パリノ・サーヴェイ株式会社 府中工房  
ニュートン編集部 三浦工業 三石耐火煉瓦株式会社開発部 山本書店 高半旅館  
武蔵野文化財修復研究所 鈴木徽章工業株式会社

(以下、東京大学) RIセンター 情報基盤センター 工学部風工学実験室 工学部武田先端知ビル  
工学部風環境シミュレーション風洞実験室 文学部考古学研究室 広報センター 史料編纂所  
原子力国際専攻タンデム加速器研究施設

## 凡 例

1. 遺構の実測図は原則として1/50で掲載している。その他の尺度の場合には、各図版にスケールを表示している。
2. 磁器・陶器・土器の実測図は原則として1/3で、その他の遺物の尺度は、各図版にスケールを表示している。
3. 実測図に付けられる記号は以下のことを表している。
  - ・ ▲ は高台、見込みなどの釉際を表しており、磁器と釉際の表現が困難な陶器に用いている。
  - ・ ◀→▶ は、人為的な磨耗痕、敲打痕を表している。
  - ・ ◀→▶ は、播鉢体部播目の範囲を表している。
  - ・ 遺物中心線上下端の破線は、推定口径、推定底径を表している。
  - ・ 本文中で記載した陶磁器・土器分類は『東京大学構内遺跡調査研究年報2別冊 東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類(1)』に、段階設定は、堀内秀樹「東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察」『東京大学構内遺跡調査研究年報』1に基づいている。
  - ・ 洋食器と判断した陶磁器は、「洋食器」と記載した。カップ&ソーサーなど上記分類に該当器種が存在しないものについては「分類なし」、該当器種が存在するものは分類に沿った。
4. 本文中の遺構番号のコードに付けた略号は以下の通りである。  
SB：建物跡 SD：溝 SE：井戸 SK：土坑 SP：小穴 SR：道 SX：性格不明遺構
5. 遺構断面図などに記載された標高は、東京湾平均海面（T.P.）を基準としている。
6. 座標数値は平面直角座標IX系で測地系は世界測地系を使用している。

○胎質

J (磁器)      T (陶器)      D (土器)

○生産地

A - 輸入陶磁器

- A1 景德鎮窯系
- A2 漳州窯系
- A3 德化窯系
- A4 龍泉窯系
- A5 宜興窯系
- A6 朝鮮
- A7 ベトナム
- A8 ヨーロッパ

B - 肥前系

C - 瀬戸・美濃系

D - 京都・信楽系

E - 備前系

F - 志戸呂系

G - 常滑系

H - 萩系

I - 萬古系

J - 大堀・相馬系

K - 丹波系

L - 堺系

M - 益子・笠間系

N - 九谷系

O - 壺屋系

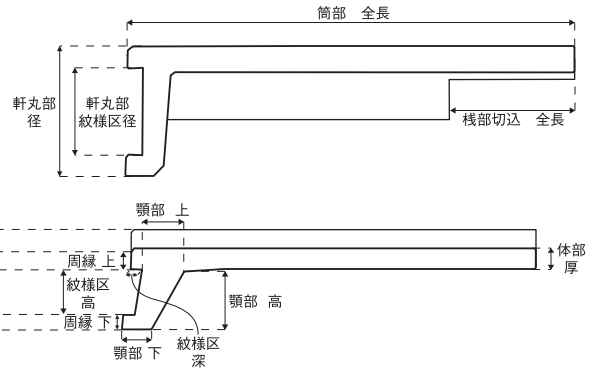
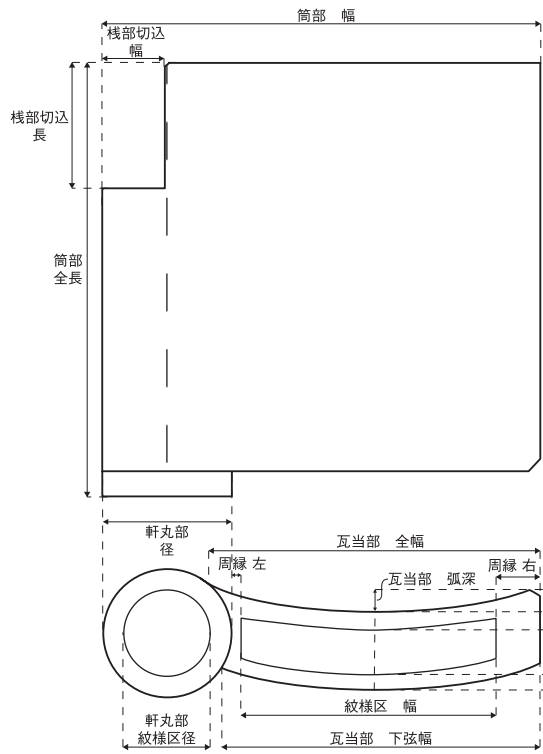
P - 淡路系

Z - 不明

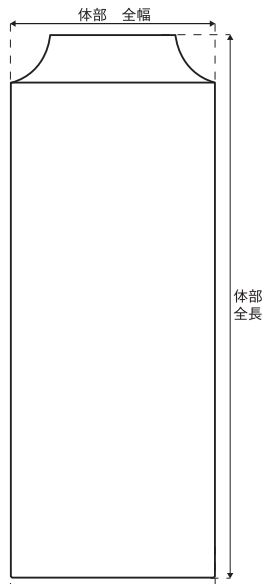
○器種

- |           |          |         |           |             |
|-----------|----------|---------|-----------|-------------|
| 1. 碗      | 2. 皿     | 3. 大皿   | 4. 爛徳利    | 5. 鉢        |
| 6. 坏      | 7. 猪口    | 8. 仏飯器  | 9. 香炉・火入れ | 10. 瓶       |
| 11. 御神酒徳利 | 12. 油壺   | 13. 蓋物  | 14. 筆立て   | 15. 壺・甕     |
| 16. 急須    | 17. 爛鍋   | 18. 合子  | 19. 水滴    | 20. 蓮華      |
| 21. 植木鉢   | 22. 花生   | 23. 片口鉢 | 24. 灰落し   | 25. 鬢水入れ    |
| 26. 茶入れ   | 27. 水注   | 28. 澆瓶  | 29. 搦鉢    | 30. 餌入      |
| 31. 火鉢    | 32. 柄杓   | 33. 鍋   | 34. 土瓶    | 35. 戸車      |
| 36. ちろり   | 37. 薬研   | 38. 手焙り | 39. おろし皿  | 40. 油受け皿    |
| 41. 油徳利   | 42. 行平鍋  | 43. 十能  | 44. ひょうそく | 45. 瓦燈      |
| 46. カンテラ  | 47. ほうろく | 48. 七輪  | 49. 涼炉    | 50. 五徳      |
| 51. 塩壺    | 52. 燭台   | 53. 蒸し器 | 54. 懐炉    | 55. 泥面子・芥子面 |
| 56. 碁石形製品 | 57. 玉    | 58. 鈴   | 59. 笛     | 60. 人形      |
| 61. ミニチュア | 62. 面型   |         |           | 00. 蓋       |

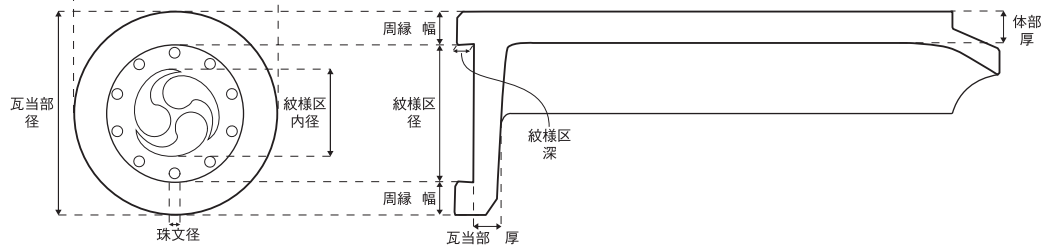




〈軒棧瓦〉



〈棧瓦〉



〈軒丸瓦〉

# 目 次

卷 頭 図 版	
例 言	
凡 例	
目 次	

## 報 告 編

### I 遺跡周辺の諸環境

第1節 地質的・地理的環境	1
第2節 歴史的環境と浅野地区の調査	2

### II 情報基盤センター 変電室1地点

第1節 調査に至る経緯	15
第2節 地理的・歴史的環境	15
第3節 遺構	16
第4節 遺物	21
第5節 動物遺体	26
第6節 情報基盤センター 変電室1地点の成果	29

### III 工学部風工学実験室地点

第1節 調査に至る経緯	37
第2節 地理的・歴史的環境	37
第3節 江戸時代以前	38
第4節 江戸時代以降	42
第5節 工学部風工学実験室地点の成果	66

### IV 工学部風工学実験室支障ケーブル地点

第1節 調査に至る経緯	73
第2節 地理的・歴史的環境	73
第3節 弥生時代	73
第4節 江戸時代以降	78
第5節 工学部風工学実験室支障ケーブル地点の成果	87

## V 工学部風環境シミュレーション風洞実験室地点

第1節 調査に至る経緯	91
第2節 調査方針・遺跡の一般公開	91
第3節 地理的・歴史的環境	91
第4節 遺構	92
第5節 遺物	108
第6節 工学部風環境シミュレーション風洞実験室地点の成果	115

## VI 工学部武田先端知ビル地点

第1節 調査に至る経緯	123
第2節 調査の経過と方形周溝墓保存の経緯	123
第3節 地理的・歴史的環境	124
第4節 弥生時代	124
第5節 江戸時代以降	135
第6節 動物遺体	173
第7節 武田先端知ビル地点の自然科学分析	178
第8節 工学部武田先端知ビル地点の成果	187

公開一覧

引用・参考文献

## 研究編

### I 東京大学浅野地区出土弥生土器の修復

.....	堀江武史	197
II 「向岡記」碑の保存修復について	石原道知	201
III 方形周溝墓の保存	石原道知	207
IV 墓の年代	吉田邦夫 小林紘一	211
V 東京大学浅野地区出土のガラス玉材質分析	小泉好延	215
VI 東京大学浅野地区の方形周溝墓における土壌分析	橋本真紀夫	223
VII 土器の紋様と玉類の孔	丑野 毅	231
VIII 弥生町遺跡の考古学的評価	篠原和大	241
IX 武田先端知ビル出土のガラス小玉の観察	小林照子	251
X 東京大学浅野地区出土瓦の考察	石井龍太	261

XI	東京大学工学部武田先端知ビル地点出土陶器製インク瓶について .....	大貫浩子	271
XII	向ヶ岡弥生町の研究.....	原 祐一	281
XIII	徳川齊昭と水戸藩駒込邸.....	原 祐一	325
XIV	「向岡記」碑の研究.....	横山淳一	340

おわりに

# 報 告 編



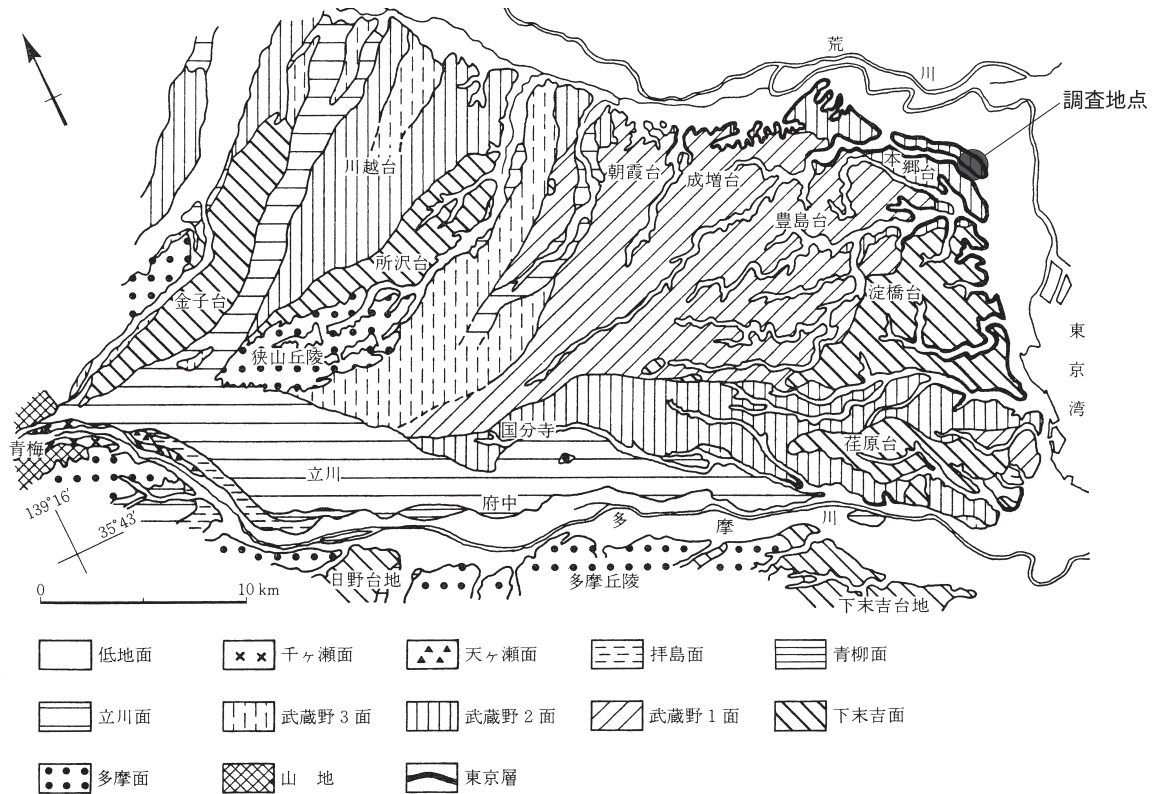
# I 遺跡周辺の諸環境

## 第1節 地質的・地理的環境

地質的地理的環境は、大成基礎設計株式会社2000『東京大学（工）研究・実験棟「武田先端知ビル（仮称）」新営工事に伴う地盤調査報告書平成12年11月』（註1）を引用した。

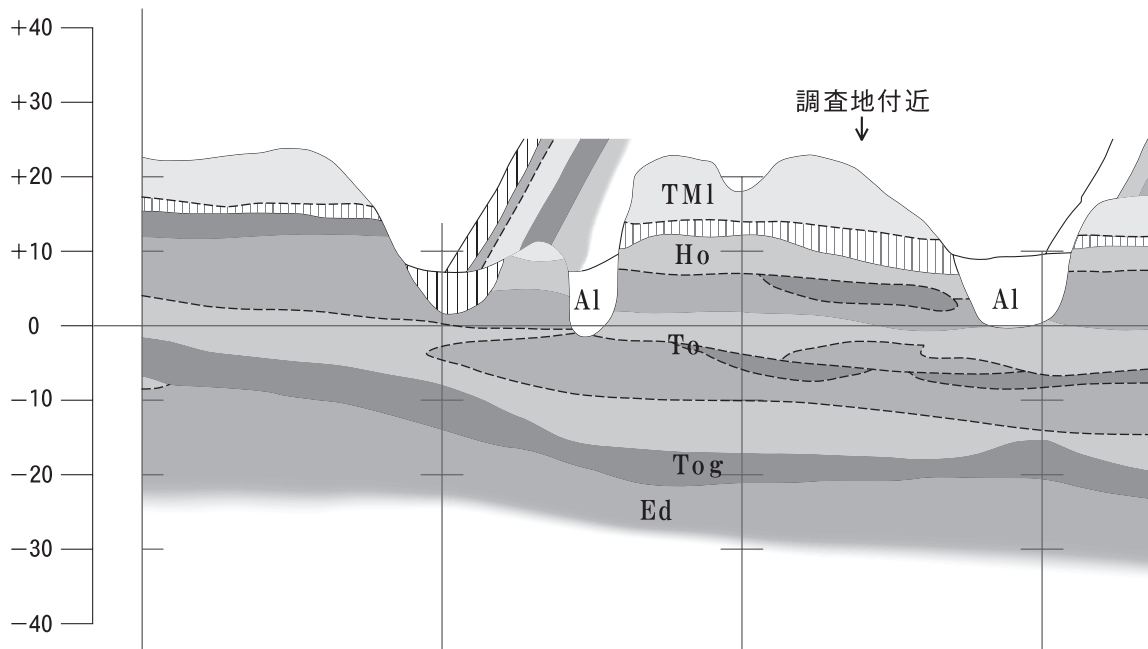
浅野地区は武蔵野台地と呼ばれる洪積台地で、調査地点はこの台地の北東縁部に発達する本郷台の端部にあたる。本郷台は、藍染川（谷田川）と谷端川により開析された谷（沖積面）に挟まれた幅1.5m～4.0m、北西～南東にかけ長さ10km程度に伸びた台地で、この台地の地形面は武蔵野面の中で2番目に地質時代の古い武蔵野Ⅱ面（M2面）に区分される。

I-2図は調査地周辺の模式地層断面図である。I-2図によると本郷台上の地層構成は上位より関東ローム層→本郷層→東京層→東京礫層→江戸川層なる層序である。ボーリング調査の結果は、調査地内の地層構成はI-2図と等しいものである。今回のボーリングでは江戸川層の分布まで確認しており、その地層構成は上位より関東ローム層（ローム→凝灰質粘土）→本郷層（砂質土→砂礫→砂質土）→東京層（粘性土→砂質土→粘性土→砂・粘性土互層）→東京礫層（砂礫）→江戸川層（砂質土）となっている。



I-1図 調査地点と東京の地形

大成基礎設計株式会社2000『東京大学(工)研究・実験棟「武田先端知ビル(仮称)」新営工事に伴う地盤調査報告書平成12年11月』p.11



TMI：関東ローム層　Ho：本郷層　To：東京層　Tog：東京礫層　Ed：江戸川層

I-2図 模式地形断面図

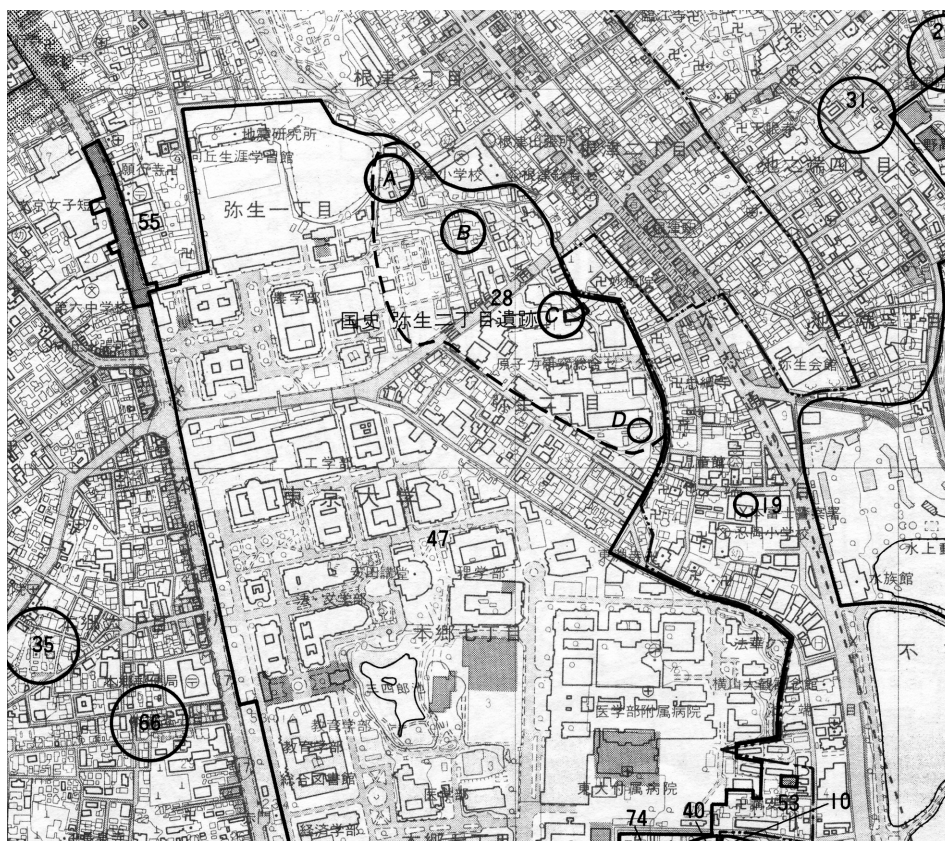
大成基礎設計株式会社 2000『東京大学(工)研究・実験棟「武田先端知ビル(仮称)」新管工事に伴う地盤調査報告書平成12年11月』p.12

## 第2節 歴史的環境と浅野地区の調査

東京大学浅野地区は、文京区弥生2丁目11番地16号に位置する。この地の旧町名は本郷区向ヶ岡弥生町で明治17(1884)年東京大学の学生であった有坂鋁蔵、白井光太郎、坪井正五郎が後に「弥生式土器」の名称由来となった土器を発見した場所でもある。浅野地区の一角に弥生町会有志によって建立された「弥生式土器発掘ゆかりの地」碑が「最初の弥生土器発見」の記念碑となっている。2008(平成20)年3月「東京都遺跡地図」のインターネット公開版(註2)によれば、浅野地区周辺の遺跡名には、弥生土器の発見に因んだ遺跡名が付されている。「28 弥生町遺跡群」「28-A 弥生町貝塚」「28-B 弥生町浅野邸貝塚」「28-C 向ヶ岡貝塚」「28-D」「47 本郷台遺跡群」で、大きくは本郷台遺跡群に含まれる。本報告は近代史、東京大学史復元の観点から近代以降についても調査対象としているが、「東京都遺跡地図」に示された遺跡の年代は、旧石器時代から近世である。本郷台遺跡群でありながら複数の遺跡名が付されているのは、「最初の弥生土器」発見後に考古学者が土器や石器を表採した地点すべてが遺跡として登録されてしまったことが一つの要因である。

I-2表は、旧地形と平成13(2001)年から旧石器時代までの向ヶ岡弥生町の変遷年表である。I-4図は、現在の街区に『明治16年陸軍参謀本部測量原図』の等高線と水戸藩駒込邸の区画を重ねた図である。旧地形は、西側台地(1-1、1-2支谷、2)、支谷(3)、東側台地(4、5)に分かれる。江戸時代の水戸藩駒込邸の土地利用状況は旧地形が反映されており、文政9(1926)年以前は、西側台地(1安志藩下屋敷・抱屋敷、2~4殿舎(御殿)、史館、長屋、役所、朱舜水の屋敷・祠他、5殿舎(御殿)、『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』の文政9(1926)年以降は、西側台地(1安志藩下屋敷・抱屋敷、2長屋・役所、3殿舎(御殿)西側敷地(殿舎(御殿)へ至る道と庭園を兼ねる)、4殿舎(御殿)





I-3図 浅野地区周辺の遺跡 文京区(コード13105)  
東京都教育委員会「東京都遺跡地図」

所在地	遺跡番号	遺跡名	遺跡の概要	時代	地図
弥生二丁目 根津一丁目	28	弥生町遺跡群	台地縁辺 貝塚・包蔵地 都旧-[弥]生式土器名称由来地(昭29.11.3)	[縄][弥][近]	28L
弥生二丁目	28-A	弥生町貝塚	台地縁辺 貝塚	[縄][弥]	28L
根津一丁目	28-B	弥生町浅野邸貝塚	台地縁辺 貝塚	[縄後][縄晩]	28L
弥生二丁目東大工学部	28-C	向ヶ岡貝塚	台地縁辺 貝塚 [弥]溝 国史-[弥]生二丁目遺跡(昭51.6.7)	[縄][弥][近]	28L
弥生二丁目	28-D		台地縁辺 包蔵地	[弥]	28L
本郷七丁目 弥生二丁目	47	本郷台遺跡群	台地 集落・貝塚・大名屋敷 [平]住居 [近]礎石土坑 地下式土坑 庭園 井戸 溝 杭 石垣	[旧][縄][弥][古][平][近]	28L 29L

I-1表 周辺の遺跡

2008(平成20)年3月「東京都遺跡地図」のインターネット公開版より

北側敷地、5殿舎（御殿）に土地利用されていた。1-2の支谷と3の支谷は『寛永江戸図』（註3）に描かれている支谷の痕跡で、4の殿舎（御殿）北側敷地と5の殿舎（御殿）部分は、これまでに理学部3号館南側から旧石器時代の遺物、弥生二丁目遺跡から弥生時代の環濠集落（註7）、タンDEM棟地点（未報告 研究編Ⅻ参照）から弥生時代もしくは古墳時代の住居、水戸藩駒込邸の殿舎（御殿）、警視庁の弥生舎などが確認されており、旧石器時代から現在まで継続して利用されている。旧地形は埋立てと削平により改変されたものの、町の外周や区画は旧地形や江戸時代の土地利用状況を踏襲し、住宅地と東京大学浅野地区、弥生地区となっている。

「向ヶ岡弥生町」の「向ヶ岡」は「忍ヶ岡」（上野の岡）に対峙する湯島から駒込にかけての台地を示し、「弥生」は水戸藩駒込邸に徳川齊昭が建立した「向岡記」碑文の「夜余秘」（やよい 万葉仮

名)をとって明治5(1872)年に名付けられた。「向岡記」碑が建立された水戸藩駒込邸は浅野地区、弥生地区、隣接する住宅地に該当する。水戸藩は元和8(1622)年、この地に下屋敷を拝領、下屋敷は駒込邸、駒込別荘などと呼ばれた。元禄6(1693)年下屋敷が中屋敷となり、天保6(1835)年隣接する安志藩下屋敷を相対替により取得、地続きの抱屋敷を買得する。明治2(1869)年駒込邸は明治政府に公収される。その後、東京府の茶桑制政策により水戸藩士によって茶桑の栽培が行われる。明治6(1873)年以降、陸軍省用地、文部省用地、警視局用地(射的場、梅毒検査所)、東京府用地(東京府癲狂院、東京府避病院)、第一高等学校などを経て現在、大学敷地と住宅地となっている。浅野地区の名称は明治時代から昭和まで浅野家敷地であったことが由来である。浅野家敷地は元警視庁用地で、浅野家当主浅野長愛氏によれば明治時代、警視総監三島通庸と浅野家の間で話がまとまり、警視庁用地が明治20(1887)年に浅野家に譲り渡されたと述べられている(註4)。浅野地区と北側の住宅地は警視庁用地で、現在、言問通りに分断されている。明治20(1887)年以降の弥生町の再開発と宅地化については、「最初の弥生土器」発見者に名を連ねる坪井正五郎の土器発見に関する論文(註5)、明治22~29(1889~1896)年この地で向ヶ岡貝塚を探索した中山平次郎の論文(註6)に詳しい。

浅野家では、浅野地区の理学部3号館とタンDEM加速研究施設の間に浅野侯爵邸、低温センターから情報基盤センターの辺りを別邸として利用していたが、昭和16(1941)年から同18(1943)年にかけて東京大学の敷地として買収された。昭和17(1942)年以降、浅野地区に高層の研究棟が建設されるようになる。弥生二丁目遺跡の調査を担当された渡辺貞幸氏(元島根大学)によれば工学部3号館、原子力本館、原子力別館をはじめとする諸施設が崖に沿った部分に建設され、工学部9号館(1966年竣工)の建設によって3~4mの深さまで掘削され、昭和43(1968)年浅野地区の北端部も3~4mの深さまで掘削されたという。その後も浅野地区の研究棟建設は進められたことから、一連の工事によって遺跡が破壊されたと思われる。

浅野地区の開発が進む中、大学の研究棟建設に一石を投じたのは「弥生二丁目遺跡」の発見と調査、佐藤達夫氏と考古学研究室関係者を中心とした遺跡の保存運動である。「弥生二丁目遺跡」発見から史跡指定までの経緯を『向ヶ岡貝塚—東京大学構内弥生二丁目遺跡の発掘調査報告—』(註7)から抜粋する。「即ち、1974年春、文京区立根津小学校6年生(当時)の松任・武田・長谷川君らは、東京大学浅野地区構内で、倒れた木の根元付近から土器片や貝殻を採集し、地元根津に住んでおられた早稲田大学講師(当時)久保哲三氏に鑑定を依頼した。この話を久保氏より聞いた筆者は、文学部考古学研究室に報告、研究員らで早速現地を訪れたところ、工学部9号館(総合試験所)東側の、根津の町見降ろす崖ぎわ付近で、縄文・弥生両時代の土器片が散布しているのを確認した。そして、この遺跡が、立地その他から見て、学史に名高い向ヶ岡貝塚の関連遺跡である可能性が強いことが注目されたのである。その後1975年初め、再び現地を訪れた筆者は、遺跡周辺に杭が打たれていることに気付いた。そこで、大学施設部に問い合わせたところ、この地域に、工学部10号館に付属する高密度エネルギー実験棟が建設されることになっており、しかも、着工予定は4月に迫っていることが判明したのである。この事態を重視した考古学研究室では早急に遺跡の確認調査を実施する方針を決め、施設部等関係各方面との協議にはいった。調査体制については、考古学研究室の、関野雄・渡辺仁両教授、佐藤達夫助教授(当時)と、向ヶ岡貝塚にゆかりの深い理学部人類学教室の渡辺直経との協議の結果、両研究室(教室)の協力によってこの調査を行うこととなった。また、予定されていた工事が工学部施設の建設であったので井上光貞文学部長を通じて岡村総吾工学部長への連絡・了解

もとられた。こうして、渡辺直経教授・佐藤達夫助教授を調査担当者とする発掘調査が行われることになったのであるが、工期が迫っていたため、文化財保護法第57条の2による事前調査という形をとることとなった。同年2月10日から3月31日にかけて行われた第1次調査では二条の溝と溝の交叉部付近で貝塚を検出した。遺跡の検出状況からこの地点が弥生土器の由来となった土器が発見された遺跡である可能性が強くなったことから、建設予定の高密度エネルギー実験棟は設計変更され、遺跡は文化庁および東京都教育委員会と連絡の上、遺跡を国の指定遺跡とする申請の方針が決められた。同年7月14日から24日まで未調査部分で住居址の確認を目的とした第2次調査（学術調査）が行われる。調査では攪乱により住居址は確認できなかったが、第1次調査で検出した二条の溝の続きを確認した。調査後、文化庁に対し調査地点と斜面を含む588.75㎡が指定遺跡として申請される。担当者は「本遺跡は考古学史上著名な向ヶ岡貝塚に該当するか、著しく近接するもの」という理解に立って「向ヶ岡貝塚（推定）」として申請が出される。申請は文化財保護審議会で検討された結果、「弥生二丁目遺跡」という名称で史跡指定されることになり、昭和51（1976）年6月7日付けで告示される。

「弥生二丁目遺跡」の史跡指定後、「最初の弥生土器」発見地として指定されてことに対し否定的な論文が発表される（研究編Ⅻ参照）。しかし、これらの論文には「弥生二丁目遺跡」が発見場所であることを否定するのに十分な科学的な論拠は示されていない。「弥生二丁目遺跡」の集落と方形周溝墓に埋葬された人々は「最初の弥生土器」に関わった人々と無関係ではないことは明らかで、発見場所はわからなくなってしまったが「最初の弥生土器」に関わった人々の痕跡が、研究者の情熱によって保存されたことを評価すべきで「向ヶ岡貝塚」がどこにあったにせよ、集落の中心部を含む浅野地区、弥生地区、住宅地の遺跡が、明治時代以降の開発と東京大学の研究棟建設によってかなりの部分が破壊されたことは明らかである。現在では「弥生二丁目遺跡」はありふれた弥生時代の集落遺跡で、残された部分は遺跡の全体像からすればほんの一部かもしれないが最初の「弥生式土器」が発見された町に残されたことに価値がある。

「弥生二丁目遺跡」史跡指定後の昭和58（1983）年、本学創立100周年事業の一環として始まった御殿下記念館、山上会館の建設を契機に、総長を委員長とする臨時遺跡調査委員会が設けられ、その下に遺跡調査室が組織される。昭和59（1984）年から昭和60（1985）年にかけて、御殿下記念館・山上会館地点、医学部附属病院中央診療棟地点、法学部4号館・文学部3号館地点、理学部7号館地点で調査が行われる。昭和62（1987）年にこれらの調査はほぼ終了するが、その後も本郷キャンパスでの発掘調査が行われる。同年、遺跡調査室によって浅野地区バンデグラフ室改築予定地で調査（立ち会い調査）が行われる。平成2（1990）年、遺跡調査室は埋蔵文化財調査室として改組・発足以降、浅野地区では研究棟の増築や新営に伴う事前調査が行われる。工学部工学実験室支障ケーブル地点、工学部武田先端知ビル地点の調査で方形周溝墓を検出、工学部実験室支障ケーブル地点では現地保存、武田先端知ビル地点では移築保存を行った（現在、茨城県柿岡倉庫に収蔵）。これらの調査によって台地の高台に環濠集落（弥生二丁目遺跡）、方形周溝墓が西側低地の埋没谷に分布するという弥生時代の集落の景観が明らかにされた（註8）。

平成18（2006）年、東京大学が弥生二丁目遺跡と武田先端知ビルに史跡解説板を設置、文京区教育委員会が「東京大学遺跡案内」を設置。平成20（2008）年、「向ヶ岡弥生町」の町名由来となった「向ヶ岡記」碑は保存処理を施して情報基盤センター敷地内に設置された。現在、遺跡調査が文化財保護法に則って行われ、浅野地区で史跡整備が行われるようになった背景は「弥生二丁目遺跡」の存在が大きい。

もうひとつ触れなければならないのは、弥生町名が住民と考古学者以外の研究者によって守られたことである。昭和39（1964）年、国による郵便番号統合により、森川町の一部を編入し言問通りの南側全域を弥生二丁目、北側は東京大学農学部敷地のみを弥生一丁目とし、その他の北部地域が根津一丁目編入される。「弥生式土器発掘ゆかりの地」である「弥生町」を取り戻すための住民運動が起き、昭和42（1967）年、根津一丁目編入された区域が、旧根津須賀町の一部とともに弥生二丁目編入された。昭和62（1987）年、弥生町有志によって「弥生式土器発掘ゆかりの地」碑が浅野地区に建立された。碑の裏面の「研碑のこぼ」には、以下の様に刻まれている。

#### 「建碑のこぼ

弥生式土器は、ここ向ヶ丘弥生町（現・弥生2丁目）内の数カ所から初めて出土発見され、町名を冠して「弥生式」と名付けられました。

遠いむかし、人々はこの辺りに住みつき、日本文化の曙を告げたのです。弥生式土器、向ヶ丘遺跡の発見によって、弥生時代という重要な文化期の存在が知られました。私たちは、こうした歴史の壮大で匂やかなロマンを憶いふるさとわが町の誇りを語り継ぎ、出土と命名の史実を末永く顕彰するため、この記念碑を建てました。

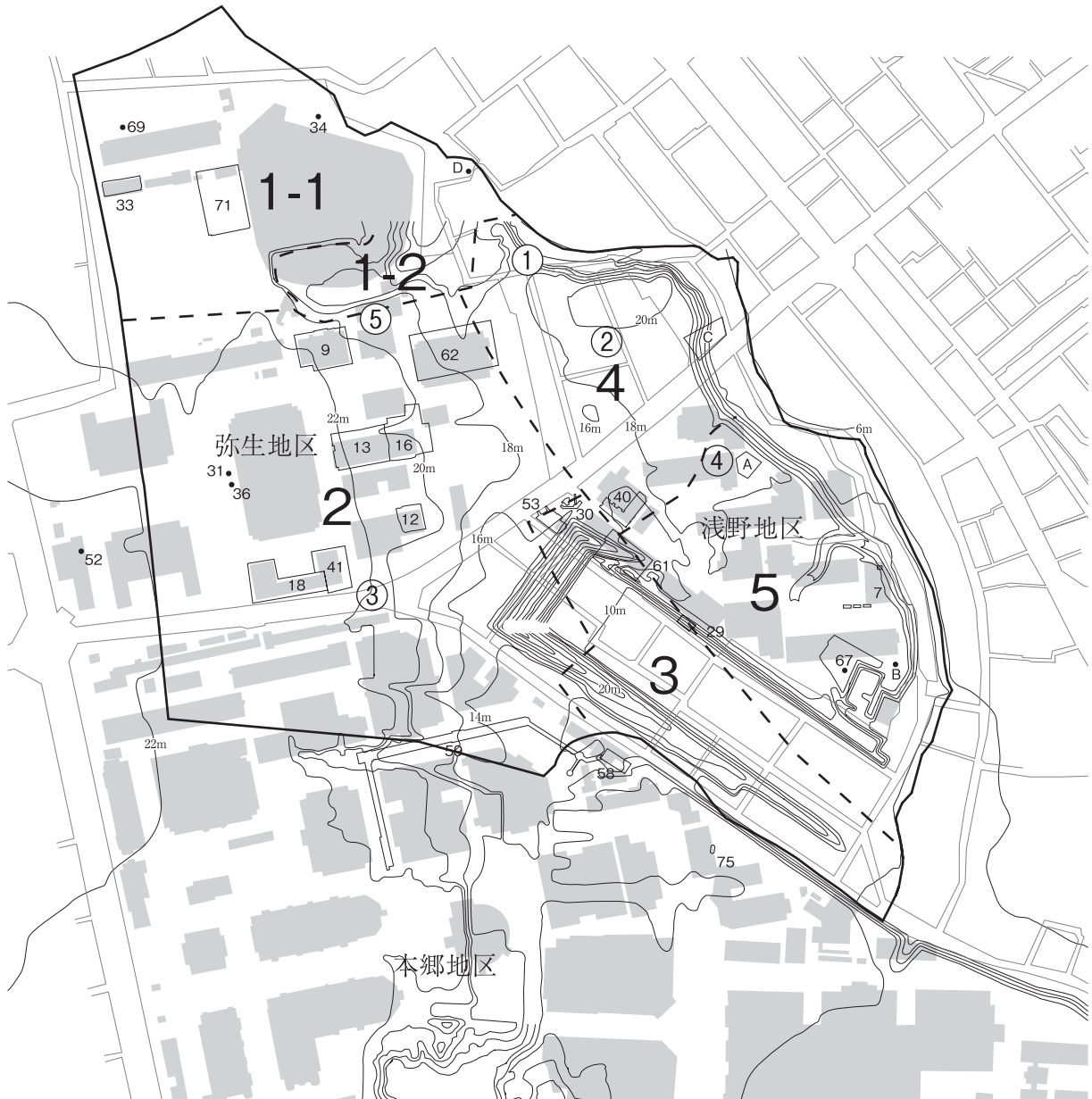
昭和39（1964）年行政措置により、この町は弥生2丁目と変わりましたが、町会名は歴史的な名を継承しております。

昭和61（1986）年 夏 7月吉日 向ヶ丘弥生町会有志  
高橋石材 刻

町会によれば碑の建立から20年以上が経過し、近年新たな住民が増え「弥生町名問題」を知る住民が少なくなったということである。大学の重要な役割の一つに「地域貢献」がある。「弥生町名問題」では「地域貢献」できなかったが、考古学には地域史という側面があり、調査結果や研究成果を発信していくことは「地域貢献」となると考える。

#### 註

- 1 大成基礎設計株式会社 2000 『東京大学（工）研究・実験棟「武田先端知ビル（仮称）」新営工事に伴う地盤調査報告書平成12年11月』
- 2 東京都教育委員会 2008（平成20）年3月「東京都遺跡地図」インターネット公開版
- 3 之潮編集部編 2007 『寛永江戸全図 仮撮影版（之潮編集部編・全2葉）』
- 4 石樽顕吉 2000 「浅野キャンパス余話」『工学部ニュース』No.358、359、360 東京大学工学部ニュース編集室 20000301 pp.19 - 20
- 5 坪井正五郎 1889 「帝国大學の隣地に貝塚の痕跡有り」『東洋学芸雑誌』No.91 pp.195 - 201
- 6 中山平次郎 1930 「近畿縄文土器、関東弥生式土器、向ヶ岡貝塚の土器竝に所謂諸磯式土器に就て」『考古学雑誌』第20巻2号 pp.42 - 48
- 7 東京大学文学部考古学研究室編 1979 『向ヶ岡貝塚—東京大学構内弥生二丁目遺跡の発掘調査報告—』東京大学文学部発行
- 8 篠原和大 2001 「弥生町遺跡の考古学的評価」東京大学原子力研究総合センター・東京大学総合研究博物館・東京大学埋蔵文化財調査室『第3回 考古科学シンポジウム』pp.81 - 91



I-4図 旧地形と江戸時代の区画

『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』、建設省国土地理院所蔵・(財)日本地図センター複製1984「明治16年第一測期第二測図  
参謀本部陸軍部測量五千分之一ノ尺東京府武蔵国本郷區本郷富士町近傍」『参謀本部陸軍部測量局五千分一東京図測量原図』より作成

弥生土器発見推定地

- ①中山平次郎、太田博太郎、今村啓爾推定地(文献1・2) ②江坂輝彌、杉原莊介推定地(文献3) ③斎藤忠推定地(文献4) ④佐藤達夫推定地(文献5)  
⑤原祐一推定地(文献6)

文献

- 1 中川平次郎 1930 「近畿縄文土器、関東弥生式土器、向ヶ岡貝塚の土器並所謂諸磯式土器に就て」『考古学雑誌』第20巻2号pp.42-48
- 2 太田博太郎 1986 「10弥生町貝塚の位置」 桜井清彦・坂詰秀一編『論争学説 日本の考古学 第4巻弥生時代』雄山閣出版株式会社発行pp.265-286他
- 3 江坂輝彌 1938 「彌生貝塚を再発見して」 考古学研究会『考古学論叢』第8輯pp.192-194 江坂輝彌1940「武蔵彌生町出土の弥生式土器に就いて」  
東京考古学会編『考古学』第11巻7号pp.412-428
- 4 斎藤 忠 1963 「五 弥生式土器の発見」『日本の発掘』pp.77-90
- 5 東京大学文学部考古学研究室編 1979 『向ヶ岡貝塚—東京大学構内弥生二丁目遺跡の発掘調査報告』東京大学文学部発行  
佐藤達夫 1978 「3.東京都向ヶ岡貝塚の発掘」 河出書房新社『日本の先史文化—その系統と年代—』pp.227-237
- 6 原祐一 2007 「弥生時代名称由来土器発見場所の推定—明治17年本郷区向ヶ岡弥生町の土地利用状況—」國學院大學考古学資料館紀要23輯  
pp.125-142

旧地形	西側台地			支谷	東側台地		備考
	1-1	支谷 1-2	2		3	4	
時代・年代	遺跡・土地利用状況			住宅地 浅野地区	住宅地 浅野地区	住宅地 浅野地区	
平成13年(2001)	工学部武田先端知ビル地点調査					「向岡記」碑	弥生町遺跡の再評価
平成7年(1995)	工学部風工学実験支障ケーブル地点調査 宅地の再開発に伴う文京区教育委員会の調査開始			○	○		
平成2年(1990)	遺跡調査室、埋蔵文化財調査室へ改組・発足						
昭和62年(1987)	遺跡調査室の調査開始			○	○	○	
昭和61年(1986)	弥生町会有志「弥生土器発掘ゆかりの地」碑建立						
昭和51年(1976)	弥生二丁目遺跡の国史跡指定						
昭和50年(1975)	弥生二丁目遺跡の調査					④	
昭和42年(1967)	弥生町名が復活「文京区弥生」						
昭和39年(1964)	弥生町名問題、弥生町名が根津へ消滅 浅野地区3号館、バンデグラフ室等、高層の研究棟建設が始まる						
昭和23年(1948)	浅野侯爵邸跡地、東京大学敷地となる					浅野地区	
昭和22年(1947)	東京帝国大学から東京大学へ			東京大学農学部			
昭和16年(1941)～ 昭和20年(1945)	太平洋戦争						
昭和16年(1941)	浅野家移転12月8日まで居住						
昭和10年(1935)	第一高等学校目黒に移転、東京帝国大学農学部弥生町に移転			東京帝国大学農学部			
昭和8年(1933)	第一高等学校敷地、東京帝国大学農学部敷地へ						
大正14年(1925)	支谷埋立(西側台地1-2)						
大正12年(1923)	関東大震災(9月1日)					別邸一部崩壊	
明治37～38年 (1904～1905)	日露戦争						
明治27～28年 (1894～1895)	日清戦争						
明治26～27年 (1893～1894)	言問通り切通し(道路整備)						
明治22年(1889)	第一高等中学校竣工(明治27年9月11日高等学校令により第一高等学校に改称)			第一高等学校			中山平次郎の調査明治22～29年
明治21年(1888)	射的場移転						
明治20年(1887)	弥生神社芝公園に移転					浅野侯爵邸	

I-2表 旧地形と現在までの土地利用状況と遺跡(1)

I 遺跡周辺の諸環境

旧地形	西側台地			支谷	東側台地		備考	
	1-1	支谷 1-2	2		3	4		5
<p>明治19年(1886) 東京府避病院廃止東京府癪狂院移転(東京府用地の一部を宮内省が買上、移転費用とする) 第一高等学校建設移転計画</p>	廃止		移転					
<p>明治17年(1884) 弥生土器の発見 弥生神社建設</p>								弥生神社
<p>明治16年(1883) 陸軍参謀本部測量原図</p>	避病院						4は茶畑	
<p>明治15年(1882) 脚気病院避病院へ 弥生舎建設 射場と射的場関連施設宮内省用地のまま東京共同射的会社へ</p>							弥生舎	5の茶畑と笹藪が庭園に整備され、景観が復活
<p>明治14年(1881) 東京府癪狂院建設</p>							東京府癪狂院 18	
<p>明治13年(1780) 警視庁梅毒病院設置</p>	脚気病院							
<p>明治12年(1879) 脚気病院建設</p>								
<p>明治11年(1878) 警視庁の射的会</p>								
<p>明治10年(1877) 西南戦争2月～9月 警視庁避病院建設、廃絶</p>	避病院			射場 61	射的場施設	40	射的場、射的会会場、劇剣大会会場へ	
<p>明治9年(1876) 射的場建設</p>		東京府用地			警視庁用地		射的場建設に伴う3と周辺の破壊と景観の消滅	
<p>明治6年(1973) 官有地化</p>	陸軍省・文部省・徳川昭武・無記入部(明治6年「沽券図」)							
<p>明治5年(1872) 「向ヶ岡弥生町」命名</p>								
<p>明治2～6年(1869～1873) 茶桑政策による駒込邸の耕作地化、水戸藩士による茶桑栽培</p>								
<p>明治2(1869) 明治政府駒込邸を公収</p>								
<p>安政年間 藩邸の荒廃</p>								
<p>天保6年(1835) 安志藩下屋敷を相對替により取得、地続きの抱屋敷を買得</p>								
<p>文政11年(1828) 「向岡記」碑建立</p>								
<p>文政9年(1826) 「向岡彌生町舊水戸邸繪図面」</p>	1安志藩下屋敷 抱屋敷	2長屋・役所		3殿舎(御殿) 西広場	4殿舎(御殿) 北敷地	5殿舎(御殿)		
<p>宝永2年(1705) 4月26日駒籠邸殿成就</p>								
<p>元禄16年(1730) 12月29日本郷丸山より火災、駒籠荘ノ荘士人亭宅過半延焼ス</p>			62					
<p>元禄6年(1693) 駒込の下屋敷、中屋敷となる</p>								
<p>寛文10年(1670) 駒込の史館、小石川邸に移転、彰考館となる</p>								

I-2表 旧地形と現在までの土地利用状況と遺跡(2)

旧地形	西側台地			支谷	東側台地		備考
	1-1	支谷 1-2	2		3	4	
寛文5年(1665)	朱舜水招聘、屋敷、没後祠建設						
寛文2年(1662)	史館員を増員						
明暦3年(1657)	明暦の大火以降、史館の設置、「火事小屋御殿」「書楼」「高殿」の造営						
寛永19～20年(1642～1643)	『寛永江戸図』						
元和8年(1622)	駒込に下屋敷を拝領						
文政9年(1826)以前	1安志藩下屋敷抱屋敷	2～4殿舎(御殿)・史館・長屋・役所・朱舜水の屋敷・朱舜水の祠・仮孔子廟			5殿舎(御殿)		
中世				53		40	
江戸時代	江戸時代片岡八郎の墳で石棺を発見、人骨、刀、鉄筒出土 願行山に古碑(板碑) 源義家が前九年の役(1051年)に向かう途中、向岡の松に鎧をかけた伝説 旧街道が不忍池側を通る						
奈良・平安時代	小野小町「向岡」を詠う。						
古墳時代	坪井正五郎の弥生土器発見地の絵の高まり、『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』に帆立貝状の墳丘らしきものが描かれる 徳川齊昭、大内山を発掘、骨出土						
弥生時代	浅野侯爵邸で弥生土器の完形品が出土したと伝えられる						
縄文時代	9						
旧石器時代	41						

遺跡番号と遺跡名 本表掲載の遺跡は年代、土地利用状況が明確な地点を掲載した。

9 農学部家畜病院、18 農学部総合研究棟、30 工学部風工学実験支障ケーブル地点工学部、40 工学部風工学実験室地点、53 工学部風環境シミュレーション風洞実験室地点、4 弥生二丁目遺跡、理3南 理学部3号館南遺跡 ○は現在まで調査を行った区域

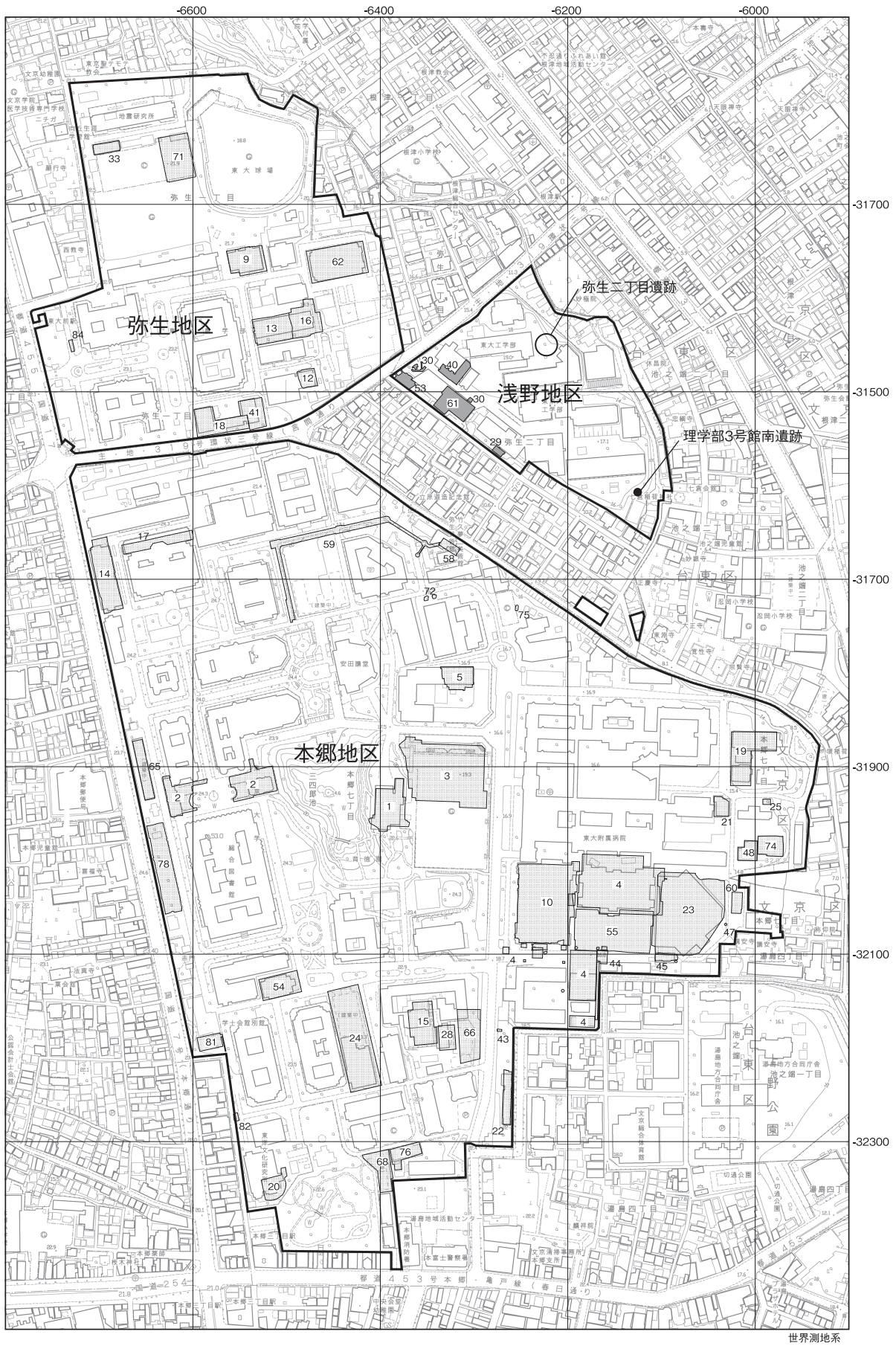
弥生式土器発見推定地

①中山平次郎・太田博太郎・今村啓爾、②江坂輝弥・杉原莊介、③齋藤忠、④佐藤達夫（弥生二丁目遺跡）、⑤原祐一

I-2表 旧地形と現在までの土地利用状況と遺跡(3)



I 遺跡周辺の諸環境



I-5図 本郷構内調査地点

報告編

番号	年度	遺跡名・調査地点名(略称)	掲載書名	遺構・遺物の年代
1	1984	山上会館(U)	『東京大学本郷構内の遺跡4 山上会館・御殿下記念館地点』	江戸時代
2	1984	法学部4号館・文学部3号館(文)(法)	『東京大学本郷構内の遺跡2 法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡』	旧石器、縄文、江戸
3	1985	御殿下記念館(G)	『東京大学本郷構内の遺跡4 山上会館・御殿下記念館地点』	旧石器、縄文、古代、江戸
4	1984	医学部附属病院 (病中)(エネセン)(給水)(共同溝)	『東京大学本郷構内の遺跡3 医学部附属病院地点』	旧石器、古墳、古代、江戸
5	1984	理学部7号館(理D)	『東京大学本郷構内の遺跡1 理学部7号館』	縄文、江戸
9	1989	農学部家畜病院(VMC)	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収	縄文、江戸
10	1990	医学部附属病院外来診療棟(HG)	『東京大学本郷構内の遺跡5 医学部附属病院外来診療棟地点』	江戸、近代
12	1992	農学部図書館(FAL)	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収	江戸
13	1992	農学部7号館A棟Ⅰ期(FA792)	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収	江戸
14	1992	工学部14号館(工14)	『東京大学本郷構内の遺跡7 工学部14号館地点』	江戸
15	1992	薬学部新館(YS)	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収	江戸
16	1993	農学部7号館A棟Ⅱ期(FA793)	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収	江戸
17	1993	工学部1号館(FE1)	『東京大学本郷構内の遺跡6 工学部1号館地点』	江戸、縄文
18	1993	総合研究棟(SK)	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収	江戸
19	1993	医学部附属病院看護婦宿舎(HN)	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収	縄文、古墳、江戸
20	1993	総合研究資料館(TUM)	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収	江戸
21	1993	医学部附属病院MRI-CT棟(MRI)	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収	古墳、江戸
22	1994	山上会館龍岡門別館(HF)	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収	江戸
23	1994	医学部附属病院病棟Ⅰ期(HWⅠ)	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収	旧石器、縄文、古墳、中世、江戸
23	1994	医学部附属病院病棟Ⅱ期(HWⅡ)	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収	縄文、古墳、中世、江戸
24	1994	医学部教育研究棟1次(医研1)	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収	江戸
24	1996	医学部教育研究棟2次(医研2)	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収	縄文、江戸
24	1998	医学部教育研究棟3次(医研3)	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収	江戸
24	2002	医学部教育研究棟4次(医研4)	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収	江戸
25	1994	医学部附属病院看護婦宿舎ゴミ置き場(HND)	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収	縄文、古墳、江戸
28	1995	薬学部資料館(FPS)	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収	旧石器、縄文、江戸
29	1995	情報基盤センター変電室1(ACC)	本報告書	江戸、近代
30	1995	工学部風工学実験室地点支障ケーブル(AFC)	本報告書	縄文、弥生、江戸、近代
33	1996	地震研テレメタリング地震観測施設(EQL)	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収	江戸
40	1996	工学部風工学実験室(AFL)	本報告書	縄文、弥生、近代
41	1996	ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー(ベンチャー)	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収	旧石器、江戸
43	1996	医学部附属病院基幹整備共同溝等(HWK1)	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収	江戸
44	1996	医学部附属病院基幹整備共同溝等(HWK2)	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収	江戸
45	1996	医学部附属病院基幹整備共同溝等(HWK3)	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収	江戸
47	1996	医学部附属病院基幹整備共同溝等(HWK4)	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収	江戸
48	1996	医学部附属病院看護婦宿舎Ⅱ期(HNⅡ)	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収	縄文、古墳、江戸
53	1998	工学部風環境シミュレーション風洞実験室(AFⅣ)	本報告書	江戸、近代
54	1999	総合研究棟(文・経・教・社研)(HES99)	『東京大学構内遺跡調査研究年報』3所収	江戸
55	1999	医学部附属病院第2中央診療棟Ⅰ期(2中Ⅰ)	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収	江戸
55	2001	医学部附属病院第2中央診療棟Ⅱ期(2中Ⅱ)	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収	縄文、古墳、中世、江戸
58	1999	医学部附属病院受変電設備棟(YM)	『東京大学構内遺跡調査研究年報』3所収	江戸、近代
59	2000	共同溝(KK)		江戸
60	2000	医学部附属病院基幹整備共同溝等(HWK6)	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収	縄文、古墳、江戸
61	2001	工学部武田先端知ビル(TSA、TSB)	本報告書	弥生、江戸、近代
62	2001	農学部総合研究棟(NS01)	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収	江戸
65	2002	法学系総合研究棟(LS03)	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収	江戸
66	2002	薬学系総合研究棟1期(YGS01)	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収	江戸
66	2004	薬学系総合研究棟2期(YGS04)	『東京大学構内遺跡調査研究年報』5所収	江戸
68	2002	インキュベーション施設(INC)	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収	縄文、江戸
71	2004	地震研究所総合研究棟(HEQ04)	『東京大学構内遺跡調査研究年報』5所収	江戸
72	2004	理学部1号館前(SC1)	『東京大学構内遺跡調査研究年報』5所収	縄文、江戸
74	2008	医学部附属病院看護師宿舎(HHN308)		旧石器・縄文・古墳・江戸・近代
75	2005	工学系総合研究棟立坑(KOS05)	『東京大学構内遺跡調査研究年報』6所収	江戸
76	2005	ベンチャープラザ(HVP06)	『東京大学構内遺跡調査研究年報』6所収	江戸
78	2006	情報学環・福武ホール1次(HJF06)	『東京大学構内遺跡調査研究年報』6所収	江戸
81	2007	経済学部学術交流研究棟(HEA07)		近代・江戸
82	2007	懐徳門(HKMO07)		江戸・縄文
84	1984	農学部共同溝(NK84)	『東京大学構内遺跡調査研究年報』6所収	江戸

試掘・立ち会いを除く

I-3表 本郷構内調査地点一覧

東京大学本郷構内の遺跡

浅野地区 I

情報基盤センター 変電室 1 地点

2009

東京大学埋蔵文化財調査室

## 例 言

1. 本報告は東京大学情報基盤センター変電室1新営に伴う埋蔵文化財発掘調査報告である。
2. 調査および整理作業での本地点の呼称は「大型計算機センター電気電機室（略称ACC）」であり、既出の年報、論文などでは「大型計算機センター電気電機室」と記載されている。今回の報告書作成時に現在の施設名称である「情報基盤センター変電室1地点」へ改称した。
3. 調査地点は東京都文京区弥生町2丁目11番16号、東京大学本郷構内浅野地区に位置している。
4. 本地点は東京大学遺跡地図「文京区No.47 本郷台遺跡群」および「文京区No.28 弥生町遺跡群」内に位置している。
5. 調査面積は78㎡である。
6. 発掘調査は東京大学埋蔵文化財調査室が行い、篠原（鮫島）和大（現静岡大学）が担当した。
7. 調査期間は以下の通りである。
  - 試掘調査 1995年6月27日
  - 事前調査 1995年7月18日～1995年7月31日
  - 整理作業 2007年5月～2009年2月（この期間に断続して作業を行った。）
  - 報告書編集 2003年3月～5月
8. 本報告の編集は原祐一、香取祐一が行った。
9. 動物遺体については阿部常樹（現國學院大學研究開発推進機構共同研究員）整理報告を行った。
10. 瓦については石井龍太（東京大学大学院人文社会系研究科博士後期課程）が整理報告を行った。
11. 執筆分担は以下の通りである。
  - 第1節 篠原和大、香取祐一
  - 第2節 原 祐一
  - 第3節 原 祐一
  - 第4節 大貫浩子、阿部常樹（動物遺体）、石井龍太（瓦）
  - 第5節 阿部常樹
  - 第6節 原 祐一
12. 出土遺物は埋蔵文化財調査室が、駒場Ⅱキャンパス・茨城県新治郡石岡市柿岡414東京大学柿岡教育研究施設内で運用、保存、管理している。

### 整理作業参加者

青山正昭 安芸毬子 今井雅子 大貫浩子 香取祐一 加藤理香 山田くりか 坂野貞子 田中美奈子

## 第1節 調査に至る経緯

東京大学大型計算機センター（現情報基盤センター）では、電算室設備等の改修が計画されており、平成7（1995）年6月6日、電気室（現変電室1）を新たに建設する旨、東京大学施設部より本調査室に通知があった。当センターの位置する東京大学浅野地区は、根津の谷とその支谷に挟まれた舌状台地の先端を占めており、明治17年最初に弥生式土器が出土したと推定されている地域として著名である。地区内には東京大学によって弥生時代後期の集落をとりまく環濠が調査され、国の指定史跡となっている弥生二丁目遺跡（文京区No.28）があり、本調査室で行ったタンDEM加速器研究棟の試掘では古墳時代前期の住居址を検出したほか、縄文時代の遺物も採集されている。また、江戸時代には水戸藩駒込邸の一部にあたっており、かつての試掘調査でも当該時期の遺構、遺物を検出している。このように浅野地区全域は、先史時代から近世にわたる時期の遺跡が存在すると考えられ、本建設予定地においても、埋蔵文化財の有無、及び遺存状況を確認する必要があった。

東京大学埋蔵文化財調査室ではこれを受けて1995年6月27日に確認調査を実施した。その結果調査地点は、立川ローム層下部にいたるまでの削平が行われていることがわかった。このため、予測された古墳時代以前の遺跡は完全に失われているものと考えられたが、試掘抗で江戸時代の地下室が検出されていること、また、浅野地区の東京大学の建物建設以前の遺構が存在する可能性があること、明治16（1883）年の地形図では既にこの台地の不忍池側が削平されているとみられることなどから、この大規模な地形の改変は江戸時代に遡る可能性も考えられ、事前調査の必要性が確認できた。

## 第2節 地理的・歴史的環境

検出遺構は、地下室、地下通路、防空壕の可能性のある地下通路状の遺構、植栽痕、土坑、柱穴列を検出した。遺構の廃棄年代は明治時代以降であった。

調査地点は、江戸時代の水戸藩駒込邸に位置する。『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』によれば弥生地区圍場から工学部武田先端知ビルを直線で結んだ位置に、藩邸内を北西から南西へ横断する道がある。この道は、農学部総合研究棟地点（2001年度調査）道SR1、工学部武田先端知ビル地点 道SR1-1・2、工学部風工学実験室地点で検出した道で、明治9（1876）年の射的場建設に伴い増幅工事が行われ、全径間風洞実験室地点の位置に監的場が建設されている。道は『明治16年陸軍参謀本部測量原図』では弥生地区部分が埋められており、明治9（1876）年の射的場建設時に埋められたと推定している。調査地点の遺跡検出面は平坦で道は確認できなかった。道は復元図の検討から調査地点の南側に位置すると考えられる。道の東側は「殿舎（御殿）の区域」で、当地点では江戸時代の遺構を確認できなかったが、殿舎（御殿）内の土地利用状況を反映している可能性があり他の地点と合わせて藩邸内の土地利用状況を検討する材料としたい。

明治20（1887）年から昭和16（1941）年は浅野家の敷地で、青木家文書『昭和11年弥生町図面』等によれば、浅野地区の高台に浅野侯爵邸、調査地点の北側に浅野侯爵別邸があった。『明治四十二年調家屋台帳』別邸図面の凡例に、明治33（1900）年の「在来建物」は実線、点線で「在来建物崩壊」、赤線で「増築」と書かれている。点線の「在来建物崩壊」は大正12年の関東大震災によるものと推定した。

### 第3節 遺構

#### SX1 (Ⅱ-2図)

遺構性格は、地下室、地下通路、防空壕などが考えられるが、現状では明確にできない。平面形はL字形、断面形は天井残存部で逆U字形を呈する。長軸は確認された範囲で3.94m、地表面からの深さはb-b'セクション部で3.4mである。天井残存部は最大幅1m、天井の高さ1.8mで人が立って歩ける規模で遺構は東側と南側にのびる。a-a'セクション部では、底部がa方向に傾斜している。

#### SX2 (Ⅱ-2図)

遺構性格は、地下室、地下通路、防空壕などが考えられるが、廃棄された遺物は昭和初期の製造年代で焼成を受けている。浅野侯爵別邸は関東大震災で建物の一部が崩壊したと推定されることから陶磁器類の焼成は関東大震災によるものと考えられる。また、遺物の年代幅や使用年代を加味すれば、戦災で焼成を受けた陶磁器類が防空壕に廃棄された可能性もあるが、戦時中当地点周辺が戦災にあっていないことから防空壕ではないと考えられる。平面形は確認された範囲でT字状形、断面形は天井残存部で逆U字形を呈する。長軸は確認された範囲で2.85m、地表面からの深さはb-b'セクション部で2.28m、天井残存部は最大幅0.8m、天井の高さ1.58mである。南側の壁面に「十」と「U」を組み合わせた印が彫られている。

#### SK3 (Ⅱ-3図)

遺構性格は土坑である。確認された範囲で短軸1m、深さ0.56mを測る。平面形は不整円形で、断面形は逆凹形を呈する。遺構底部は凸凹しており、1層の覆土は、きめ細かい黒褐色土で締めりはない。遺構性格は植栽痕である。

#### SK4 (Ⅱ-3図)

遺構性格は土坑である。確認された範囲で長軸1.23m、深さ0.42mを測る。平面形は不整円形である。

#### SK5 (Ⅱ-3図)

遺構性格は土坑である。確認された範囲で長軸1.14m、深さ0.53mを測る。平面形は不整円形である。

#### SP15 (Ⅱ-4図)

遺構性格は柱穴である。SP15、SP16、SP25、SP31が0.5～0.6m間隔で並ぶ。確認された範囲で長軸0.52m、深さ0.2mを測る。平面形は不整円形である。

#### SP16 (Ⅱ-4図)

遺構性格は柱穴である。長軸0.5m、短軸0.4m、深さ0.17mを測る。平面形は隅丸方形である。

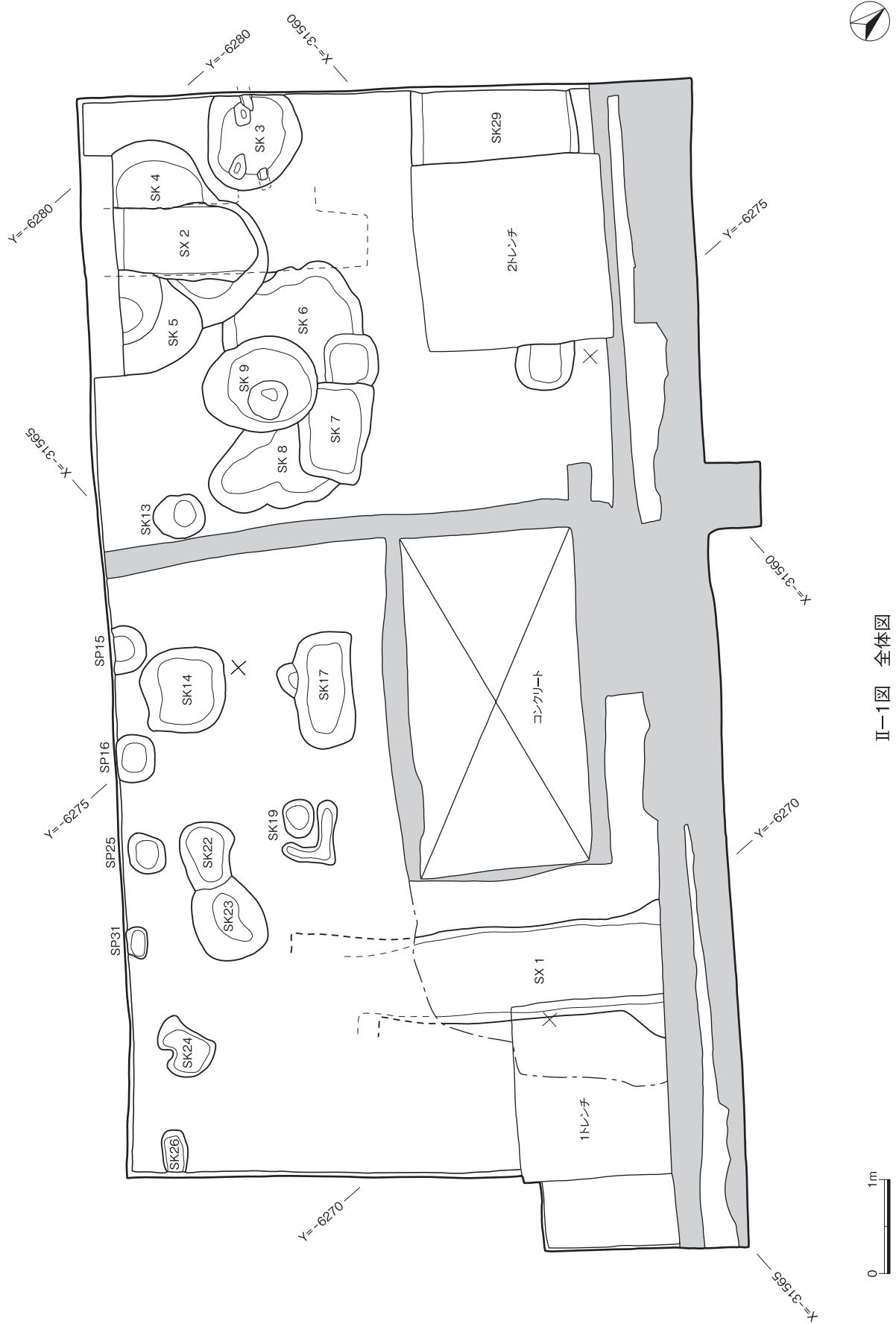
#### SP25 (Ⅱ-4図)

遺構性格は柱穴である。長軸0.48m、短軸0.38m、深さ0.16mを測る。平面形は不整方形である。

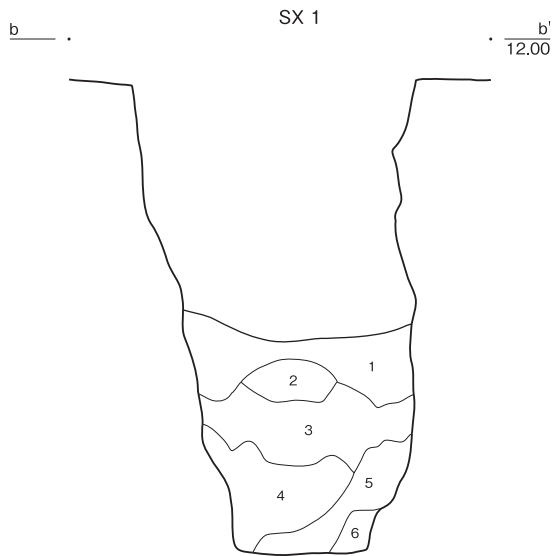
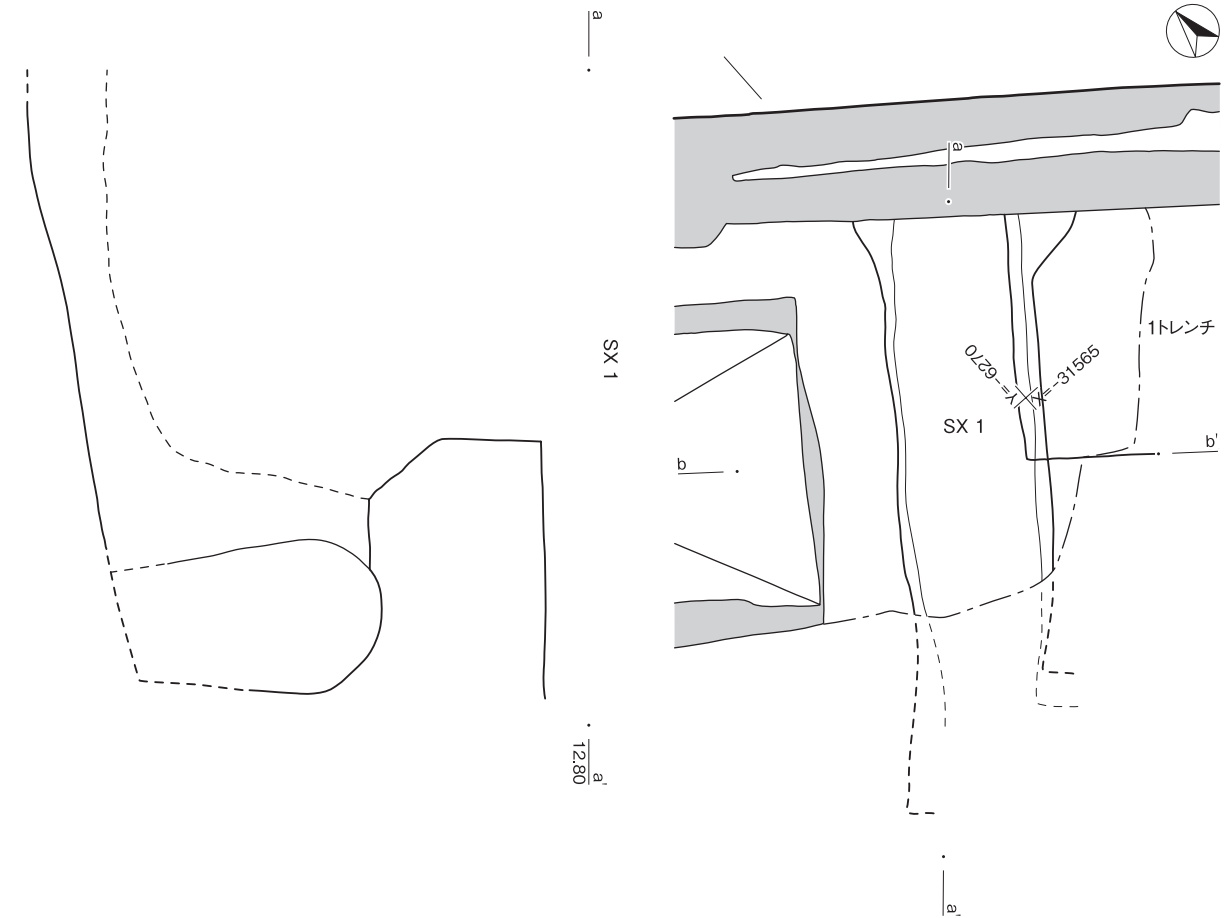
#### SP31 (Ⅱ-4図)

遺構性格は柱穴である。長軸0.35m、短軸0.22m、深さ0.8mを測る。平面形は隅丸長方形である。

II 情報基盤センター 変電室1 地点



II-1図 全体図

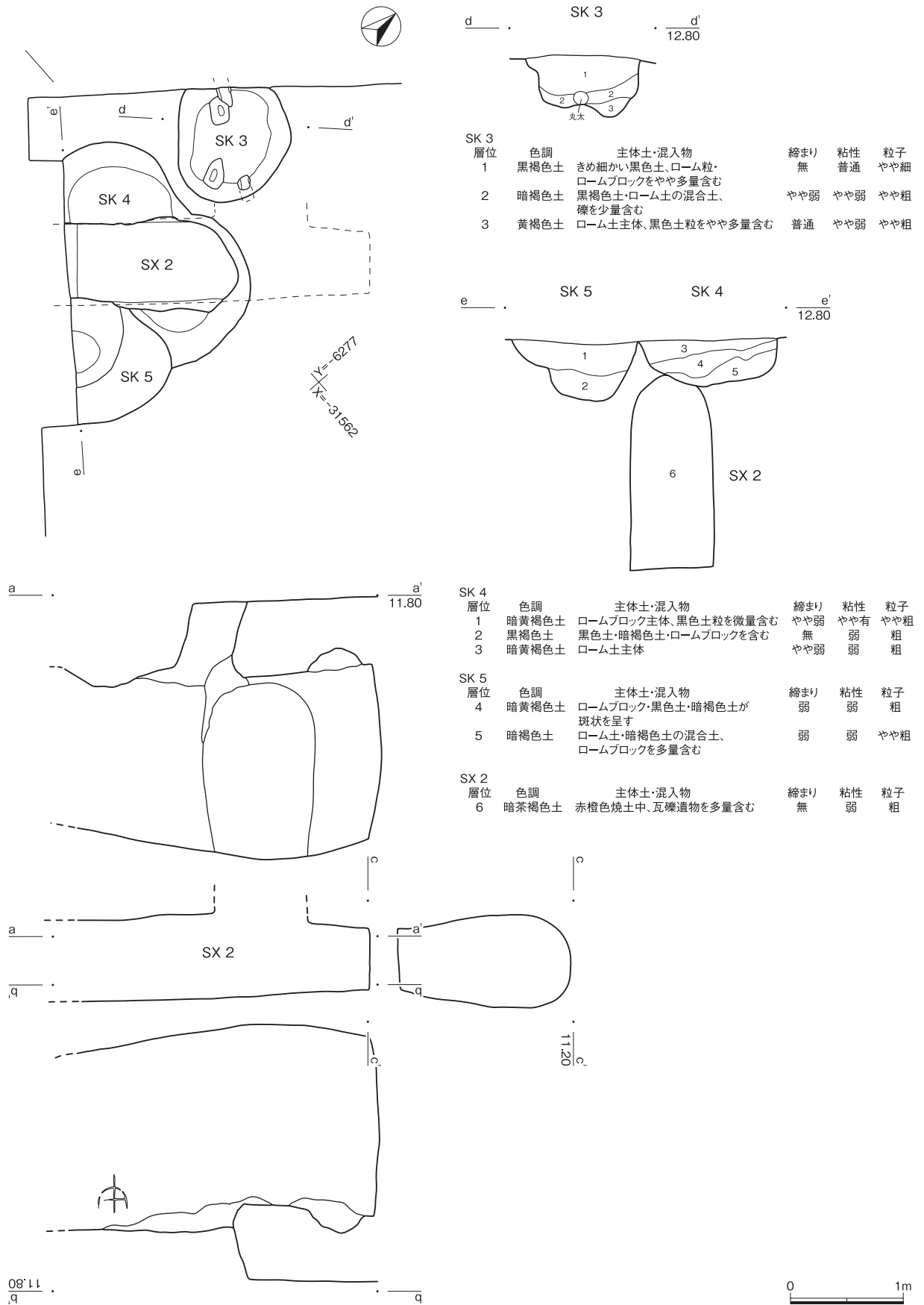


SX 1 層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性	粒子	備考
1	暗灰褐色土	やや砂質のローム質土・灰白色粒砂を少量含む、スコリア等は含まない	やや弱	普通	細	上層、ローム崩落部分(天井)
2	黒褐色土	ロームブロック・ローム粒と暗灰褐色土の混在	やや弱	無	粗	上層
3	黒色土	やや砂質の暗灰褐色土中、炭化物を多量、ロームブロック・ローム粒をやや多量含む	弱	弱	やや粗	中層
4	橙灰褐色土	黒色スコリアをやや多量、白色スコリアを微量含む。	強	普通	細	下層
5	乳灰色土	ややシルト質のローム質土で還元色を呈する、黒色スコリアをやや多量含む	やや強	普通	細	下層
6	灰褐色土	最下層崩落、砂質ローム土・砂礫をやや多量含む	やや強	やや弱	細	下層

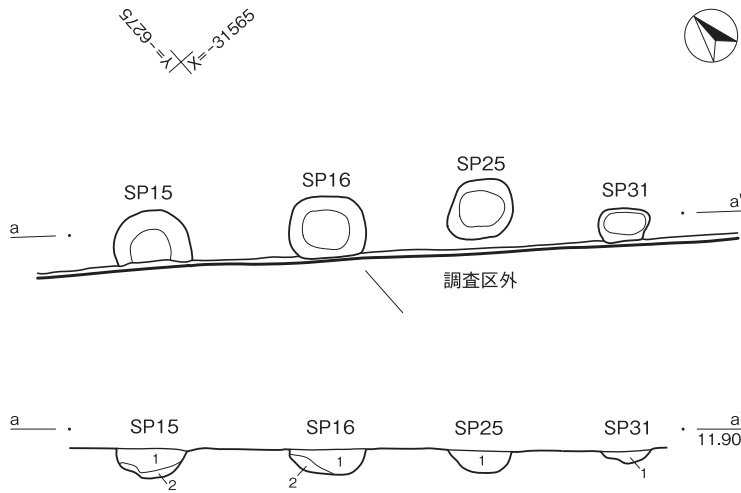
II-2図 SX 1



II 情報基盤センター 変電室1 地点



II-3図 SX 2.SK 3.SK 4.SK 5



SP15・SP16・SP25・SP31

層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性	粒子
1	黒褐色土	細かい黒褐色土主体、ロームブロックをやや多量含む	無	弱	やや細
2	暗黄褐色土	ローム土主体、黒色土粒を微量含む	やや弱	弱	やや粗

II-4図 SP15.SP16.SP25.SP31

## 第4節 遺物

本地点からはコンテナ総数、約9箱の遺物（磁器・陶器・土器・その他）が出土している。磁器・陶器・土器の分類基準は「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類（1）」（東京大学埋蔵文化財調査室 1999）を参照しているが、本地点の遺物は分類の範囲外の遺物が多く、分類の記載が無いものが多い。分類にないカップ&ソーサーなど洋食器と判断できるものは洋食器と記載した。遺跡における分類は数量分析により様々な文化・時代の様相を浮かび上がらせる手段である。そのためにはある一定以上の数量（便宜的に推定個体数100個体以上）を必要とするが、本地点においては全体的に遺物量が少なかったため、推定個体数100個体以上の遺物量を有する遺構が無く分析することができなかった。数量分析ができなかったため、大まかな年代観を出し検証した。

本地点は水戸藩駒込邸（中屋敷）以降、明治9（1876）年から明治21（1888）年に射的場、その後昭和16（1941）年まで浅野公爵別邸の裏庭、昭和23（1948）年までに東京大学敷地となった場所である。遺構も少なく遺物もあまり検出されていない。昭和初期の遺物を中心としており、浅野公爵別邸で使用されていた物であろう。統制番号が付されているものも一点、確認されている。浅野邸以降の遺物も混在していると思われる。

### SX1（Ⅱ-5図）

1～3は磁器である。1は罍皿である。プリント。2は青磁色絵染付鉢である。染付・イッチン。外面青磁陰刻文。3はコバルトによる銅版転写爛徳利である。

4は、生産地不明の陶器である。行平鍋（TZ-42-b）の蓋でTZ-00-kに分類される。内外面に鉄釉が施釉される。

### SX2（Ⅱ-5～7図）

1～10は磁器である。1は手描き色絵湯飲み。緑・青・桃色。筒形で底部に「水荘」の刻印がある。2は掛け分け碗。褐釉。底部に型で「岐86」の浮文がある。昭和16年頃から戦後しばらくの間の統制下で生産者ごとに付けられていた番号で、岐阜県輸出陶磁器工業組合連合会で作られ、統制番号「86」を与えられた製品であることがわかる。3はクロム青磁上絵皿。底部に「萬豊酒店」の店名あり。宣伝用の頒布品か。

4～10は洋食器である。東陶・名陶の裏印の年代及び説明は「オールド大倉・東陶・名陶 大正・昭和モダン食器」葵航太郎・木村一彦著を参考とした。4、5は皿である。4は「IDEAL IRONSTONE CHINA IDE BROS.POTTERY」とマークの裏印あり。模様の部分はない。5は口縁部がやや立ち上がった皿で、「名陶硬質磁器 NagoyaSeitoshu」とマークの裏印あり。漢字は左から書かれている。この裏印は大正11年頃～昭和12年頃の国内向け商品に付けられていた代表的なものである。直径は12.9 cm。名古屋製陶所は明治39（1906）年に設立した帝國製陶所を前身とし明治44（1911）年に合資会社名古屋製陶所として発足する。昭和13（1938）年に名古屋製陶會社に名前を変更。戦後、名古屋製陶會社の鳴海工場は買収され鳴海製陶社となる。6はカップ&ソーサーのソーサーである。「東洋陶器 TOYOTOKIKAI (SHA) 意匠登録」の裏印あり。漢字は右から書かれている。この裏印は大正10年頃～昭和16年頃の国内向け商品に付けられていた代表的なものである。意匠登録の番号部分は欠損。二次焼成の痕がある。東洋陶器は大正6（1917）年に設立されてから第二次大戦を挟んで戦後数年間、磁食器の生産を行っていたが、その後は陶食器へ転換していった。7

～10はカップ&ソーサーのカップである。7は「(名古) 屋製陶會社 MEITO」の裏印あり。漢字は右から書かれている。この裏印は昭和13年頃～昭和20年頃の国内向け商品に付けられていた代表的なものである。8は「東洋陶器 (TO) YOTOKIKAISHA (意) 匠登録73714」の裏印あり。漢字は右から書かれている。この裏印は大正10年頃～昭和16年頃の国内向け商品に付けられていた代表的なものである。「意匠登録73714」とあり、昭和10年頃のものであろう。9は「MEIT (O CHINA) MADE IN JAPAN」とマークの裏印あり。この裏印は大正11年頃～昭和12年頃の輸出向け商品に付けられていたものである。この時期の輸出向け商品は廉価な製品が多い。10は「MEITO CHINA MATSUSAKAYA」と松坂屋のマークの裏印あり。百貨店と提携して作られたものであろう。昭和初期頃のもの(第二次大戦前)か。

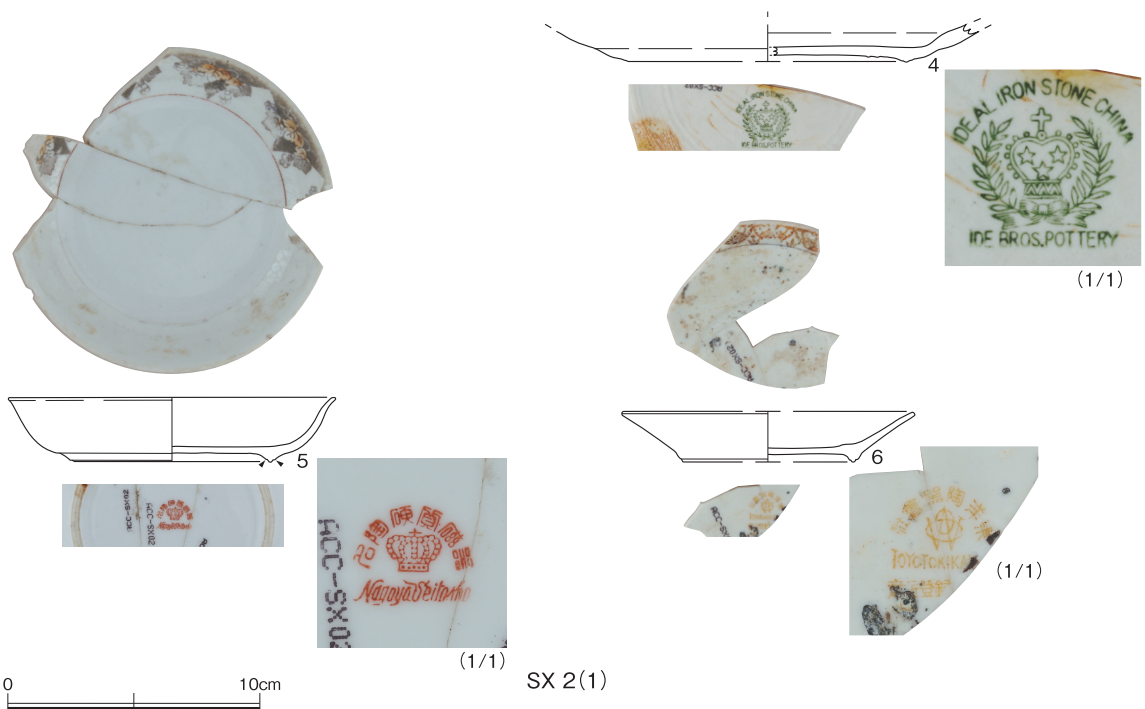
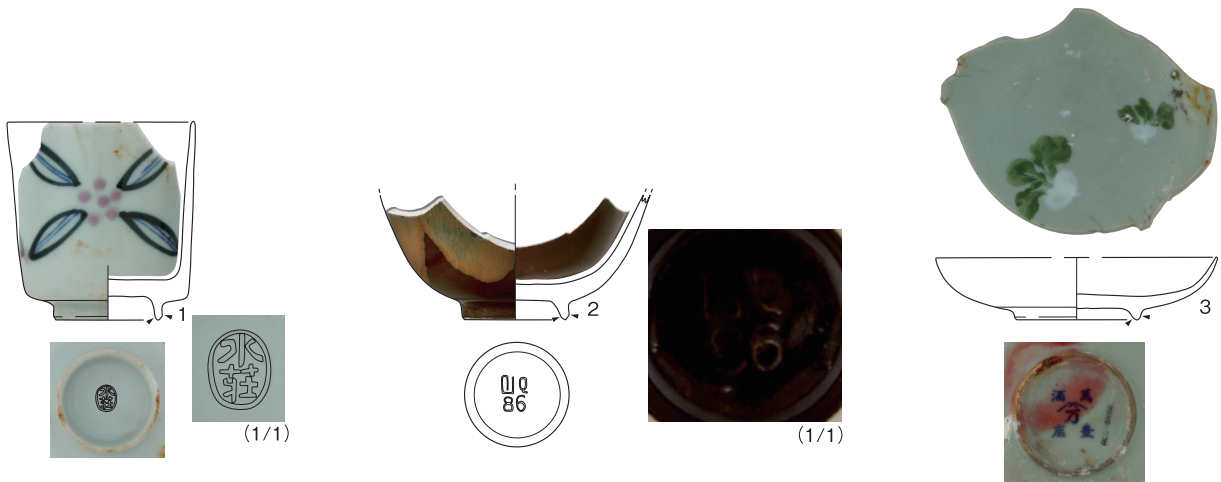
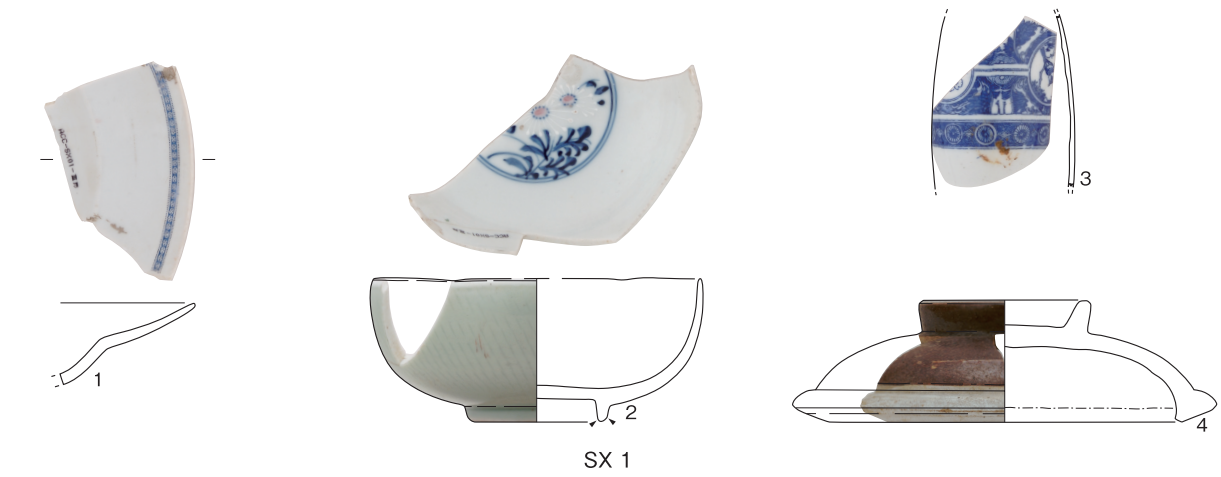
11～14は金属である。11は引き戸の把手。絵の刻まれている円盤部分とそれ以外の部分の、2つの部品で組み立てられている。3カ所の爪で円盤部分を留めている。爪は2カ所残存しており、1カ所欠損している。12はフォーク。上端部に僅かに模様が見られる。13はシュガートング。模様は見られない。14は把手、15、16、18はガラス瓶である。17、19は瓶に付随するプラスチックの蓋である。15は色調は黒褐色透明。全面に気泡が入る。スクリュー栓。口唇部は窄まっている。口唇部から底部まで左右に成形の型痕が見られる。口縁部とは別作りになっており、成形の型痕がずれる。底部に資生堂のマークが陽刻のエンボスで付けられている。16は色調は青色透明。僅かに気泡が入る。スクリュー栓。口唇部は窄まっている。口唇部から底部まで左右に成形の型痕が見られる。口縁部とは別作りになっており、成形の型痕がずれる。17は、16に伴うプラスチックの蓋である。「TOWEL GOURD COLOGNE」が刻まれている。18は色調は青色透明。全面に小さい気泡が入る。スクリュー栓。口唇部は窄まっている。口唇部から底部まで左右に成形の型痕が見られる。口縁部とは別作りになっており、成形の型痕がずれる。19は、18に伴うプラスチックの蓋である。いずれも昭和初期頃のものであろう。

20は石製品。翡翠。帯留め(?)・アクセサリ(?)。石製の花の透かし彫りが金属の台に付けられている。細工の細かい上質のものである。後ろには1カ所小さな突起が付けられている。

21～23は瓦である。21は軒棧瓦と推察される。軒丸部のみだが裏面に軒平部と接合されていた痕跡を残す。連珠のない三つ巴文。周縁は幅広い。赤色を呈するが表面に黒色塗料を塗っている。裏面の筒部との接合面にはカキヤブリが施されている。22は鬼瓦。内側には丸い突出部が設けられ、緊縛用の穴が空けられている。穴周辺には青錆が残っており、銅線を用いて屋根に固定したものと考えられる。胎土は赤褐色を呈するが表面に一部黒い塗料が残っており、本来は全面黒色に塗られていたと思われる。21と同じ色調でありまた黒色塗料の使用も共通し興味深い。23は鬼瓦。形態は22と類似し同様の機能と考えられるが細部で異なる。縦断面はコの字形になり、22のように折り返さない。内側に丸い突出部を設け、横方向に穴を空ける。突出部の周辺には22と同じく青錆が付着し、銅線を用いて屋根に固定したものと考えられる。胎土は白褐色を呈する。表面の約半分が黒色を呈するが、意図的な塗装なのかあるいはすすけや汚染による変色なのか判断し難い。

本遺構の遺物の中には、6のように二次焼成を受けているものがいくつか含まれている。磁器でゴム版が施されている破片の中に二次焼成を受けているものがあり昭和初期以降の可能性が高い。

図示していない破片の中にコンポート、Drainer(水切り)、皿などの様々な器種があり、またカップ&ソーサーも数種類が確認されている。大正時代末頃には転写プリントの技術が発達してディナーセットなどが量産されるようになってくる時期ではあるが、かなりの洋食器を所有していたことがわかる。



II-5図 SX 1.SX 2(1) 出土遺物



II-6図 SX 2(2) 出土遺物



II-7図 SX 2(3) 出土遺物

## 第5節 動物遺体

情報基盤センター変電室1地点から出土した動物遺体は、6群7個体分である（Ⅱ-1、2表）。これらの資料は、すべて現場にて肉眼で確認のできたもののみを任意に採集したものである。

貝類遺体は、3種4点が取り上げられている。その内、3種3点がSX2から取り上げられた。残りの1点は遺構外で採集されたハマグリの中殻1点である。SX2からは、マガキの中殻、ヤマトシジミの中殻、ハマグリの中殻がそれぞれ1点ずつ取り上げられた。マガキの中殻には、ハマグリに付着していたと推測される痕が見られる。また、ヤマトシジミもマガキを主体とした廃棄貝殻群に良く含まれる種である。マガキを主体とした廃棄貝殻群は、マガキを調理した際（剥き身にした際）に廃棄されたものであると推定される。近世以降、マガキは、蛎礁の一部を破壊してそのまま採集する方法がとられている。そのため、蛎礁やその近辺に生息する生物も混獲されることから、マガキを主体とした廃棄貝殻群が検出された場合、そのほとんどの貝類遺体が、マガキを採集した際に混獲されたものであると推測される（阿部2006）。以上のことから、この3種がそれぞれ別個に異なる料理に利用する為に持ち込まれたという一般的な解釈と共に、ハマグリとヤマトシジミの2種は、蛎礁やその近辺に生息していた、もしくは殻のみの状態（死殻）でその場にあったことにより、マガキを採集した際に混獲され、そのまま共に持ち込まれたものである可能性も想定する必要がある。

魚類遺体は、SX1の2層より、マダイの前頭骨が1点取り上げられている。左側のみが出土しているが、切断面が有ったと予想される部分が欠損しているため、調理方法は不明である。

鳥類遺体は、遺構外からカモ科の右大指基節骨が1点採集されている。全長47.5mmと大形のため、ガン類である。

哺乳類遺体は、SX1の1層より1体分のイヌの頭蓋骨と右下顎骨が出土している。頭蓋骨は部分的に残存しているのみで、顔のプロポーシオンは窺い知ることができない。しかし、外矢状稜及び項稜が発達しており、また、右下顎骨の咬筋窩が比較的深いことから、顎の力の強いイヌであったことが推測される。なお、イヌのサイズ計測は、茂原（1986）に基づいている。その計測結果と歯式は、Ⅱ-3表に示した。

### 引用・参考文献

- 阿部常樹 2006 「市谷砂土原町三丁目遺跡（第2次調査）出土の動物遺体」『東京都新宿区市谷砂土原町三丁目遺跡Ⅱ』大成エンジニアリング株式会社（p.46 - 60）
- 茂原信夫 1986 『東京大学総合研究資料館所蔵 長谷部言人博士収集犬科動物資料カタログ』東京大学総合研究資料館



軟体動物門 Phylum MOLLUSCA  
 二枚貝綱 Class Bivalvia  
 カキ目 Order Ostreoida  
 イタボガキ科 Family Ostreidae  
 マガキ *Crassostrea gigas*  
 マルスダレガイ目 Order Veneroida  
 シジミガイ科 Family Cobicalidae  
 ヤマトシジミ *Corbicula japonica*  
 マルスダレガイ科 Family Veneridae  
 ハマグリ *Meretrix lusoria*

脊椎動物門 Phylum VERTEBRATA  
 硬骨魚綱 Class Osteiithyes  
 スズキ目 Order Perciformes  
 タイ科 Family Sparidae  
 マダイ *Pagrus major*

鳥綱 Class Aves  
 カモ目 Order Anseriformes  
 カモ科 Family Anatidae  
 ガン亜科 Subfamily Anseridae  
 ガン族 Anserini spp.

哺乳綱 Class Mammalia  
 食肉目 Order Carnivora  
 イヌ科 Family Canidae  
 イヌ *Canis familiaris*

II-1表 情報基盤センター変電室1地点 出土動物遺体種名表

遺構	時期	分類群		部位	左右	数	観察所見
SX 1・1層	18c後	哺乳	イヌ	頭蓋骨	—	1	左側P3からM2歯槽までの上顎部分、左側側頭骨頬骨突起及び鼓室部とその周辺、後頭骨頭頂部付近などが残存。(P34M1×)。頬側のP3からM1、舌側のP4とM1の間の歯槽にごく軽度の歯周症による退縮が認められる。
				下顎骨	右	1	M1歯槽から後の下顎体および下顎枝前半分のみ残存。(M12×)。頬側のM1からM2の歯槽に軽度の歯周症による退縮がみられる。歯列は、頬側にやや膨れている。
SX 1・2層	18c後~19c前	魚	マダイ	前頭骨	—	1	
SX 2	近代(大正)	貝	マガキ	—	左	1	殻表に滑らかで湾曲した付着痕あり。ハマグリに付着した痕?殻高70.5mm。
			ヤマトシジミ	—	左	1	殻長18.5mm, 殻高17.4mm
			ハマグリ	—	右	1	殻長63.7mm, 殻高49.3mm, 外鞆溝長18.0mm
遺構外	—	貝	ハマグリ	—	左	1	「大型」のもの。
		鳥	カモ科	大指基節骨	右	1	完存。ガン類。全長47.5mm

II-2表 情報基盤センター変電室1地点 出土動物遺体一覧

遺構名	部位名	左/右		I			C	P				M		
				1	2	3		1	2	3	4	1	2	3
SX 1・1層	上顎骨	左	歯式	/	/	/	/	/	/	7	8	9	×	
			頬舌径								5.09	9.90	16.12	
			近遠心径(最大長)								11.46	18.32	12.44	
			外側長									17.74		
	下顎骨	右	歯式	/	/	/	/	/	/	/	/	9	10	×
			頬舌径(近:M1)										9.12	6.25
			頬舌径(遠:M1)										8.78	
			近遠心径								19.99	9.84		

凡例

アラビア数字(例:4):永久歯あり, /:顎体自体が欠損, ×:歯脱落、歯槽は開放されたまま。

計測項目について:基本的に頬舌径・近遠心径を計測。上顎P4は近遠心径を最大長と外側長、下顎M1は頬舌径を近位と遠位に分けて計測。計測定義は茂原(1986)に基づいている。

計測箇所	計測値	備考
下顎体高(1)(M2後方)	26.28	
下顎体高(2)(M1中央)	25.63	
下顎体厚(M1中央)	13.45	
下顎・大白歯列長(M1-M3)	35.04	歯槽部分

計測値の単位:mm。

II-3表 SX 1・1層出土イヌ遺体の上顎骨及び下顎骨の歯式及び計測値



II-8図 情報基盤センター変電室1地点 出土動物遺体

1. マガキ(左) 2. ヤマトシジミ(左) 3. ハマガリ(右) 4. マダイ前頭骨(左側) 5. ガン類 大指基節骨(右) 6. イヌ 上顎骨(左) 7. イヌ 下顎骨(右)  
8. イヌ 後頭骨頭頂部 (1~3. SX2 4. SX1・2層 5. 遺構外 6~8. SX1・1層)

## 第6節 情報基盤センター 変電室1地点の成果

情報基盤センター 変電室1地点の検出遺構は、明治時代以降と考えられる植栽痕、土坑、柱穴列、東京大学の電気施設等である。江戸時代から明治時代の土地利用状況を調査地点の周辺部分も含めて検討する。

### (1) 江戸時代

当地点は、江戸時代の水戸藩駒込邸に位置する。『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』によれば藩邸内を北西から南西へ横断する道が描かれている。農学部総合研究棟地点（2001年度調査）SR1、工学部武田先端知ビル地点SR1-1・2がこの道に該当すると考えられる（I-9図）。道の西側が「長屋と役所の区域」（西側台地 1-1・1-2・2）、東側が「殿舎（御殿）の区域」（東側台地 4・5）にあたる（I-9図）。藩邸の南側、「長屋と役所の区域」と「殿舎（御殿）の区域」に挟まれた支谷3は「切手御門」から「中門」「殿舎（御殿）の区域」に至る道と庭園を兼ねた区域である。道の規模は農学部総合研究棟地点（2001年度調査）では断面形が逆台形で幅11m、検出面から路面までの掘削深度は4m、切通し状の道である。工学部武田先端知ビル地点では、明治9（1876）年の射的場建設に伴う造成で埋め立てや拡張が行われているものの、検出面から路面までの掘削深度は農学部に比べ浅くなっている。道の延長線上に調査地点が位置する。道に関連する遺構が確認されていないのは、明治時代以降の削平によって道の痕跡が失われたか、道が調査地点の西側を通過していたか、切り通し状の道が中門近くで浅くなった可能性が考えられる。

### (2) 明治時代

明治時代、調査地点は、向ヶ岡弥生町（以下「弥生町」）に建設された射的場に位置する。明治9（1876）年、上野に設置されていた警視局射的場の代替施設として、弥生町で射的場の建設が開始される。弥生町に射的場が建設されたのは、射場建設予定地の駒込邸の3区域の西側が加賀藩邸の位置する台地、東側が駒込邸の殿舎（御殿）の位置する台地で、小銃の発射方向に住宅地がなく被弾被害を防ぐことができる地形が選定理由である。この工事によって、駒込邸の「3」の大部分と「2・4・5」の区画の一部が破壊される（註1）。明治10（1877）年1月15日開場式が行われ、「射撃演習」が開始される。上野と弥生町で「射撃演習」、各区の「練兵場」で「銃術ヲ演習」（註2）を行った警視庁巡査が西南戦争で九州等に派遣された。西南戦争終結後の明治11（1878）年、西南戦争で西郷隆盛が鹿児島から熊本へ進軍を開始した2月17日から3日間にわたり警視官の射的小会が行われる（註3）。この射的会以降、射的場は演習施設から射的会会場、劇剣大会会場等へとその機能を徐々に変化させていく。現在、住宅地と浅野地区の一部となっている射的場関連施設のあった区域は、明治15（1882）年宮内省用地となり、同年、宮内省用地のまま東京共同射的会社の射的場となる。現在の浅野地区と北側の住宅地は、射的演習場として使用されていた時期「桑（畑）」「小笹藪」となっていたが、「明治16年陸軍参謀本部測量原図」では浅野地区側が庭園として整備されている。明治15（1882）年に建設された「弥生舎」は、明治天皇、各国公使を招いた射的会の表彰式と饗応、劇剣大会の会場などに使用される。

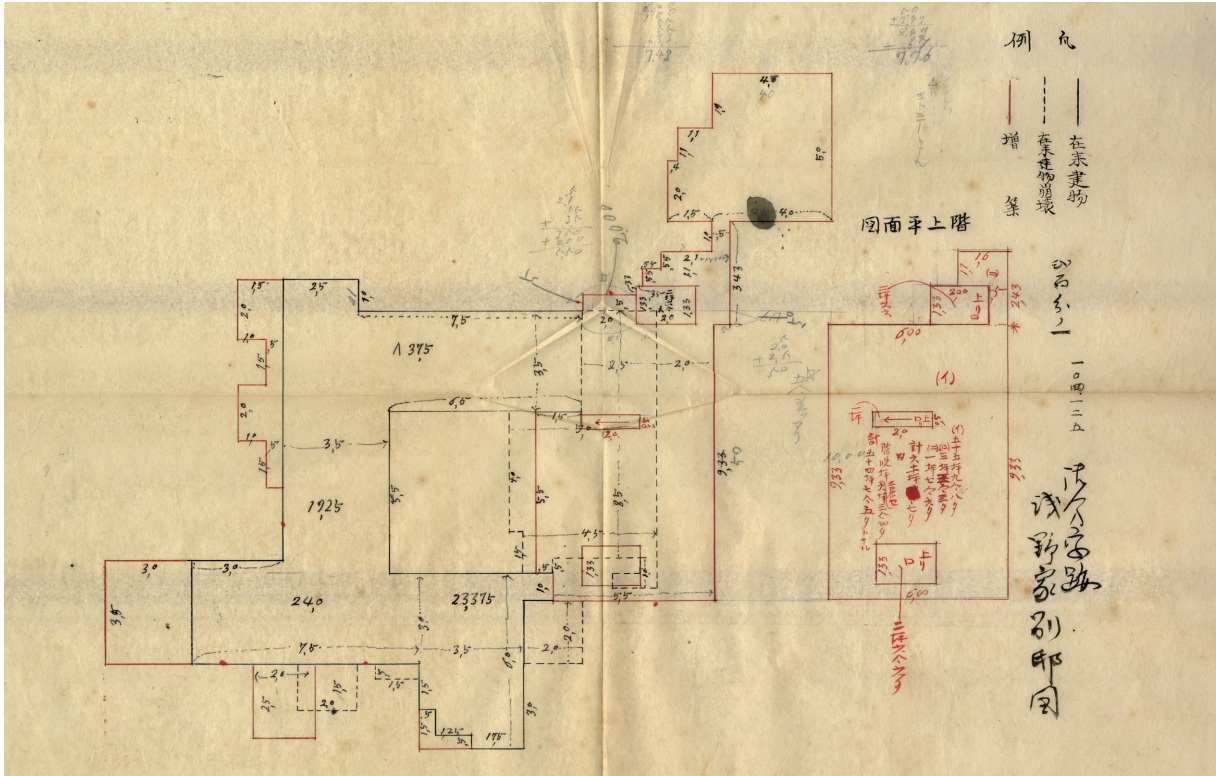


調査地点名

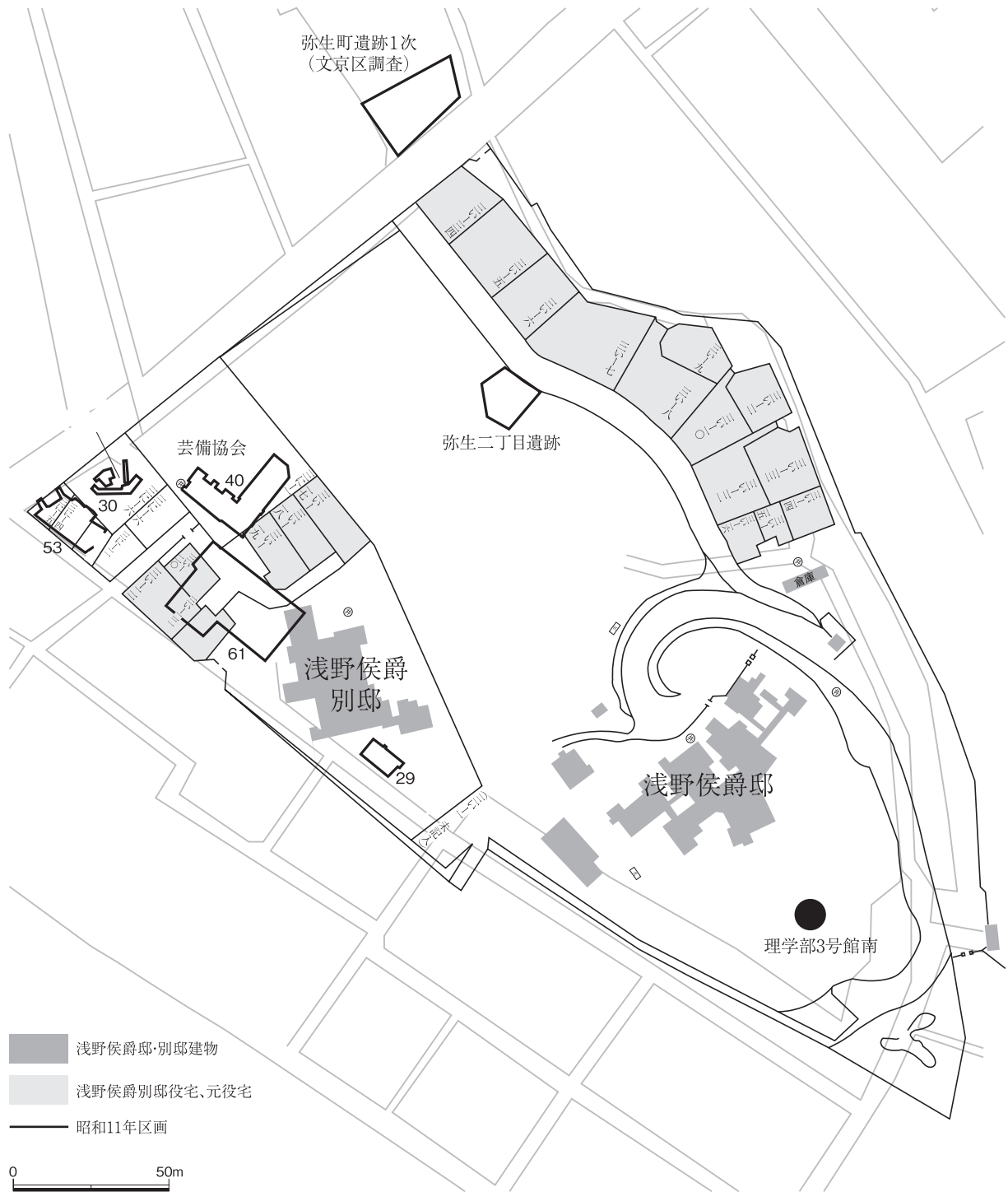
61 工学部館田先端知ビル地点 62 農学部総合研究棟地点(2001)

道

I-9図 水戸藩駒込邸の道と遺跡



II-10図 浅野公爵別邸図



II-11図 昭和11(1936)年の浅野家敷地と浅野地区の遺跡

昭和11(1936)年弥生町会事務所作成図より作成

調査地点名

29 情報基盤センター 変電室1地点 40 工学部風工学実験室地点 30 工学部風工学実験室支障ケーブル地点 53 工学部風環境シミュレーション風洞実験室地点 61 工学部館田先端知ビル地点

明治17(1884)年、警視庁用地に警視庁の慰霊堂である弥生神社が建設される。明治20(1886)年、弥生神社が芝公園に移転、弥生神社のあった警視庁用地は警視総監三島通庸と浅野家の間で話がまとまり、同年に浅野家に譲り渡される(註4)。射的場は明治21(1887)年大森へ移転する(註5)。射的場移転後、射場の埋め立が開始され、埋め土の不足を補うため周辺の削平が行われる。

青木家文書『昭和11年弥生町図面』によれば、東京大学タンデム加速器研究施設の西側に浅野侯爵邸、調査地点が位置する情報基盤センターと低温センターの位置に浅野侯爵別邸が建設された(Ⅱ-11図)。浅野侯爵邸の図面と弥生舎の建物を比較すると、平面形に共通する部分が多く建物の位置もほぼ同じであることから、弥生舎の建物を増築して使用していたと考えられる(註6)。

当地点で検出した遺構には東京大学になってからの施設も含まれるが、植栽痕と土坑は、別邸の裏庭に関連する遺構と考えられる。隣接する工学部武田先端知ビル地点は別邸の前庭にあたり、前庭の植栽痕と別邸の基礎と考えられるSB134-1・2を検出した。別邸の平面図が『明治四十二年調家屋台帳』に描かれている。別邸の平面図に「在来建物」は実線、点線で「在来建物崩壊」、赤線で「増築」と書かれている(Ⅱ-10図)。「在来建物」と「増築」部、「在来建物崩壊」を除いた平面形は、Ⅱ-11図の浅野侯爵別邸の平面形と同じで昭和11(1936)年の別邸は増改築後の平面図である。「在来建物崩壊」の要因として考えられるのは、大正12(1923)年の関東大震災である。浅野侯爵別邸は工学部武田先端知ビル地点のSR1-2は別邸の上に建設されている。SR1-2はロームブロックを使用して埋め戻しが行われており、ロームブロック間には隙間があり、しっかりとした地盤固めは行われていない。浅野侯爵邸は震災で書斎が崩れた程度の被害で済んだが(註7)、別邸が震災の被害を受けたのは、建物の地下の盛土が影響したと考えられる。

出土遺物には、焼成を受けた洋食器が含まれていた。浅野家敷地内は戦災を受けていないことから、整理作業開始当初、これらの遺物は関東大震災の「在来建物崩壊」に伴い裏庭に廃棄されたごみと推定したが、出土遺物の製造年代が大正から昭和にかけてと年代幅があること、同じ遺構に昭和16(1941)年以降に製造された磁器や江戸時代の陶磁器、東京大学以降の遺物が含まれていることから、廃棄の背景には複数の状況が想定できるため、焼成を受けた洋食器が「在来建物崩壊」に伴うごみの可能性が高いが、これらが含まれる遺構が「在来建物崩壊」に伴う遺構であることを明確にすることができなかった。

## 註

- 1 東京日日新聞 明治十年一月十五日 月曜日 第千五百三拾壹號 四十三
- 2 警視庁 1893 『警視廳史稿下巻 警視庁史卷十五』(明治7年10月9日) p.3、警視庁 1893 『警視廳史稿 下巻 警視庁史卷十五』(明治7年10月9日) pp.3-4
- 3 石井研堂 1941 「第六編 宗教部 向ヶ岡弥生神社」『改訂増補 明治事物起原 上巻』 p.433 (ちくま学芸文庫 1997 『明治事物起原3』 所収)
- 4 石樽顕吉 2000 「浅野キャンパス余話」『工学部ニュース』 No.358、359、360 東京大学工学部ニュース編集室 20000301 pp.19-20
- 5 東京日日新聞 明治廿一年八月十四日 火曜日 第五千三十四號 三
- 6 浅野長愛氏(山階鳥類研究所理事長)よれば(註2資料)、浅野侯爵邸の使用期間は明治20年~昭和17年、別邸の使用期間は大正7年~昭和16年と述べている。
- 7 谷根千工房 2001 「五十三号「地主は浅野のお殿様」補遺 芸州浅野家一十七代当主、浅野長愛さんにうかがう 弥生町での日々」『谷中・根津・千駄木(季刊) 其の六十七 二〇〇一年十月十五日発行』 pp.28-38

報告書抄録

ふりがな	とうきょうだいがくほんごうこうないのいせき あさのちく1 じょうほうきばんせんたー へんでんしつ1ちてん・こうがくぶかぜこうがくじっけんしつちてん・こうがくぶかぜこうがくじっけんしつししょうけーぶるちてん・こうがくぶかぜかんきょうしみゆれーしょんふうどうじっけんしつちてん・こうがくぶたけだせんたんちびるちてん							
書名	東京大学本郷構内の遺跡 浅野地区 I 情報基盤センター 変電室1 地点・工学部風工学実験室地点・工学部風工学実験室支障ケーブル地点・工学部風環境シミュレーション風洞実験室地点・工学部武田先端知ビル地点							
副書名								
巻次								
シリーズ名	東京大学埋蔵文化財調査発掘調査報告書							
シリーズ番号	9							
編著者名	原祐一（編）、篠原和大、大貫浩子、阿部常樹、石井龍太							
編集機関	東京大学埋蔵文化財調査室	所在地	〒153-8904 東京都目黒区駒場4-6-1 駒場リサーチキャンパス内 03-5452-5103					
発行機関	東京大学埋蔵文化財調査室	所在地	〒153-8904 東京都目黒区駒場4-6-1 駒場リサーチキャンパス内 03-5452-5103					
発行年月日	平成21年12月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° / ′	° / ′			
とうきょうだいがくほんごうこうない 東京大学本郷構内 いせき あさのちく の遺跡 浅野地区 ほんごうだいいせきぐん (本郷台遺跡群・ やよいちやう ちよ 弥生町遺跡群) じょうほうきばん 情報基盤センター へんでんしつ ちてん 変電室1地点	とうきょうと 東京都 ぶんきょうく 文京区 やよいちやう ちよ 弥生町2丁 うめ ぼん 目11番16 ごう 号	13105	47 . 28	35° 42′ 55″	139° 45′ 50″	平成7年7月 18日～8年 7月31日	78㎡	事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
東京大学本郷構内 の遺跡 浅野地区 (本郷台遺跡・弥 生町遺跡群) 情報基盤センター 変電室1地点	武家屋敷 (水戸藩 駒込邸)、 浅野候爵 別邸	近世、近代	土坑、小穴	陶磁器、土器、金属製 品、石製品、瓦、ガラ ス製品、動物遺体				





東京大学本郷構内の遺跡

浅野地区 I

工学部風工学実験室地点

2009

東京大学埋蔵文化財調査室

## 例 言

1. 本報告は東京大学工学部風工学実験室改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告である。
2. 調査および整理作業での本地点の呼称は「工学部全径間風洞実験室地点（略称AFL）」であり、既出の年報、論文などでは「工学部全径間風洞実験室地点」と記載されている。今回の報告書作成時に現在の施設名称である「工学部風工学実験室地点」へ改称した。
3. 調査地点は東京都文京区弥生町2丁目11番16号、東京大学本郷構内浅野地区に位置している。
4. 本地点は東京大学遺跡地図「文京区No.47 本郷台遺跡群」および「文京区No.28 弥生町遺跡群」内に位置している。
5. 調査面積は252㎡である。
6. 発掘調査は東京大学埋蔵文化財調査室が行い、篠原（鮫島）和大（現静岡大学）が担当した。
7. 調査期間は以下の通りである。
  - 事前調査 1996年1月22日～1996年8年3月7日
  - 整理作業 2007年5月～2009年2月（この期間に断続して作業を行った。）
  - 報告書編集 2003年3月～5月
8. 本報告の編集は原祐一、香取祐一が行った。
9. 瓦については石井龍太（東京大学大学院人文社会系研究科博士後期課程）が整理報告を行った。
10. 石質の鑑定はパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。
11. 執筆分担は以下の通りである。
  - 第1節 篠原和大、香取祐一
  - 第2節 原 祐一
  - 第3節 香取祐一
  - 第4節 - (1) 原 祐一
  - 第4節 - (2) 大貫浩子、原 祐一（弾丸）、石井龍太（瓦）
  - 第5節 原 祐一
12. 出土遺物は埋蔵文化財調査室が、東京都目黒区駒場4-6-1駒場リサーチキャンパス・茨城県新治郡石岡市柿岡414東京大学柿岡教育研究施設内で運用、保存、管理している。

### 整理作業参加者

青山正昭 安芸毬子 今井雅子 大貫浩子 香取祐一 加藤理香 君嶋俊行 山田くりか 米川裕治  
坂野貞子 田中美奈子

## 第1節 調査に至る経緯

1995年、東京大学工学部では全経間風洞実験室（現風工学実験室）の増築を計画した。建設予定地は本郷台遺跡群（文京区No.47）および弥生町遺跡群（文京区No.28）に位置しているため、埋蔵文化財の有無について調査の依頼を受けた。試掘調査を行った結果、江戸時代の遺構・遺物の存在していたため、1996年1月22日から3月7日まで事前調査を行った。

## 第2節 地理的・歴史的環境

地理的環境については「I 遺跡周辺の諸環境」参照されたい。

調査の結果、6基の道、井戸、土坑等を検出した。調査地点北側、現地表面の標高は16.58m、遺跡検出面の標高は14.1m、道SR2の路面標高は12.32mで調査地点は深く掘削されていた。

調査地点は、江戸時代の水戸藩駒込邸に位置する。『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』によれば弥生地区圃場から工学部武田先端知ビルを直線で結んだ位置に、藩邸内を北西から南東へ横断する道がある。この道は、農学部総合研究棟地点01のSR1（東京大学埋蔵文化財調査室2004）、工学部武田先端知ビル地点のSR1-1・2（VI章参照）に該当し両遺構の延長線上に当地点が位置する。農学部総合研究棟地点01のSR1は道幅11m、深さ4mである。総合研究棟地点と武田先端知ビル地点を地図上で11m幅の直線で結ぶと、当地点のSR2、SR9が帯に重なり軸も同じである。以上から、SR2、SR9は『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』に描かれた道であり、その東側が「殿舎（御殿）の区域」と推定した。

『明治16年陸軍参謀本部測量原図』によれば、現在の浅野地区と北側住宅地は警視庁用地、西側の住宅地は射的場である。調査地点は窪地で建物が描かれている。この建物は「監的場」で射的の的を納めた建物と考えられる。江戸時代の道は同図には描かれていないため明治16（1883）年までに江戸時代の道は埋め立てられている。同図の等高線は2m間隔で窪地の外周に16mの等高線が描かれる。標高は窪地南側15.5m、窪地西側16.8m、窪地東側16.9mである。SR2、SR9の検出標高は14.1m、SR2底部標高は12.32m、SR9底部標高は10.45mでSR2、SR9の路面は段になっており、埋土の堆積状況から廃絶は同時に行われている。道の段差は射的場の施設建設には不向きで、建設のために埋め立てて平坦地にする必要があったのだろう。地表面との標高差を残しつつ道の段差を埋め東側への拡張が行われ「監的場」が建設されたと考えられる。明治16年の地表面と路面には5mの標高差があり、射場から離れた当地点で射的場建設のために切通し状の道を新営するとは考えられない。江戸時代の道を活用して窪地としたと考えられる。明治時代以降この地で行われた大規模な造成工事は、明治9（1876）年に造営の警視局射的場の建設工事と射的場移転後の宅地化が考えられるが、当地点で確認され造成は、明治9年の警視局射的場の建設に伴う工事と考えられる。路面に残された轍は江戸時代の造成時や使用時、警視局射的場の建設時の可能性があるが、どの段階の轍であるか区別はできなかった。

## 第3節 江戸時代以前

### (1) 埋没谷（Ⅲ－1図）

今回の調査では埋没谷が検出されている。この埋没谷の全幅は調査地点内では検出できなかったが、調査区北西側で立ち上がりを確認できるため、中心位置を元に推定すると幅約12mの規模を有していたと推定でき、北西から南東に向け緩やかに傾斜している。埋土は複雑な様相を呈し、19層を数える。このうち台地上の標準的な土層と明確に対比できるのは、9層のソフトローム層（Ⅲ層）および10層のハードローム層（Ⅳ層）のみであり、埋没谷の中心部付近の8・11・13・14・16・18・19層は粘性の強い、いわゆる水付きロームとなっており立川第1、第2黒色帯なども判別はできなかった。

### (2) 遺物（Ⅲ－2図）

江戸時代以前の遺物としては、縄文時代前期から晩期の土器および土師器が少量出土している。いずれも小片で包含層から出土し、遺構に伴うものではなかった。この中で縄文時代草創期に属すると思われる土器が2点、ソフトローム上面より検出された。

1の胎土は褐色で小石を含み繊維が混入されている。焼成は良好で比較的硬質である。口縁部は外反し、口唇から垂下する二条の微隆起線文が見られる。この隆起線文は口唇部では見られなくなるが口縁部上に続いている。そのほかに口縁部には口唇に沿う平行な二条の微隆起線文、および体部でも斜位方向に二条の微隆起線文が認められる。2はやや砂質な胎土で焼成はあまり良くないようである。摩滅が著しく判別しづらいが、口唇上部に棒状工具による斜位の窪みが三列見られ、体部に爪形文とは言い切れないが削られたような窪みが二カ所存在する。

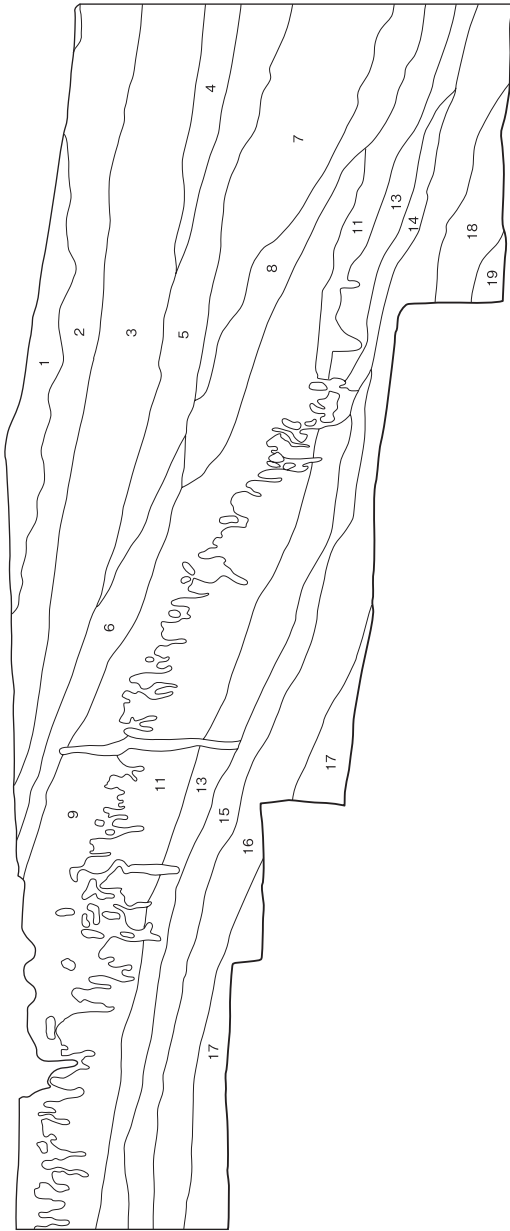
これまでの本郷構内の発掘調査では、文学部3号館地点から縄文時代草創期に属すると思われる石鎗が出土しているが、土器は出土していなかった。上記二点の土器については大塚達朗氏に実見していただき、1は微隆起線文土器で「多摩ニュータウン No.116 遺跡」および神奈川県藤沢市「柄沢遺跡」で出土している土器とモチーフが似ているとのことであった。2については類似例は見あたらないが、やはり草創期に属する土器片で良いのではないかとのご教示をいただいた。

本調査地点で検出された埋没谷は一部分であり、その規模の全容については明確にしえない部分が多い。また堆積している土層についても、本郷構内の他の調査地点との整合性および科学的な分析が行えなかったが、他の調査地点での検出状況との比較から、本地点の埋没谷について述べてみたい。

現在まで本郷構内の調査では埋没谷が御殿下記念館地点、中央診療棟地点、第2中央診療棟地点、病棟地点、薬学部資料館地点、地震研総合研究棟地点などで検出されており、本調査地点で検出された埋没谷の状況に類似している。その中で御殿下記念館地点では、谷頭に近いと思われる地点も検出できており、調査区内に4条の谷筋が存在している。また病棟地点および中央診療棟地点、第2中央診療棟地点ではひと続きの谷が検出され、南北75m、東西120mの範囲でほぼ直角に曲がる様相を呈しており、本郷構内の埋没谷が複雑な地形を呈している様相が伺える。

本郷構内浅野地区の原地形は近世以降の改変が著しく、現在の地形から読み取るのは難しい。その中で比較的巨視的に地形が看取できる地図である「二万分一迅速測図原図」の等高線と、明治19

A' 13.60



層位	色調	主体土	縮まり	粘性
1	暗黄褐色斑状土	暗褐色土とローム質土が斑状を呈す、ローム粒、1~3mmの赤色スコリアを多量に含む	普通	弱
2	黒褐色土	2~3mmの赤色スコリアを多量に含む	普通	やや弱
3	暗褐色土	1mm以下のスコリアをやや多量に含む	普通	普通
4	黒褐色土	ローム色の強い部分と黒色の部分がやや斑状を呈す、2~3mmのスコリアをやや多量に含む	普通	普通
5	暗茶褐色土	やや暗い色のローム質土(漸移層)、1mm以下の赤色スコリア、黒色粒を少量含む	普通	弱
6	暗灰黄褐色土	キメ細かい黒色土、1mm以下の赤色スコリアを多量に含む	普通	普通
7	黒色土	ローム質土、やや水付き、A-6下層からクラック状・斑状に暗褐色土が入る	普通	強
8	乳灰褐色土	極小~3mmの赤色スコリアをやや多量、黒色スコリア少量含む、いわゆるソフトローム	普通	普通
9	暗灰褐色土	2~3mmの赤色・黒色スコリアを多量に含む、やや水付き、空隙がやや多く見られる	普通	普通
10	暗灰色土	1~3mmの赤色・黒色スコリアを多量に含む、1~2mm程度の空隙が多く見られる、ハードローム	強	普通
11	黄褐色土	砂粒状の黒色スコリアを多量、赤色スコリアをやや多量に含む、水付き、空隙がやや多く見られる	強	普通
12	灰黄色土	赤色・黒色スコリアを少量含む、不定形の空隙多数	やや強	強
13	灰褐色土	1mm以下の黒スコリアを多量に含む、黄色が強い部分が多量にある	普通	強
14	黄灰白色土	赤色・黒色スコリアを少量含む、空隙が多く見られる	弱	強
15	暗灰黄褐色土	硬質な部分と脆部な部分がやや斑状を呈す、1mm前後の黒色スコリアを多量に含む、空隙がやや多く見られる	やや強	強
16	暗灰褐色土	下部は2~5mmの黒色スコリアを多量に含む、水付き、やや砂質で硬質の部分がブロック状に散在	普通	強
17	暗灰黄色土	7~8mmの黒色スコリアを多量含む、不定形で大きめの空隙多数	強	強
18	淡紫茶褐色土	暗茶褐色土層、白色粒を多量に含む、空隙(大)が多く見られる	強	強
19	黄灰色土	黄色ローム質土主体、やや暗い部分が斑状を呈す、空隙がやや多く見られる	極強	強



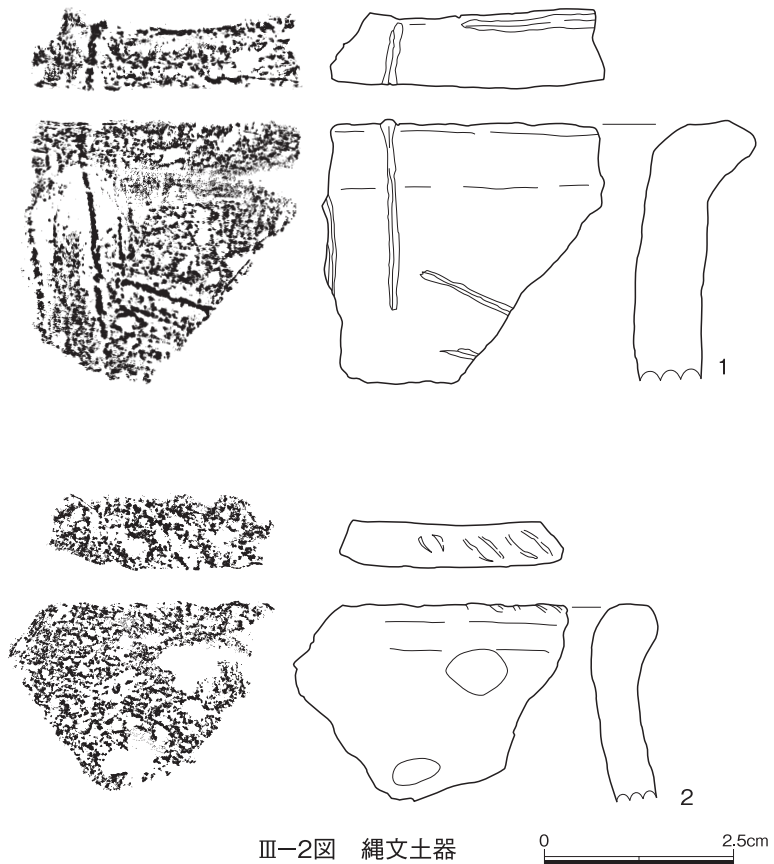
III-1図 埋没谷土層図

年参謀本部原図を重ね合わせ本郷構内の埋没谷の状況を図示した(Ⅲ-3図)。この図からまず射的場の北西部付近に、谷頭を持つ大きめの谷の存在が考えられる。調査地点周辺では、武田先端知ビル地点(TS地点)で調査区の東に東側へ下る傾斜が確認されており、近接する風工学実験室支障ケーブル第I地点(AFC I地点)でも東側へ下る傾斜が確認されている。しかし同Ⅱ・Ⅲ地点および風環境シミュレーション風洞実験室地点(AFⅣ地点)では、自然地形に大きい変化は認められなかった。このような状況から本調査地点で検出された埋没谷は、射的場北西側を谷頭とする大きい谷地形に流れ込む小谷と思われ、南側に緩やかカーブし大きい谷に合

流すると考えられるが、情報基盤センター変電室1地点(ACC地点)では自然地形の傾斜は見られない。谷が尾根筋を越え東側に流れ込むとは考えられないので、情報基盤センター変電室1地点手前から急激に西側にカーブし大きい谷に流れ込むと考えられる。

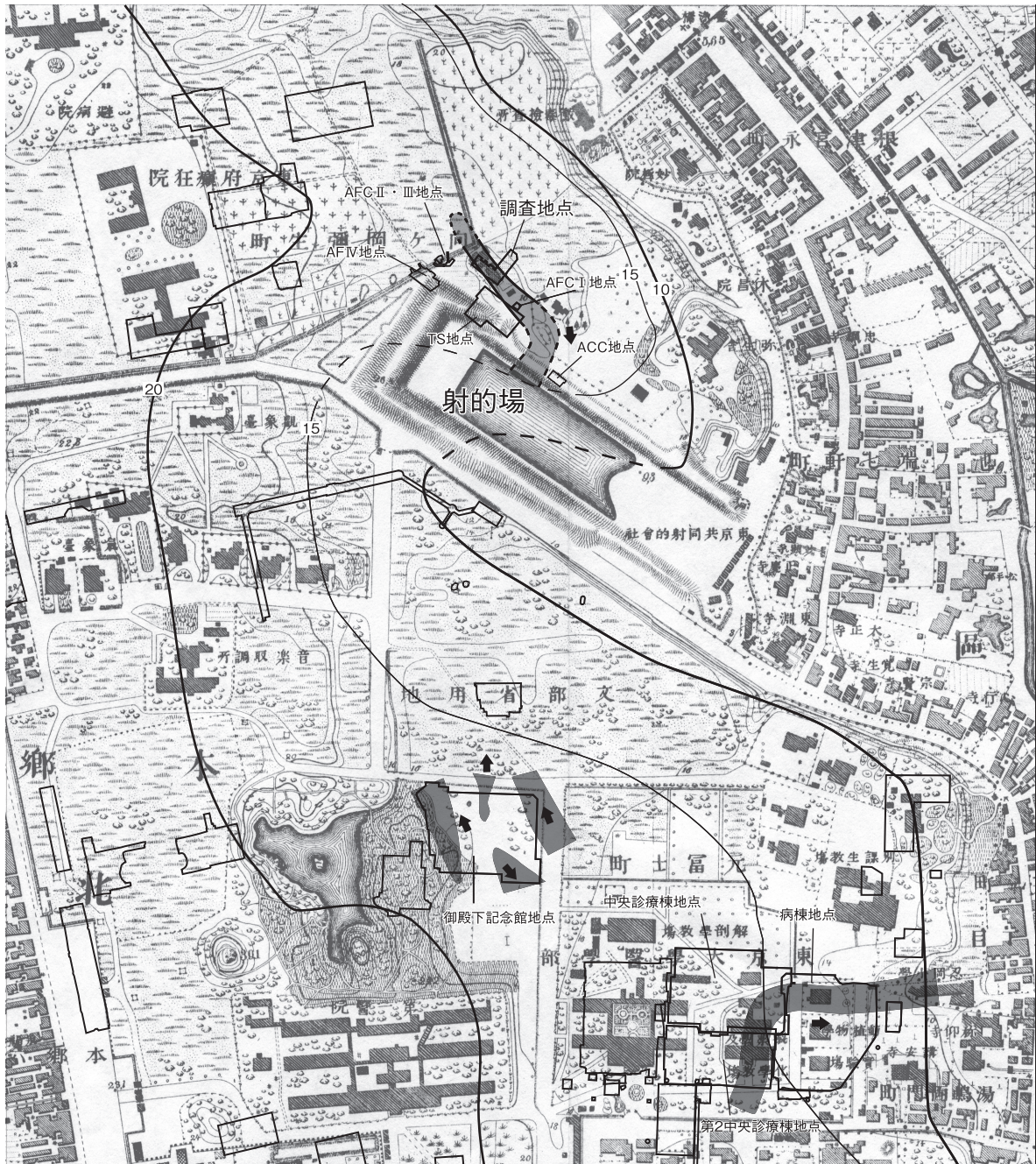
埋没谷の開析の推移について、御殿下記念館地点ではローム層の堆積状況から武蔵野ローム堆積直後の約三万年前から開析が始まり、第二黒色帯の堆積時の二万八千年~二万七千年前に調査地点では開析が停止したとしている。また中央診療棟地点・病棟地点では、ソフトローム上面で3.5mから5mほど御殿下記念館地点よりも標高の低いことから、より後の時期まで開析されていたと考えられ、谷の最下部は粘性の強い水つきロームとなっている。

ローム層堆積以降の埋没谷の堆積状況は、各地点で類似点が認められ黒色土(註1)が中心部で厚く縁辺にかけて薄くなりレンズ状に堆積している。御殿下記念館地点では「褐色土」を間層とし、黒色土を上下層に分けることができている。間層である「褐色土」の上面からは縄文時代後期・晩期の土器が出土し、下部の黒色土からは縄文時代前期の土器、陥穴が検出されている。この「褐色土」は病棟地点ではH層とされており、茶褐色土と暗褐色土が斑状を呈す土層で、やはり上面で縄文時代晩期の土器がまとまった数量出土している(香取 2000)。また中央診療棟地点の調査では、この「褐色土」の上位の黒色土層が、平安時代と考えられる井戸の埋土、および古墳時代後期の住居の埋土の最上層に位置していることから、多摩ニュータウンⅡB層に相当するのではないかとし、「褐色土」を同ⅡY層と推定している(藤本 1990)。これらの見解から本郷構内に見られる埋没谷の堆積状況は、大きく分けると下位に縄文時代前期までの黒色土、その上位に多摩ニュータウンⅡY層と考えられる縄文時代前期以降~縄文時代中期までの斑状の「褐色土」、さらにその上位に同ⅡB層と思われ



Ⅲ-2図 縄文土器

0 2.5cm



Ⅲ-3図 本郷構内の埋没谷

等高線は迅速図原図からトレース

埋没谷の範囲

る「黒色土」が堆積する状況と考えられる。

前述の堆積状況を当調査地点と対比させてみると、1層がⅡ y層に、2層から7層は縄文時代前期までの「黒色土」に相当すると考えられる。また当調査地点での埋没谷の標高は、中央診療棟地点・病棟地点よりは高く、御殿下記念館地点よりは低いが、下部に水付きロームを持つ点などから、開析の推移は中央診療棟地点・病棟地点に近い状況であった類推できる。

註

- 1 中央診療棟地点では褐～暗褐色土としている。

## 第4節 江戸時代以降

### (1) 遺構

#### SR1 (Ⅲ-5図)

遺構性格は道で両遺構は路面が硬く突き固められていた。路面は南に傾斜する。断面形は逆台形を呈する。確認された範囲で長さ7.5m、a-a'セクション部で幅7.23m、深さ1.2mを測る。1～10・15層はロームブロック、ローム粒を主体とする埋土で、11～14・16層は路面の盛土で硬く突き固められている。路面に轍痕が確認されているが突き固められた層は道の中心になく路面が自然堆積層で、道を造成した際の轍か、道を使用した際の轍であるかの区別できなかった。

#### SR2、SR9 (Ⅲ-6～9図)

遺構性格は道で両遺構は路面が硬く突き固められていた。路面は南に傾斜する。SR2とSR9は埋め土の状況から同時に使用されていたと考えられる。SR2は、確認された範囲で長さ6.4m、a-a'セクション部で幅7.6m、深さ1.7mを測る。路面標高は北側が12.31m、南側が12.37mで南側に傾斜している。SR9は確認された範囲で長さ20.7m、a-a'セクション部で幅9.7m、深さ3.24mを測る。路面標高は10.45mである。1～18層はロームブロック、ローム粒を主体とする埋土である。SR9をSR2底部レベルまで埋めた後(18層)、両遺構を埋めている(1～17層)。SR2最下層の25層は固く突き固められており面として確認ができことから路面の盛土と考えられる。SR9の20・24層は25層程ではないが強く突き固められていた。SR9の路面は部分的に失われている部分があった。路面下層は自然堆積層の黒ボク土が堆積しており轍は道を造成した際の轍か道を使用した際の轍であるかの区別はつかなかった。

#### SE3 (Ⅲ-13、14図)

遺構性格は井戸である。遺構の径は比較的小さく1.1mを測る。深さ1.92mまで掘削を行った。SR2に切られる。

#### SK4 (Ⅲ-10図)

遺構性格は風倒木跡である。長軸3.54m、短軸2.74m、深さ3.54mを測る。

#### SR5 (Ⅲ-8図)

遺構性格は道で路面が硬く突き固められていた。確認された範囲で長さ5m、幅1mを測る。

#### SR6 (Ⅲ-8図)

遺構性格は道で路面が硬く突き固められていた。確認された範囲で長さ12m、幅3.4mを測る。路面標高は北側が12.73m、南側が12.81mやや北側に傾斜している。裏面から靴底が出土した。SR7を切る。

#### SR7 (Ⅲ-8図)

遺構性格は道である。確認された範囲で長さ8m、幅3.6mを測る。SR1・SR2・SR5・SR6・RS9と軸が異なる。SR6に西側を切られる。

#### SE8 (Ⅲ-11図)

遺構性格は井戸である。遺構の径は比較的小さく長軸1.2mと短軸1.1mを測る。深さ3mまで掘削を行った。上部をSR9に切られる。東大編年IV b期(1690～1700年代)に相当する遺物群が出土しており、色絵磁器等上手の磁器が含まれる。



SK10 (Ⅲ-16図)

遺構性格は土坑である。長軸2.5m、短軸1m、深さ0.1mを測る。平面形は不整形である。

SK11 (Ⅲ-10図)

遺構性格は土坑である。確認された範囲で長さ1.8m、短軸1m、深さ0.54mを測る。

SK12 (Ⅲ-12図)

遺構性格は土坑である。長軸2.18m、深さ0.57mを測る。

SK14 (Ⅲ-17図)

平面形は不整形、底部は凸凹しており覆土の堆積状況から倒木跡と考えられる。長軸3.24m、短軸3.2m、深さ1.38mを測る。上部をSR9に切られる。

SK15 (Ⅲ-14図)

遺構性格は土坑である。b-b'セクション部で幅2.92m、深さ0.45mを測る。南側をSK18に切られる。16世紀中頃以降の在地系土器1点が出土した。

SP16 (Ⅲ-15図)

遺構性格は杭穴である。長軸0.5m、短軸0.48m、深さ0.24mを測る。平面形は不整円形である。

SP17 (Ⅲ-15図)

遺構性格は杭穴である。長軸0.42m、短軸0.4m、深さ0.2mを測る。平面形は隅丸方形である。

SK18 (Ⅲ-13、14図)

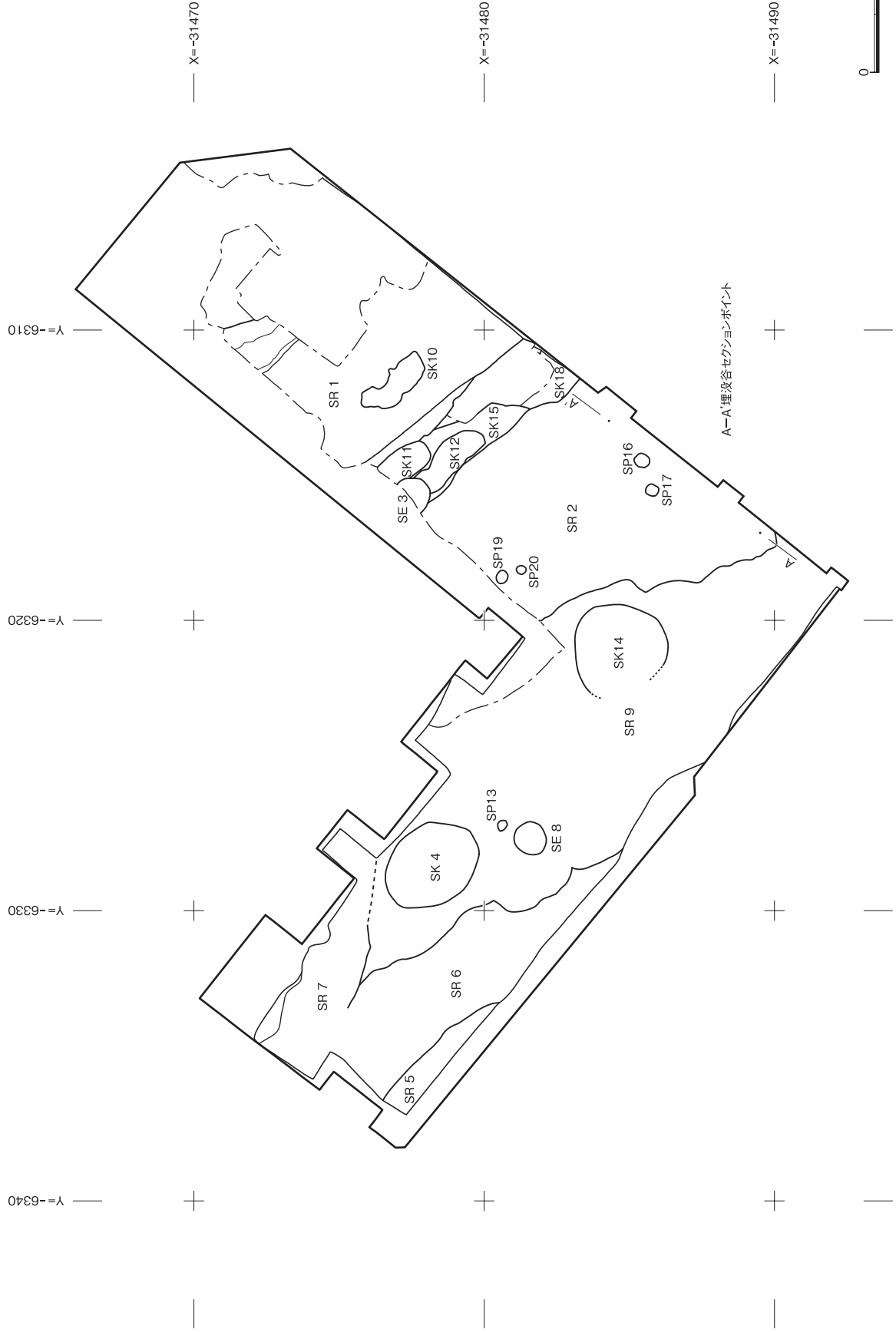
遺構性格は土坑である。b-b'セクション部で幅2.3m、深さ0.44mを測る。SK15を切る。

SP19 (Ⅲ-15図)

遺構性格は杭穴である。長軸0.5m、短軸0.4m、深さ0.26mを測る。平面形は不整円形である。

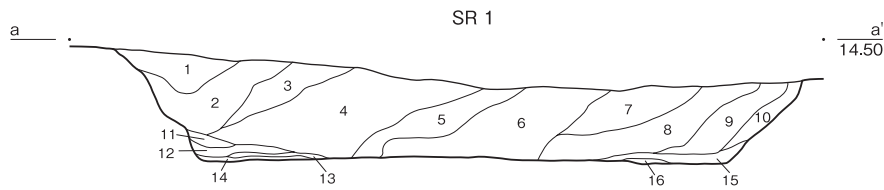
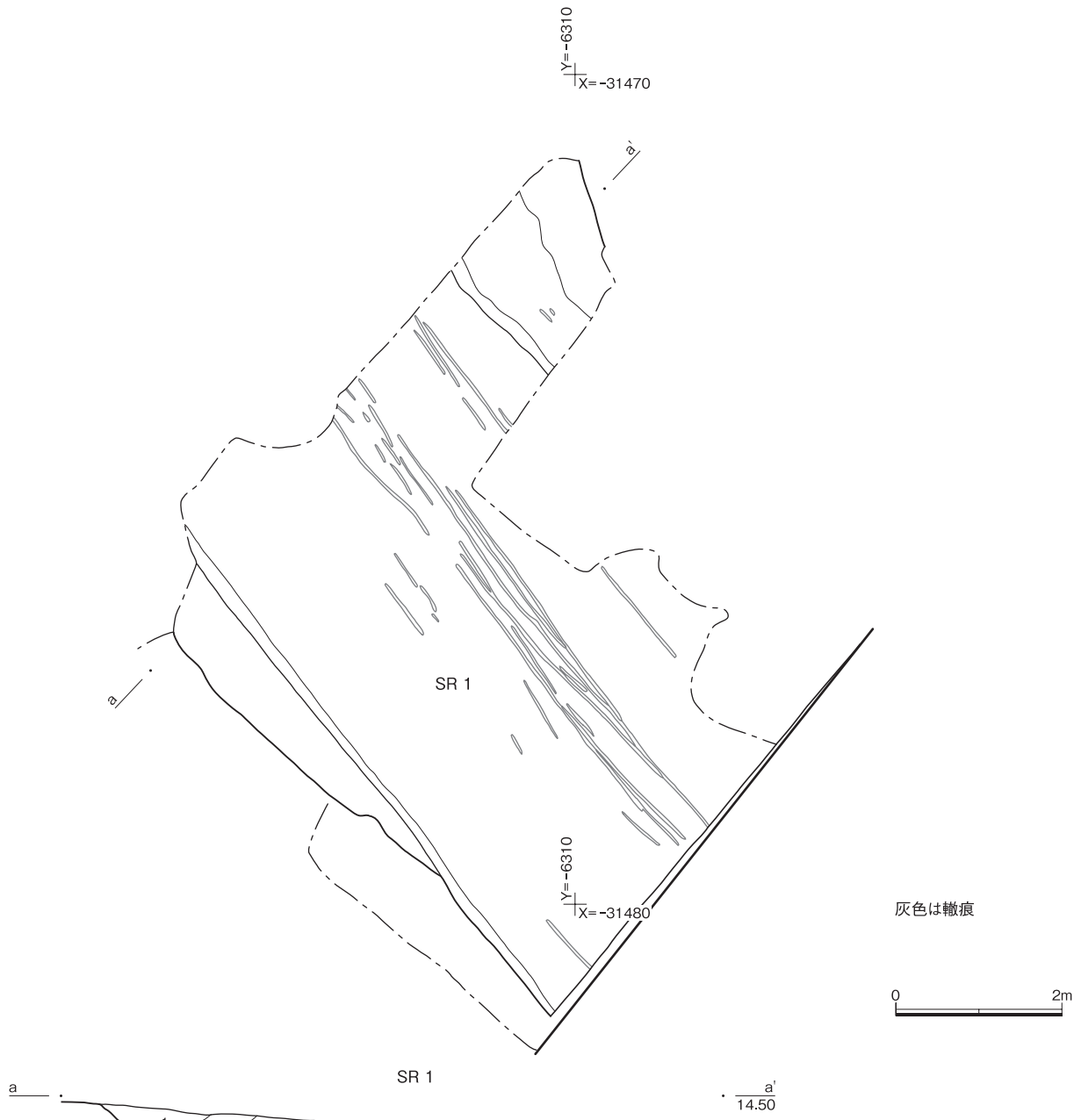
SP20 (Ⅲ-15図)

遺構性格は杭穴である。長軸0.3m、短軸0.3m、深さ0.3mを測る。平面形は不整円形である。



Ⅲ-4図 全体図

III 工学部風工学実験室地点

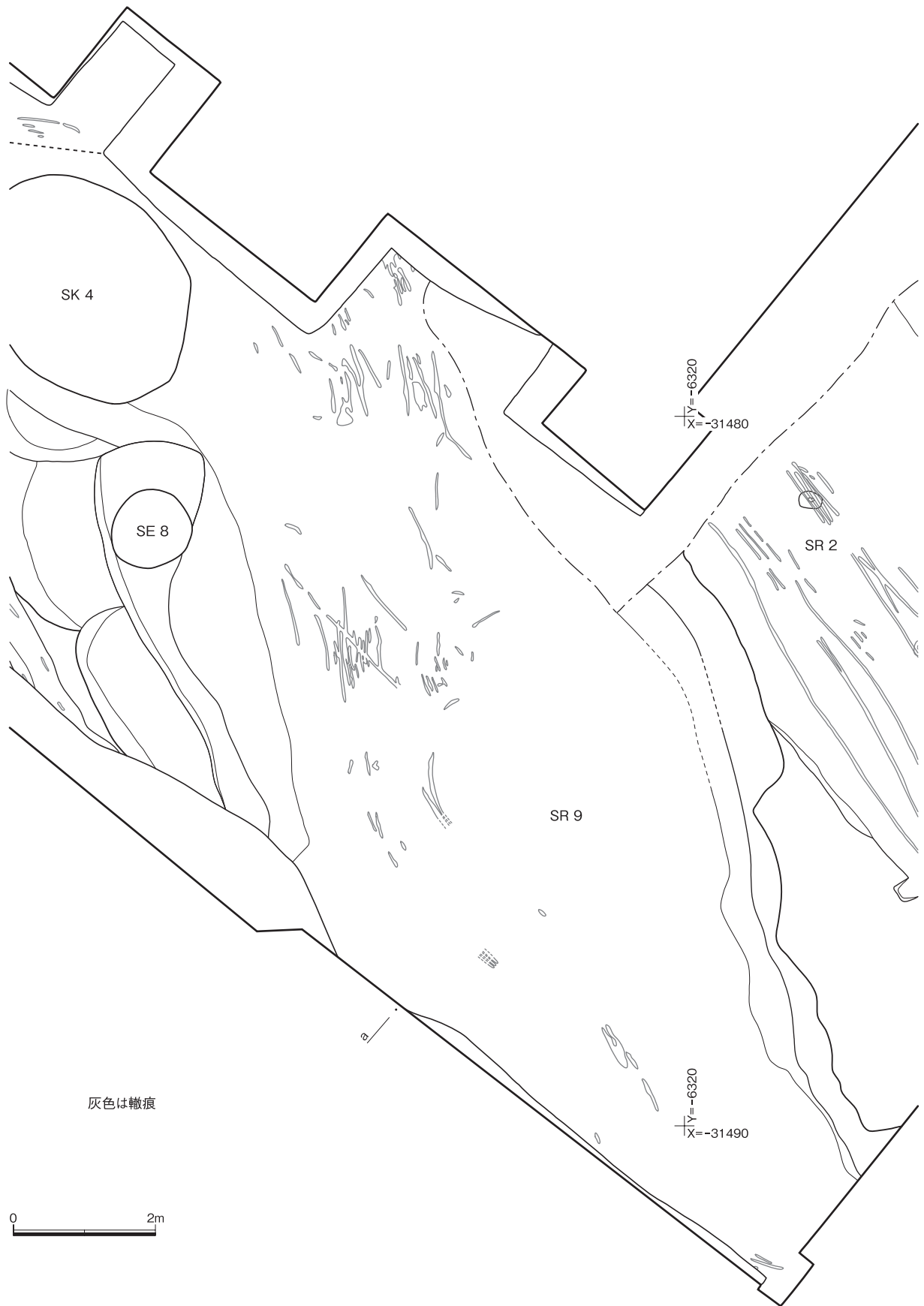


層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性
1	黄褐色土	ローム粒・ロームブロックを多量含む、やや白みを帯びる	強	弱
2	黄褐色土	ロームブロック主体	強	やや弱
3	茶褐色土	ロームブロックを多量含む	強	やや弱
4	黄褐色土	ロームブロック(大)主体	強	やや弱
5	黄褐色土	ロームブロック(小)主体	普通	やや弱
6	黄褐色土	ローム粒・ロームブロック(大)を多量含む	普通	やや弱
7	黄褐色土	ローム粒・ロームブロック(小)を多量含む	普通	やや弱
8	黄褐色土	ロームブロック(大)主体	普通	やや弱
9	茶褐色土	ロームブロック(小)を少量含む	普通	弱
10	暗褐色土	ローム粒・焼土粒を少量含む	普通	やや弱
11	茶褐色土	ローム粒を少量含む	強	弱
12	茶褐色土	ローム粒を少量含む(11層より多い)	強	弱
13	暗褐色土	ローム粒を少量含む	強	弱
14	暗褐色土	ローム粒を少量含む	強	普通
15	黄褐色土	ローム粒を多量含む	普通	やや弱
16	黄褐色土	ロームブロック主体	強	普通

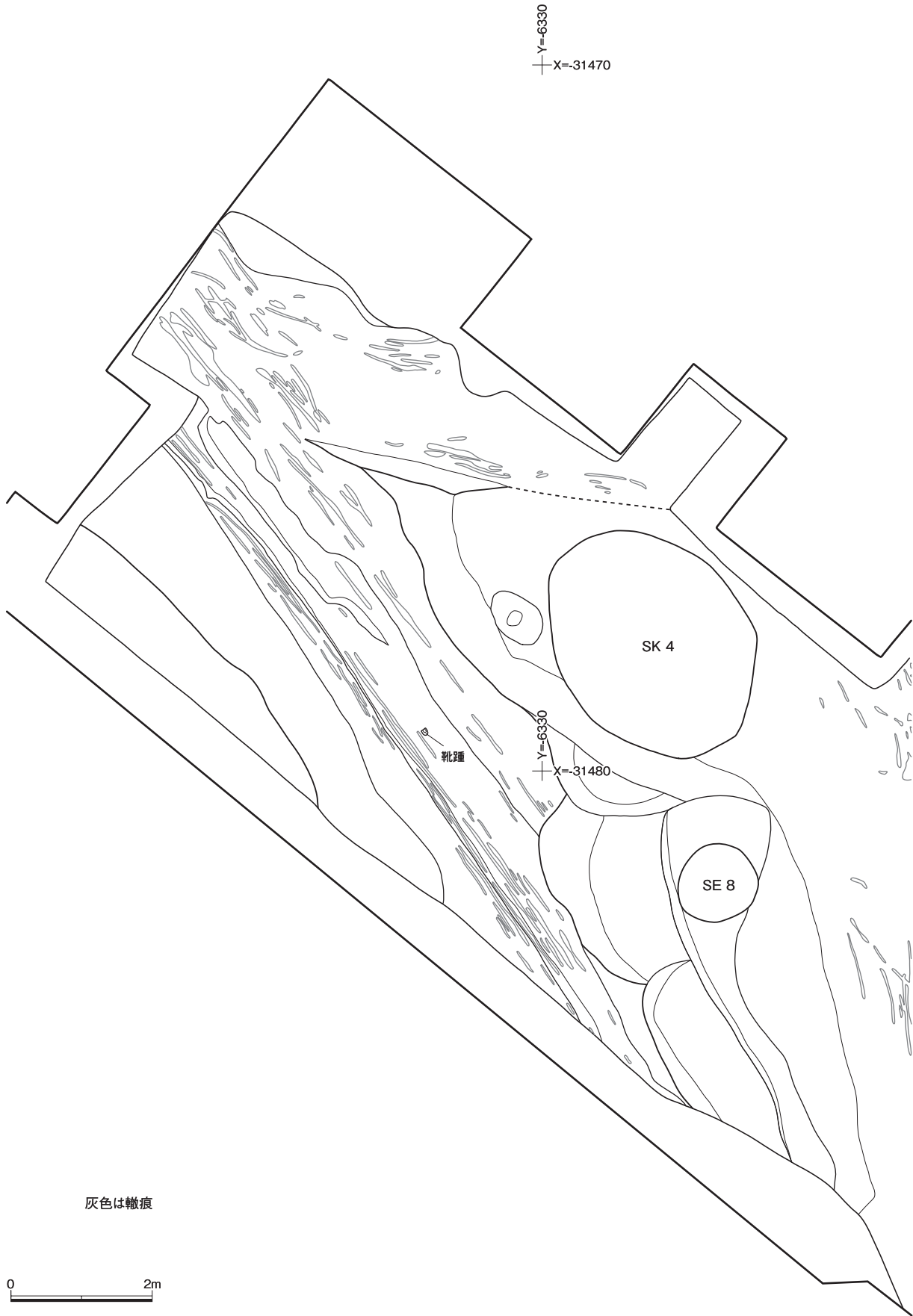
III-5図 SR 1



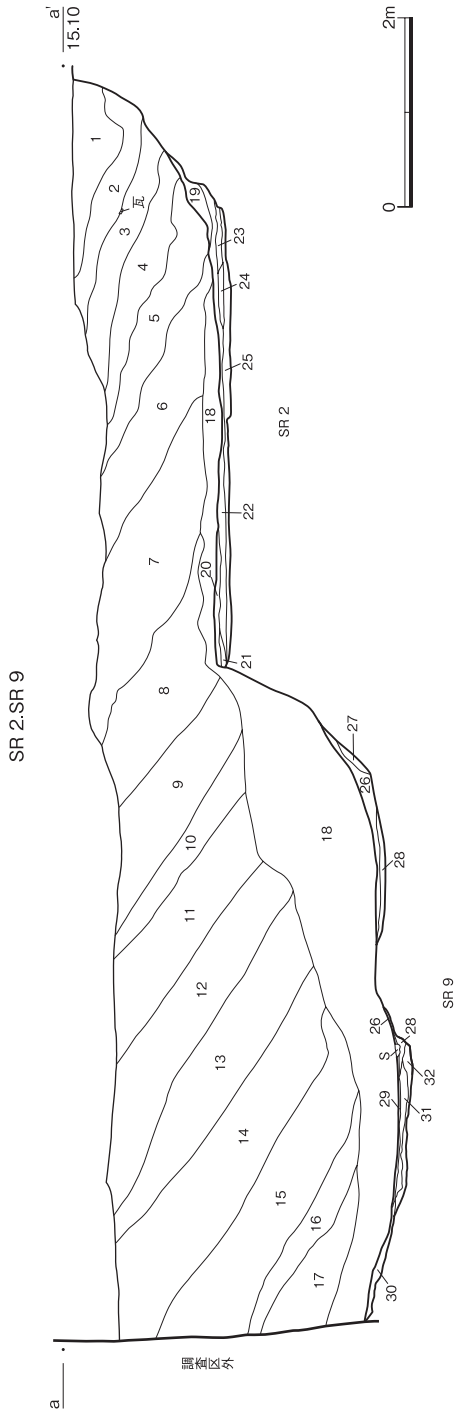
Ⅲ-6図 SR 2(1).SR 9(1)



Ⅲ-7図 SR 9(2)

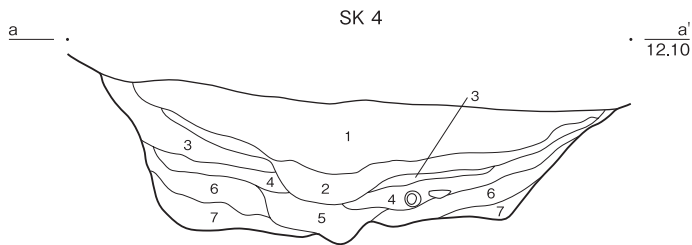
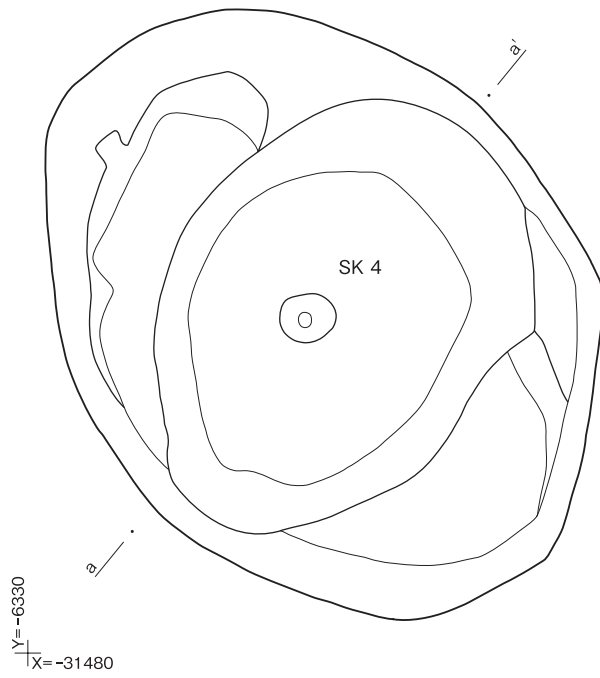


Ⅲ-8図 SR 5.SR 6.SR 7.SR 9(3)



SR 2・SR 9	色調	主体土・混入物	縮まり	粘性	SR 2	層位	色調	主体土・混入物	縮まり	粘性
1	暗黄褐色土	ローム粒・ロームブロックを多量含む	強	弱	SR 2	19	暗褐色土	ローム粒を少量含む	やや弱	弱
2	黄褐色土	ローム粒・ロームブロックを少量含む	普通	弱	SR 2	20	暗褐色土	ローム粒を少量含む	強	弱
3	黄褐色土	ローム粒・ロームブロックを少量含む	普通	弱	SR 2	21	黒褐色土	ローム粒を少量含む	普通	弱
4	黄褐色土	ローム粒・ロームブロックを少量含む	普通	やや弱	SR 2	22	暗褐色土	ローム粒を少量含む	普通	やや弱
5	暗黄褐色土	ローム粒を多量、ロームブロックを少量含む	普通	やや弱	SR 2	23	暗褐色土	ローム粒を少量含む、16層より多い	普通	やや弱
6	暗黄褐色土	ローム粒を多量、ロームブロックを少量含む	普通	やや弱	SR 2	24	暗褐色土	ローム粒を少量含む	強	やや弱
7	暗黄褐色土	ローム粒を多量、ロームブロックを少量含む	普通	弱	SR 2	25	暗褐色土	ローム粒を多量含む(硬化面)	強	やや弱
8	暗黄褐色土	ロームブロックを多量含む	強	やや弱	SR 9	SR 9	暗褐色土	ローム粒を微量含む	やや弱	弱
9	黄褐色土	ローム粒・ロームブロックを多量含む	強	弱	SR 9	26	褐色土	ローム粒を微量含む	強	強
10	黄褐色土	ローム粒・ロームブロックを多量含む	強	弱	SR 9	27	褐色土	ローム粒を微量含む	強	普通
11	黄褐色土	ローム粒・ロームブロックを多量含む、5層より明るい	強	やや弱	SR 9	28	暗褐色土	きめ細かい粘土主体、埋土直前の水性体積が?	強	普通
12	黄褐色土	ローム粒・ロームブロックを多量含む	強	弱	SR 9	29	暗灰色土	きめ細かい黒色土主体、ローム粒を少量含む	強	弱
13	黄褐色土	ローム粒を少量含む、7層より暗い	普通	普通	SR 9	30	黒色土	黒色土と暗褐色土の混合土、ローム粒・	普通	強
14	黄褐色土	ローム粒・ロームブロックを多量、茶褐色土粒子を少量含む	普通	強	SR 9	31	黒褐色土	赤色スコリアを微量、18層のブロックを所々に含む	普通	強
15	黄褐色土	ローム粒・ロームブロックを多量、茶褐色土粒子を少量含む	普通	強	SR 9	32	灰黒褐色土	黒褐色土と暗褐色ローム質土が斑状を呈し硬化している、上面に凹凸(亀)	普通	強
16	黄白色粘土	ローム粒を多量含む	やや弱	強					やや弱	強
17	黄白色粘土	ローム粒を少量含む、11層より暗い	やや弱	強					やや弱	強
18	黄褐色土	ロームブロック主体	やや弱	強					やや弱	強

III-9 図 SR 2(2).SR 9(4)



SK 4

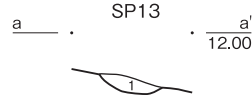
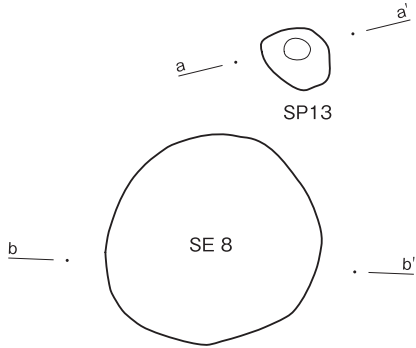
層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性
1	黄褐色土	盛土最下層、ロームブロックを多量含む	強	強
2	灰褐色粘土	粘土により構成される	普通	極強
3	黒褐色土	黒色土中にローム土を縞状に含む	弱	弱
4	暗灰褐色土	灰褐色粘土質土主体、ロームブロック(小)をやや多量含む	普通	強
5	黒褐色土	水つきロームブロック(小)をやや多量、やや砂質の黒褐色土・ロームブロック(大)を少量含む	弱	無
6	暗褐色土	暗褐色土中にローム粒を縞状にやや多量含む	弱	弱
7	黒色土	黒色土中にロームブロックをやや多量含む	やや弱	普通

III-10図 SK 4

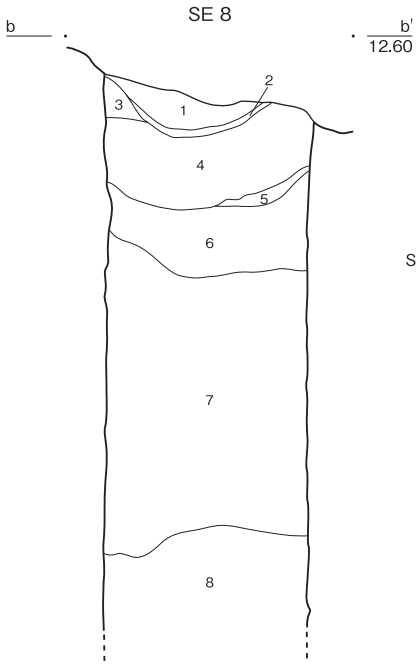


III 工学部風工学実験室地点

Y=-6326  
X=-31480

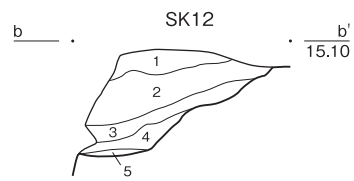
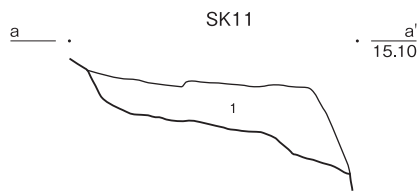
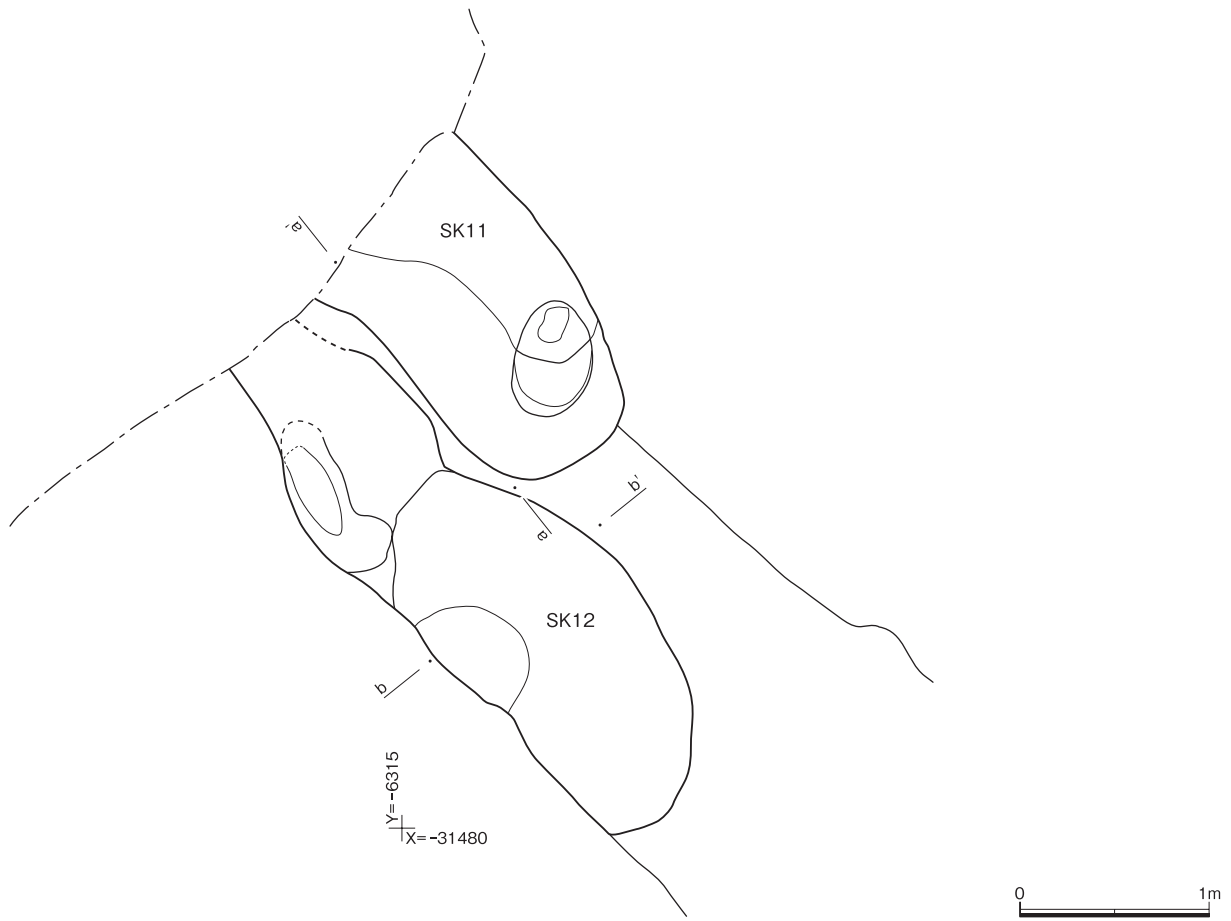


SP13 層位	色調	主体土・混入物	縮まり	粘性
1	黒色土	ローム土を多量、灰色粘土をやや多量、遺物を含む。	やや弱	普通



SE 8 層位	色調	主体土・混入物	縮まり	粘性
1	暗灰褐色土	遺物を多量に、ローム粒、炭化物粒、焼土粒をやや多量に含む。	やや弱	やや弱
2	赤褐色土	細かい焼土主体、炭化物粒、灰色土粒を多量に含む。	弱	無
3	黒褐色土	黒色土と暗褐色土が斑状にはいる。	弱	無
4	暗灰色土	暗灰色土主体、炭化物粒、焼土粒を多量、遺物をやや多量に含む、焼土が繻状になっている部分あり。	普通	普通
5	赤褐色土	焼土主体、ローム粒、炭化物粒、灰色土粒を含む。	弱	無
6	暗灰色土	暗灰色土主体、炭化物粒、焼土粒を少量含む。	弱	普通
7	暗褐色土	ローム土と暗灰色土の混合土、ロームブロックを多量、炭化物粒を少量含む。	普通	普通
8	暗茶褐色土	ローム粒を多量含む、暗褐色土、茶褐色土、ロームブロックを多量に含む、やや砂質。	弱	弱

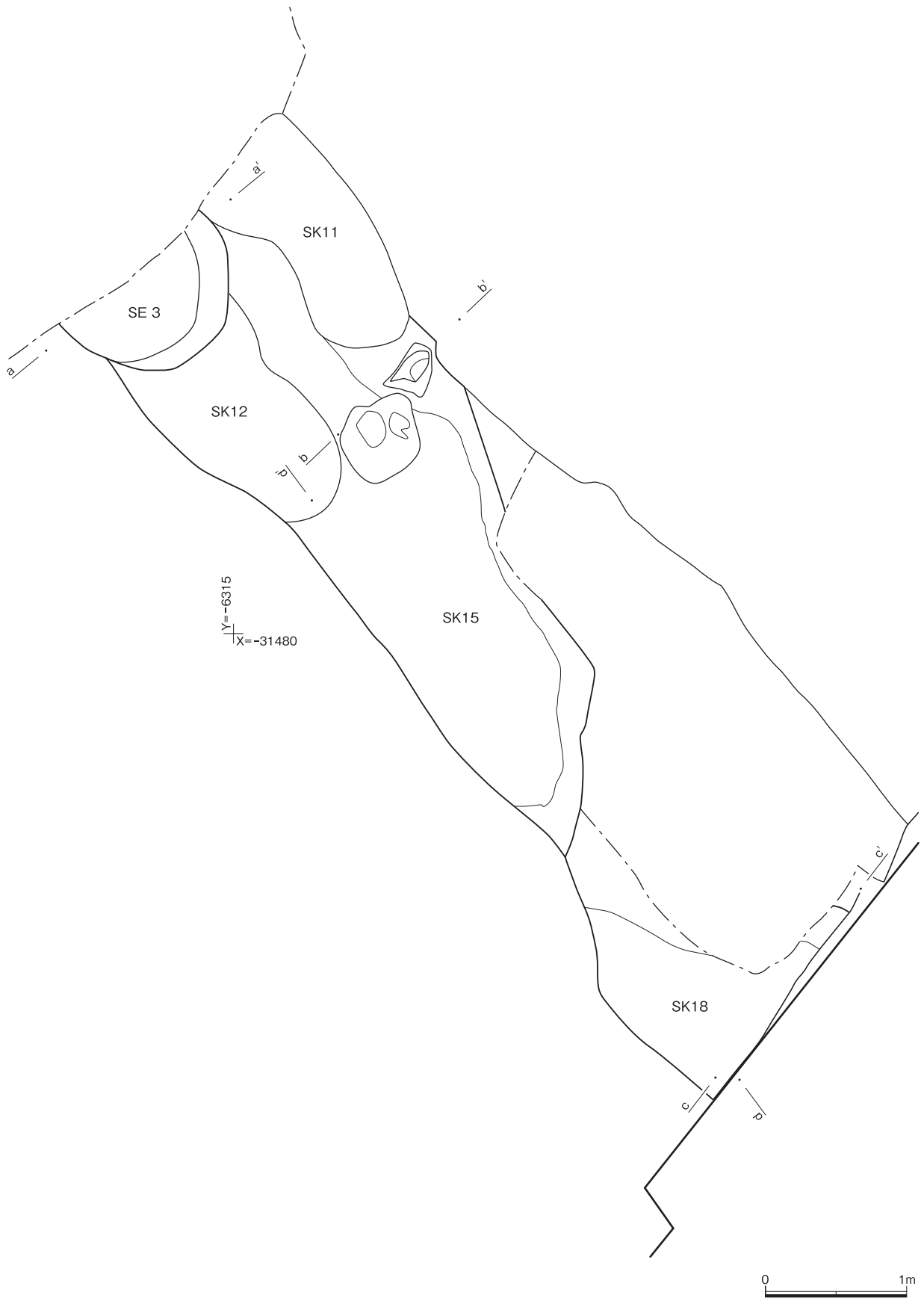
III-11図 SE 8.SP13



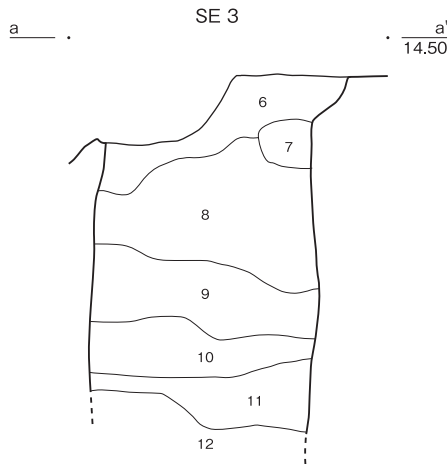
SK11	層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性
	1	茶褐色土	ローム粒・ロームブロックを少量含む	普通	やや弱

SK12	層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性
	1	明褐色土	灰褐色土塊を少量、ローム粒を微量含む	強	やや弱
	2	明茶褐色土	ロームブロック・黄灰白色砂礫ブロックを多量、小円礫をやや多量含む	普通	やや弱
	3	暗茶褐色土	黄灰白色砂礫ブロックを少量、ローム粒を微量含む	普通	普通
	4	暗茶褐色土	黄灰白色砂礫ブロックを少量含む	普通	普通
	5	暗黄褐色土	ローム粒を多量含む	普通	やや弱

III-12図 SK11.1SK12

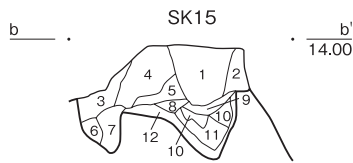


Ⅲ-13 Ⅱ SE 3(1).SK15(1).SK18(1)



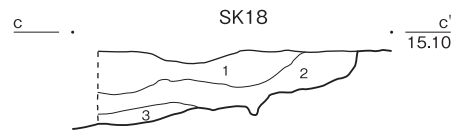
SE 3

層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性
1	明褐色土	ロームブロックを少量含む	普通	やや弱
2	明褐色土	ロームブロックを少量含む(1層より暗い)	普通	弱
3	明褐色土	ローム粒・小円礫を少量含む	普通	やや弱
4	暗褐色土	ロームブロックを少量含む	やや弱	やや弱
5	暗褐色土	ローム粒を微量含む	やや弱	やや弱
6	暗褐色土	ローム粒を少量含む(10層よりやや多い)	やや弱	やや弱
7	暗褐色土	ローム粒を少量含む(11層より少ない)	やや弱	やや弱



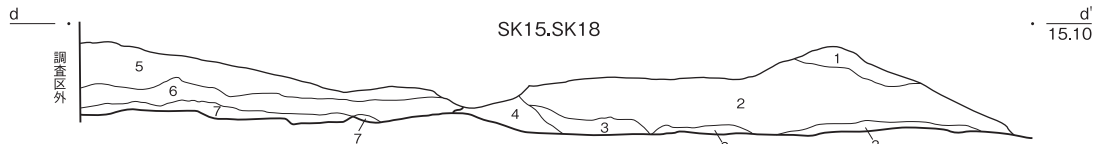
SK15

層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性
1	明茶褐色土	ローム粒をやや多量、赤灰白色土粒を少量含む	強	やや弱
2	明茶褐色土	ローム粒(1層に比べてやや少ない)・ロームブロックを少量含む	普通	やや弱
3	明褐色土	ローム粒を微量含む	やや弱	弱
4	茶褐色土	赤灰白色土粒を少量、ローム粒を微量含む	強	弱
5	黒茶褐色土	ローム粒を微量含む	普通	弱
6	暗茶褐色土		やや弱	弱
7	暗黄褐色土	ローム粒を多量含む	やや弱	やや弱
8	黄褐色土	ローム粒主体	やや弱	弱
9	暗黄褐色土	ローム粒を多量含む	やや弱	やや弱
10	暗茶褐色土	ローム粒を微量含む	やや弱	弱
11	暗褐色土	赤灰白色土ブロック・極小礫を少量含む	弱	弱
12	黄褐色土	ローム粒主体	強	やや弱



SK18

層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性
1	茶褐色土			
2	黒茶褐色土			
3	暗黄褐色土	ローム粒多量含む	強	やや弱



SK15

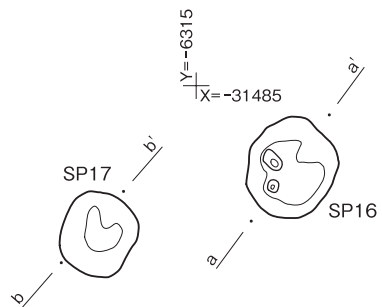
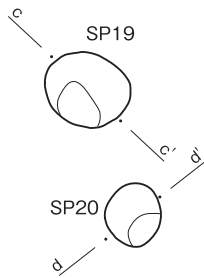
層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性
1	暗灰白色土	黄灰白色土粒及びブロック(小)を多量、白色砂礫を含む	強	弱
2	暗茶褐色土	ローム粒を微量含む	普通	弱
3	暗黄褐色土	ローム粒を多量含む	やや弱	弱
4	暗茶褐色土	ローム粒を少量、黄褐色土を斑状に含む	やや弱	弱

SK18

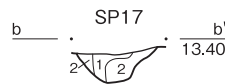
層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性
5	茶褐色土	ローム粒・黄褐色土塊を少量含む	強	やや弱
6	黒茶褐色土	ローム粒を所々斑状にやや多量含む	普通	弱
7	暗黄褐色土	ローム粒を斑状に多量、ロームブロック(大)を少量含む	強	弱



Ⅲ-14図 SE 3(2).SK15(2).SK18(2)



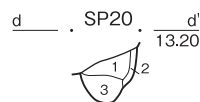
SP16 層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性
1	暗茶褐色土	ロームブロック(小)を少量、 ローム粒を微量含む	普通	弱
2	暗褐色土	ローム粒を微量、下層に ロームブロックを少量含む	普通	弱



SP17 層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性
1	暗茶褐色土	ローム粒を微量含む	強	弱
2	暗褐色土	ロームブロック(小) を少量含む	強	やや弱

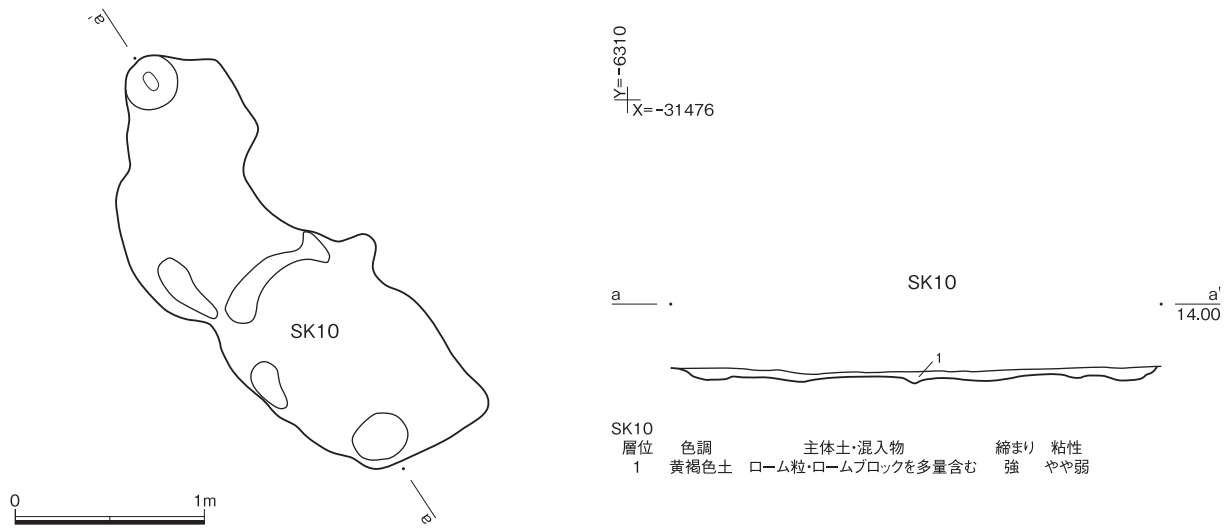


SP19 層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性
1	黒褐色土	暗褐色土粒を含む	やや弱	普通
2	暗褐色土	暗茶褐色土粒をやや多量含む	強	普通
3	暗褐色土	暗茶褐色土粒をやや多量含む	普通	普通

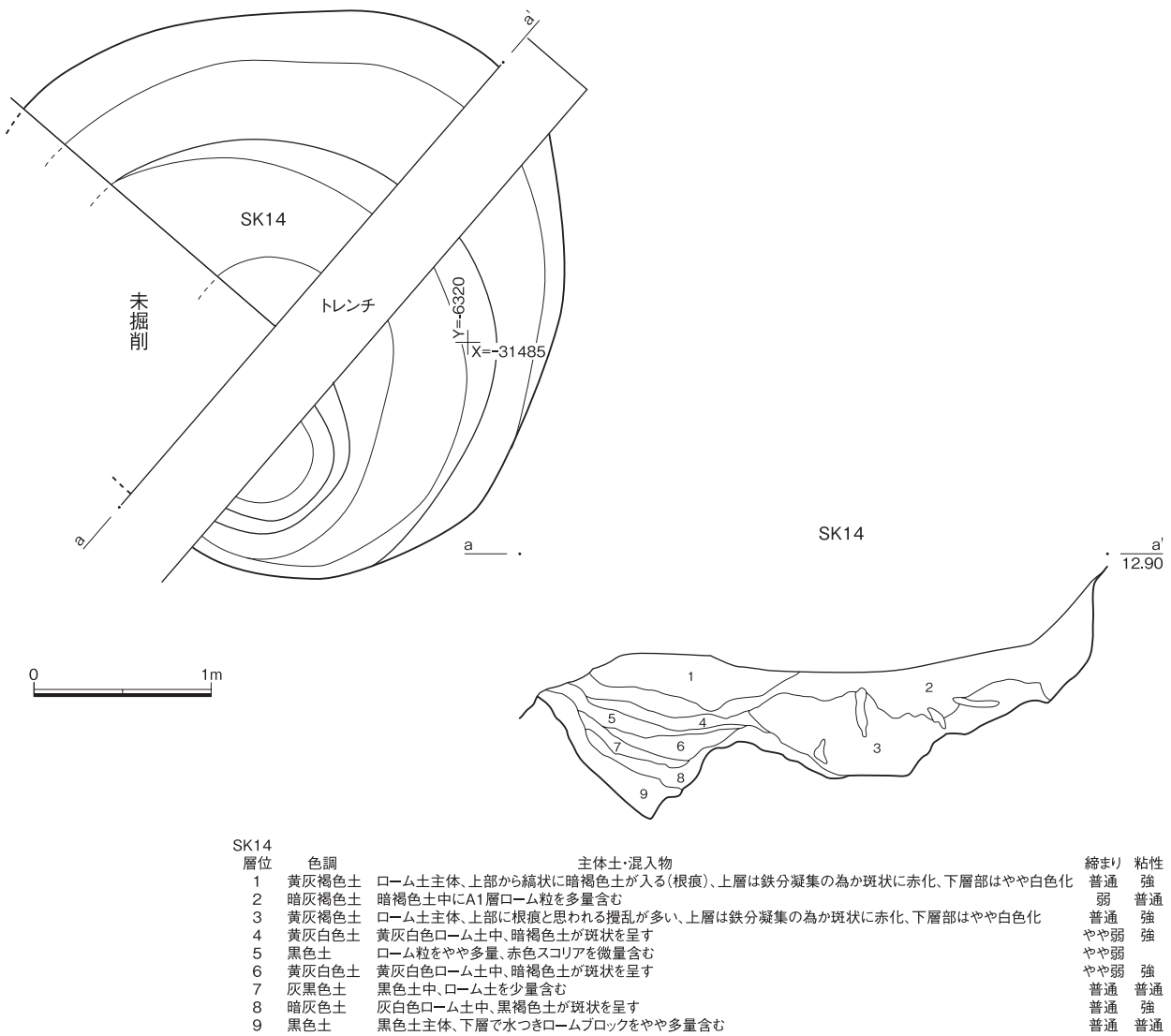


SP20 層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性
1	黒褐色土	ロームブロック・暗褐色土を少量含む	やや弱	やや弱
2	暗黄褐色土	黒褐色土を斑状に含む	強	普通
3	暗褐色土	黒褐色土を少量含む	やや弱	やや弱

III-15図 SP16.SP17.SP19.SP20



III-16図 SK10



III-17図 SK14

## (2) 出土遺物

本地点からはコンテナ総数、約18箱の遺物（磁器・陶器・土器・その他）が出土している。磁器・陶器・土器の分類基準は「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類（1）」（東京大学埋蔵文化財調査室1999）を参照している。遺跡における分類は数量分析により様々な文化・時代の様相を浮かび上がらせる手段である。そのためにはある一定以上の数量（便宜的に推定個体数100個体以上）を必要とするが、本地点においては全体的に遺物量が少なかったため、推定個体数100個体以上の遺物量を有する遺構が無く分析することができなかつた。数量分析ができなかつたため、大まかな年代観を出し検証した。

本地点は水戸藩駒込邸（中屋敷）の中央部やや東側に位置する。遺物がまとまって検出されている遺構は井戸のSE8のみである。

### SR6（Ⅲ－23図）

1は靴踵。革を4枚積み重ねて成形され、11本の釘で留められている。中央部は中空になっている。本遺構の硬化面直上から検出され、整地のために入れられた土は明治9（1876）年に警視庁の射的場を作る際の客土ではないかと考えられている。一般の日本人の間で靴が本格的に普及するのはかなり後になってからとされている。しかし、警察の前身機関で「ら卒」と呼ばれた人たちの制服姿が写されている明治5（1872）年とされている写真（神奈川県警察HP）では、すでに革靴を履いている。明治7（1874）年に東京警視庁が創設され本格的に活動を始めるが、やはり革靴を着用していたと考えられる。

### SR8（Ⅲ－19～22図）

井戸からの検出である。染付碗で高台断面がシャープな「U」字状で高台高が高いJB-1-dと共に高台高が低いJB-1-eも検出されており東大編年IV b期（1690～1700年代）に相当する遺物群である。1～21は肥前系磁器である。1は外面に藤花が色絵で施されている色絵碗。高台断面がシャープな「U」字状で高台高が高くJB-1-dに分類される。内面の釉は均一ではなくもたつきが見られる。高台内には砂粒が付着しており、高台外面にもわずかに砂粒の痕跡が認められる。2～5は染付碗である。2は高台断面がシャープな「U」字状で高台高が高いものでJB-1-dに分類される。3は高台断面がシャープな「U」字状で高台高が低いものでJB-1-eに分類される。4、5は高台断面がシャープな「U」字状で高台高が高く小振りの碗。コンニャク印判が多く、JB-1-uに分類される。5は外面にコンニャク印判による模様が見込みに2重圏線と手描き5弁花が施されている。2～5はいずれも高台内面に1重圏線、高台脇に2重圏線が巡る。6は色絵碗。底部が欠損している。JB-1に分類される。7は内面に桔梗、外面に紅葉が色絵で施された色絵碗である。体部が直線的に開く大振りの碗で内側に主文様が施される。JB-1-tに分類される。慣用名はうがい茶碗。8、9は染付皿で、8はJB-2-hに分類される。蛇ノ目高台。高台内には砂粒が付着している。見込みに2重圏線が施されている。9は糸切細工貼り付け高台で表面にわずかに布目が見られる。JB-2-rに分類される。口縁部は輪花に成形されており、放射状に陽刻が見られる。高台内には砂粒が付着している。10は古九谷様式の皿の破片である。11は染付鉢でJB-5に分類される。口縁部は外反しており、内外面共に文様が描かれている。口縁部のみの破片で底部は不明。12～14は染付で端反型の小坏である。JB-6-bに分類される。12は外面高台際に2本の圏線が巡る。高台内畳付け近くに砂粒が付着し、内面見込みに砂粒が見られる。13は底部近くと高台際に圏線が3本巡る。わずかに高台内畳付け近くに砂粒が付着している。14は外面に

網目模様。15～17は染付で丸碗型の小坏である。JB-6-aに分類される。16は外面口縁部と高台際に3本の圈線が巡っている。18、19は染付の仏飯器である。18は脚部が欠損しておりJB-18に分類される。外面には型紙摺りの七宝繫ぎ文が施されている。19は脚部のえぐりが浅く、畳付外周面取りでJB-18-cに分類される。底部には墨書で「ホ」が書かれている。粗雑な作りで、呉須の発色も黒く釉も脚部中央までしか掛けられていない部分もある。20は染付で円盤状の露胎部を持つ香炉。JB-9-aに分類される。21は壺・甕の蓋（JB-15）でJB-00-gに分類される。

22～32は陶器である。22、23は肥前系京焼風陶器で外面に主文様がくる碗である。文様のない物もある。TB-1-bに分類される。22は鉄絵山水文が描かれている。高台無釉で高台内には「小松吉」の刻印が認められる。23は無文様である。22の器形より変化したもので、小型化し腰が張る。高台無釉で高台内には刻印が認められる。24は大振りの丸碗。呉器手である。TB-1-aに分類される。口縁部のみの破片である。25は肥前系青緑釉丸碗で内野山窯指標とされている。TB-1-iに分類される。26は肥前系三島手の鉢でTB-5-bに分類される。口縁部は鐔状に緩やかに屈曲している。27は京・信楽系の皿でTD-2に分類される。口縁部は欠損しているが残存部分から鐔状に屈曲し、透かしの文様がはいっていたものと思われる。胎土には白色粒がみられ、釉際は赤変している。28は肥前系の鉢でTB-5に分類される。口縁部はラッパ状に大きく開き、上端部のみ立ち上がる。底部欠損。29は瀬戸・美濃系の壺・甕でTC-15に分類される。底部無釉。高台内には刻印を施されている。30は肥前系の瓶でTB-10に分類される。胎土は灰白色で粒子は細かく、ロクロ成形。外面は黒釉が施釉され、高台畳付け及び高台外面のみ釉が拭き取られている。高台内は施釉。高台内畳付け際には砂粒が付着している。31は肥前系の香炉・火入れでTB-9-bに分類される。外面には鉄絵山水文、輪高台高台面取。32は丹波系の播鉢。TK-29に分類される。口縁部は縁帯状を呈す。外面は粗くナデ調整される。播目は7条1単位で施される。底部欠損。

33～52は土器である。33～46は皿である。33は底部が平滑な磨きかわらけでDZ-2-dに分類される。体部はやや丸みを帯びて立ち上がる。胎土は橙白色、内外面を部分的に黒く還元焰焼成している。34～41は底裏に左回転糸切り痕がある皿でDZ-2-bに分類される。34～36、39～40の胎土は鈍い橙色を呈す。34、35、40、は口縁部にはススが付着する。37・38・41はそれらよりやや白味がかっている。34、36～40体部はやや丸みを帯びて立ち上がり、口縁端部はやや内傾する。35は内面立ち上がり際に窪みがみられ、見込みは中心部を除きややふくらみを持つ。36は一部赤色化している。41は体部中央に段を持ち立ち上がっている。口縁端部はやや外反している。内面立ち上がり際に窪みがみられ、見込みは中心部を除きややふくらみを持つ。42～45は底裏の回転糸切り痕が欠損しておりDZ-2に分類される。胎土は鈍い橙色を呈す。体部はやや丸みを帯びて立ち上がり、口縁端部はやや内傾する。44の胎土は淡橙色を呈す。44、45は口縁部にはススが付着する。46は器壁はやや厚く、体部中央に段を持ち緩やかに立ち上がっている。口縁部端はわずかに外反している。

47～50は丸底の焙烙でDZ-47-aに分類される。体部はほぼ垂直に立ち上がる。47、48は団子状の内耳が1個残存しており、その周囲はナデ調整される。底裏は縮緬状を呈する。47～49は内外面にススが付着している。51は軟質瓦質の大型の鉢（？）でDZ-5に分類される。上部が欠損しているため器形の詳細は不明。輪積成形。底部は平底。外面は5条1単位の櫛状のもので上方から底部に向かって沈線が施されている。底面には板目状の圧痕が全面にみられる。52ミニチュア。播り鉢。DZ-61に分類される。

53～56は金属製品。53は銭貨。寛永通宝 文銭。54、55は煙管の雁首。火皿高は高く腰の張らない碗型である。脂返しは大きく湾曲している。継ぎ目の蠟付けは左側である。54の小口は欠損して



いる。56は留め金具。小さな釘が2個差し込まれており、他のものに取り付けられていたものであろう。最上層からの出土であり、他の遺物と時期が異なる可能性もある。

57～59は石製品。57、58は砥石。小振りで持ち砥として使用したものかもしれない。57は粘板岩。中砥。58は無斑晶質安山岩。7本1単位の櫛目状の工具で両脇を成形している。59は火打ち石。玉ずい。

本井戸は、水戸藩駒込邸（中屋敷）の中央やや東寄りにあり、AFⅣ地点（巻頭例言を参照）のSE18の井戸より東側に位置する。肥前系磁器で外面に藤花が色絵で施されたJB-1-dに分類されている色絵碗・色絵が施されたJB-1-tに分類されるうがい茶碗、古九谷様式の皿の破片などが検出されており、良質な陶磁器の一群であると言えよう。文政9（1826）年の『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』（口絵図参照）によると、水戸藩駒込邸（中屋敷）の殿舎・庭園の区域と長屋・建物のある区域の間にある道の近くに位置する。絵図と遺構の推定年代との間に年代的隔りがあるが、同じような土地利用がされていたとすれば殿舎などから廃棄されたことも考えられる。AFⅣ地点SE18の井戸からは生活に即した遺物が検出されており、長屋や役所などから廃棄されたのかもしれない。異なる様相が見られ興味深い。

#### SK11（Ⅲ－23図）

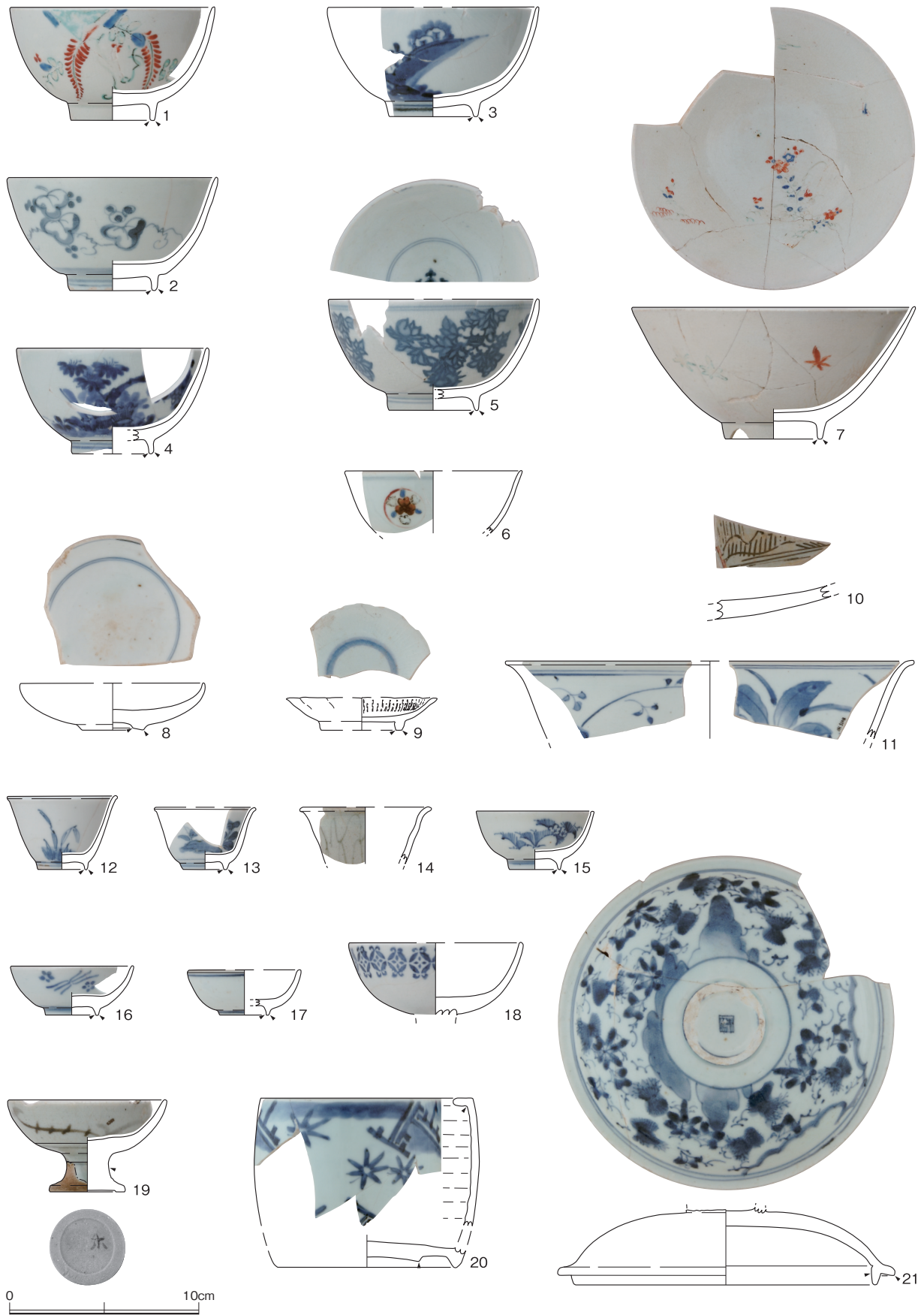
1、2は瓦。1は軒棧瓦。軒丸部は連珠のない三つ巴文。軒平部は加藤氏の分類（加藤1989, 1992）のうち江戸式ⅡKiに、金子氏の分類（金子2003）のうちA－084類に近似する。表面特に紋様区内には雲母が顕著である。全体的に風化しざらつく。表面は白灰色、胎土は黒灰色を呈する。2は軒棧瓦。軒丸部は連珠のない三つ巴文。実測番号1よりも周縁が幅広で、巴文の盛り上がり大きい。軒平部は加藤氏の分類のうち江戸式ⅢKjに、金子氏の分類のうちA－085類に近似する。表面特に紋様区内には雲母が顕著である。軒平部の瓦当と筒部の接合面にはカキヤブリが施され食い付きをよくしている。また筒部の破面を観察すると粘土に隙間が多く見られ、不出来な生地を使用しているといえる。全体的に風化しざらつく。表面は黒灰色、胎土は白灰色を呈する。

#### SK15（Ⅲ－23図）

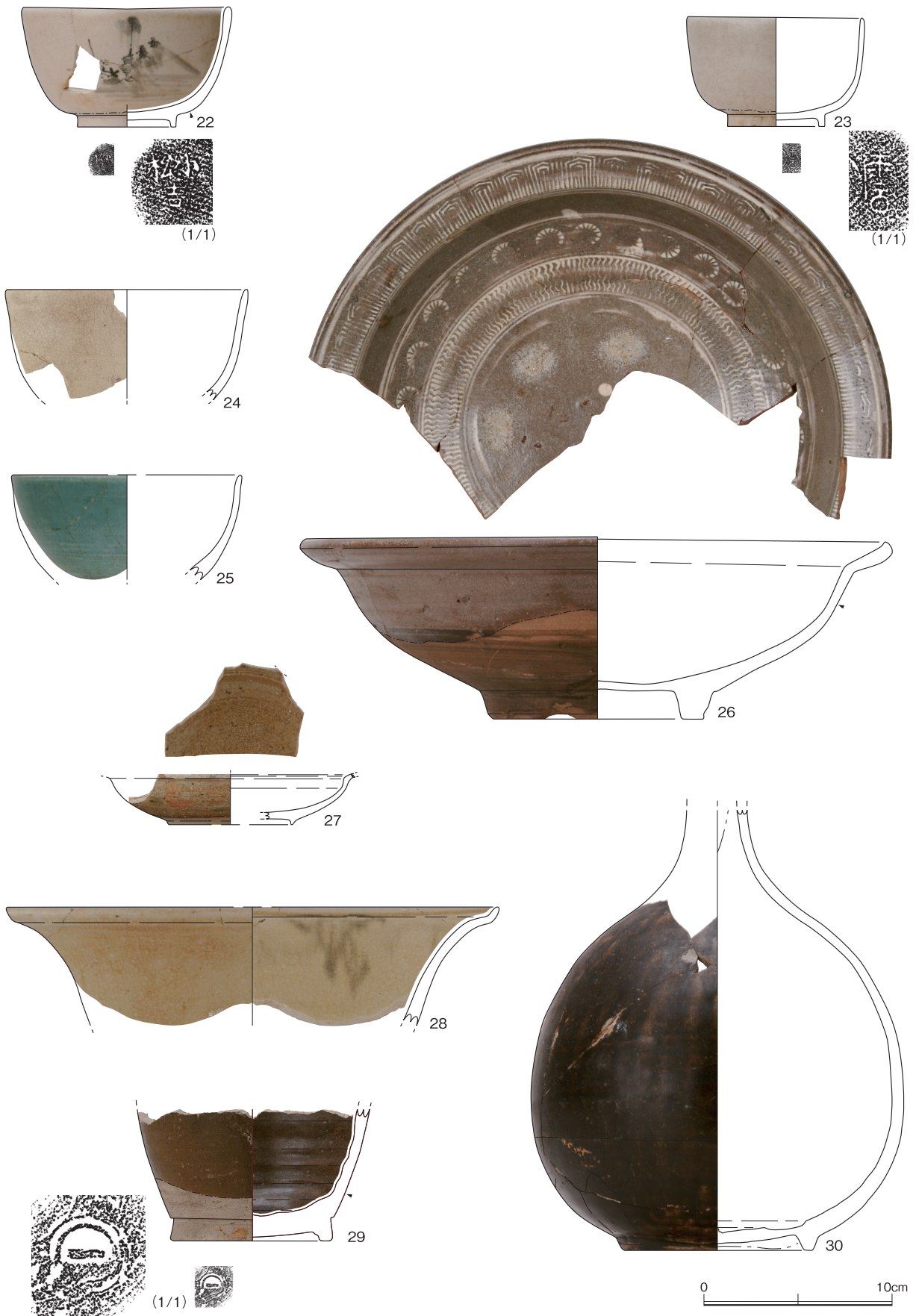
1は16世紀中頃以降に焼成された、在地系土器である。胎土は赤褐色で硬く焼成されている。形状は底径が小さく、胴部は緩やかな角度で立ち上がり、口縁が外反する。口縁部は丸く仕上げられている。胴部、底部の器厚は5mm以上と厚い。台東区教育委員会 小俣氏にご教授いただいた。

#### 遺構外（Ⅲ－23図）

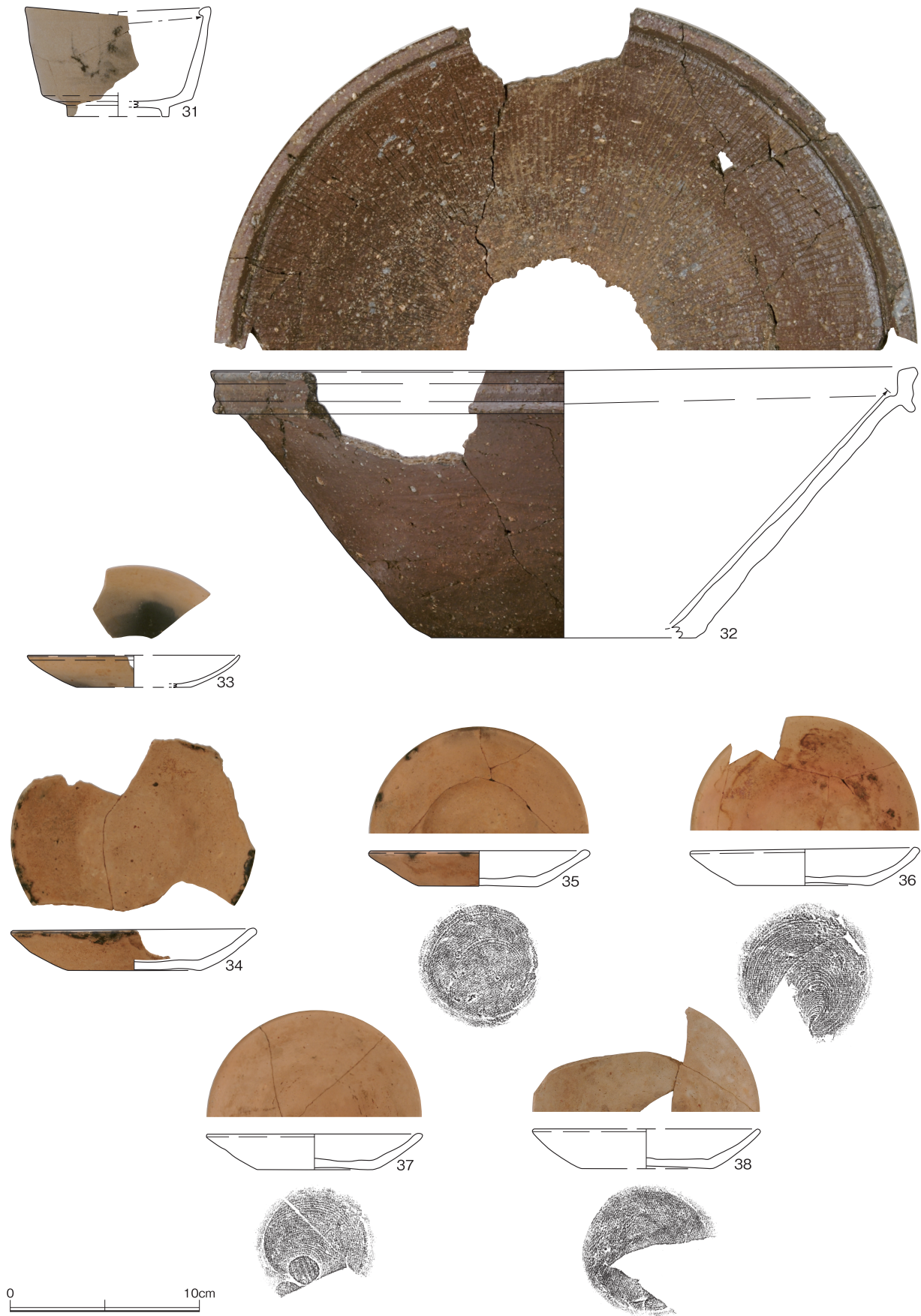
1は瀬戸・美濃系陶器の二合半灰釉徳利である。底部釉つけ掛けでTC-10-cに分類される。列点状の釘書がみられる。底部には「水」の墨書がみられる。2は堺系陶器の播鉢でTL-29に分類される。口縁部内面に扇面の中に「長上」の刻印が押されている。3、4は鉛の弾丸である。明治時代にあった射場からの流れ弾であろう。



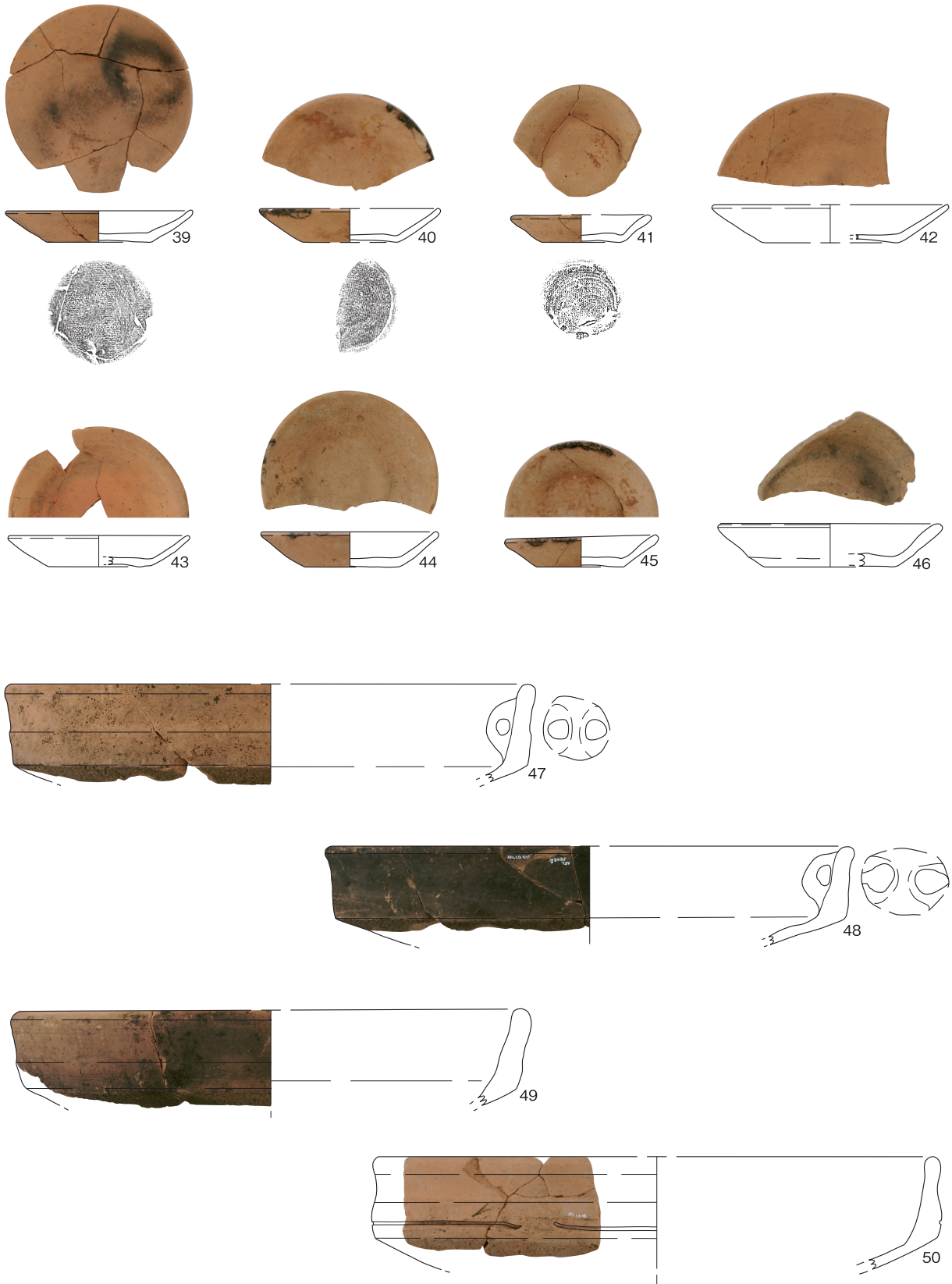
III-18図 SE 8(1) 出土遺物



Ⅲ-19図 SE 8(2) 出土遺物

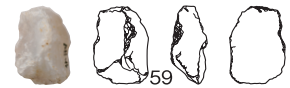
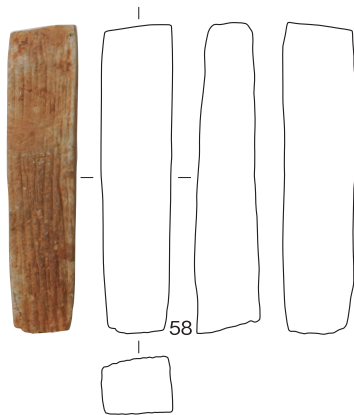
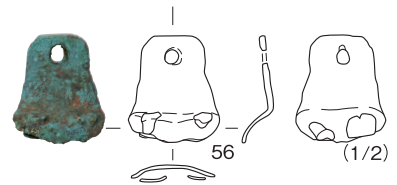
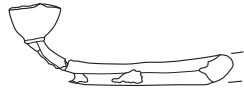
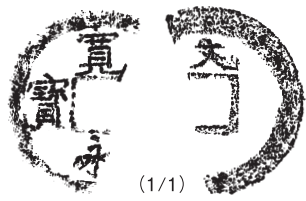
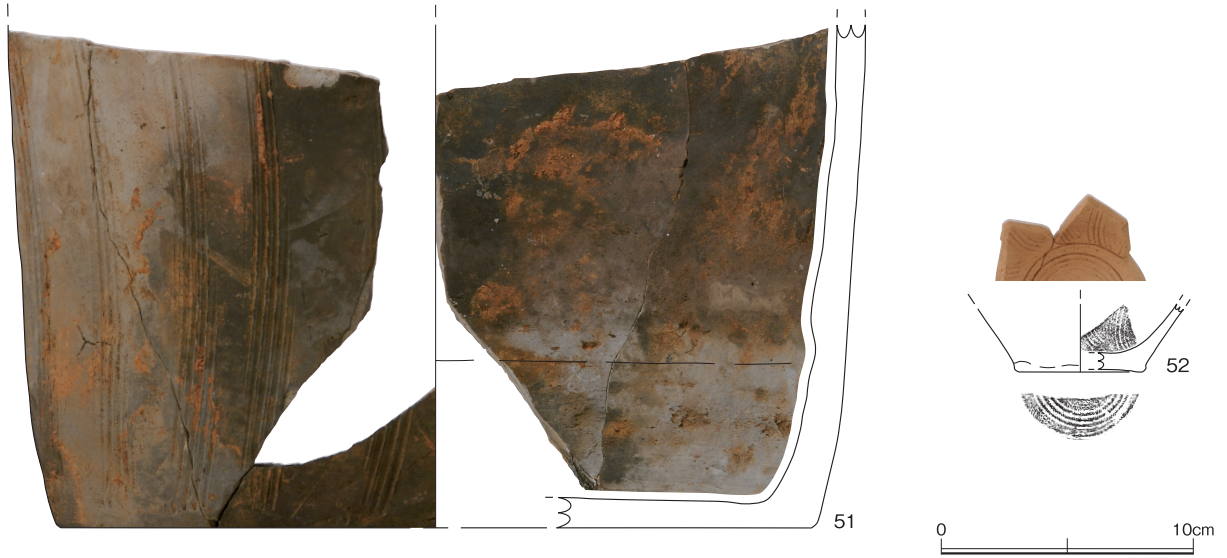


III-20図 SE 8(3) 出土遺物

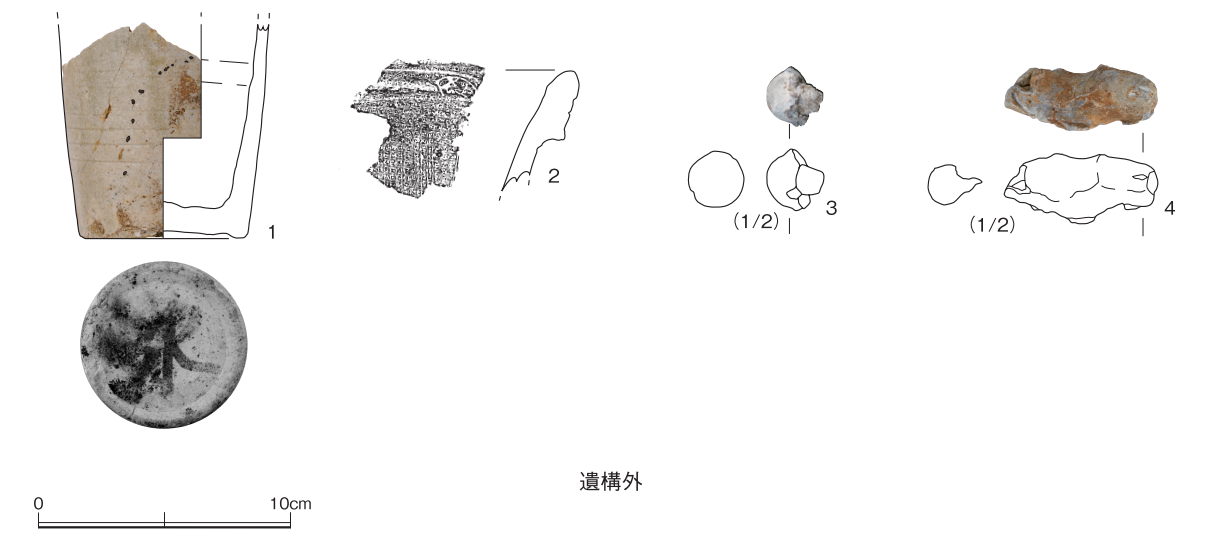
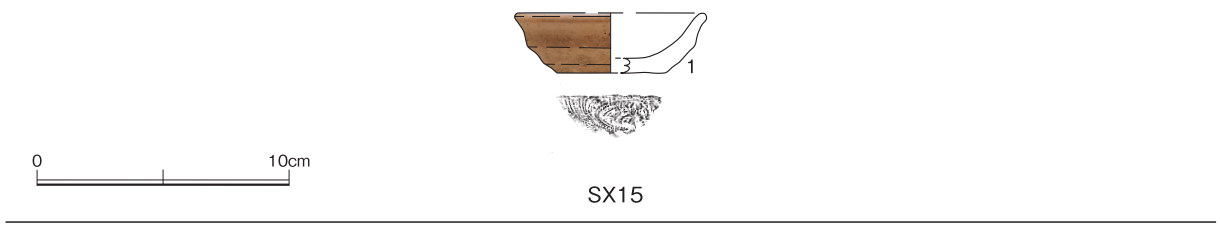


0 10cm

III-21図 SE 8(4) 出土遺物



Ⅲ-22図 SE 8(5) 出土遺物



Ⅲ-23図 SR 6.SK11.SX15.遺構外 出土遺物

## 第5節 工学部風工学実験室地点の成果

### (1) 江戸時代

弥生地区圃場に位置する2001年度調査の農学部総合研究棟地点01SR1（東京大学埋蔵文化財調査室2004）と工学部武田先端知ビル地点SR1-1・2（Ⅵ章参照）を直線で結んだ直線上に当地点が位置する。農学部総合研究棟地点01の道SR1は幅11mで（註1）、同遺構と考えられる工学部武田先端知ビル地点SR1-1・2を地図上で11m幅の直線で結ぶと当地点のSR2・SR9と重なる。『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』に藩邸内を東西に区画する道が、農学部総合研究棟地点01SR1、工学部武田先端知ビル地点SR1-1・2、当地点のSR2・SR9に該当すると考えられ、西側の「長屋と役所の区域」（1-1・1-2・2区域）と東側の「殿舎（御殿）の区域」（4・5区域）を区画している（Ⅲ-24図）。当地点ではSR2・SR9の他にSR1、SR5、SR6、SR7を検出した。これらの道の造成年代ははっきりしないが、『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』には「殿舎（御殿）の区域」に藩邸内を北西から南西へ横断する道とは別に描かれた道があり、これらの道は絵図に描かれていない道である可能性がある。また、SR9に切られた井戸SE8から、東大編年Ⅳb期（1690～1700年代）に相当する遺物群が出土、これらの中には色絵磁器が含まれていた。駒込邸の殿舎（御殿）は徳川光圀の代、徳川齊昭の代ともに5区域におかれたと推定している（研究編ⅩⅡ参照）。SE8が殿舎（御殿）の区域の遺構であるかは明確にできないが、SE8はSR2・SR9が造成される以前の土地利用状況を示している。SE8の遺物の評価と、SE8使用時の土地利用状況については今後の課題としたい。

### (2) 明治時代

#### a. 射的場の「監的場」が建設された窪地

Ⅲ-24図によれば、現在の浅野地区と北側住宅地は警視庁用地、西側の住宅地は射的場である。調査地点は窪地で、的を納めた建物と考えられる「監的場」が建設されている。「監的場」の建設された窪地は東側に拡張されているが江戸時代の道SR2・SR9に重なる。明治16年の標高は、窪地の外周に16mの等高線があり窪地内の南側15.5m、窪地外西側16.8m、窪地外東側16.9mと記述されている。SR2・SR9の検出標高は14.1m、SR2底部標高は12.32m、SR9底部標高は10.45mである。SR2・SR9の路面は段になっており、埋土の堆積状況から廃絶は同時に行われたと考えられる。『明治16年陸軍参謀本部測量原図』では、SR2・SR9で確認された段差は描かれておらず、SR9の路面はこの段階で埋められていることから、SR2・SR9の段差は施設建設に支障をきたすために埋め立てて平坦地にする必要があったのだろう。しかし、窪地は被弾を避けるためには有効な地形である。そこで、江戸時代に造成された道の高低差を残しつつ道の段差を埋め、東側への拡張が行われ「監的場」が建設されたと考えられる。

窪地外周の等高線16mとSR2・SR9の検出標高14.1mの標高差は、他の地点でも確認された射的場移転後に行われた射的場埋め立てに伴う掘削と考えられる。

#### b. 浅野家敷地

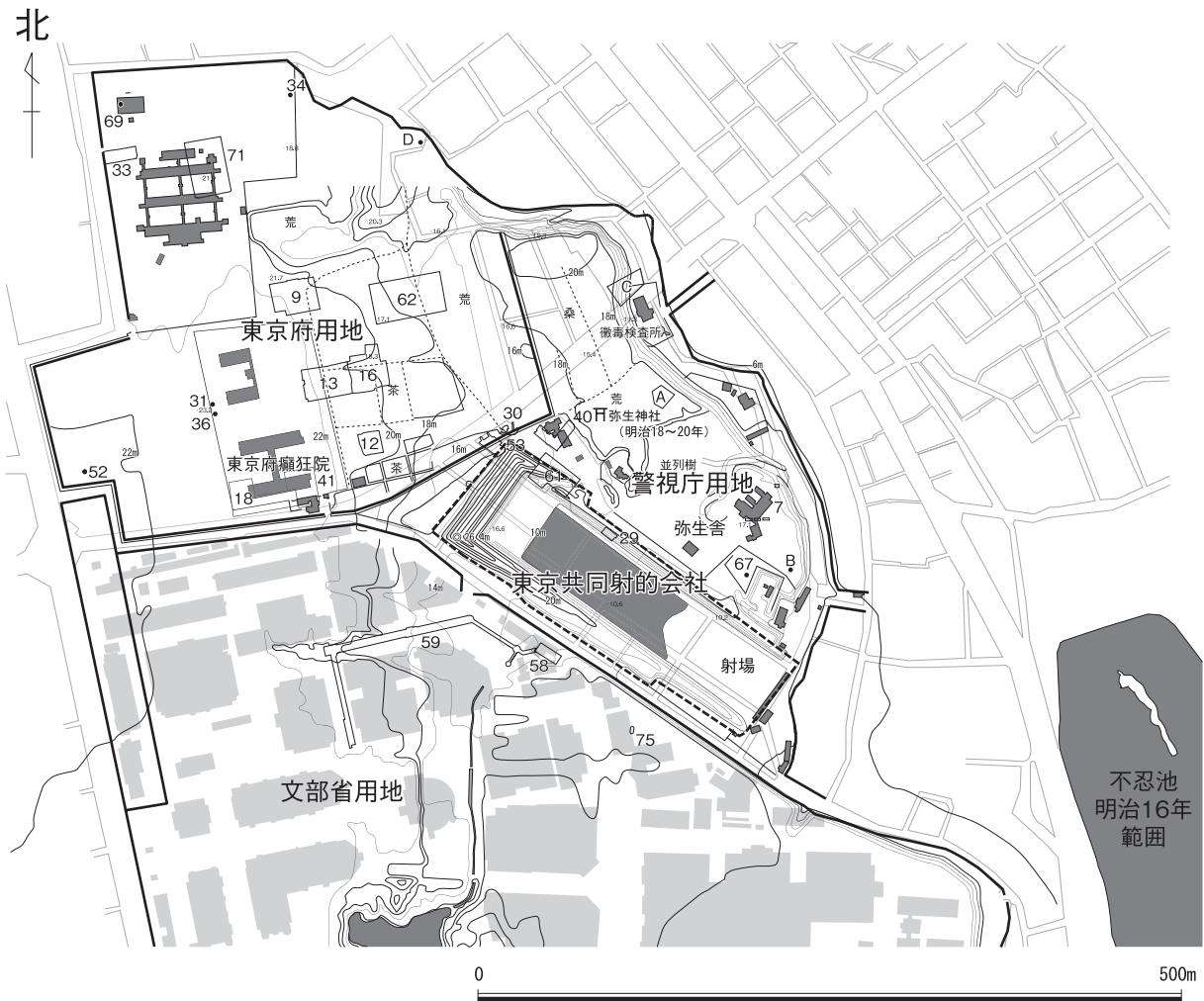
明治20（1886）年、警視庁用地に建設された弥生神社が芝公園に移転、警視庁用地は警視総監三



島通庸と浅野家の間で話がまとまり、同年に浅野家に譲り渡される。射的場は明治21（1887）年大森へ移転する。射的場移転後、周辺部の削平と射場の埋め立が開始され、調査地点の窪地も埋め立てられたと考えられる。調査地点は、青木家文書 昭和11（1936）年3月弥生町会事務所作成『向ヶ岡彌生町二・三番地略圖』によれば、調査地点の番地は「三に-1」で「芸備協会」が位置する（Ⅱ-11図）。「芸備協会」は「財団法人 芸備協会」の前身で広島県出身者の育英、奨学を業務としている。青木家文書『明治四十二年調製 家屋臺帳 是ヨリ彌生町三番地所在分』に「(明治)三十七年十二月十四日届 芸備協会」と記述されている。

註

- 1 原祐一 「10. 農学部総合研究棟地点発掘調査略報」 東京大学埋蔵文化財調査室『東京大学構内遺跡調査研究年報4 2000・2001・2002年度』 pp.80 - 84



7 タンデム棟(タンデム) 9 農学部家畜病院(VMC) 12 農学部図書館(FAL) 13 農学部7号館地A棟I期(FA792) 16 農学部7号館地A棟II期(FA793) 18 総合研究棟(SK) 29 情報基盤センター変電室1(ACC) 30 工学部風工学実験室支障ケーブル(AFC) 40 工学部風工学実験室(AFL) 41 ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー(ベンチャー) 53 工学部風環境シミュレーション風洞実験室(AFV) 58 医学部付属病院受変電施設棟II期(YM) 59 共同溝(KK) 61 工学部武田先端知ビル(TSA TSB TSC) 62 農学部総合研究棟(NS01) 67 地震研究所総合研究棟 A 弥生二丁目遺跡(文学部考古学研究室・理学部人類学教室) B 理学部3号館南(文学部考古学研究室・理学部人類学教室)

Ⅲ-24図 明治16(1883)年の向ヶ岡弥生町

報告書抄録

ふりがな	とうきょうだいがくほんごうこうないのいせき あさのちく1 じょうほうきばんせんたーへんでんしつ1ちてん・こうがくぶかぜこうがくじっけんしつちてん・こうがくぶかぜこうがくじっけんしつししょうけいぶるちてん・こうがくぶかぜかんきょうしみゆれーしょんふうどうじっけんしつちてん・こうがくぶたけだせんたんちびるちてん							
書名	東京大学本郷構内の遺跡 浅野地区I 情報基盤センター 変電室1地点・工学部風工学実験室地点・工学部風工学実験室支障ケーブル地点・工学部風環境シミュレーション風洞実験室地点・工学部武田先端知ビル地点							
副書名								
巻次								
シリーズ名	東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書							
シリーズ番号	9							
編著者名	原祐一（編）、篠原和大、大貫浩子、阿部常樹、石井龍太							
編集機関	東京大学埋蔵文化財調査室	所在地	〒153-8904 東京都目黒区駒場4-6-1 駒場リサーチキャンパス内 03-5452-5103					
発行機関	東京大学埋蔵文化財調査室	所在地	〒153-8904 東京都目黒区駒場4-6-1 駒場リサーチキャンパス内 03-5452-5103					
発行年月日	平成21年12月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
とうきょうだいがくほんごうこうない 東京大学本郷構内 の遺跡 浅野地区 (本郷台遺跡群・ 弥生町遺跡群) 工学部風工学実験 室地点	とうきょうと 東京都 ぶんきょうく 文京区 やよいちよう ちよ 弥生町2丁 うめ ほん 目11番16 ごう 号	13105	47 . 28	35° 42' 58"	139° 45' 47" ~139° 45' 49"	平成8年1月 22日~8年 3月7日	252㎡	事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
東京大学本郷構内 の遺跡 浅野地区 (本郷台遺跡群・弥 生町遺跡群) 工学部風工学実験 室地点	武家屋敷 (水戸藩 駒込邸)、 射的場	縄文、中 世、近世、 近代	道、土坑、小穴、井戸	縄文土器、陶磁器、土 器、金属製品、石製 品、瓦				



東京大学本郷構内の遺跡

浅野地区 I

工学部風工学実験室支障ケーブル地点

2009

東京大学埋蔵文化財調査室

## 例 言

1. 本報告は東京工学部風工学実験室支障ケーブル移設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告である。
2. 調査および整理作業での本地点の呼称は「工学部全径間風洞実験室支障ケーブル移設その他（略称 AFC）」であり、既出の年報、論文などでは「工学部全径間風洞実験室支障ケーブル移設その他」と記載されている。今回の報告書作成時に現在の施設名称である「工学部風工学実験室支障ケーブル地点」へ改称した。
3. 本報告には風工学実験室支障ケーブル地点の他に1996年2月19日～1996年3月7日に行った補足調査地点を含めている。
4. 調査地点は東京都文京区弥生町2丁目11番16号、東京大学本郷構内浅野地区に位置している。
5. 本地点は東京大学遺跡地図「文京区No.47 本郷台遺跡群」および「文京区No.28 弥生町遺跡群」内に位置している。
6. 調査面積は63㎡である。
7. 発掘調査は東京大学埋蔵文化財調査室が行い、篠原（鮫島）和大（現静岡大学）が担当した。
8. 調査期間は以下の通りである。

事前調査 1995年8月22日～9月6日、9月22日、1996年2月19日～1996年3月7日（補足調査）

整理作業 2007年5月～2009年2月（複数遺跡の整理を並行して実施しているため、この期間に断続して作業を行った。）

報告書編集 2003年3月～5月
9. 本報告の編集は原祐一、香取祐一が行った。
10. 瓦については石井龍太（東京大学大学院考古学研究室）が整理報告を行った。
11. 執筆分担は以下の通りである。

第1節 篠原和大、原 祐一

第2節 原 祐一

第3節 - (1) 篠原和大、原 祐一

第3節 - (2) 篠原和大、原 祐一

第4節 - (1) 原 祐一

第4節 - (2) 大貫浩子、石井龍太（瓦）、原祐一（四文銭）

第5節 原 祐一
12. 出土遺物は埋蔵文化財調査室が、駒場Ⅱキャンパス・茨城県新治郡石岡市柿岡414東京大学柿岡教育研究施設内で運用、保存、管理している。

### 整理作業参加者

青山正昭 安芸穂子 今井雅子 大貫浩子 香取祐一 加藤理香 君嶋俊行 山田くりか 米川裕治  
坂野貞子 田中美奈子

## 第1節 調査に至る経緯

工学部では浅野地区全経間風洞実験室（現風工学実験室）増築に先だって支障を来すケーブルの移設を計画した。浅野地区は弥生二丁目遺跡群の中に位置する埋蔵文化財の包蔵地にあたる。このため調査室では立ち会い調査を行ない、埋蔵文化財の有無を確認した。結果、I地点（IV-5図）、II・III地点（IV-1図）について発掘調査を行うこととした。調査は1995年8月22日から9月6日および9月22日に行った。

これらの調査のうち第II・III地点では弥生時代に属する可能性のある溝状遺構の一部が検出され、弥生町遺跡に関する重要な遺跡の発見である可能性が強まった。幸い翌1996年の全経間風洞実験室（現風工学実験室）の改修に伴う発掘に並行して、2月19日から3月7日の間に第II・III地点で検出された溝の補足調査を行うことができ、この遺構が方形周溝墓であることを確認したほか壺型土器などの遺物を検出され、大きい成果を得ることができた。この補足地点については工学部関係者の方々に格別の配慮をいただいたことを明記しておきたい。

## 第2節 地理的・歴史的環境

地理的環境については「I 遺跡周辺の諸環境」の章を参照されたい。

調査地点は水戸藩駒込邸に位置する。『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』によれば藩邸内を北西から南東へ横断する道が「殿舎（御殿）の区域」（西側台地 4・5）と「長屋・役所の区域」（西側台地 2・支谷 3）を区画している（I-4図）。調査地点は道の西側、両区域に挟まれた南側の「切手御門」から「殿舎（御殿）の区域」の門である「中門」に至る道と庭園を兼ねた区域の北奥に位置する。

『明治16年陸軍参謀本部測量原図』によれば、調査地点は「東京府用地」と射的場の境辺りに位置する。「東京府用地」は弥生地区と本郷地区の北側、浅野地区の北側と住宅地に該当し「塘」で囲まれている。用地内には「東京府癩狂院」「東京府避病院」が建設されている。『向ヶ岡彌生町會二・三番地略圖』（昭和11（1936）年3月弥生町会事務所作成）によれば調査地点は、「三番地に一六」の「東京洋服学校」敷地に位置する。「東京洋服学校」以前は住宅であったが「東京洋服学校」と住宅の遺構を区別することができなかった。

## 第3節 弥生時代

方形周溝墓の周溝を検出し、壺形土器が出土した。周溝は現地保存した。

### (1) 遺構（IV-2、3図）

第II地点SD9、第III地点SD7、補足調査地点で壺形土器が出土したSD14、SK15、それぞれの地点から検出された弥生時代の遺構は直交する断面箱形の溝で、江戸時代以降の遺構によって部分的に破壊されているが、これらの遺構をつなぎ合わせた形状と弥生土器の出土から方形周溝墓の周溝と考え

られる。周溝は、第Ⅱ地点西側から補足調査地点に向かって南北方向に延びる西溝と第Ⅲ地点北側から補足調査地点に向かって東西方向に延びる北溝に分けることができるが、その交差部分、つまり周溝基の北西コーナー部分は、SK13によって破壊されている。部分的な検出であるため周溝基全体の規模は不明であるが、北溝は第Ⅲ地点部分で幅1.1m、確認面からの深さ0.5m、補足調査部分で幅1.8m、確認面からの深さ0.4m、西溝は第Ⅱ地点部分で幅2.6m、確認面からの深さ0.7mを測る。北溝は西に向かうにつれて幅広くなっていることが指摘される一方、西溝は著しく幅が広く、底面が階段状になっており、二本の溝が重複している可能性もある。同時期の他遺跡で検出された周溝墓の例に複数の周溝墓が接続することが多いことからすれば、この周溝墓の西側には、さらに別の周溝墓が接して存在していた可能性も指摘しうる。SD10は覆土の様相から江戸時代以前の遺構と考えられる。遺構性格は溝状遺構である。確認された範囲で長軸2.0m、深さ0.3mを測る。

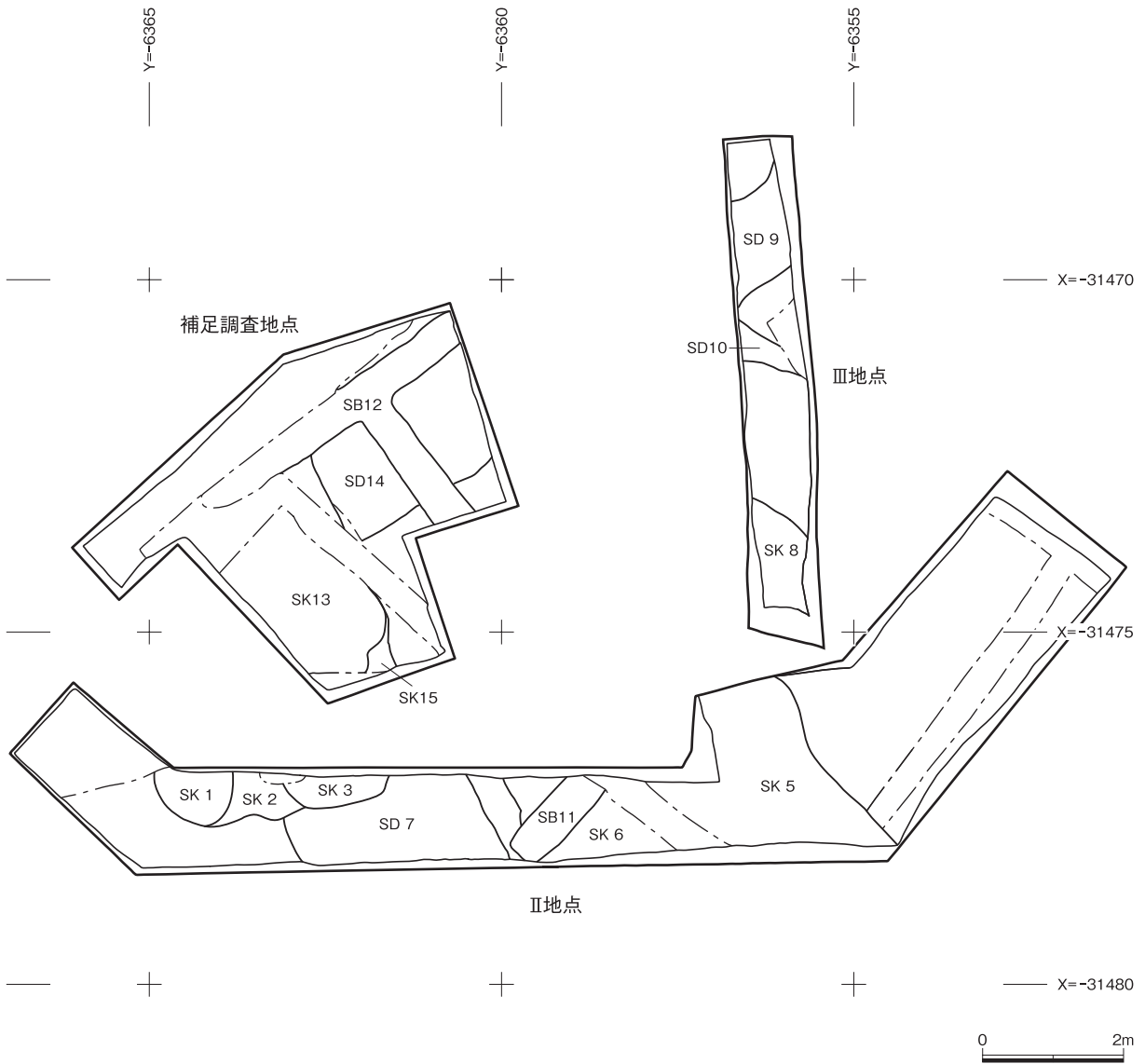
## (2) 遺物 (Ⅳ-4図)

SD14では、Ⅳ-4図の壺形土器が出土した。底部を欠く胴部～口縁部の約2分の1が遺存しており、無文の複合口縁壺である。内面は、底部付近を目の細かい刷毛調整したあと、胴部は木口状工具によるナデ、頸部内面には指押さえ痕を残し、口縁内面は底部同様の刷毛調整のあと、頸部付近まで横位のヘラミガキをおこなっている。外面は、内面と同工具の刷毛調整で仕上げたのち、胴部下半を左下がり斜位、胴部上半を右下がり斜位、頸部を縦位のヘラミガキ調整している。口縁部は幅1.5cmほどの薄い粘土紐を貼り付けて複合口縁とし、口唇部はややはっきりと面取りしている。器形は無花果形で胴下半に緩い稜を持っており、この部分で粘土の積み上げを一旦休止したものと考えられる。この部分の外面は横位のミガキ調整であって、上下の調整を分けている。欠損した底部との境あたりには、径4cmほどの内面からあけられたと考えられる穿孔の上半分が残っており、周溝墓に供献される土器に通有の儀礼の結果と考えられる。

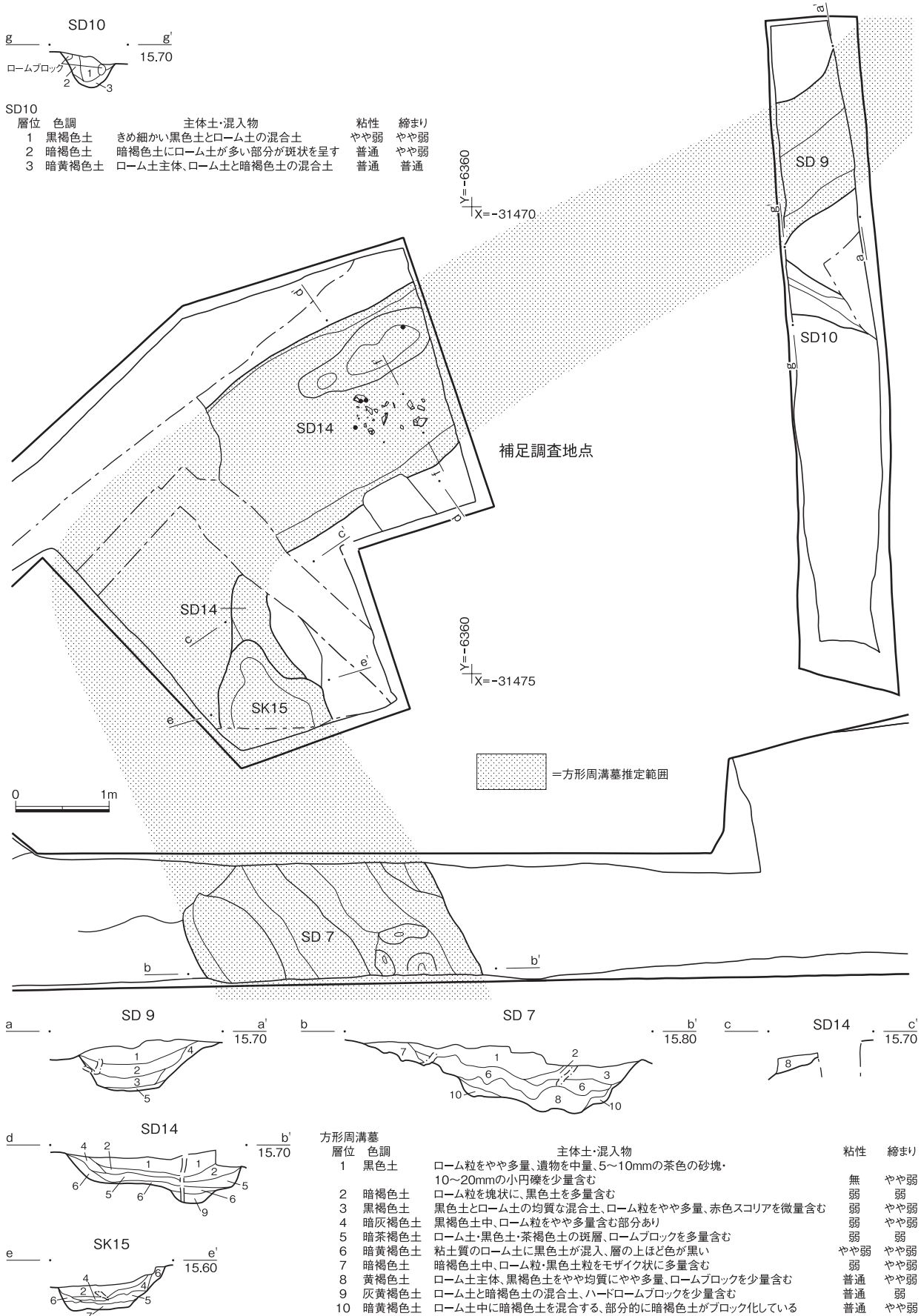
出土遺物の壺は、無文ながらも頸部が緩やかに湾曲し、屈曲しない点。頸部内面の指押さえや胴下半の稜とその外面の横位ヘラミガキ、頸部の縦ヘラミガキなどの手法が残されている点から、弥生後期後半（東海系古式土師器の波及前）の中で捉えられるものと考えられる。つまり、この周溝墓は、おそらくこの地点の東側に展開する弥生町の環濠集落の墓域の中に位置するものと考えられ、環濠集落が成立してしばらくののちに造営されたものと考えられよう。

出土した弥生土器は側面が欠損していた。工学部武田先端知ビル地点出土土器も土器側面が欠損していた。工学部武田先端知ビル地点の土器は、水戸藩駒込邸を東西に区画する道の造成もしくは、明治9（1876）年の射的場建設工事による「歴史的破損」と推定した。工学部風工学実験支障ケーブル地点は道の西側に位置することから、土器の欠損は明治21（1888）年の射的場移転後の射的場関連施設の埋め立てに伴う周辺部の削平によって行われた「歴史的破損」と考えた。そこで、修復は強度が必要な口縁部は樹脂を充填したが、側面の樹脂の充填は行っていない。

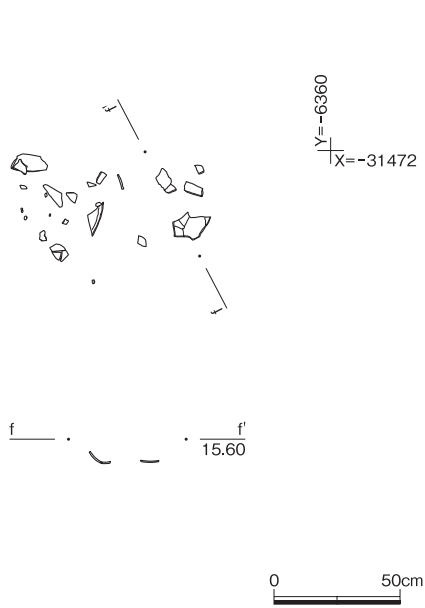




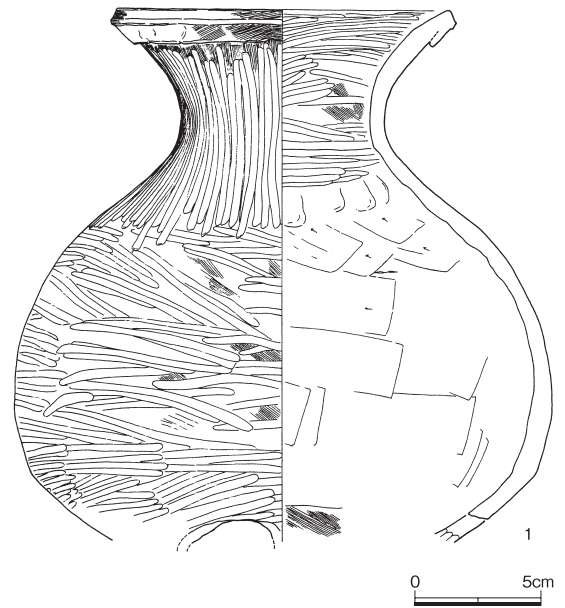
IV-1図 II・III地点・補足調査地点全体図



IV-2図 方形周溝墓



IV-3図 出土遺物微細図



IV-4図 出土遺物実測図

図版 番号	器 種	法量(cm) 口径 底径 高さ	器形の特徴	調整・文様	胎 土	焼 成	色 調	備考・残存
1	壺形土器	(14.4) - [21.2]	折り返し口縁、頸部は緩やかにくびれ、胴部中位に最大径、胴部下位に陵を有す	外面：口唇部はハケ横位、折り返し部はハケ横位、頸部は刷毛縦位後、ヘラミガキ縦位、胴部はハケ斜位後、ヘラミガキ横位 内面：口縁部から頸部はハケ横位後、ヘラミガキ横位、胴部はヘラ状工具によるヘラナデ横位	精良（橙色粒・褐色粒・黒色粒少量）	良	外面：明黄褐色 内面：浅黄橙色	胴部下位に割れ面が磨耗した割れ口が認められる 口縁部から胴部下位の2/5残存、底部欠損

※法量の（ ）は推定値、[ ]は現存値を表す

IV-1表 出土土器観察表

## 第4節 江戸時代以降

現地表面の標高は16.58m、遺構検出標高は補足区調査地点で15.6～15.9mである。「明治16年陸軍参謀本部測量原図」によると調査地点西側の標高は16.8m、遺構検出面の標高は明治16年の標高より0.9m以上低くなっている。

第Ⅰ地点（Ⅳ-5図）は、電気ケーブル用ピットの敷設地点で、浅野地区正門の北東約30mの地点である。約4m四方のピット敷設地点を4m程掘り下げたところ、黒色土の硬化面を検出した。この遺構は、前述の江戸時代の道を活用し、射的場の「監的場」の窪みにしたもので、全径間風洞新営地点SR2、SR9、工学部武田先端知ビル地点SR1-1・2である。硬化面下の暗褐色土中から数点の縄文土器片を検出した。

第Ⅱ地点はⅠ地点から北西方向に約50m離れた位置にある、ほぼ東西に延びる電気ケーブル敷設溝及びピットの地点である。SK8、SD10を検出した。

第Ⅲ地点は第Ⅱ地点の敷設溝に直交する方向でピット部分から北方向に延びるケーブル敷設溝地点である。SK1、SK2、SK3、SK5、SK6を検出した。

補足調査地点では、SB1、SK2を検出した。

### (1) 遺構

#### SK1（Ⅳ-6図）

遺構性格は土坑である。a-a'セクション部で長軸1.05m、深さ0.3mを測る。SK2に切られる。

#### SK2（Ⅳ-6図）

遺構性格は土坑である。a-a'セクション部で長軸2.5m、深さ0.4mを測る。SK1を切る。

#### SK3（Ⅳ-6図）

遺構性格は土坑である。a-a'セクション部で長軸1.5m、深さ0.55mを測る。

#### SK5（Ⅳ-7図）

遺構性格は土坑である。a-a'セクション部で長軸3.45m、深さ0.85mを測る。SK6に切られる。

#### SK6（Ⅳ-7図）

遺構性格は土坑である。a-a'セクション部で長軸2.15m、深さ1.25mを測る。本遺構は遺物の出土状況から江戸の遺構と考えられる。

#### SK8（Ⅳ-8図）

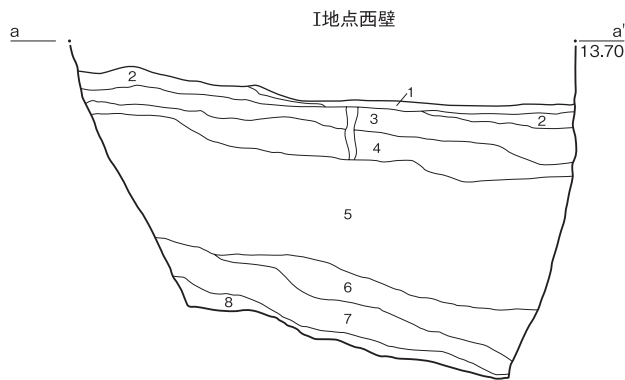
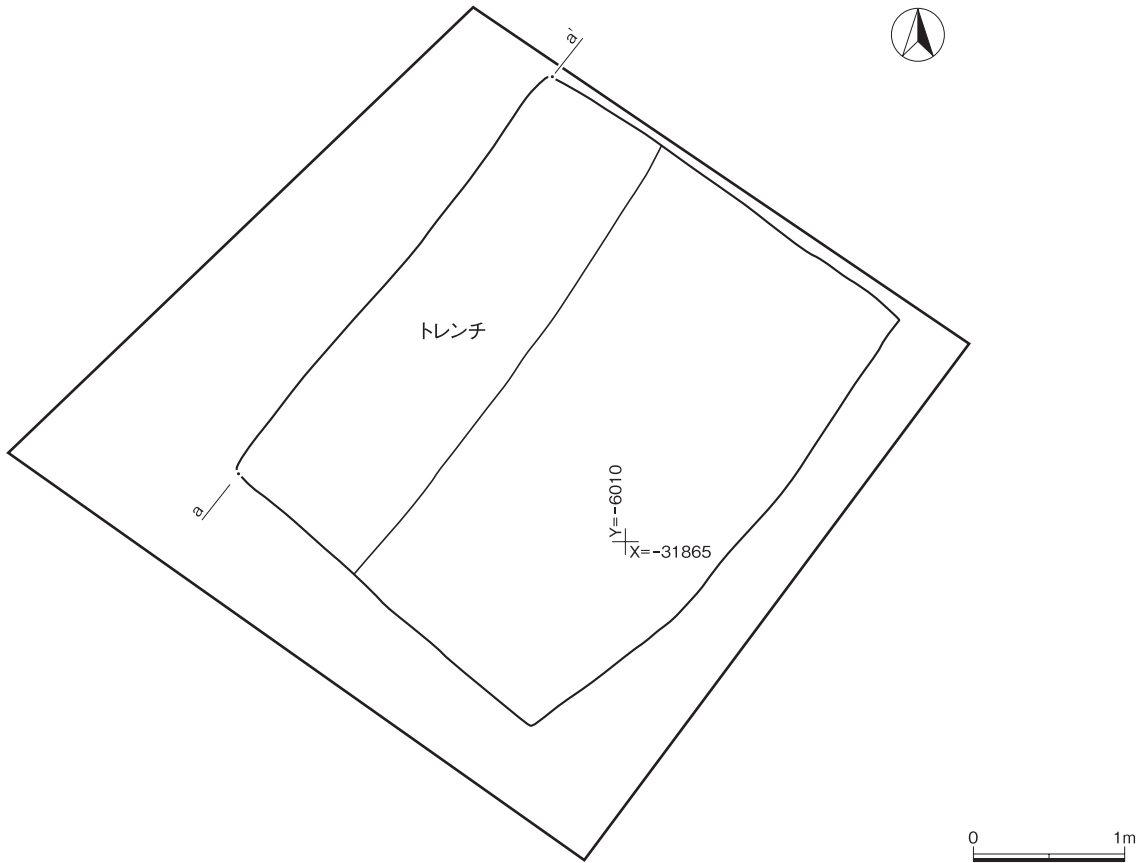
遺構性格は土坑である。a-a'セクション部で長軸1.65m、深さ1.25mを測る。SK5を切る。

#### SB11（Ⅳ-9図）

遺構性格は建物の基礎である。確認された範囲で長軸1.52m、短軸0.5m、深さ0.15mを測る。断面形は台形で溝状遺構に石が並べられている。

#### SB12（Ⅳ-10図）

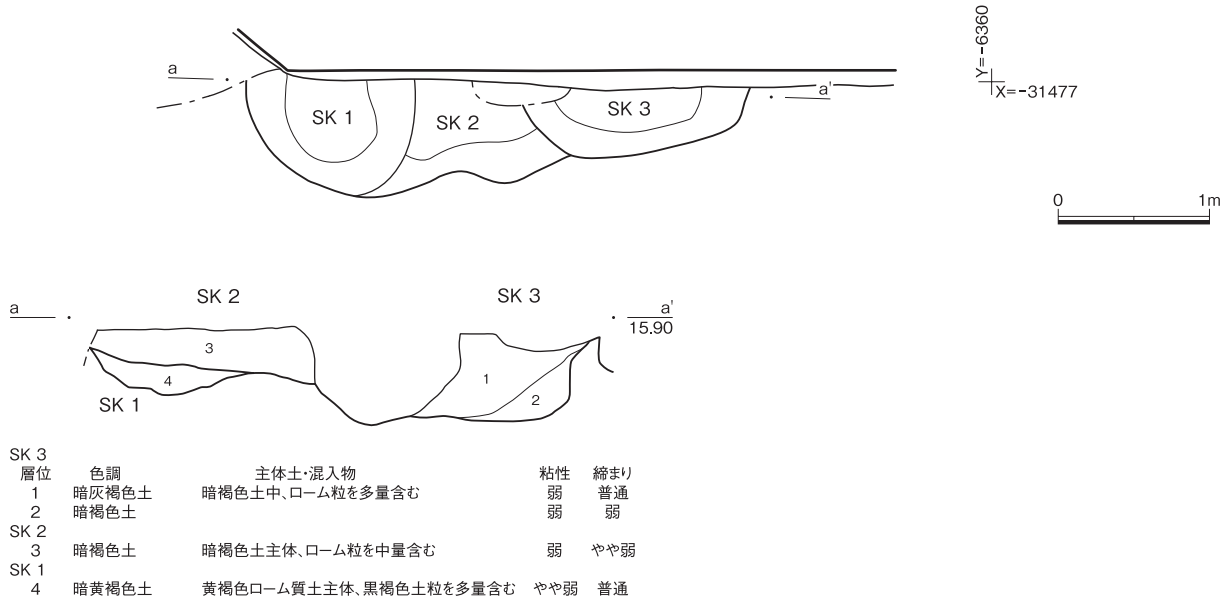
遺構性格は建物の基礎で言問通りに平行する。南北の溝には石が並べられている。SB12からは礎石等建物の構造を明確に示す石組は確認されていないため、調査区域全体が削平されたか、石組が撤去されたと考えられる。確認された範囲で東西の溝が長軸4.95m、短軸0.56m、深さ0.25m、南北の溝が長軸2m、短軸0.48m、深さ0.35mを測る。遺構の断面形は長方形である。SB12の検出標高は15.6m



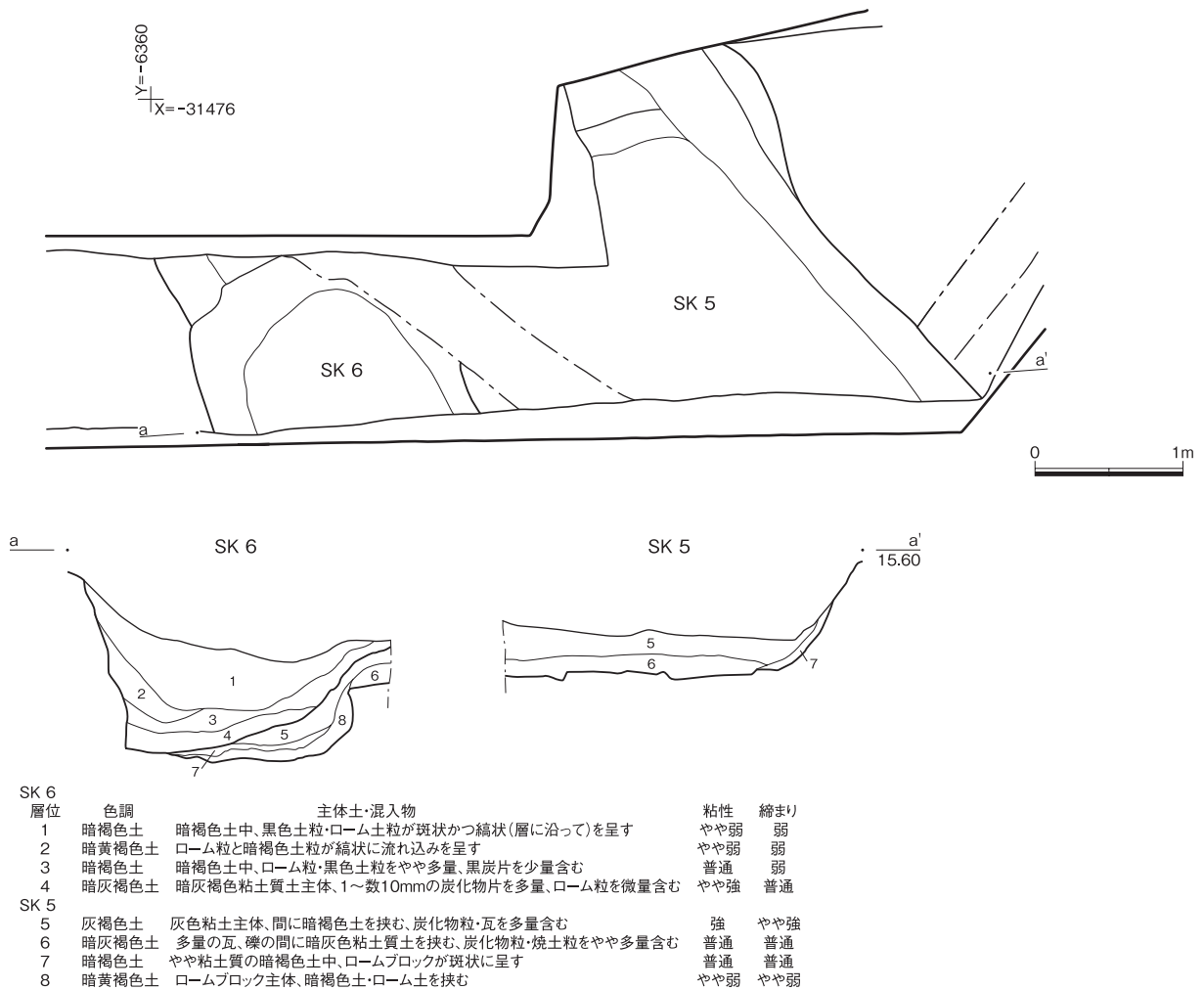
I地点西壁		主体土・混入物	粘性	締まり
層位	色調			
1	暗灰褐色土	黒褐色土中にローム粒をやや多く、焼土粒を少量含む	弱	強
2	黒褐色土	黒褐色土中にローム粒を、黒色土粒を所々に含む	無	やや弱
3	暗黄褐色土	暗褐色土の多い部分とローム土の多い部分が斑状を呈す、赤色スコリアを微量含む	弱	やや弱
4	暗褐色土	暗褐色土主体、ローム土を多く含む部分が斑状を呈す	弱	弱
5	黒褐色土	肌目細かい黒褐色土、下層で暗褐色土(ローム?)ブロックを斑状に含む	やや弱	弱
6	黒色土	黒色土主体、ローム粒・赤色スコリアを少量含む	弱	普通
7	暗黄褐色土	黒褐色土とローム土の混合土(斑状)、下層に行くにつれて、ローム土の量が増す	普通	やや弱
8	黄褐色土	明るい色のソフトローム主体、ハード状の細かいロームブロック、赤色スコリアをやや多く含む	普通	普通

IV-5図 I地点全体図

である。「明治16年陸軍参謀本部測量原図」の調査地点西側の標高は16.8m、標高差は1.2mある。現在の標高が調査地点北側で16.58m、現在の舗装道路の厚み、SBI2の上部が削平されたことを考慮しても、建物基礎が遺構検出面から1.2m上にあったとは考えにくく、明治時代以降、建物が建てられ

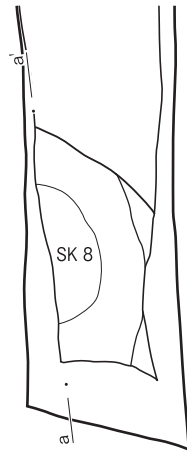


IV-6図 SK 1.SK 2.SK 3

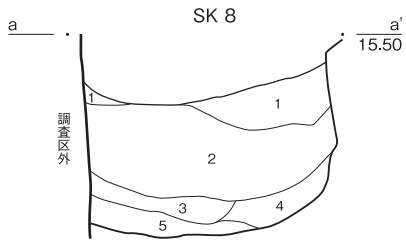


IV-7図 SK 5.SK 6

IV 工学部風工学実験室支障ケーブル地点



Y=-6355  
X=-31475

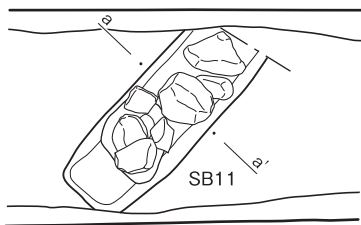


SK 8

層位	色調	主体土・混入物	粘性	締まり
1	暗褐色土	ロームブロックを多量含む	普通	普通
2	暗灰褐色土	炭化物粒・焼土粒を微量含む	普通	普通
3	灰褐色土	炭化物粒をやや多量、焼土粒を微量含む	普通	やや強
4	暗黄褐色土	暗褐色土主体、ロームブロックを多量含む	普通	普通
5	暗褐色土	やや粘土質の暗褐色土中、10mm程度のロームブロックが斑状を呈す	普通	普通

IV-8図 SK 8

Y=-6360  
X=-31476

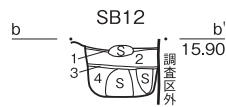
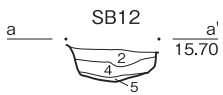
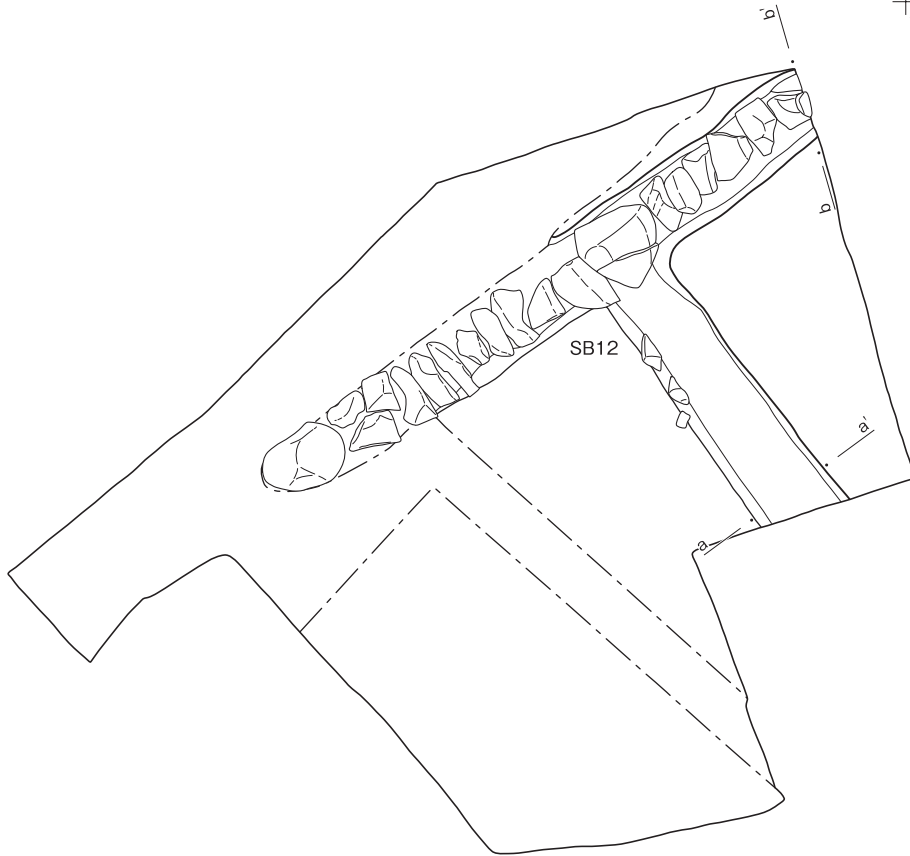


SB11  
a' 15.50



IV-9図 SB11

Y=-6360  
X=-31470

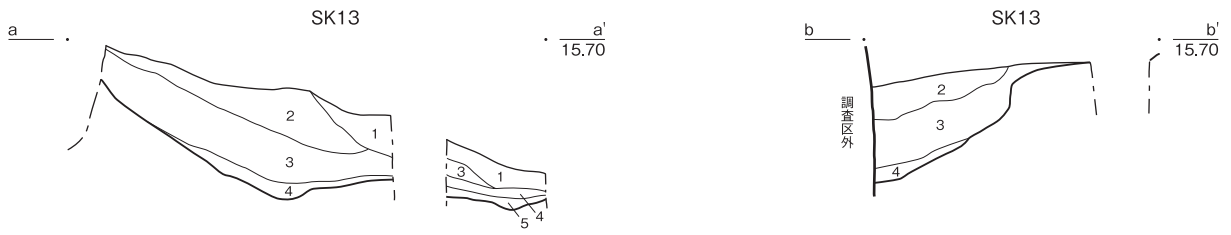
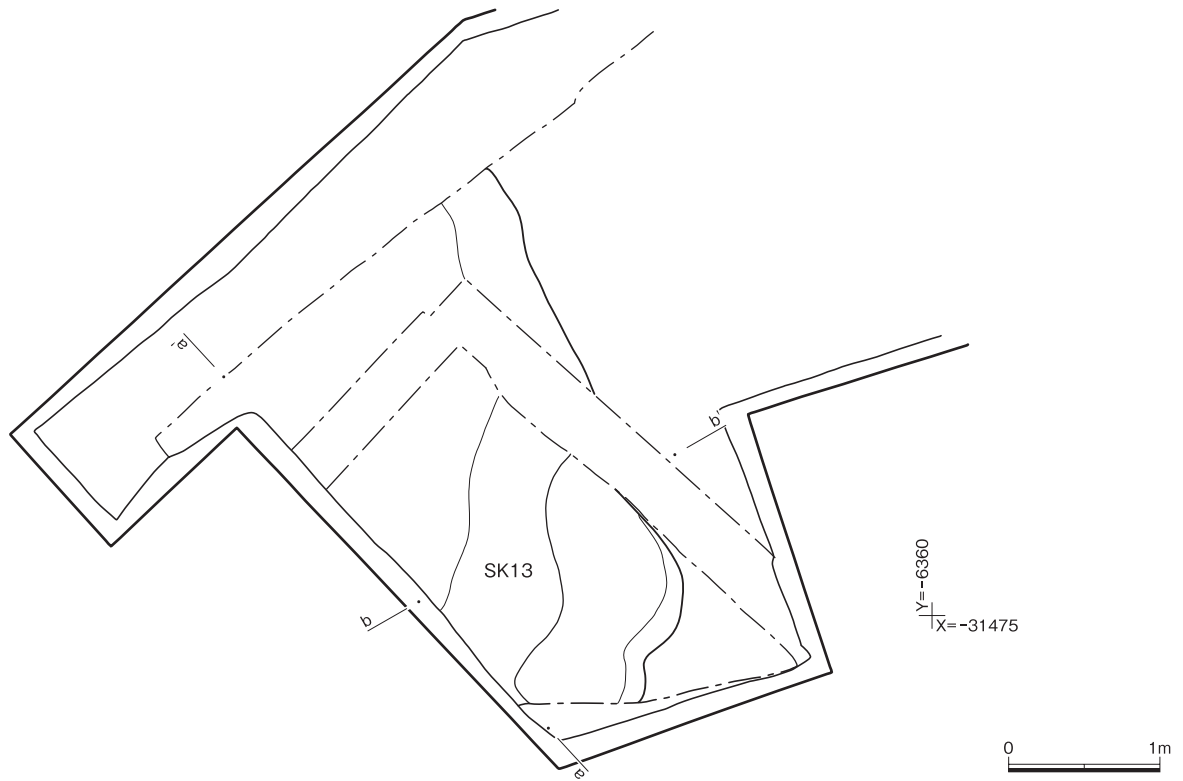


SB12 層位	色調	主体土・混入物	粘性	締まり
1	砂層			
2	茶褐色土	ローム土と黒色土の斑層、2~3mmの小円礫を少量含む	やや弱	普通
3	砂層			
4	暗黄褐色土	砂層を多く含む、黒色土塊・5mm~10mmの小円礫を多量、ローム粒をやや多量含む	弱	やや弱
5	暗茶褐色土	2~3mmの小円礫を少量含む	普通	普通

IV-10図 補足調査地点SB12



IV 工学部風工学実験室支障ケーブル地点



SK13

層位	色調	主体土・混入物	粘性	締まり
1	暗黄褐色土	ローム粒・茶色の粘性の高い土塊を多量、10mm程度の粘土粒・10mm以下の小円礫を少量含む	やや弱	弱
2	暗褐色土	ローム粒・ロームブロックを多量、礫を微量含む	弱	やや弱
3	黒灰褐色土	ローム粒を少量、礫を微量含む	弱	やや弱
4	暗黄褐色土	ローム土・ロームブロック主体、黒灰色土が斑状を呈す	弱	普通
5	暗灰褐色土	ローム土・黒褐色土・暗褐色土が斑状を呈す	やや弱	やや弱

IV-11図 補足調査地点SK13

るまでの間に、調査地点は削平され、建物撤去後盛土が行われたと考えられる。

#### SK13 (IV-13図)

遺構性格は土坑である。確認された範囲で長軸6.57m、深さ1.1mを測る。

## (2) 出土遺物

本地点からはコンテナ1箱の磁器・陶器・土器が出土している。分類基準は「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類(1)」(東京大学埋蔵文化財調査室1999)を参照している。遺跡における分類は数量分析により様々な文化・時代の様相を浮かび上がらせる手段である。そのためにはある一定以上の数量(便宜的に推定個体数100個体以上)を必要とするが、本地点においてはほとんど遺物が検出されていないため、遺物の提示のみにとどめた。

本地点は水戸藩駒込邸(中屋敷)の中央やや東よりに位置する。文政9(1826)年の『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』(口絵図参照)によると、水戸藩駒込邸(中屋敷)の長屋・建物のある区域に位置する。遺物がまとまって検出されている遺構はないが、僅かずつ江戸期の陶磁器が検出されている。また、SK6、SK5・6に、瓦が検出されている。

#### SK3 (IV-12図)

1は金属製品。スプンまたはフォークの柄である。サビを除去した地金の色調は銀色である。

#### SK6 (IV-12図)

1は軒棧瓦。軒丸部は連珠のない三つ巴文。軒平部と平行にならず、下端は飛び出し、斜めに接合されている。意図的なものなのか偶発的なものなのかは不明。軒平部は加藤氏の分類に寄れば江戸式II Kiに分類され、金子氏の分類のうちA-084類に近似する。瓦当表面には転写された範傷が多く見られる。表面特に紋様区内には雲母が顕著である。風化し、表面は黒灰色、胎土は白灰色を呈する。

#### SK5・6 (IV-12図)

1～3は瓦である。1は軒棧瓦。軒丸部は連珠のない三つ巴文。出土遺物のうちこの資料だけ巴文の向きが逆である。軒平部は加藤氏の分類のうち江戸式IV Kiに、金子氏の分類のうちA-105類に近似する。裏面に一部漆喰の痕跡と思しき白い縞が見られる。瓦当と筒部の接合面にはカキヤブリが施される。雲母は顕著でない。風化しており、表面は黒灰色、胎土は白灰色を呈する。2はSX11出土資料とも接合する。軒棧瓦。軒丸部は連珠のない三つ巴文。軒平部は加藤氏の分類のうち江戸式I Kiに、金子氏の分類のうちA-055類に近似する。表面特に紋様区内には雲母が顕著である。全体的に風化している。表面が黒灰色、胎土は灰色を呈する。3はSX11出土資料とも接合する。軒棧瓦。軒丸部は連珠のない三つ巴文。軒平部は加藤氏の分類のうち江戸式に分類されるが、中心飾りは破損のため不詳、蔓はK、子葉はjに近似する。金子氏の分類のうちA-059類に近似する。表面特に紋様区内に雲母が顕著である。表面は黒灰色、胎土は白灰色を呈する。

#### SB8 (IV-12図)

遺物量は少ないが江戸期の遺構と考えている。

1は肥前系染付磁器碗。梅樹文が描かれた粗製の碗。JB-1-vに分類される。2は瀬戸・美濃系陶器。二合半灰釉徳利、底部釉拭き取り。TC-10-aに分類される。

#### SB11 (IV-12図)

1は軒棧瓦。軒丸部は連珠のない三つ巴文。若干下端が飛び出し斜めに接合されている。軒平部は

加藤氏の分類のうち江戸式ⅢLgに近似し、金子氏の分類には近似するものが見当たらない。軒平部の屈曲が弱く、特に下端はほとんど直線をなす。表面特に紋様区内には雲母が顕著である。風化し、表面は黒灰色、胎土は白灰色を呈する。

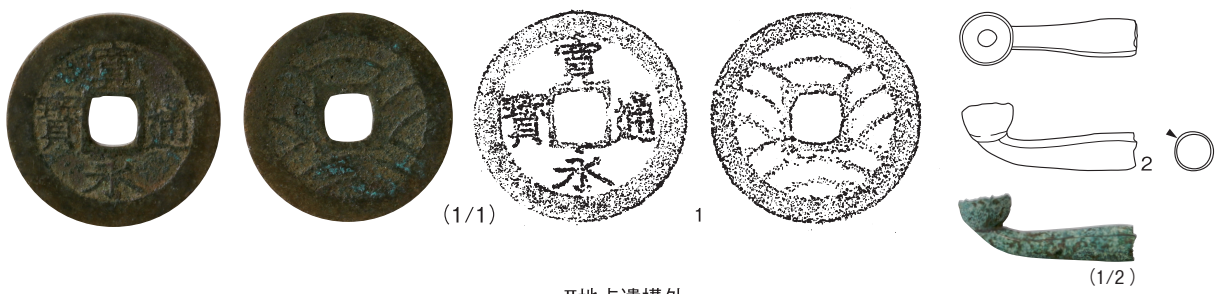
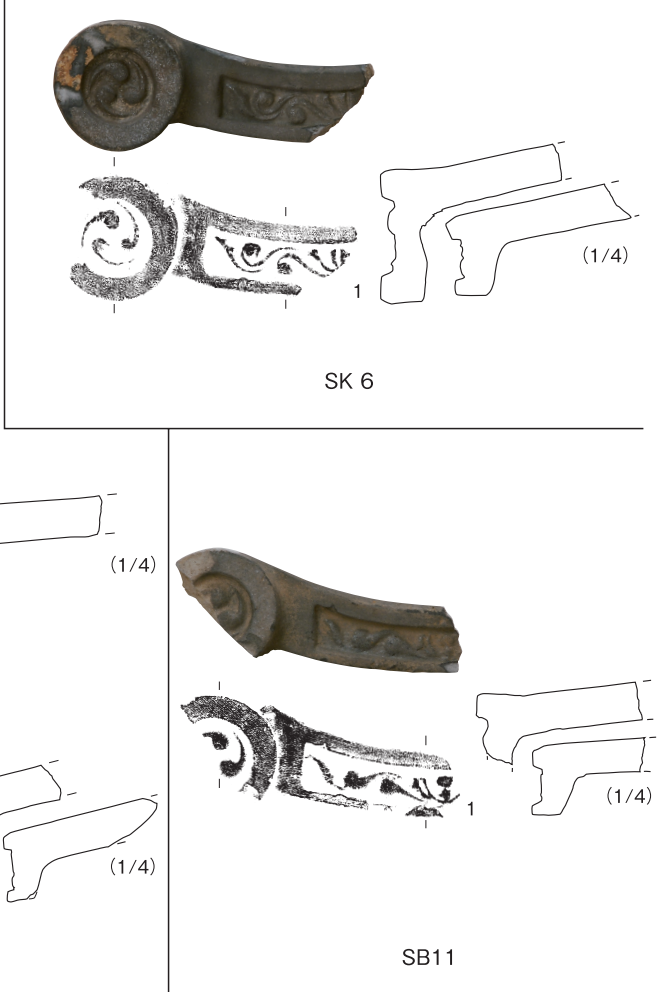
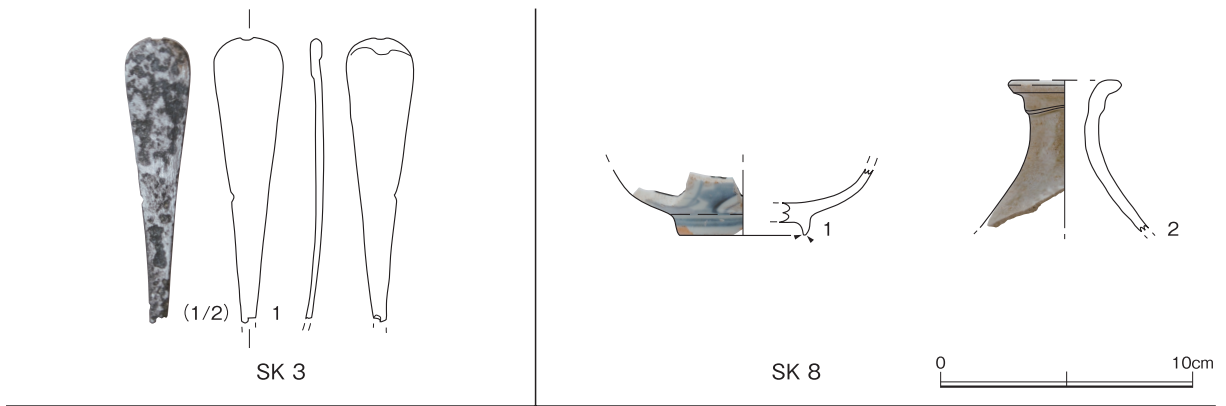
## II 地点 遺構外 (IV-12図)

1は、寛永通宝真鍮四文銭で表面に「寛永通宝」、裏面に「青海波紋」がある。出土資料は裏面の紋様から、明和5(1768)年に鑄造された寛永通宝真鍮四文銭の21波でサビを除去した地金の色調は黄色である。『真鍮銭吹方一件』(『銀座書留』別冊)、『江戸事情 誠斎雑記』、『貨幣秘録』(明治13年写本 東京大学史料編纂所蔵)によれば、寛永通宝真鍮四文銭は銀座で鑄造された貨幣で、寛永通宝真鍮四文銭21波の原材料組成は、銅68%、亜鉛24%、白蠟8%で地金の色調から青銭と呼ばれた。寛永通宝真鍮四文銭には、明和5(1768)年以降に鑄造された21波と同材質の11波の寛永通宝真鍮四文銭、文政4~8(1821~1825)年に鑄造され赤銭と呼ばれた11波がある。文政期の11波の原材料組成は、銅75%、亜鉛15%、鉛10%である。寛永通宝真鍮四文銭の21波、11波、文政期の11波の伝製世品、出土資料をPIXE分析した結果から、青銭と呼ばれた寛永通宝真鍮四文銭の21波、11波の材質は同じで、鉄、砒素等の微量元素の検出と文献史料の検討から、材料である「白蠟」(しろめ)は、鑄造時添加される銅、鉄、砒素、アンチモン等からなる一種の合金と解釈した。青銭の11波と、文政期の11波はデザインが全く同じで、近世考古学では貨幣研究の方法に従い「寛永通宝」の字体の詳細分析から両貨幣を分けている。しかし、字体は腐食やサビの除去によってはっきりしないことが多く、材質分析を行わない限り区別はつかない。青銭材質試料の中にも地金の色調が腐食等により赤みを帯びた試料があったため、金属色調で単純に分けられない場合もある。寛永通宝真鍮四文銭は鑄造年代が明らかな考古資料であるが、文政期とそれ以前の区別が適当になされている場合が多いのではないか。1のPIXE分析結果は、明和5(1768)年以降に鑄造された21波、11波と同材質であった。

2は煙管の雁首。火皿高は低く腰の張らない碗型である。脂返の湾曲はほとんど無い。継ぎ目の蠟付けは左側である。

## 引用・参考文献

- 伊藤博之・小泉好延・原祐一 2000 「江戸期四文銭の科学的研究」産業考古学会『産業考古学会第24回大会(2000年度)総会研究発表講演論文集』pp.21-24
- 伊藤博之・小泉好延・原祐一 2000 「近世の真鍮四文銭における亜鉛の研究-製造および亜鉛輸入文献による考察-」産業考古学会『産業考古学会第24回大会(2000年度)総会研究発表講演論文集』pp.25-28



II地点遺構外

IV-12図 SK 3.SK 6.SK 5・6.SK 8.SB11.II地点遺構外 出土遺物

## 第5節 工学部風工学実験室支障ケーブル地点の成果

工学部風工学実験室支障ケーブル地点の調査は、工学部風工学実験室地点の補足調査として行われた。調査の結果、方形周溝墓と明治時代以降の遺構を検出した。第Ⅰ地点は弥生地区の正門の北東、約30mに位置する。ロームブロックを主体とした盛土を除去すると、地表面から4mの深度で黒色土を用いた硬化面を検出した。この盛土と硬化面は、工学部風工学実験室地点のSR2・SR9と武田先端知ビル地点SR1-1・2（Ⅵ章参照）に繋がる射的場の「監的場」が建設された窪地の一部である。第Ⅱ地点の遺構検出面の標高は15.6mから15.9m、『明治16年陸軍参謀本部測量原図』の標高は16.8m、検出面は明治時代の標高より0.9m以上削平されていた。この標高差は射的場移転後の射場の埋め立てに用いた埋め土の不足を補うための削平と考えられる。

### (1) 方形周溝墓の発見の重要性

方形周溝墓は前述の削平と明治時代の以降の遺構によって部分的に破壊されていたが、周溝を確認、壺型土器が出土した。方形周溝墓は「最初の弥生土器」が発見された弥生町遺跡に関連する遺構と推定されたことから、調査担当の篠原和大氏の尽力と工学部関係者の協力により、調査後、遺構が現地保存された。篠原はこの遺跡の西側にさらに別の墓が存在していると推定したが、武田先端知ビル地点では篠原の推定していた通り方形周溝墓を検出した。浅野地区の遺跡は、明治時代以降の開発によって破壊されていたと考えられていたが、場所によっては弥生時代の遺跡が残されていることが確認され、弥生町遺跡の集落の規模、景観を含めた再評価が行われるきっかけとなった（註1）。また、浅野地区における発掘調査の重要性と意義を大学に示した点で評価される調査であった。

### (2) 明治時代以降

第Ⅱ地点は、明治9（1876）年に建設が開始された射的場と東京府用地の地境付近に位置する。

検出遺構は射的場移転以降の石組、土坑等である。建物の礎石は検出していないが、浅野家敷地から東大敷地になるまでの間、削平が行われたと考えられるものの、石組の検出から遺構検出面の標高は射的場以降の生活面に近いと考えられる。射的場移転後は浅野家の敷地で、『向ヶ岡彌生町會二三番地略圖』（昭和11（1936）年3月弥生町会事務所作成）によれば「三に一六」（2丁目3番地に6）にあたり「東京服学校」がある。「東京服学校」は大正9（1920）年9月15日、濱田美穂の設立した学校で、校長は濱田が務めた（註2）。「東京洋服学校」以前の住宅と「東京洋服学校」の遺構を区別することはできなかった。

#### 註

- 1 篠原和大 1999 「V-2タイプサイトの実情-弥生町遺跡-」『文化財の保護 第31号』東京都教育庁生涯学習部文化課編集・発行p.134
- 2 本郷区役所 1937 「第三篇 第六章 教育 第九節 各種學校」『本郷区史』P875

報告書抄録

ふりがな	とうきょうだいがくほんごうこうないのいせき あさのちく1 じょうほうきばんせんたーへんでんしつ1ちてん・こうがくぶかせこうがくじっけんしつちてん・こうがくぶかせこうがくじっけんしつししょうけーぶるちてん・こうがくぶかせかんきょうしみゆれーしょんふうどうじっけんしつちてん・こうがくぶたけだせんたんちびるちてん							
書名	東京大学本郷構内の遺跡 浅野地区 I 情報基盤センター 変電室 1 地点・工学部風工学実験室地点・工学部風工学実験室支障ケーブル地点・工学部風環境シミュレーション風洞実験室地点・工学部武田先端知ビル地点							
副書名								
巻次								
シリーズ名	東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書							
シリーズ番号	9							
編著者名	原祐一（編）、篠原和大、大貫浩子、石井龍太							
編集機関	東京大学埋蔵文化財調査室	所在地	〒153-8904 東京都目黒区駒場4-6-1 駒場リサーチキャンパス内 03-5452-5103					
発行機関	東京大学埋蔵文化財調査室	所在地	〒153-8904 東京都目黒区駒場4-6-1 駒場リサーチキャンパス内 03-5452-5103					
発行年月日	平成21年12月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
とうきょうだいがくほんごうこうない 東京大学本郷構内の遺跡 浅野地区 の遺跡 浅野地区 (本郷台遺跡群・弥生町2丁目 弥生町遺跡群) 工学部風工学実験室支障ケーブル地点	とうきょうと 東京都 ぶんきょうく 文京区 やよいちよう ちよ 弥生町2丁 うめ ばん 目11番16 ごう 号	13105	47 . 28	35° 42' 54" ~ 35° 42' 58"	139° 45' 46" ~ 139° 45' 49"	平成7年8月 22日~平成 8年9月22日、 平成9年2月 19日~3月7 日	63㎡	事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
東京大学本郷構内の遺跡 浅野地区 (本郷台遺跡群・弥生町遺跡群) 工学部風工学実験室支障ケーブル地点	武家屋敷 (水戸藩 駒込邸)	弥生、近世、 近代	方形周溝墓、建物跡、土 坑	弥生土器、陶磁器、陶 磁器、金属製品、瓦				

東京大学本郷構内の遺跡

浅野地区 I

工学部風環境シミュレーション風洞実験室地点

2009

東京大学埋蔵文化財調査室

## 例 言

1. 本報告は、工学部風環境シミュレーション風洞実験室新営に伴う発掘調査報告書である。
2. 調査地点は文京区弥生2丁目11番16号、東京大学浅野地区に位置している。
3. 遺跡略号は「AFⅣ」である。
4. 本地点は東京都遺跡地図では「文京区No.47 本郷台遺跡群」および「文京区No.28 弥生町遺跡群」内に位置している。
5. 調査面積は300㎡である。
6. 発掘調査は、東京大学埋蔵文化財調査室が行い、原祐一が担当した。
7. 調査期間は以下の通りである。
  - 試掘調査 1998年12月22日～12月23日
  - 事前調査 1999年1月7日～1月25日
  - 整理作業 2007年5月～2009年2月（この期間に断続して作業を行った。）
  - 報告書編集 2008年3月～5月
8. 本書の編集は、原祐一、堀内秀樹、香取祐一を中心に執筆者の協議の上行った。
9. 陶磁器類については池田奈津子、今井雅子、川原良子、坂野貞子、野村遊が整理作業を行った。
10. 人形・玩具については安芸毬子、瓦については石井龍太（東京大学大学院考古学研究室）、動物遺体については阿部常樹（現國學院大學研究開発推進機構共同研究員）が整理報告を行った。
11. 石質の鑑定はパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。
12. 水戸藩駒込邸関連文書、「青木家文書」（文京区弥生在住、青木誠氏所蔵）の調査は、原祐一が担当した。
13. 執筆分担は以下の通りである。
  - 第1節 原 祐一
  - 第2節 原 祐一
  - 第3節 原 祐一
  - 第4節 原 祐一
  - 第5節 安芸毬子、大貫浩子、石井龍太
  - 第6節 原 祐一
14. 発掘調査に伴う図面、写真、出土遺物は東京大学埋蔵文化財調査室が駒場リサーチキャンパス（東京都目黒区駒場4-6-1）、東京大学工学部工学系研究科柿岡教育研究施設（茨城県石岡市柿岡414）において、運用、保存、管理している。

### 整理作業参加者

青山正昭 安芸毬子 池田奈津子 今井雅子、大貫浩子 香取祐一 川原良子 坂野貞子 田中美奈子  
野村遊 山田くりか



## 第1節 調査に至る経緯

建設予定地が位置する文京区弥生（向ヶ岡弥生町）は、明治17（1884）年に有坂紹蔵、白井光太郎、坪井正五郎が「弥生土器」の名称の由来となった土器（以下「最初の弥生土器」）を発見した場所として知られている。浅野構内では、昭和50（1975）年、文学部考古学研究室、理学部人類学教室によって、弥生時代の遺跡が調査され、環濠集落の環濠、貝塚層を検出し、弥生土器等が出土した。「最初の弥生土器」が発見された遺跡と、きわめて関係が深い遺跡と判断され、昭和51年、「弥生二丁目遺跡」の名称で国の史跡に指定、現地保存された。

平成10（1998）年度、東京大学施設部から埋蔵文化財調査室に、工学部強風シミュレーション風洞実験室新営工事に伴う埋蔵文化財の調査に関する照会があった。周辺の遺跡の分布状況、建設予定地に隣接する、工学部風工学実験室地点では江戸時代の遺構、工学部風工学実験室支障ケーブル地点では方形周溝墓を検出していることから、当地点においても遺跡が存在する可能性が高いことが推定された。埋蔵文化財調査室では、平成10（1998）年12月22・23日に試掘調査を行った。調査の結果江戸時代の遺構を確認したことから、平成11（1999）年1月7日から1月25日まで事前調査を行った。

## 第2節 調査方針・遺跡の一般公開

### (1) 調査方針

弥生時代、江戸時代の遺跡は、当然調査対象であるが、東京大学史の観点から明治時代以降も調査の対象とした。ただし、明治時代以降の遺跡については調査期間に配慮し必要最低限の調査に止めた。

### (2) 遺跡の一般公開

発掘調査は、文化財保護法、第1章 総則（この法律の目的）第1条「この法律は、文化財を保存し、且つ、その活用を図り、もつて国民の文化的向上に資するとともに、世界文化の進歩に貢献することを目的とする」という理念に基づき、常時、遺跡調査を公開した。また、平成11（1999）年1月24日、周辺住民と学内関係者を対象に、遺跡調査の説明会を開催した。

## 第3節 地理的・歴史的環境

工学部強風シミュレーション風洞実験室地点では83基の遺構を検出した。

江戸時代の調査地点は『向ヶ岡彌生町舊水戸邸繪図面』によれば、水戸藩駒込邸の敷地を東西に区画する道の西側敷地に該当する。

明治9（1878）年から明治21（1888）年までは射的場敷地で、明治7（1874）年に建設された上野の警視局射的場で、住宅地への被弾被害と上野公園の開園、明治10（1877）年の勸業博覧会開催のため明治9（1876）年演習を休止、上野の射的場の代替施設として弥生町射的場建設計画が出され、

同年、向ヶ岡弥生町で建設を開始、明治10（1877）年1月から演習が開始される。射的場はフランス式で射場は長さ300m、幅50m、地下を約10m以上掘削したプール状の施設で、掘削土を東側、北側、西側に盛り防護壁とし南側に「発射場」が建設された。射場内の北側に的が置かれ、射場の周辺に関連施設が建設されている。

射的場は、現在の浅野地区と北側の住宅地が警視庁敷地のまま射場が宮内省敷地となる。射的場は明治15（1882）年、皇宮地附属地となり同年、皇宮省附属地のまま東京共同射的会社射的場となる。明治20（1887）年、警視庁用地に建設された弥生神社が芝公園に移転、明治21（1888）年東京共同射的会社が大森に移転し、明治21（1888）年、警視庁用地と射的場跡地の大部分が浅野家敷地となる。射場は埋め立てられ埋め土の不足を補うために周辺部の削平が行われたと考えられる。青木家文書『明治四十二年調家屋台帳』と『向ヶ岡彌生町二・三番地略圖』（昭和11（1936）年3月弥生町会事務所作成）によれば、明治21（1888）年以降、調査地点は浅野地区部分が浅野侯爵邸と別邸と住宅地、調査地点以外は住宅地となる。浅野家は、昭和16（1883）年12月8日までこの地に居住、浅野家敷地は昭和23（1948）年までに東京大学敷地となり現在に至る。

## 第4節 遺構

### SP1（V-3、4図）

遺構の西側は、浅野地区のコンクリート塀の下あるため未調査である。確認された部分で平面形が方形の小穴で、柱穴と考えられる。遺構断面図には、柱跡が確認できる。小穴を掘削し、柱を小穴の中に配置し、土で固定したと考えられる。SK67に切られる。SP8、SP10、SP11、SP17と東西に並び、SP1、SP2、SK3、SK4、SK5、SB6、SK66、SP67、SK68、SP69、SP85、SP86、SP87、SP88、SP89、SP90と南北に並ぶ。東西に並ぶ遺構列を区画の塀に伴う遺構、南北に並ぶ遺構を道沿いの塀もしくは杭列に伴う遺構と推定した。

### SP2（V-3、4図）

遺構の西側は、浅野地区のコンクリート塀の下あるため未調査である。確認された部分で平面形が長方形の小穴で、柱穴と考えられる。

### SK3（V-3、4図）

遺構の西側は、浅野地区のコンクリート塀の下あるため未調査である。確認された部分で平面形が長方形の小穴で、柱穴と考えられる。遺構断面図には、柱もしくは杭の跡が確認できる。小穴を掘削し、柱を土坑の中に配置し、土で固定したと考えられる。柱がどこまで打ち込まれていたかは、掘削ができなかったため不明である。

### SK4（V-3、4図）

遺構の西側は、浅野地区のコンクリート塀の下あるため未調査である。確認された部分で平面形が不整形の土坑でSP6遺構を切る。

### SK5（V-3、4図）

遺構の西側は、浅野地区のコンクリート塀の下あるため未調査である。確認された部分で平面形が方形の土坑である。

### SK6（V-3、4図）

遺構の西側は、浅野地区のコンクリート塀の下あるため未調査である。平面形が長方形の土坑であ

る。遺構断面図には、柱もしくは杭の跡が確認できる。柱跡の直径は24cmを測る。長方形の土坑を掘削し、柱土坑の中に配置し、土で固定したと考えられる。SK4に切られる。

**SP8 (V-3, 4図)**

平面形が方形の小穴で、柱穴と考えられる。SP1、SP10、SP11、SP17と東西に並ぶ。

**SP11 (V-3, 4図)**

平面形が長方形の小穴で、柱穴と考えられる。P1、SP8、SP10、SP17と東西に並ぶ。

**SP12 (V-3, 4図)**

平面形が不整形の小穴である。SK74に切られる。SP54、SP78と東西に並ぶ。

**SB13 (V-5, 6図)**

建物の礎石と考えられる。長軸93m、短軸8m、深さ29mの不整形の土坑の中央に、直径約4mの石を中央に配置し、中央の石を同じ石質の碎石と土で突き固めている。SB19と一間(1.8m)間隔で並ぶ。

**SK16 (V-5, 6図)**

平面形が長方形の小穴で、柱穴と考えられる。SP1、SP8、SP10、SP11、SP17の軸に直行する軸で、SP17と南北に並ぶ。

**SP17 (V-5, 6図)**

平面形が長方形の小穴で、柱穴と考えられる。SP1、SP8、SP10、SP11と東西に並ぶ。SP16と南北に並ぶ。

**SE18 (V-8図)**

平面形が円形の井戸である。3mまで掘削をおこなった。北側と西側に「足がかり」が確認された。北側、西側とも「足がかり」は約上下に5m間隔で掘削されている。

**SB19 (V-5, 6図)**

建物の礎石と考えられる。長軸74m、短軸6m、深さ26mの方形の土坑の中央に、直径約0.4mの石を中央に配置し、中央の石を同じ石質の碎石と土で突き固めている。SB13とは一間(1.8m)間隔で東西に並ぶ。

**SK20 (V-10図)**

北側をSB29に切られ、調査区外に遺構がのびることから、遺構の規模は不明である。遺構の覆土は硬く突き固められている。

**SD21 (V-5, 6図)**

溝状遺構で遺構は、東西の調査区外にのびている。確認された範囲である。SD21-2の遺構断面図は、現在の浅野地区の植込みと盛土、SD21を含めた断面図である。1層は現在の植込みの盛土で、瓦礫(レンガ、セメント)を含む。2層は植込みが作られる以前の盛土で、砂を含んだ灰色土が硬く突き固められている。この土層は、現在の植込み部分の外、調査区東側で確認されている。植込みの縁石より南側はアスファルト舗装の工事によって削平されている。3~7層は、ローム土と黒ボク土を主体とする土層で、SD21の覆土である8層を切っている。8層では、水が流れた形跡は認められない。2層は調査区全域で行われた盛土で植込みと舗装工事で部分的に削平されていた。2層は東京大学浅野地区になってからの盛土で、3~7層、8層は東大以前の遺構と考えられる。SD21の遺物は、江戸時代の陶磁器の破片を中心に、明治以降の陶磁器の破片が少量含まれる。

**SP22 (V-5, 6図)**

平面形が不整形の小穴で、柱穴と考えられる。SK80を切る。西に約7.5m離れたSP24 遺構との軸は、SB13、SB19の軸と平行である。

**SP24 (V-3、4図)**

平面形が方形の小穴で、柱穴と考えられる。東に約7.5m離れたSP22 遺構との軸は、SB13、SB19の軸と平行である。南に4.5m離れたSP8と南北に並ぶ。

**SB29 (V-10図)**

建物の基礎と考えられる。直径約0.3mの碎石を確認した。遺構断面の観察では、各層が硬く突き固められており、1～3層、10～11層の切り合いが確認されており、少なくとも2回の作り変えが行われたと考えられる。SK20を切る。

**SB30 (V-10、11図)**

建物の基礎と考えられる。SP1、SP8、SP10、SP11、SP17に区画された、「三(番地)に-五」と「三(番地)に-四」両区画にまたがっている。平面形はL字形を呈する。東側は、調査区外にのびる。直径約4mの碎石が遺構底面に並べられ、碎石の周りの土はそれほど硬く突き固められておらず、碎石の上層の土が硬く突き固められていた。

**SK40 (V-10、11図)**

平面形が小判型の土坑である。遺構の東側は、調査区外のため未調査である。遺構の底面から土器2点が出土した。現地表面のアスファルト舗装の下は、盛土で砂を含んだ灰色土(1層)と茶褐色土(2層)が硬く突き固められていた。3層が、SK40の覆土で、色調は黒褐色、よく締まっていた。土層断面は逆三角形を呈する。

**SK42 (V-10、11図)**

平面形が不整形の土坑である。SK81に上部を切られる。遺構断面図の1～3層がSK81の覆土、4層がSK42の覆土である。

**SK47 (V-10、11図)**

溝状遺構である。東側は調査区外のため未調査である。遺構の底面はほぼ平坦で、南側の遺構の立ち上がりはほぼ垂直であるのに対し、北側は緩やかに立ち上がる。覆土はよく締まっており、褐色土(1層)と茶褐色土(2層)に別れ、レンズ状に堆積している。

**SD49 (V-10、11図)**

溝状遺構である。遺構の北側はテラス状になっている。南側の溝部分の遺構断面形は逆台形を呈する。遺構の覆土は良く締まる。西側はA-1面の攪乱、北側はSD79に切られる。SD65を切る。

**SK56 (V-5、6図)**

平面形が不整形の土坑である。北側をSK27に切られる。SK57を切る。土層断面図1層はSK57、2層がSK56の覆土で、1層、2層とも良く締まる。

**SK65 (V-10、11図)**

溝状遺構である。土層断面図1層、2層は良く締まる。北側がオーバーハングしている。SK49、SD79に切られる。

**SP72 (V-3図)**

平面形が方形の小穴である。SP1、SP8、SP10、SP11、SP17の軸に直行する軸で、SP8と南北に並ぶ。

**SP73 (V-3図)**

平面形が不整形の土坑で、土坑の東側に小穴があり、西側より深くなっている。長軸45m、短軸37mを測る。SP1、SP8、SP10、SP11、SP17の軸に直行する軸で、土坑の東側小穴がSP11と南北に並ぶ。

**SK81 (V-10、11図)**

平面形が不整形の土坑で、短軸65m、深さ3mを測る。SK4を切る。遺構断面図の1～3層がSK81

の覆土、4層がSK42の覆土である。

**SK82 (V-10、11図)**

平面形が不整形の土坑である。SK43を切る。遺構の覆土は良く締まり、レンズ状に堆積している。

**SP83 (V-10、11図)**

平面形が円形の小穴である。遺構の覆土は良く締まる。

**SP85、SP86、SP87、SP88、SP89、SP90 (V-9図)**

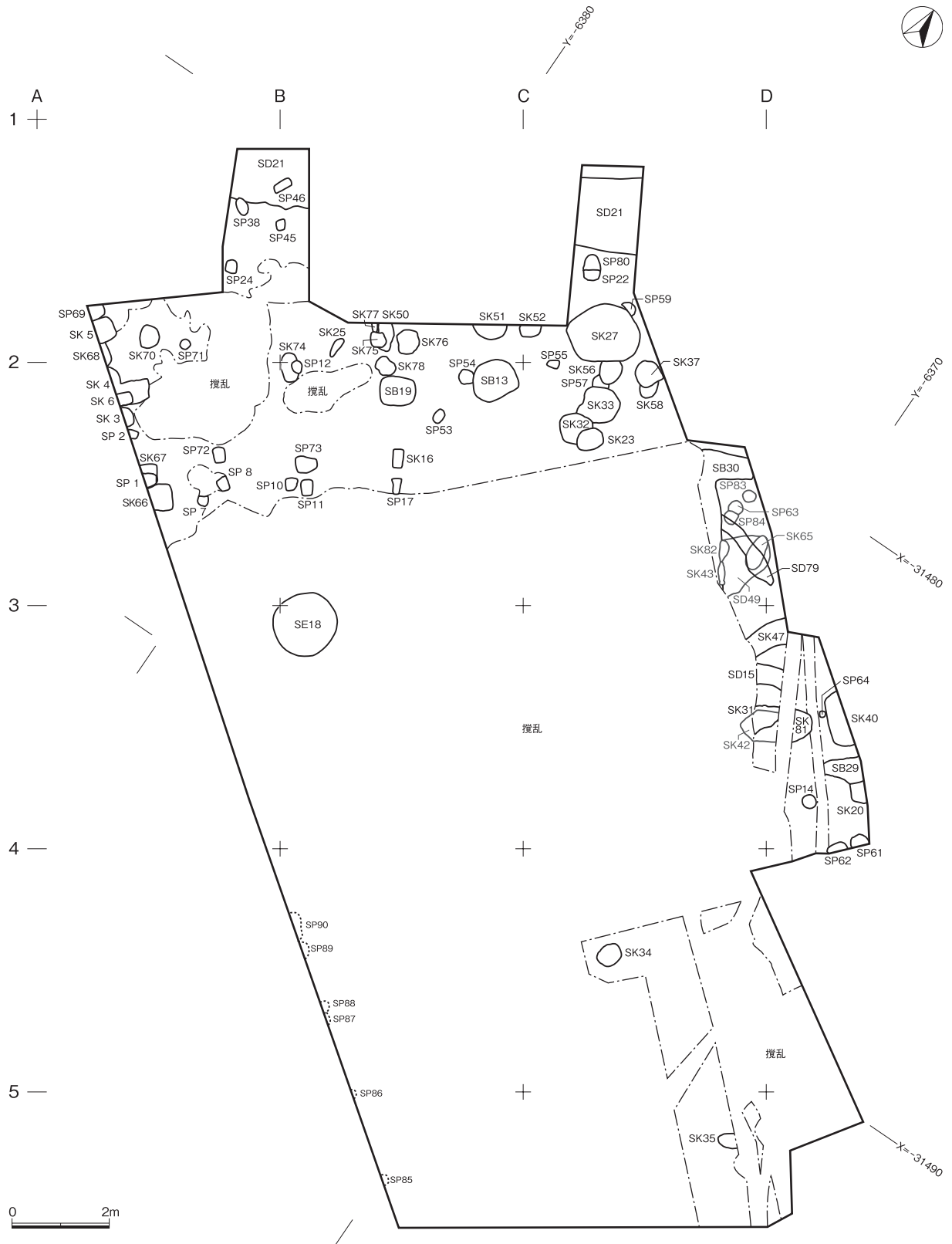
柱跡は確認できないが、SP1、SP2、SK3、SK4、SK5、SB6、SK66、SP67、SK68、SP69と南北に並ぶことから、道沿いの塀もしくは杭列に伴う遺構と推定した。

遺構No.	グリッド	種別	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)
SP 1	A2	小穴	-	0.29	0.94
SP 2	A2	小穴	0.14	-	0.38
SK 3	A2	土坑	0.4	-	0.34
SK 4	A2	土坑	0.49	-	0.34
SK 5	A1	土坑	-	0.5	0.2
SK 6	A2	土坑	0.47	-	0.89
SP 7	A2	小穴	-	0.23	0.29
SP 8	A2	小穴	0.27	0.22	0.46
SP10	B2	小穴	0.33	0.25	0.14
SP11	B2	小穴	0.24	0.2	0.35
SP12	B1・2	小穴	-	0.14	0.35
SB13	B1・2	礎石	0.93	0.8	0.29
SP14	D3	小穴	0.28	0.28	0.3
SD15	C3,D3	溝状遺構	-	0.46	0.13
SP16	B2	小穴	0.4	0.23	0.43
SP17	B2	小穴	0.32	0.2	0.38
SE18	A2・3,B2・3	井戸	1.35	1.26	3mまで掘削
SB19	B2	礎石	0.74	0.6	0.26
SK20	D3	土坑	-	-	0.34
SD21	A1,B1,C1	溝状遺構	-	1.58	0.32
SP22	C1	小穴	0.33	0.22	0.6
SK23	C2	土坑	0.55	0.42	0.31
SP24	A1	小穴	0.27	0.23	0.3
SK25	B1	土坑	0.44	0.16	0.14
SK27	C1	土坑 (植栽痕)	1.53	1.16	0.26
SB29	D3	基礎	-	0.6	-
SB30	C2	基礎	-	0.58	0.64
SK31	C3,D3	土坑	-	0.52	0.16
SK32	C2	土坑	0.7	0.65	-
SK33	C2	土坑	0.93	0.8	-
SK34	C4	土坑	0.5	0.4	0.1
SK35	C4	土坑	-	0.3	0.06
SK37	C1・2	土坑	0.52	0.5	0.3
SP38	A1	小穴	0.37	0.23	0.27
SK40	D3	土坑	1.15	-	0.24
SK42	C3,D3	土坑	-	0.73	0.46
SK43	C2	土坑	-	0.46	0.13
SP45	A1,B1	小穴	0.4	0.3	0.12

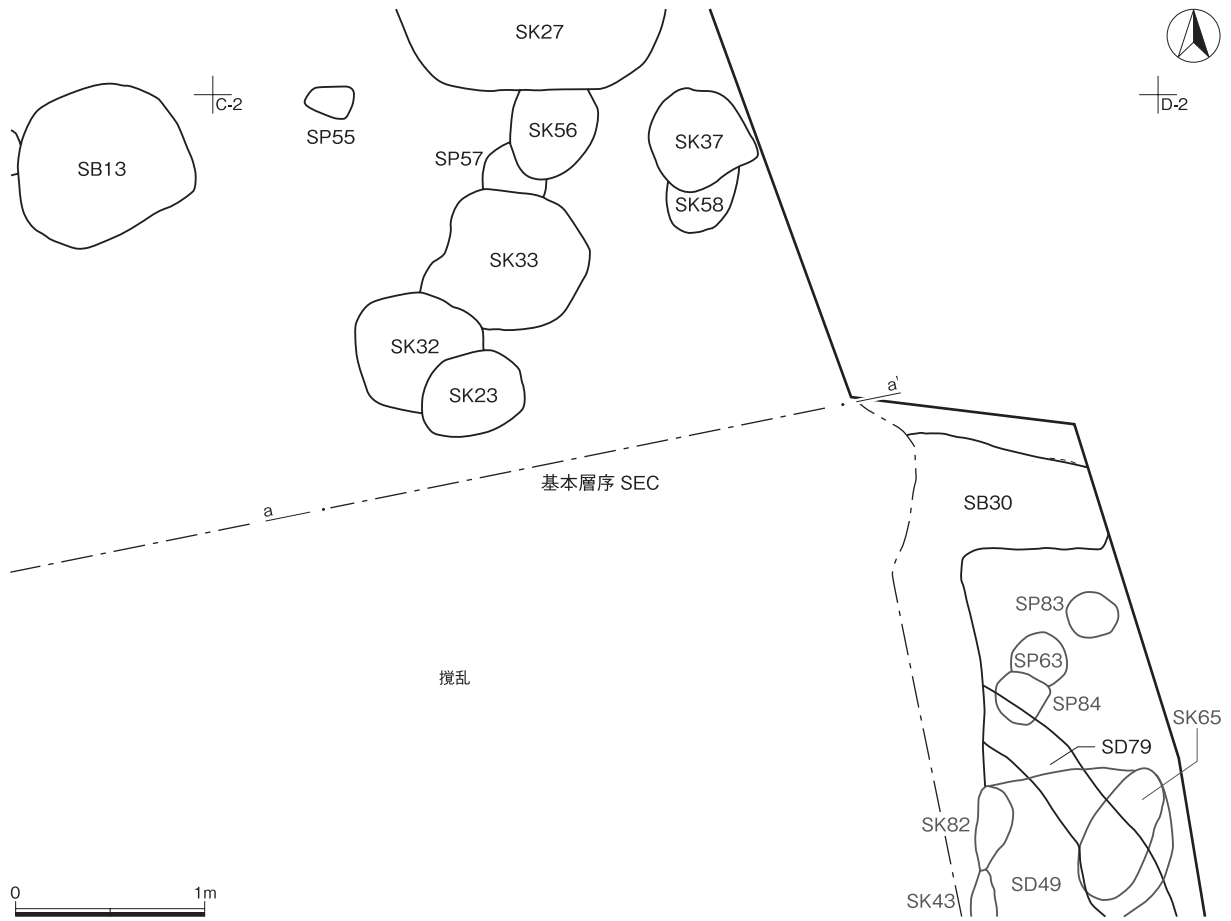
V-1表 遺構一覧表(1)

遺構No.	グリッド	種別	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)
SP46	A1,B1	小穴	0.4	0.32	0.2
SK47	C3,D3	土坑	-	0.54	0.18
SD49	C2,D2	溝状遺構	-	1.12	0.25
SK50	B1	土坑	-	0.35	-
SK51	B1	土坑	0.7	-	-
SK52	B1,C2	土坑	-	0.45	-
SK52	B1,C1	土坑	-	-	-
SP53	B2	小穴	0.3	0.2	-
SP54	B2	小穴	0.35	0.3	0.15
SP55	C1・2	小穴	0.27	0.16	0.33
SK56	C1・2	土坑	0.6	0.45	0.12
SP57	C2	小穴	-	0.35	0.06
SK58	C2	小穴	0.67	0.35	0.25
SP59	C1	小穴	0.32	-	0.06
SK61	D3	土坑	0.38	-	0.13
SK62	D3,D4	土坑	0.36	-	0.12
SP63	C2	小穴	-	0.29	0.12
SP64	D3	小穴	0.13	0.12	0.24
SK65	C2,D2	土坑	0.85	0.35	0.24
SK66	A2	土坑	-	0.54	-
SK67	A2	土坑	-	0.34	0.33
SK68	A1	土坑	-	0.5	-
SP69	A1	小穴	-	-	0.37
SK70	A1	土坑	0.47	0.4	-
SP71	A1	小穴	0.21	0.2	-
SP72	A2	小穴	0.33	0.25	-
SK73	B2	土坑	0.45	0.37	-
SK74	B1・2	土坑	0.6	0.34	-
SP75	B1	小穴	0.3	0.29	-
SK76	B1	土坑	0.5	0.34	-
SK77	B1	土坑	-	0.12	-
SP78	B1	小穴	0.42	0.35	-
SD79	C2,D2	溝状遺構	-	0.4	-
SP80	C1	小穴	0.31	0.3	0.68
SK81	D3	土坑	-	0.65	0.08
SK82	C2	土坑	0.45	-	0.13
SP83	C2	小穴	0.27	0.24	0.5
SP84	C2	小穴	0.27	0.26	0.01
SP85	A3	小穴	0.23	-	0.2
SP86	A3	小穴	0.19	-	0.3
SP87	A3	小穴	0.25	-	0.22
SP88	A3	小穴	0.28	-	0.42
SP89	A2	小穴	0.38	-	0.3
SP90	A2	小穴	0.56	-	0.44
SP91	A3	小穴	1.56	-	1.44

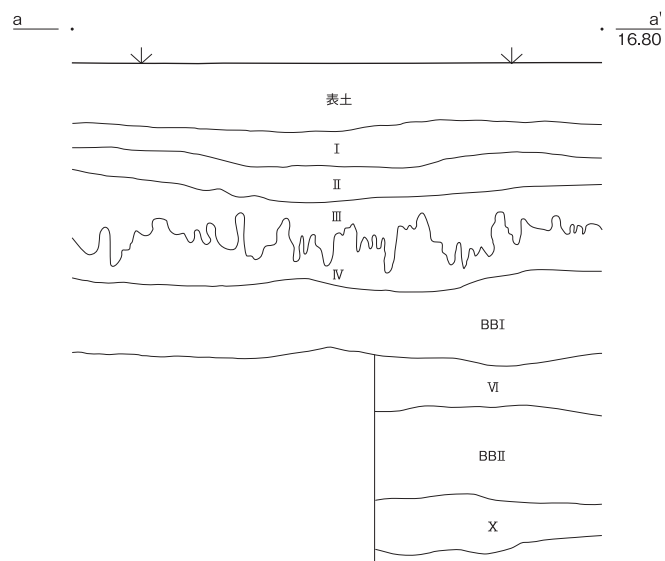
V-1表 遺構一覧表(2)



V-1図 全体図



V-2図 基本層序位置

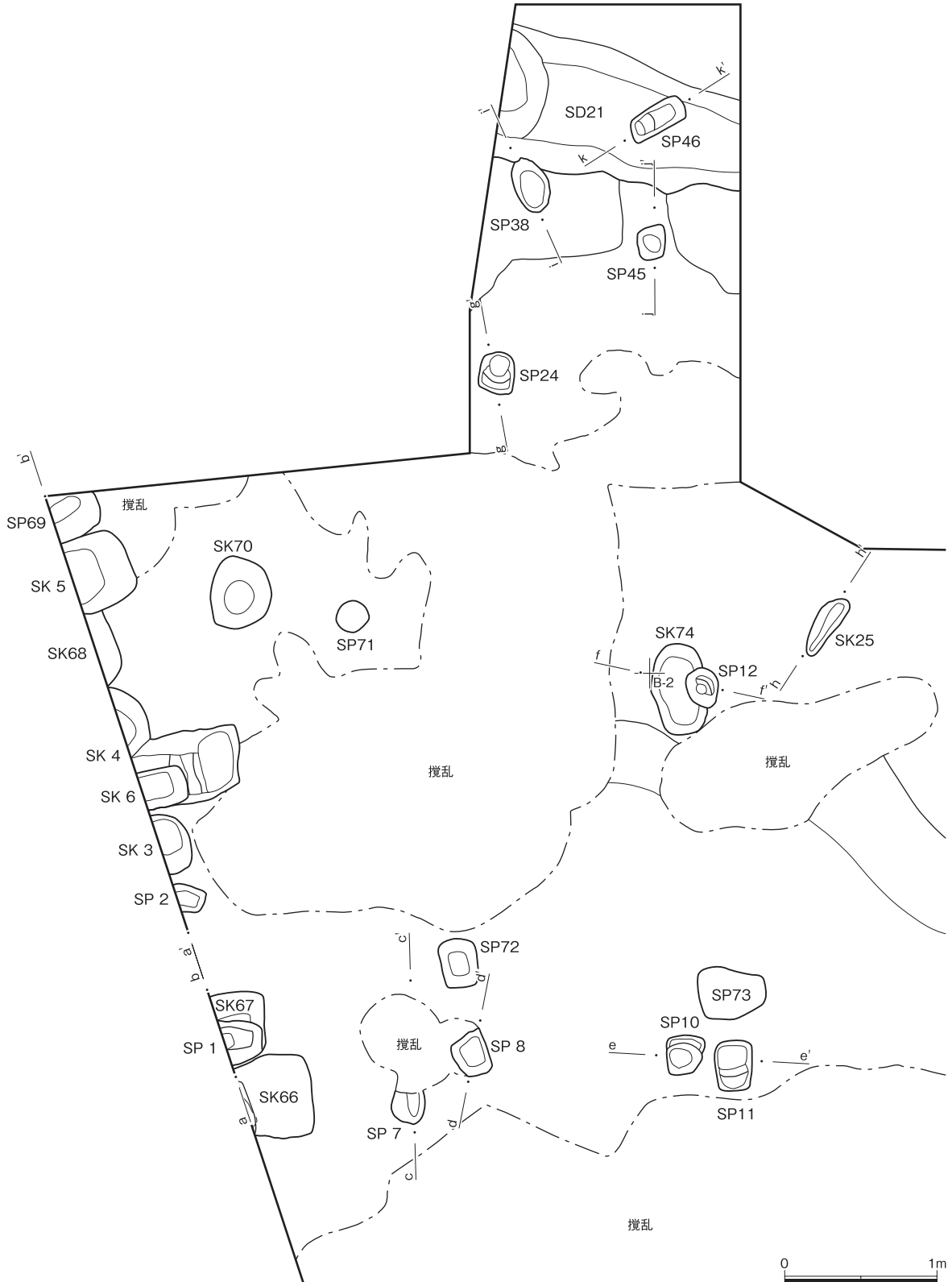


V-3図 基本層序土層図

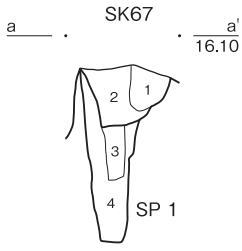




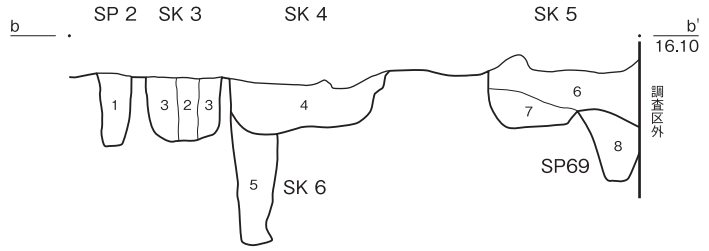
B-1



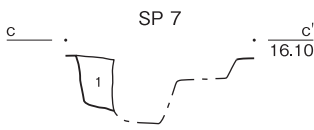
V-4図 A.B-1.2grid



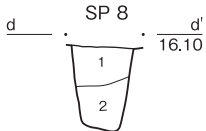
SK67				
層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性
1	暗褐色土	ローム土、黒ボク土	あり	あり
2	暗褐色土	ローム土、黒ボク土	あり	あり
SP 1				
3	黒褐色土	黒ボク土	なし	あり
4	暗褐色土	ローム土、黒ボク土	あり	あり



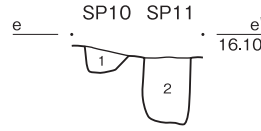
SP 2						
層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性	備考	
1	暗褐色土	ローム土、黒ボク土	あり	あり	柱跡	
SK 3						
2	黒褐色土	黒ボク土	なし	あり	柱跡	
3	暗褐色土	ローム土、黒ボク土	あり	あり		
SK 4						
4	茶褐色土	ローム土、黒ボク土	あり	あり		
SK 6						
5	黄褐色土	ローム土(ロームブロック)	あり	あり		
SK 5						
6	暗褐色土	ローム土、黒ボク土、炭化物	あり	あり		
7	茶褐色土	ローム土、黒ボク土	あり	あり		
SP69						
8	褐色土	ローム土、黒ボク土	あり	あり		



SK 7				
層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性
1	暗褐色土	ローム土、黒ボク土	あり	あり



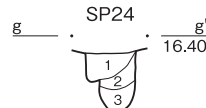
SP 8				
層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性
1	茶褐色土	ローム土、黒ボク土	あり	あり
2	茶褐色土	ローム土、黒ボク土	なし	あり



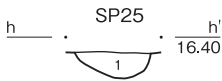
SP10				
層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性
1	暗褐色土	ローム土、黒ボク土	なし	あり
SP11				
2	茶褐色土	ローム土、黒ボク土	あり	あり



SP12				
層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性
1	暗褐色土	ローム土、黒ボク土	あり	あり



SP24				
層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性
1	暗褐色土	ローム土、黒ボク土	なし	あり
2	茶褐色土	ローム土、黒ボク土	あり	あり
3	暗褐色土	ローム土、黒ボク土	なし	あり



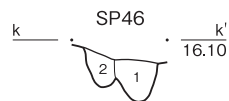
SP25				
層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性
1	茶褐色土	ローム土、黒ボク土、炭化物	あり	あり



SP38				
層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性
1	黒褐色土	ローム土、黒ボク土	あり	あり



SP45				
層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性
1	茶褐色土	ローム土、黒ボク土、炭化物	硬質	あり

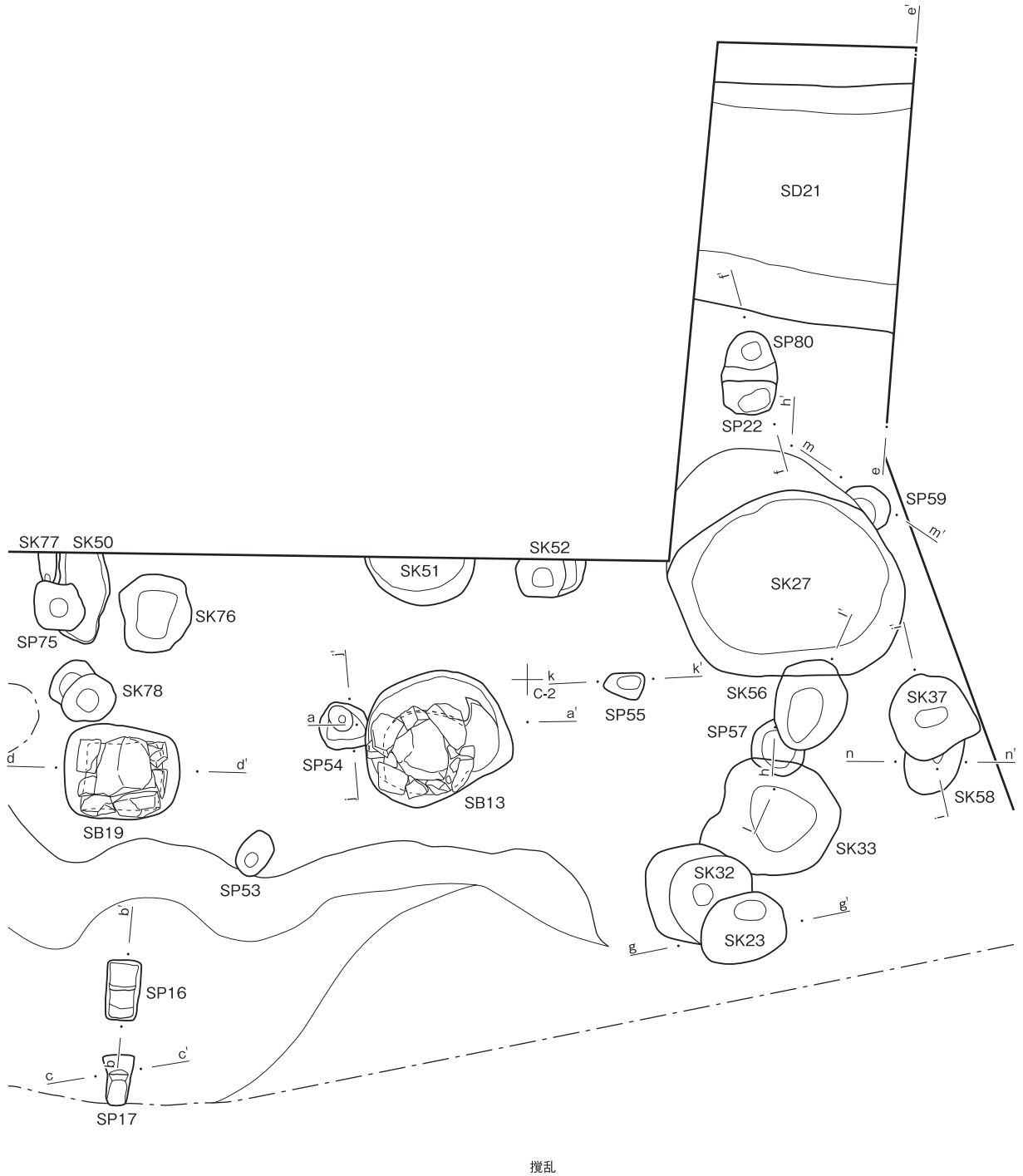


SP46				
層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性
1	茶褐色土	ローム土、黒ボク土、炭化物	あり	あり
2	褐色土	ローム土、黒ボク土	あり	あり

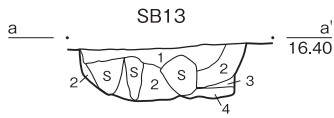
V-5図 SP 1. SP 2. SK 3. SK 4. SK 5. SK 6. SK 7. SP 8. SP10. SP11. SK12. SP24. SP25. SP38. SP45. SP46. SK67. SP69



C-1

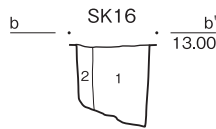


V-6図 B.C-1.2grid



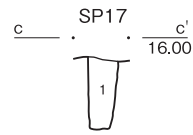
SB13

層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性
1	茶褐色土	ローム土、黒ボク土	あり	あり
2	暗褐色土	ローム土、黒ボク土	あり	あり
3	茶褐色土	ローム土	あり	あり
4	暗褐色土	黒ボク土	あり	あり



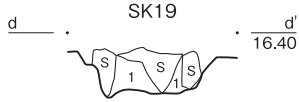
SK16

層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性
1	茶褐色土	ローム土、黒ボク土	なし	あり
2	茶褐色土	ローム土、黒ボク土	あり	あり



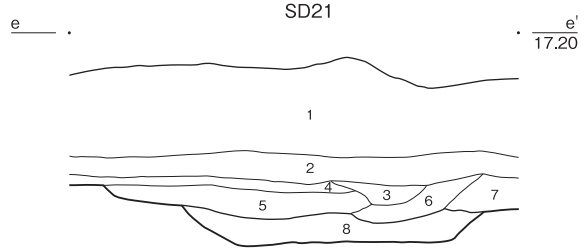
SP17

層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性
1	茶褐色土	ローム土、黒ボク土	なし	あり



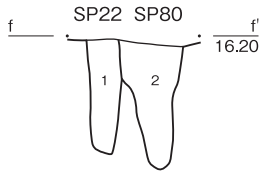
SK19

層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性
1	茶褐色土	ローム土、黒ボク土	あり	あり



SD21

層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性
1	灰色土	瓦礫(レンガ・セメント)を含む	あり	あり
2	灰色土	砂	硬質	あり
3	灰褐色土	黒ボク土、砂	あり	あり
4	暗褐色土	ローム土、黒ボク土、焼土	あり	あり
5	茶褐色土	ローム土、黒ボク土	あり	あり
6	茶褐色土	ローム土、黒ボク土	あり	あり
7	暗褐色土	ローム土、黒ボク土	あり	あり
8	暗褐色土	ローム土、黒ボク土、炭化物	あり	あり

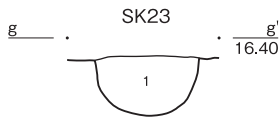


SP22

層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性
1	茶褐色土	ローム土、黒ボク土	あり	あり

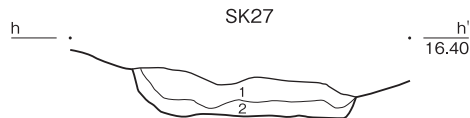
SP80

層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性
2	暗褐色土	ローム土、黒ボク土	あり	あり



SK23

層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性
1	暗褐色土	ローム土、黒ボク土	あり	あり



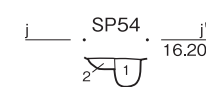
SK27

層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性
1	暗褐色土	ローム土、黒ボク土	あり	あり
2	茶褐色土	ローム土、黒ボク土	あり	あり



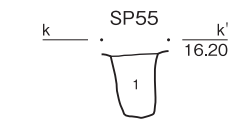
SK37

層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性
1	暗褐色土	ローム土、黒ボク土、炭化物	あり	あり



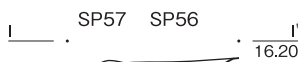
SP54

層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性
1	茶褐色土	ローム土、黒ボク土	あり	あり
2	褐色土	ローム土、黒ボク土	あり	あり



SP55

層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性
1	黒褐色土	ローム土、黒ボク土	あり	あり

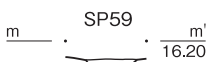


SP56

層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性
1	褐色土	ローム土、黒ボク土	あり	あり

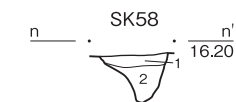
SP57

層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性
2	茶褐色土	ローム土、黒ボク土	あり	あり



SP59

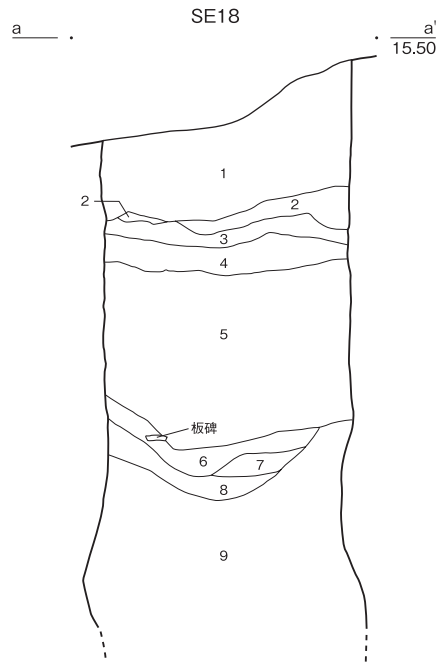
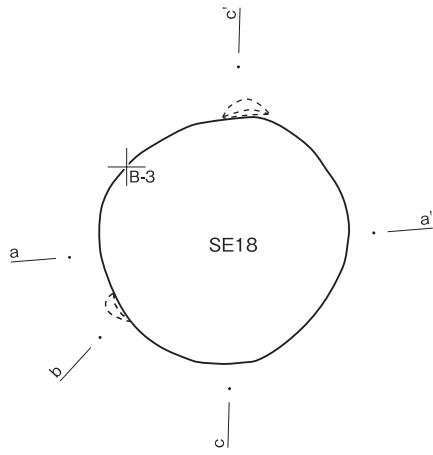
層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性
1	褐色土	ローム土、黒ボク土	あり	あり



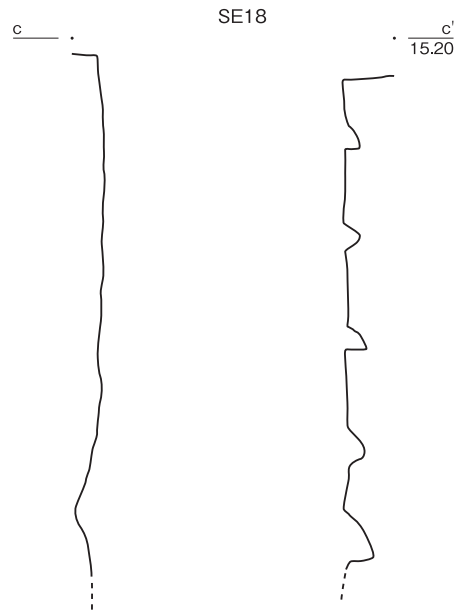
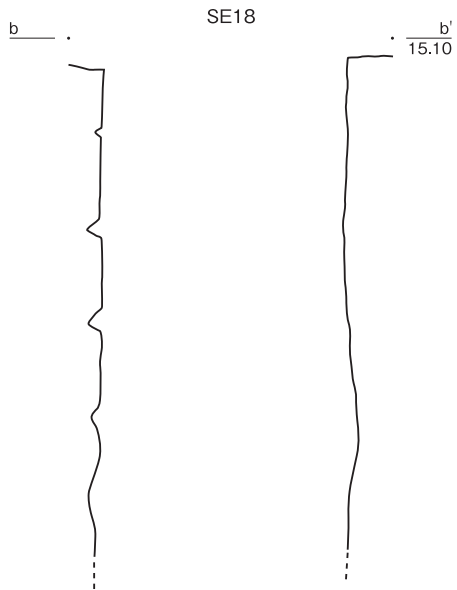
SK58

層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性
1	暗褐色土	ローム土、黒ボク土	あり	あり
2	褐色土	ローム土、黒ボク土	あり	あり

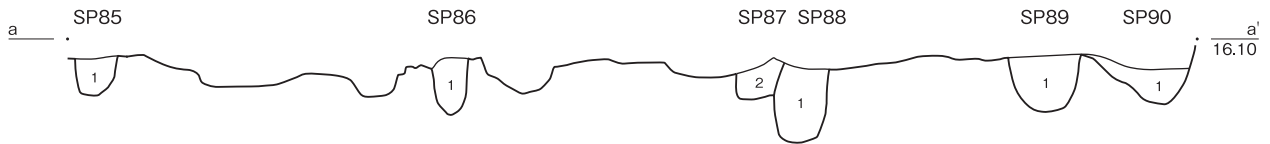
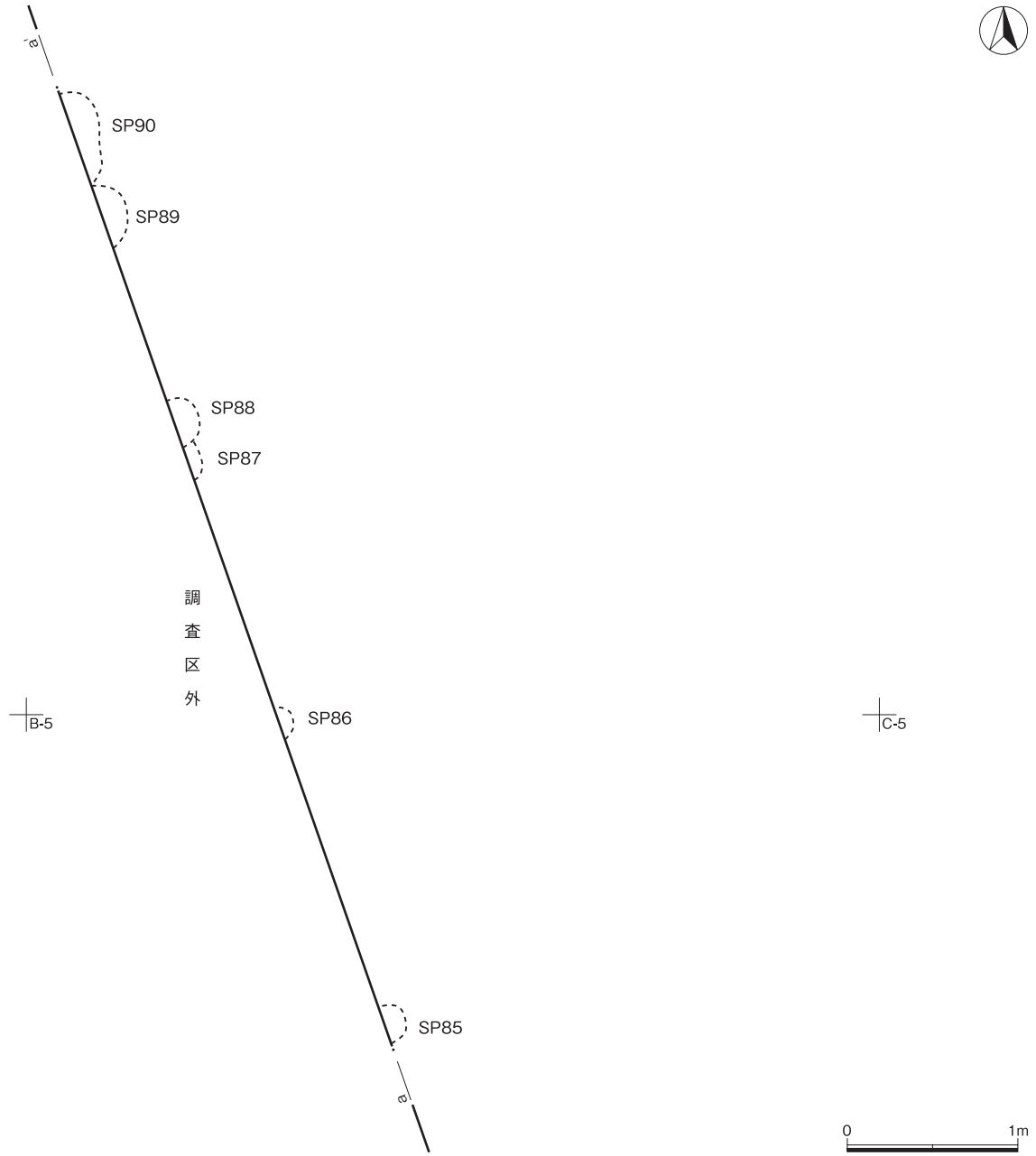
V-7図 SB13. SK16. SP17. SK19. SD21. SP22. SK23. SK27. SK37. SP54. SP55. SP56. SP57. SK58. SP59. SP80



SE18 層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性	備考
1	暗褐色土	ローム土、黒ボク土、焼土	あり	あり	
2	茶褐色土	ローム土、黒ボク土	あり	あり	
3	暗灰色土	黒ボク土、灰色粘土、焼土	あり	あり	
4	暗灰色土	黒ボク土、灰色粘土	あり	あり	
5	暗褐色土	ローム土、黒ボク土、焼土	あり	あり	
6	暗灰色土	灰、炭化物、焼土	あり	あり	板碑
7	黒灰色土	灰、炭化物、焼土	あり	あり	
8	黒色土	灰、炭化物	あり	あり	
9	暗褐色土	ローム土、黒ボク土、焼土	あり	あり	



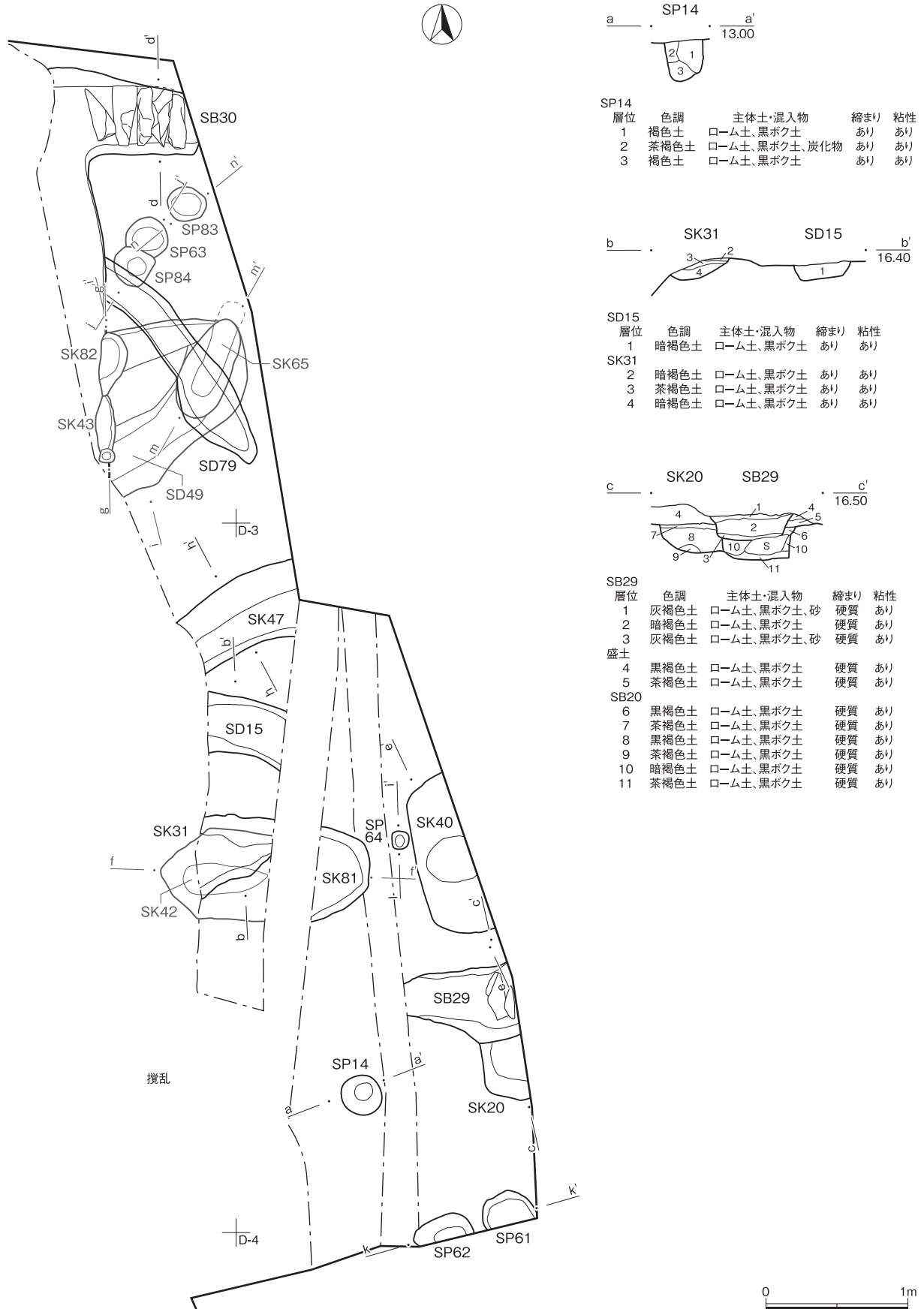
V-8☒ SE18



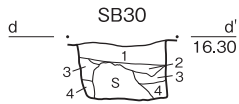
SP85, SP86, SP88, SP89, SP90

層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性
1	茶褐色土	ローム土、黒ボク土	あり	あり
2	明褐色土	ローム土、黒ボク土	あり	あり

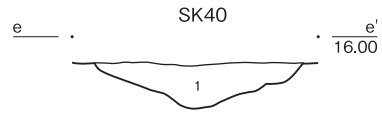
V-9図 SP85. SP86. SP87. SP88. SP89. SP90



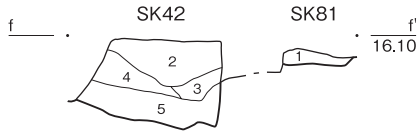
V-10図 C-2, C-3, D-3grid



層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性
1	茶褐色土	ローム土、黒ボク土	硬質	あり
2	黄褐色土	ローム土、砂	硬質	あり
3	暗褐色土	ローム土、黒ボク土	あり	あり
4	茶褐色土	ローム土、黒ボク土	あり	あり



層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性
1	黒褐色土	ローム土、黒ボク土	あり	あり



層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性
1	黒褐色土	ローム土、黒ボク土、炭化物	あり	あり

層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性
2	黒褐色土	ローム土、黒ボク土、炭化物	あり	あり
3	褐色土	ローム土、黒ボク土、炭化物	あり	あり
4	茶褐色土	ローム土、黒ボク土	あり	あり
5	明褐色土	ローム土、黒ボク土	あり	あり



層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性
1	黒褐色土	ローム土、黒ボク土	あり	あり
2	茶褐色土	ローム土、黒ボク土、炭化物	あり	あり

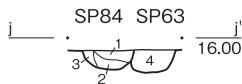
層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性
3	黒色土	黒ボク土	あり	あり
4	褐色土	ローム土、黒ボク土、焼土	あり	あり
5	茶褐色土	ローム土、黒ボク土、炭化物	あり	あり



層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性
1	褐色土	ローム土、黒ボク土、炭化物	あり	あり
2	茶褐色土	ローム土、黒ボク土	あり	あり



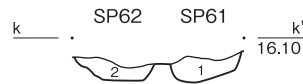
層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性
1	暗褐色土	ローム土、黒ボク土	あり	あり
2	褐色土	ローム土、黒ボク土	あり	あり
3	茶褐色土	ローム土、黒ボク土	なし	あり



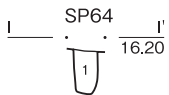
層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性
1	暗褐色土	ローム土、黒ボク土	よく締まる	あり
2	茶褐色土	ローム土、黒ボク土	よく締まる	あり
3	暗褐色土	ローム土、黒ボク土	よく締まる	あり

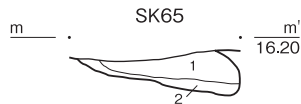
層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性
4	暗褐色土	ローム土、黒ボク土	あり	あり



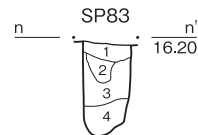
層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性
1	褐色土	ローム土、黒ボク土	あり	あり
2	褐色土	ローム土、黒ボク土	あり	あり



層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性
1	褐色土	ローム土、黒ボク土	あり	あり



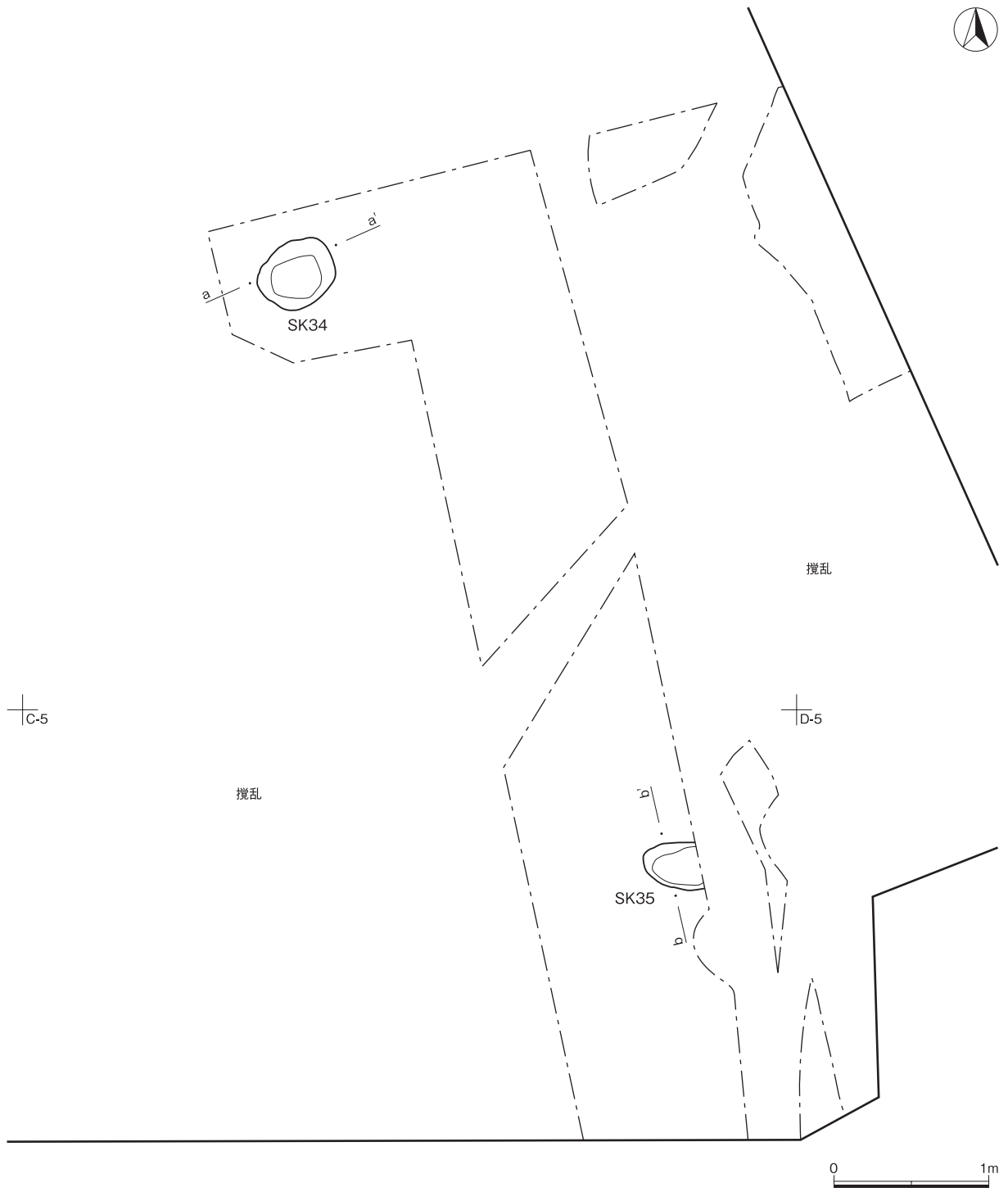
層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性
1	暗褐色土	ローム土、黒ボク土	あり	あり
2	茶褐色土	ローム土、黒ボク土	あり	あり



層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性
1	暗褐色土	ローム土、黒ボク土	あり	あり
2	黒色	黒ボク土、炭化物	あり	あり
3	茶褐色土	ローム土、黒ボク土	あり	あり
4	黒色	黒ボク土	あり	あり

V-11 図 SB30. SK40. SK42. SK43. SK47. SD49. SP61. SP62. SP63. SP64. SK65. SK81. SK82. SP83. SP84





SK34				
層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性
1	暗褐色土	ローム土、黒ボク土	あり	あり



SK35				
層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性
1	茶褐色土	ローム土、黒ボク土	あり	あり

V-12図 SK34. SK35

## 第5節 遺物

### (1) 陶磁器類

本地点からはコンテナ総数、約9箱の遺物（磁器・陶器・土器・その他）が出土している。磁器・陶器・土器の分類基準は「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類（1）」（東京大学埋蔵文化財調査室1999）を参照している。遺跡における分類は数量分析により様々な文化・時代の様相を浮かび上がらせる手段である。そのためにはある一定以上の数量（便宜的に推定個体数100個体以上）を必要とするが、本地点においては全体的に遺物量が少なかったため、推定個体数100個体以上の遺物量を有する遺構が無く分析することができなかつた。数量分析ができなかつたため、大まかな年代観を出し検証した。

本地点は水戸藩駒込邸（中屋敷）のあった区域で、まとまった遺物が検出されている遺構はSE18の井戸のみである。水戸藩邸以降、明治9（1876）年から明治21（1888）年に射的場、および隣接地、その後、昭和16（1941）年まで浅野公爵別邸と隣接する住宅地、昭和23（1948）年までに東京大学敷地となった場所である。表土の遺物は住宅地であった頃のものが多く含まれているものと思われる。

本地点SE18以降、本地点以外からも水戸藩駒込邸（中屋敷）と思われる遺構からのまとまった遺物の出土は見られなくなる。今回の5地点のみの調査ではあまりにも狭い範囲ではあるが、この時期以降、あまり邸内での生活空間としての土地利用が活発に行われていなかったのではないだろうか。

#### SE18（V-13～15図）

井戸からの検出である。遺物量は少ないが染付碗で絵付け・作りの粗雑な碗のJB-1-gが検出されており上限が東大編年Va期（1710～1720年代）に相当する遺物群であると考えられる。その前段階とされている丹波系播鉢（TK-29）。板作り成形で3ピース。「御壺塩師堺湊伊織」の刻印が施されている塩壺（DZ-51-f）が検出されている。

1～4は肥前系磁器である。1は染付碗で絵付け・作りの粗雑な碗のJB-1-gに分類される。外面には草本文。底部から高台際にかけて圏線が3本巡っている。高台内には圏線の内側に「大明年製」の銘がある。2は染付の丸型坏でJB-6-aに分類される。外面にはコンニャク印判で文様が施されている。底部から高台際にかけて圏線が3本巡っている。高台内には1本の圏線が巡っている。3は青磁で高台内蛇ノ目釉剥ぎの鉢でJB-5-cに分類される。内面には陰刻で模様が施されている。底部は蛇ノ目が高台畳付けより僅かしか上がっておらず、蛇ノ目凹形高台により近い形態である。4は染付の水滴である。貝と蟹をモチーフとしている。

5～8は陶器である。5は肥前系陶器。刷毛目丸碗で内面が渦巻き状の刷毛目。TB-1-dに分類される。胎土は黒褐色。6は瀬戸・美濃系鬚水入れてTC-25に分類される。灰釉が施され無文。7は瀬戸・美濃系播鉢。TC-29に分類される。全面に鉄釉が掛けられている。口縁部は外側に折り返され、口縁部内側には明瞭な稜を有す。播目は13条1単位で施される。底裏には右回転糸切痕が見られる。胎土には黒色の鉄分が多く見られ、赤津の製品と思われる。見込みとその周辺部には摩滅の痕が見られる。8は丹波系播鉢でTK-29に分類される。無釉。口縁部は縁帯状を呈す。外面は粗くナデ調整される。播目は7条1単位で施される。

9、10は土器である。9は底裏に左回転糸切り痕がある皿でDZ-2-bに分類される。胎土は鈍い橙色を呈す。口縁部にはススが付着する。体部はまっすぐに斜めに立ち上がり中央に段を持つ、口縁端部はやや内傾する。内面立ち上がり際に窪みがみられ、見込みは中心部を除きややふくらみを持つ。10は板作り成形の塩壺である。3ピース。「御壺塩師堺湊伊織」の刻印が施されている。DZ-51-fに分類される。

11は土製の西行の人形でDZ-60-aに分類される。成形方法は二枚の型による型押し成形の底部開口型で、器壁の厚いタイプである。貼り合わせたのち内部を工具でナデ調整している。全体に銀色の付着物が観察される。銀色の付着物は白雲母と思われ、型取りをする際型離れをよくするためのもので型で製作される人形や泥面子等に使用される。西行の人形はやや型抜きはあまいが、東大編年IV a期に比定される医学部附属病院中央診療棟地点のF34-11から出土した西行と酷似している。

12～14は金属製品である。12は銅製品の手柄である。中に折れた刃部がそのまま残存している。表面には斜めの線彫りが施されている。13は煙管の雁首。火皿高は高く腰の張らない碗型である。脂返しは大きく湾曲している。継ぎ目の蠟付けは左側である。小口は欠損している。14は鉄製品。片端は丸くおりまげられ環状になっており、もう一方はやや細くなって終わっている。

15、16は瓦である。15は軒丸瓦。連珠のある三つ巴文。表裏面は被熱によるものだろうか部分的に黒い炭状の付着物がある。周縁の一部に長方形に白く抜ける部分があり、重ね焼きの痕跡と推察される。表裏面は黒、胎土は灰色を呈する。16は破片だが特徴的な資料であると判断し取り上げる。軒棧瓦と推察されるが軒平部のみで軒丸部が欠損しており、軒平瓦の可能性が残る。屈曲が弱くほとんど直線をなす。加藤氏の言う江戸式の範疇に収まるものと考えられ、中心飾りはI、蔓はIあるいはHに分類されるが小破片のため判然としない。金子氏の分類のうちA-012類に近似する。子葉は残存せず分類出来ない。細い凸線により中心飾りと蔓を表現している。瓦当紋様から年代を特定するのは困難だが、色調、紋様構成とも他の出土瓦資料と異質であり、また風化が進んでいることから古式に位置付けられる可能性もある。紋様区内には若干雲母が認められる。表面は灰褐色、胎土は灰色を呈する。

17は板碑である。中世に盛んに作られ、16世紀末から17世紀初頭に掛けて作られなくなる。緑色片岩。板状に薄く割れ、青みがかった色をしている。武蔵型板碑。横幅14cmで小形。阿弥陀如来（キリーク）を表す種字とその下に蓮座、蓮座の下部には法名や紀年銘を著すと思われる文字の一部が残っている。頭部には二条線が刻まれる。線は細い1本の線で表されている。線の間は約15mm。頭頂部および下半欠損。裏面には幅約10mmの鑿を横方向に使った成形痕が残る。板碑は、江戸時代に入り、石材として2次利用されることも多い。

本井戸はAFL地点（巻頭例言を参照）SE8の井戸よりやや西側に位置する。肥前系磁器の染付碗で絵付け・作りの粗雑な碗（JB-1-g）、播り鉢、西行の土人形など生活に即した遺物が検出されている。文政9（1826）年の『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』（巻頭図版参照）によると、水戸藩駒込邸（中屋敷）の長屋・建物のある区域に位置する。遺構の推定年代と絵図との間に年代的隔たりがあるが、同じような土地利用がされていたとすれば長屋や役所などから廃棄されたのかもしれない。AFL地点SE8の井戸からは良質の陶磁器が検出されており、殿舎などからの廃棄も考えられる。異なる様相が見られ興味深い。

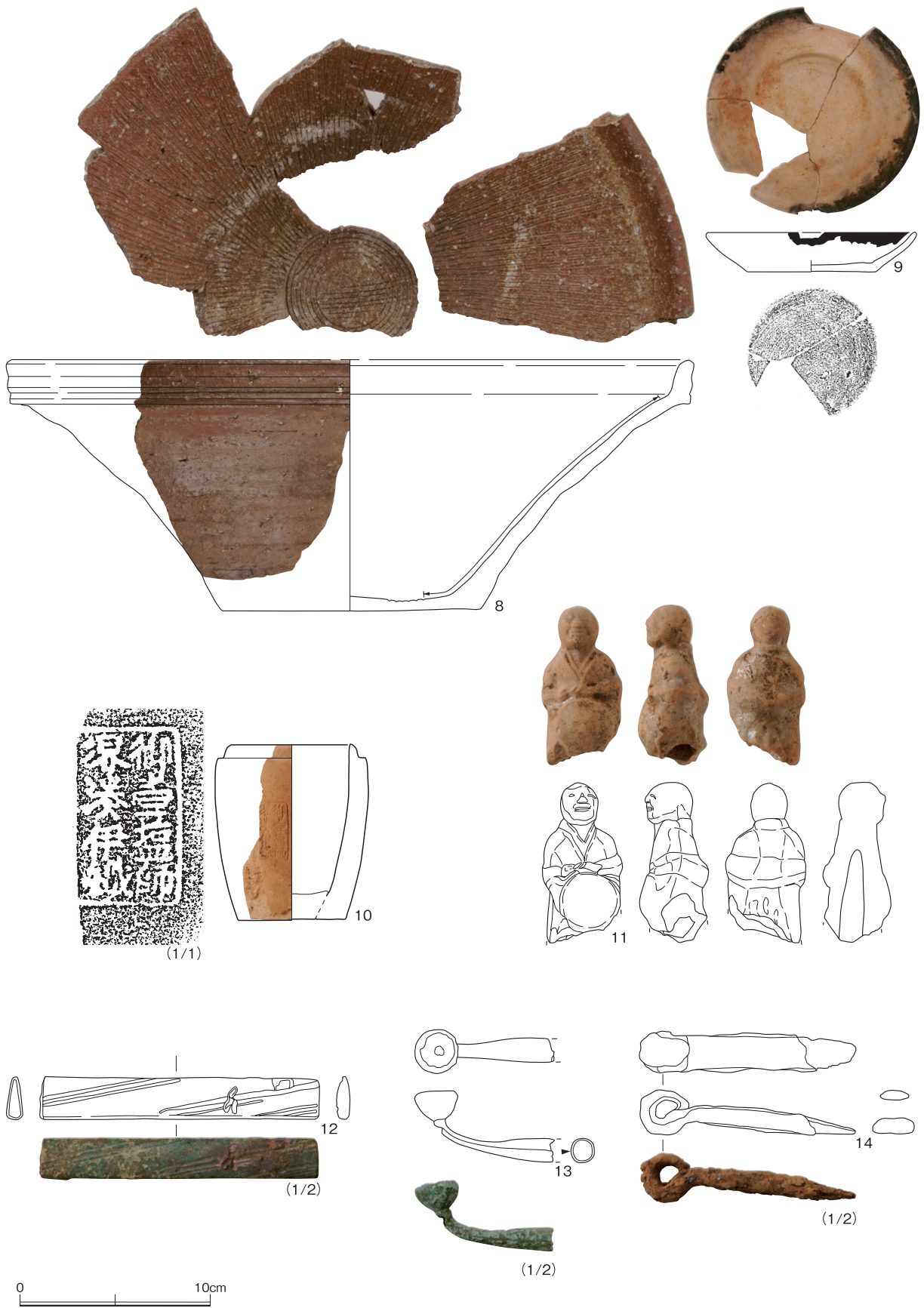
#### 表土（V-15図）

1～4はガラスである。1は上から見ると対角線上に成形の型痕が見られる。型痕は口唇部から下約1cmところまでで、口縁部には型痕は見られない。色調は無色透明でしわや気泡が見られる。堀越

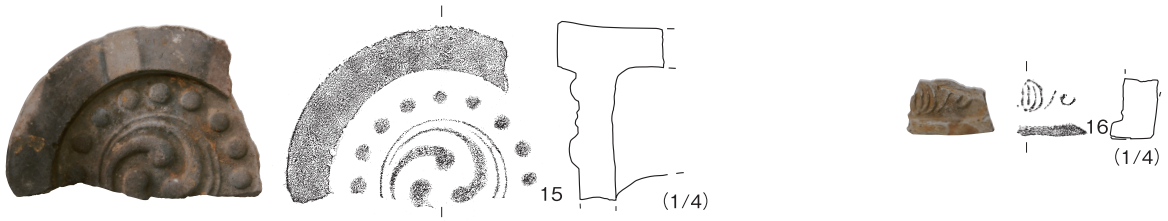
二八堂から売り出された「ホーカー液」の瓶。大正時代に大々的に売り出し、家族で使える万人向けの肌荒れ・日焼け止・美白の効用をうたっている家庭用化粧水である。仙台日日新聞 大正4年8月14日の広告欄には「坊やにホーカー液」と掲載されている。また、「婦人之友」の広告に載っており、大正二年には「大80銭・小25銭。」となっている。大正3年には「小25銭・中40銭・家庭用大80銭」となっており、新たに中が発売され、瓶の大きさが3種類あることがわかる。瓶の表には「ホーカー液」以外に店名の「堀越」、底部中央には円い窪みが施され「4」の陽刻（エンボス）が見られる。他の遺跡から検出された瓶を調べたところ底部の数字は「1」、「2」、「3」、「4」、「5」、「8」、「14」を確認できた。古い新聞を確認したところ東京・仙台・奈良・熊本と全国的に広告が確認され、大正4年～14年の間に掲載されているのが確認された。明治後期から大正に掛けて様々な化粧品会社が観劇に無料招待したり、粗品として配ったり、販売拡大のために工夫を凝らしているのが広告でも確認することができる。ホーカーでも「ホーカーデー」を作り自社製品を無料配布していた。ホーカー液の瓶が報告されている遺跡は汐留遺跡・巣鴨遺跡・染井遺跡・東池袋I遺跡・千駄ヶ谷五丁目遺跡などである。2は上から見ると対角線上に成形の型痕が見られる。型痕は口唇部から下約8mmのところまでで、口縁部には型痕は見られない。色調は透明でやや緑がかっており細かい気泡が見られる。底部は縁にしわが見られる。底部中央には円い窪みが施されているが、陽刻（エンボス）などはない。インク瓶。3は左右に成形の型痕が見られる。型痕は口唇部から下約8mmのところまでで、口縁部とは別作りになっており、口縁部にも左右に成形の型痕が見られる。色調は黄褐色。底部には陽刻（エンボス）が見られる。薬瓶であろうか。4小型の長頸瓶である。色調は無色透明。底が厚い。



V-13図 SE18(1) 出土遺物



V-14図 SE18(2) 出土遺物



SE18(3)



V-15図 SE18(3).表土 出土遺物

## (2) 動物遺体

動物遺体は表土からアカニシ1点が出土したのみである。殻高125mm±で、殻柱と外唇部分のみが残存する。



V-16図 工学部風環境シミュレーション風洞実験室地点表土アカニシ



## 第6節 工学部風環境シミュレーション風洞実験室地点の成果

工学部環境シミュレーション風洞実験室地点は、大型構造物実験施設による攪乱、調査地点周辺で行われた明治時代以降の削平が確認された。検出遺構は、江戸時代の井戸、明治時代以降と考えられる植栽痕、礎石列、溝状遺構、東京大学関連遺構等である。中世から明治時代の土地利用状況を調査地点の周辺部分も含めて検討する。

### (1) 中世

江戸時代の井戸SE18から板碑の破片が出土した。隣接する工学部風工学実験室地点のSX15では、16世紀中頃以降に焼成された在地系土器の皿が出土した。SE18は江戸時代の遺構、SX15の遺構性格は不明である。水戸藩駒込邸関連文書に、駒込邸に「願行寺」があり「願行山」に「應永二十三年八月四日」銘の古碑（註1）、石棺から古骨、刀、鐵の筒が出土した「片岡八郎の墳」（註2）、「内大山」と呼ばれる塚（註3）があったとされる。また、徳川齊昭建立の「向岡紀」碑の碑文には、源義家（八幡太郎義家）が前九年の役（安部頼時との戦い、1051年）後三年の役（清原武衡との戦い、1085年）の際、鎧をかけたと言われる老松が向ヶ岡にあったという。現在のところ浅野地区と弥生地区、周辺の住宅地で建物跡や「願行山」「片岡八郎の墳」「内大山」に関連する遺構は確認されていないが、駒込邸関連文書から、少なくとも江戸時代まではこれらの遺蹟が残されていたと考えられる。出土遺物は少ないが、文書に記述された中世の遺蹟との関連が考えられる。

### (2) 江戸時代

文政9（1826）年の『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』には藩邸内を北西から南西へ横断する道が描かれている。この道は、農学部総合研究棟地点01SR1（東京大学埋蔵文化財調査室2004）、工学部風工学実験室地点の道SR6、SR9、工学部武田先端知ビル地点SR1-1・2（VI章参照）がこの道に該当する。道の西側が「長屋と役所の区域」（西側台地 1-1・1-2支谷・2）、東側が「殿舎（御殿）の区域」（東側台地 4・5）にあたる。藩邸の南側、「長屋と役所の区域」と「殿舎（御殿）の区域」に挟まれた支谷 3支谷 は「切手御門」から「殿舎（御殿）の区域」に至る道と庭園を兼ねた区域である。当地点は支谷 3支谷 に該当する（I-9図）。『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』では、「殿舎（御殿）の区域」に至る道と庭園を兼ねた区域に該当することから「長屋と役所の区域」とは異なり、地下室などの遺構は分布していなかったと考えられる。

#### 殿舎（御殿）の位置と調査地点

「殿舎（御殿）の区域」と「長屋と役所の区域」について、景観に関する記述と『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』から検討する。福田耕二郎は『水戸の彰考館—学問と成果—』で、徳川光圀が明暦3（1657）年の明暦の大火で、小石川邸を焼け出され駒込邸に避難したことについて、

「さて夫人が小石川の八垣こむる新室にお住みになられて三年たつた正月にお屋敷が全焼してしまいました。これは有名な明暦の大火で類焼したので父君威公はじめ、義公に伴はれて、駒込の別荘にお移りになりました。ここは木立古り、淋しい田舎の山荘であつたのであります。あの「大日本史」もここ

で編纂が始められたのであります。何しろ急に大勢が移って来たので、いかにも手ぜまになり、小石川の御殿の本建築もすぐには完成しないので、急に焼小屋が作られたりしましたが、やがて見晴らしの良い高台に書楼が新築されました。夫人のお住まいは低いところで、眺望も悪く夏などはやみやみした感じがしました。そこへ義公から新築された高殿へ登つて八月十五夜の月をご一緒に眺めようといふお誘いがありました。夫人もその日の来るのを楽しみにしてをられました。生憎夫人は病気になられて、果し得なかつたのであります。義公も残念に思召し、是もまたこゝろつくしのくまなれや名におふ月を君としみねば義公という歌を詠まれて見舞はれました。これにこたへてはれやらぬこゝろのやみはかきくれたわが身にひとつくもる月かな 夫人といふご心情を訴へられてゐます。その後全快されたので、義公とともに心ゆくまで、高樓に登り、眺望をほしいまにされました。」(註4)と記述されている。

また、徳川光圀の記録である『桃源遺事』に

「武州駒込の御別荘よりしのはすの池を見渡し風色面白かりけるに、それより御覧のため、其趣を御門主へ御願ひありて、東叡山の麓に桃多く御植させ御遠望なされ候」(註5)と記述されている。

これらの記述から、殿舎(御殿)は不忍池が眺望できる高台にあったことがわかる。『明治16年陸軍参謀本部測量元図』から不忍池の眺望を検討し、前述の文書の景観を考慮して御殿(殿舎)の位置を検討した結果、御殿(殿舎)は現在の浅野地区にあったと推定した。また、『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』の東側台地 5に「長局」と記述されていることと齊昭が建立した「向岡記」碑から、浅野地区に御殿(殿舎)があったと推定した。光圀と齊昭の景観の記述と絵図には年代差があるが、殿舎(御殿)は継続して駒込邸の東側の高台にあったと考えられる。

検出した江戸時代の遺構は井戸SE18、1基である。『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』以前の土地利用状況を示すと考えられる遺構であるが、明治時代の削平と大型構造物実験施設の攪乱によって他の遺構を確認することができなかつたため、土地利用状況を明らかにすることができなかつた。

### (3) 明治時代以降

調査地点は、明治9(1876)年に建設が開始された射的場と東京府用地の地境付近に位置する。調査地点では射的場と東京府用地に比定できる遺構は検出していない。射的場移転後の調査地点は浅野家の敷地で、『向ヶ岡彌生町二・三番地略圖』(昭和11(1936)年3月弥生町会事務所作成)によれば「三に-三」「三に-四」「三に-五」内にあり、検出した柱穴列、植栽痕は住宅地に関連する遺構と考えられる。調査地点の西側、現在の東京大学浅野地区の地境の塀に沿って柱穴列を検出した。旧住宅地と現在の東京大学の地境は重なるため、この柱穴列は住宅地の地境か東京大学の地境であるか明確にすることができなかつた。

#### 註

- 1 国立国会図書館蔵『楓軒年録』天宝八丁酉四 五十
- 2 文京区 1985 「第二編 本郷通史 第四章 江戸氏時代の本郷 片岡八郎の墳」『本郷区史1937 復刻版』pp.44 - 48
- 3 文京区 1968 「Ⅲ武家生活の展開と文化 一武家地の大勢 2武家地の整備 水戸家別邸の縄張り」『文京区史巻二』p.303
- 4 福田耕二郎 1991 『水戸の彰考館 一学問と成果一』水戸史学選書pp.143 - 149
- 5 千葉新治編 1909 「桃源遺事」『義公叢書』国会図書館蔵所収p.197

報告書抄録

ふりがな	とうきょうだいがくほんごうこうないのいせき あさのちく1 じょうほうきばんせんたーへんでんしつ1ちてん・こうがくぶかぜこうがくじっけんしつちてん・こうがくぶかぜこうがくじっけんしつししょうけーぶるちてん・こうがくぶかぜかんきょうしみゆれーしょんふうどうじっけんしつちてん・こうがくぶたけだせんたんちびるちてん							
書名	東京大学本郷構内の遺跡 浅野地区 I 情報基盤センター 変電室 1 地点・工学部風工学実験室地点・工学部風工学実験室支障ケーブル地点・工学部風環境シミュレーション風洞実験室地点・工学部武田先端知ビル地点							
副書名								
巻次								
シリーズ名	東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書							
シリーズ番号	9							
編著者名	原祐一（編）、大貫浩子、阿部常樹、石井龍太							
編集機関	東京大学埋蔵文化財調査室	所在地	〒153-8904 東京都目黒区駒場4-6-1 駒場リサーチキャンパス内 03-5452-5103					
発行機関	東京大学埋蔵文化財調査室	所在地	〒153-8904 東京都目黒区駒場4-6-1 駒場リサーチキャンパス内 03-5452-5103					
発行年月日	平成21年12月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
とうきょうだいがくほんごうこうない 東京大学本郷構内 の遺跡 浅野地区 (本郷台遺跡群・ 弥生町遺跡群) 工学部風環境シミュレーション風洞 実験室地点	とうきょうと 東京都 ぶんきょうく 文京区 やよいちよう ちよ 弥生町2丁 うめ ばん 目11番16 ごう 号	13105	47 . 28	35° 42' 57" ~ 35° 42' 58"	139° 45' 45" ~ 139° 45' 46"	平成11年1 月7日~1月 25日	300㎡	事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
東京大学本郷構内 の遺跡 浅野地区 (本郷台遺跡群・ 弥生町遺跡群) 工学部風環境シミュレーション風 洞実験室地点	武家屋敷 (水戸藩 駒込邸)、 射的場	中世、近世、 近代	建物跡、溝、井戸、土 坑、小穴	板碑、陶磁器、土器、 金属製品、ガラス製 品、瓦				



東京大学本郷構内の遺跡

浅野地区 I

工学部武田先端知ビル地点

2009

東京大学埋蔵文化財調査室

## 例 言

1. 本報告は、工学部武田先端知ビル新営に伴う発掘調査報告書である。
2. 各調査地点は文京区弥生2丁目11番16号、東京大学浅野地区に位置している。
3. 遺跡略号は「TS」である。
4. 本地点は東京都遺跡地図では「文京区No.47 本郷台遺跡群」および「文京区No.28 弥生町遺跡群」内に位置している。
5. 調査面積は300㎡である。
6. 調査は平面直角座標系を基準とした5m×5mのグリッドを設定し、北西隅を基準（A1）に東へアルファベット、南にアラビア数字を降順で付している。A1の座標値は平面直角座標IX系でX = -31494.4360、Y = -6348.1388（世界測地系）である。
7. 発掘調査は、東大埋蔵文化財調査室が行い、発掘調査は原祐一が調査を担当した。
8. 調査期間は以下の通りである。
  - 試掘調査 1998年12月22日～12月23日
  - 事前調査 2001年6月4日～8月7日、2001年11月28日～12月28日
  - 追加調査及び方形周溝墓の移築 2002年1月7日～1月25日
  - 整理事業 2007年5月～2009年2月（複数遺跡の整理を並行して実施しているため、この期間に継続して作業を行った。）
  - 報告書編集 2008年3月～5月
9. 本書の編集は、原祐一、堀内秀樹、香取祐一を中心に執筆者と協議の上行った。
10. 遺構の浄書、デジタル化は、香取祐一、田中美奈子が行った。
11. 遺物の実測は、今井雅子、大貫浩子、坂野貞子、加藤理香が行い、実測図の浄書とデジタル化は、加藤理香、山田くりかが行った。
12. 弥生土器の整理事業は森本幹彦（現福岡市教育委員会文化財部）が行った。
13. 遺物の写真撮影は青山正昭が行った。
14. 本地点検出の方形周溝墓の移築保存、本地点と工学部風工学実験室支障ケーブル地点から出土した弥生土器の保存修復は、武蔵野文化財修復研究所、府中工房に依頼した。
15. 本地点の土壌分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
16. 各遺物の分析は、陶磁器類については大貫浩子、人形・玩具については安芸穂子、瓦については石井龍太（東京大学大学院考古学研究室）、ガラス製品については小林照子、金属製品については原祐一、動物遺体については阿部常樹（現國學院大學研究開発推進機構共同研究員）、野々村海が行った。
17. 水戸藩駒込邸関連文書、警視庁射的場関連文書、青木家文書（文京区弥生在住、青木誠氏蔵）の調査は原祐一が行った。
18. 方形周溝墓出土ガラス小玉、明治時代の弾丸の材質分析は、小泉好延（武蔵野文化財修復研究所）、原祐一が、東京大学大学院工学系研究科原子力国際専攻タンDEM加速器研究施設のPIXE分析法（荷電粒子励起X線分析Particle Induced X-ray Emission）によって行った。本報告の成果は、東大MALT平成13年度下半期共同利用採択課題14 E 02（研究代表者 原祐一、共同研究者 中野忠一郎、松崎浩之）等の成果である。

19. 執筆分担は以下の通りである。

第1節 原 祐一

第2節 原 祐一

第3節 原 祐一

第4節 - (1) 原 祐一

第4節 - (2) 原 祐一

第5節 安芸毬子、石井龍太、大貫浩子、小林照子、原 祐一

第6節 阿部常樹

第6節 原 祐一

第7節 パリノ・サーヴェイ株式会社

20. 発掘調査に伴う図面、写真、出土遺物は東京大学埋蔵文化財調査室が駒場リサーチキャンパス（東京都目黒区駒場4-6-1）、東京大学工学部工学系研究科柿岡教育研究施設（茨城県石岡市柿岡414）において、運用、保存、管理している。

整理作業参加者

青山正昭 安芸毬子 池田奈津子 今井雅子 大貫浩子 加藤理香 香取祐一 川原良子 坂野貞子  
田中美奈子 野々村海 野村遊 森本幹彦 山田くりか





## 第1節 調査に至る経緯

平成13(2001)年に東京大学大学院工学系研究科から埋蔵文化財調査室に、浅野地区大学院工学系研究科大形構造物試験機室跡地の武田先端知ビル新営に伴い、埋蔵文化財に関する照会があった。東京都教育委員会作成の遺跡地図によれば、弥生二丁目 根津一丁目の「弥生町遺跡群」(文京区28)、本郷七丁目 弥生二丁目の「本郷台遺跡群」(文京区47)内に位置し周知の遺跡として認知されている。「弥生町遺跡群」は、明治17(1884)年有坂鋁蔵らによって「弥生式土器」「弥生時代」の名称の由来となった弥生式土器が発見された本郷区向ヶ岡弥生町にちなんだ遺跡名である。浅野地区理学部3号館では旧石器時代の石器が出土し、工学部9号館東では弥生時代の環濠を検出した「弥生二丁目遺跡」は国指定史跡に指定されている。建設予定地が周知の遺跡内に位置すること、調査地点に隣接する工学部風工学実験室支障ケーブル地点(本郷No.30 平成7・8(1996・1997)年調査)では、方形周溝墓を検出していることから平成13(2001)年5月7日、試掘調査を行った。試掘調査の結果、大形構造物試験機室部分では遺跡が破壊されていたが南側に遺跡が残っていたことから、大形構造物試験機室部分を除いた建設予定地の埋蔵文化財の発掘調査を行うこと決定した。

## 第2節 調査の経過と方形周溝墓保存の経緯

発掘調査は、残土搬出の都合から740㎡の調査地点をA工区(TSA)、B工区(TSB)に分けて調査を行った。調査対象は、弥生時代の遺跡をはじめとする江戸時代以前の遺跡、水戸藩駒込邸関連遺跡はもちろんであるが、東京大学史の観点から明治時代以降の遺跡も調査対象とした。A工区の調査は、表土掘削を平成13(2001)年6月4～8日、調査を同年6月6日から7月3日まで行った。B工区の調査は、表土掘削を同年7月4～11日、同年7月4日から8月7日まで行った。遺物の乾燥は通常天日乾燥のため天候の影響、材質によっては乾燥時間に差がありすべての遺物が乾燥しないと収納箱に収められず洗浄作業が滞ることがあった。そこで乾燥には自然乾燥と温度調整ができるオープン併用し洗浄と乾燥の効率化を図った。その結果、洗浄作業は調査期間内ではほぼ終了した。B工区の調査では方形周溝墓を検出したが、1号方形周溝墓の周溝の一部が使用中の高圧電気ケーブルの下に続いており、調査ができなかったことから、高圧電気ケーブル撤去後再調査を行うことになった。また、方形周溝墓は出土した土器の形式から、弥生時代の由来となった土器に関わった弥生人との関連があると考えられたことから、大学側に現地保存を求めたが、建設予定の武田先端知ビルの構造上現地保存は不可能で設計変更はできないと回答があった。学内の考古学関係者には、工事が遅れる事を理由に方形周溝墓の保存に強く反対する意見があったが、そこで、弥生町会、近隣住民から保存の要望があったため、埋蔵文化財委員会が開かれ議論した結果、方形周溝墓の移築保存を行うことが決定された。追加調査はC工区(TSC)とし、同年11月28日から12月28日まで、追加調査と移築保存作業を行った。

### 第3節 地理的・歴史的環境

地理的環境については「I 遺跡周辺の諸環境」を参照されたい。江戸時代の調査地点は『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』によれば、水戸藩駒込邸の敷地を東西に区画する道と道の東側の敷地に該当する。明治9（1876）年から明治21（1888）年まで射的場敷地であった。明治7（1874）年上野に建設された警視局射的場で住宅地への被弾被害と、上野公園の開園と明治10（1877）年開催予定の勸業博覧会のため、明治9（1876）年演習を休止、上野の射的場の代替施設として弥生町射的場建設計画が出され、同年、向ヶ岡彌生町で建設を開始、明治10（1877）年1月から演習が開始される。射的場はフランス式で、射場は長さ300m、幅50m、地下を約10m以上掘削したプール状の施設で、掘削土を東側、北側、西側に盛り防護壁とし南側に「発射場」が建設された。射場内北側に的が置かれ、射場の周辺に関連施設が建設されている。『明治15年向ヶ岡射的場引受ノ件』（国立公文書館蔵）、『明治16年陸軍参謀本部測量原図』によれば、調査地点は射場の出入口と「監的所」が建設された窪地に該当する。

射的場は、現在の浅野地区と北側の住宅地が警視庁敷地、明治15（1882）年射的場が宮内省附属地となる。射的場は明治15（1882）年、皇宮省附属地のまま東京共同射的会社射的場となる。明治20（1887）年、警視庁用地に建設された弥生神社が芝公園に移転、明治21（1888）年東京共同射的会社が大森に移転し、警視庁用地と射的場跡地の大部分が浅野家敷地となる。射場は埋め立てられ、埋め土の不足を補うために周辺部の削平が行われた。『明治四十二年調家屋台帳』（青木家文書）と『向ヶ岡彌生町會二・三番地略圖』（青木家文）によれば、明治21（1888）年以降、調査地点は浅野地区部分が浅野侯爵邸と別邸と住宅地、調査地点以外は住宅地となる。浅野家は、昭和16（1883）年12月8日までこの地に居住、浅野家敷地は昭和23（1948）年までに東京大学敷地となり現在に至る。

『明治16年陸軍参謀本部測量元図』の標高は、射場の出入口を登った辺りで標高16m、射場の出入口（SR2）の検出標高は15mで1mの標高差があり、この標高差は射的場移転後の削平によって生じたと考えられる。調査地点北側では削平された面で、建物の基礎を検出した。明治16（1883）年の標高が現在の標高に近いことから、これらの遺構は射的場移に伴う造成（削平と埋め立て）後に構築された遺構と考えられる。

遺構の年代は、江戸時代射的場の建設が開始された明治9（1876）年から射的場が移転する明治21（1888）年、浅野家敷地と住宅地となる明治21（1888）年以降、東京大学敷地となる昭和23年以降に区分できる。

### 第4節 弥生時代

#### (1) 遺構

##### 1号方形周溝墓

1号方形周溝墓は主体部と単独の周溝1号-4、1号-2、1号-3、1号-1からなる。遺構の位置は埋没谷部分で、黒褐色土の堆積土の上に作られている。完掘写真では1号-4と1号-3が繋がっているように見えるが、方形周溝墓の検出前にこの部分にトレンチを設定したためである。両遺構とも

遺構の立ち上がりを確認していることから1号-4と1号-3は単独の周溝である。方形周溝墓の1号-4から主体部、1号-2断面の傾斜角度は6度で、主体部周辺が若干盛り上がっているように見え、盛土が行われたように見えるが1号方形周溝墓と2号方形周溝墓と土坑は、江戸時代から明治時代に造成されたと考えられるSR-2に削平されているため墓が造られた当時のままの傾斜と検出状況を示していない。SR1-2の埋土を掘削した方形周溝墓の検出面にはSR1-2の工事に関連したと考えられる轍が確認されている。弥生土器の出土は遺構検出面とそれほど深くない位置で出土し、周溝の深い位置からの出土はない。横たわって出土した土器の側面はすべて削り取られており、土器片が周溝周辺に散らばっていた。そのため、本来の位置からは動いていると考えた方が良いだろう。主体部では炭化物の14C年代測定を行ったが、炭化物は遺体の埋蔵後に何らかの理由で土壌に混入したものであったため、土器の年代を明確にすることができなかった。

#### 主体部 (SK186)

平面形は不整形、断面形は台形を呈する。長軸1.54m、短軸1.13m、深さ0.3mを測る。ガラス小玉24点(紺色22点、青色2点)、管玉4点が出土した。遺物番号1~19はドット上げを行った遺物で、20~28は一括遺物である。出土位置は北側に集中し、出土した深さは遺構検出面から0.15mより上層で検出した。遺構の覆土は主に土色とローム土の混入状況、黄褐色粒子と覆土の締まりと粘性によって分層を行った。覆土の締まりは6層はローム土が含まれ比較的硬く締まっていた。ガラス小玉と管玉の出土は遺物検出標高から概ね6層より上で出土した。ガラス小玉については、材質と発色材料について科学分析を行った。

#### 1号-4 (SD149)

断面形は台形で長軸3.59m、短軸1.07m、深さ0.67mを測る。切り合いは2号-2 (SD173) を切る。土器出土。

#### 1号-2 (SD172)

断面形は台形で長軸、短軸0.9m、深さ0.52mを測る。

#### 1号-3 (SD174)

断面形は台形で長軸3.2m、短軸0.74m、深さ0.39mを測る。土器出土

#### 1号-1 (SD181)

断面形は台形で長軸2.52m、短軸0.82m、深さ0.67mを測る。土器出土。

#### 2号方形周溝墓

##### 2号-1 (SD180)

断面形は台形で長軸3.5m、短軸0.9m、深さ0.34mを測る。切り合いはSD180 を切る。この周溝に対応する周溝は確認できなかった。

##### 2号-2 (SD173)

土坑で平面形は不整形、断面形は不整形である。長軸3.13m、短軸1.74m、深さ0.38mを測る。

## (2) 遺物

### 土器

1号方形周溝墓の周溝および北側包含層より弥生式土器が出土している。今回の報告では遺存度の高い個体4点を図示し、観察表を掲載した。いずれも幅広の複合口縁をもつ壺形土器で供献土器の可能性が高い。時期は弥生時代後期後半と考えられる。土器はいずれも底部を欠損しているが、意図的な穿孔や打ち欠きによるものなのか、近代の削平によって失われたものかは不明である。

周溝から出土した土器は周溝の上層から出土している。こうした土器に対する評価として、方形周溝墓の方台部に置かれていたものが転落したという考えがあるが、周溝がある程度埋まった段階で行われた祭祀で使用された土器が周溝に直接納められたという考えもある（註1）。本例も完形の状態で周溝上層に置かれたと考えられる土器が多いので、後者の解釈が自然であろう。

### ガラス小玉・管玉の材質分析

1号方形周溝墓主体部よりガラス小玉、管玉が出土した。土壌の掘削は、篋、刷毛などを用い、遺物の出土位置の確認を行い、掘削土は篩いにかけて遺物の確認を行った。これらの遺物は副葬品と考えられるが、人骨は確認できなかった。出土位置は主体部の北側0.5mの範囲、土層断面では3層にあたる部分に集中していた。ガラス小玉の色調と点数は、紺色（22点）と青色（2点）で、石製管玉は赤色（4点）が出土した。ガラス小玉の材質分析結果は、研究編 V 「東京大学浅野地区出土のガラス玉材質分析」を、詳細な観察については同IX 「武田先端知ビル出土のガラス小玉の観察」を参照されたい。

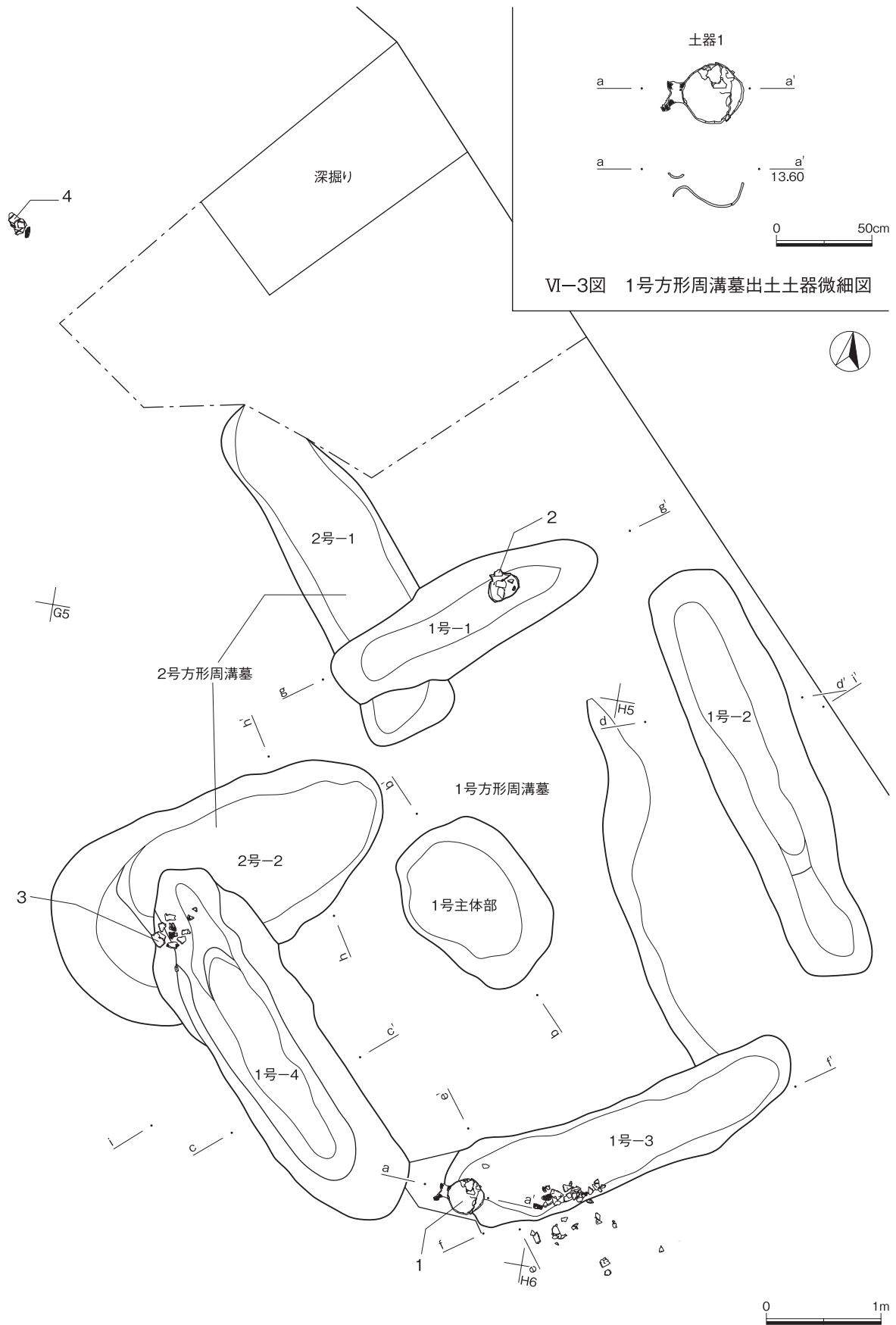
### 註

- 1 福田聖 1991 「方形周溝墓と儀礼－鍛冶谷、新田口遺跡12号方形周溝墓の死者儀礼」『埼玉県考古学論集設立10年記念論文集』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
立花実・秋田かな子 2000 「第3節 方形周溝墓の分析」『王子台遺跡 第三卷 弥生、古墳時代編』東海大学校地内遺跡調査団



VI-1図 全体図

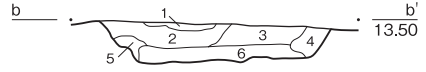
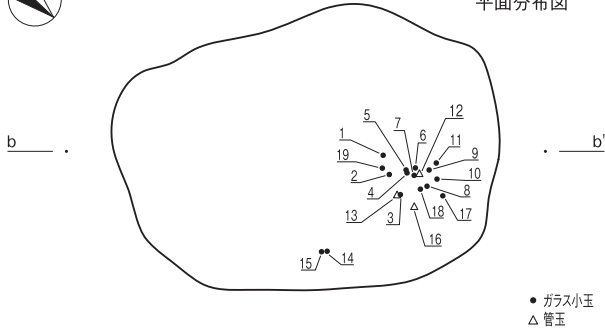




VI-2図 1号・2号方形周溝墓(1)

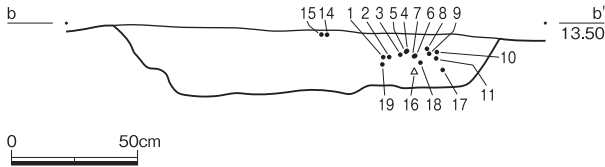


ビーズ・管玉  
平面分布図

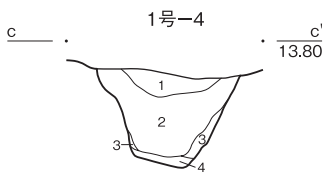


主体部 層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性
1	明褐色	黒ボク土、黄褐色粒子少量	なし	なし
2	暗褐色	黒ボク土、黄褐色粒子ほとんどなし	なし	あり
3	明褐色	黒ボク土、黄褐色粒子ほとんどなし	なし	あり
4	黒褐色	黒ボク土、黄褐色粒子少量	なし	あり
5	黒褐色	黒ボク土、黄褐色粒子少量	なし	あり
6	明褐色	ローム土、黄褐色粒子	あり	あり

ビーズ・管玉垂直分布図

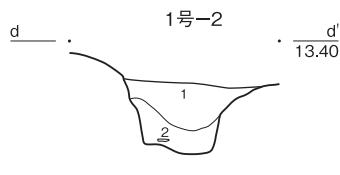


VI-4図 1号方形周溝墓 主体部



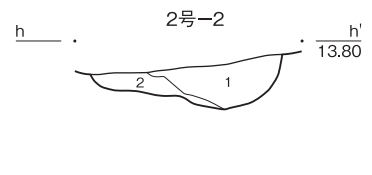
1号-4

層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性
1	黒色	黒ボク土	あり	あり
2	黒色	ローム土、黒ボク土	あり	あり
3	茶褐色	ローム土、黒ボク土	あり	あり
4	明褐色	ローム土、黒ボク土	あり	あり



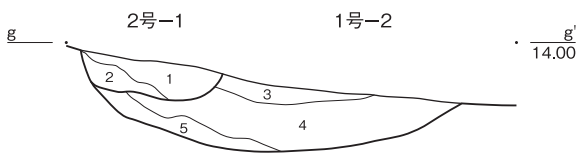
1号-2

層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性
1	黒色	黒ボク土	あり	あり
2	暗褐色	ローム土、黒ボク土	あり	あり



2号-2

層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性
1	黒色	黒ボク土	あり	なし
2	暗褐色	ローム土、黒ボク土	あり	あり

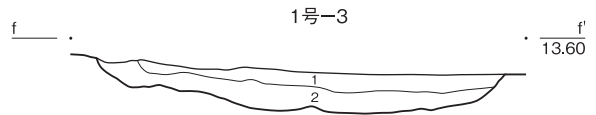
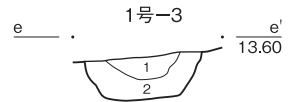


2号-1

層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性
1	黒褐色	ローム土、黒ボク土	あり	あり
2	褐色	ローム土、黒ボク土	あり	あり

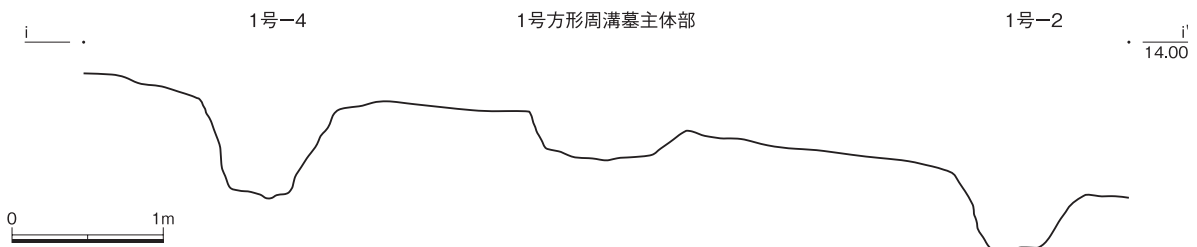
1号-2

層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性
3	黒色	ローム土、黒ボク土	あり	あり
4	暗褐色	ローム土、黒ボク土	あり	あり
5	茶褐色	ローム土(ブロック)、黒ボク土	あり	あり



1号-3

層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性
1	黒色	黒ボク土	あり	あり
2	黒色	ローム土、黒ボク土	あり	あり

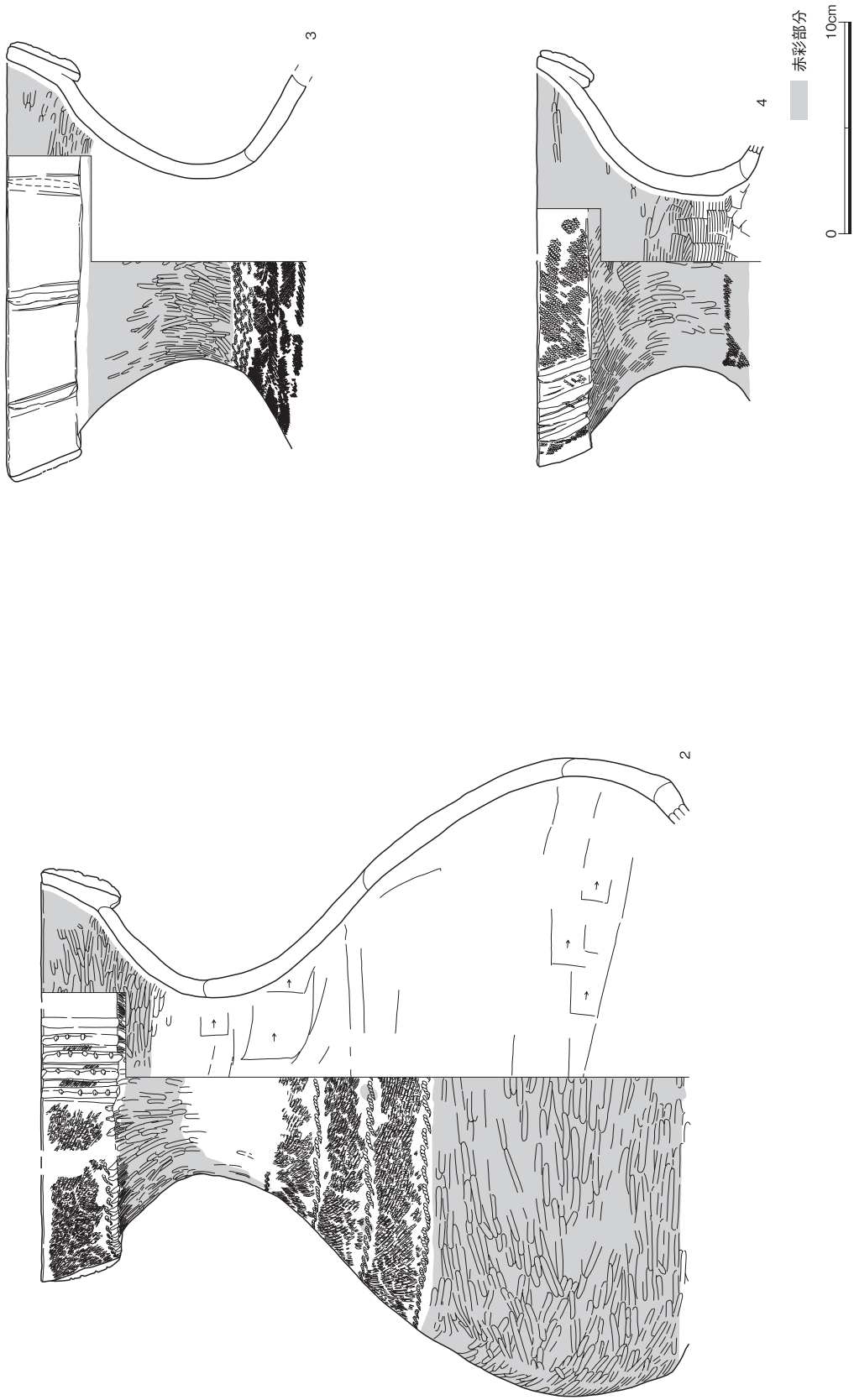


VI-5図 1号・2号方形周溝墓(2)





VI-6図 1号方形周溝墓(1) 出土土器

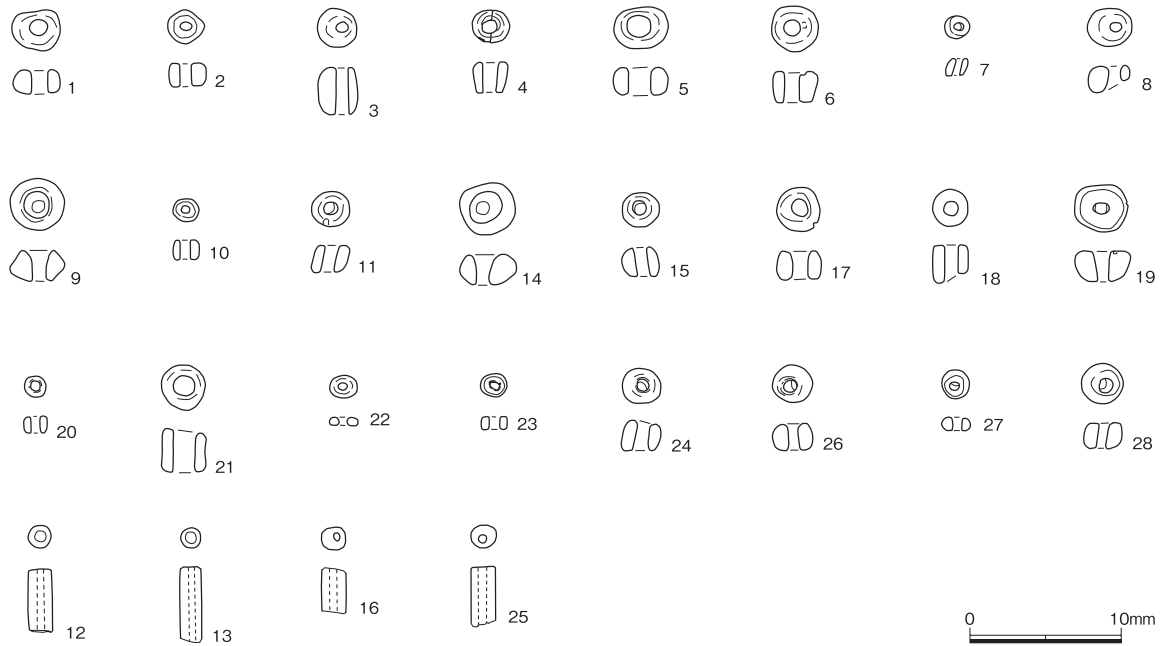


VI-7図 1号方形周溝墓(2).包含層 出土土器

図版番号	器種	法量(cm) 口径 底径 高さ	器形の特徴	調整・文様	胎土	焼成	色調	出土位置	備考・残存
1	壺形土器	(20.6) - (40.5)	幅広の複合口縁、頸部は緩やかにくびれる、胴部は球形で中に最大径を有する	外面:口唇部は無節縄文R横位、複合部は無節縄文L横位→無節縄文R横位、境目に円形赤彩文、断面三角形の棒状貼付文5本一組を1箇所確認、頸部はハケ縦位、後ヘラミガキ縦位、複合部直下はハケ目を残す、銅部上半に無節縄文L横位→結節文Z→無節縄文R横位→結節文S→無節縄文L横位→結節文Z、1段目の結節上に円形貼付文4個一組4箇所、胴部中位から下位はヘラミガキ横位、頸部および文様帯下から胴部中段下部まで赤彩 内面:複合部から頸部上半までヘラミガキ横位、頸部まで赤彩	精良 (橙色粒・灰色粒微量)	良好	外面:黄橙～橙 内面:黄橙	1号-3	頸部、胴部の赤彩は大部分が磨耗する、内面は器面の剥落が著しい 口縁～胴部の1/2残存、底部欠損
2	壺形土器	(19.3) - (30.6)	幅広の複合口縁、頸部は緩やかにくびれる、胴部は中位から下位に最大径、胴部下位に稜を有する	外面:口唇部はナデ横位、複合部は無節縄文R横位、下端に結節S1段と板状工具の先端による刻目、刻目をもつ棒状貼付文5本一組4箇所、頸部はナデ縦位後、ヘラミガキ縦位、胴部上半は無節縄文R横位と自縄結節文S1段の組み合わせを3段施文、2段目の結節文上に円形赤彩文、以下はヘラミガキ横位、頸部から胴部下位の稜線まで、文様帯以外を赤彩 内面:複合部から頸部までヘラミガキ横位、赤彩、以下はヘラミガキ工具によるナデ横位	普通 (黄橙色粒・褐色粒少量)	良	外面:灰白～にぶい黄橙色 内面:にぶい黄橙色	1号-1	頸部の一部に円形の磨耗痕 口縁～胴部の2/5残存、底部欠損
3	壺形土器	(20.2) - (14.1)	幅広の複合口縁、頸部は緩やかにくびれる	外面:口唇部はナデ横位、赤彩、複合部はナデ横位、棒状貼付文1本を4箇所確認、5～6cm間隔で貼付けられ、本来は10～11箇所、頸部はナデ横位後ヘラミガキ縦位、銅部上半は細密な自縄結節文S4段→細密な単節縄文RL→LR→RL→LR4段横位、頸部直下を空けて文様帯の上まで赤彩 内面:複合部から頸部上部はヘラミガキ横位、以下はナデ横位、口縁から頸部の上位まで赤彩	普通 (橙色粒・灰色粒少量)	良	外面:にぶい橙～にぶい褐色 内面:にぶい褐色	1号-4	頸部以下の内面は器面の剥落が著しい 口縁～頸部の1/2残存
4	壺形土器	(19.3) - (10.7)	幅広の複合口縁、頸部は緩やかにくびれる	外面:口唇部は平坦、ナデ横位、赤彩、複合部はナデ横位後、単節縄文LR横位、断面三角形の棒状貼付文4本一組1箇所確認、頸部はハケ縦位後、ヘラミガキ縦位、複合部直下はハケを残す、頸部下段単節縄文LR、頸部は文様帯を含め赤彩 内面:複合部はハケ横位後ヘラミガキ横位、頸部はハケ横位、口縁から頸部最小径部まで赤彩	精良 (橙褐色粒少量)	不良	外面:にぶい黄橙色 内面:にぶい黄橙色	包含層	複合部の一部に赤彩 口縁から頸部の2/3残存

※法量の( )は推定値、( )は現存値を表す

VI-1表 出土土器観察表



VI-8図 1号方形周溝墓出土ガラス小玉・管玉

番号	法 量 (mm)						特 徴					備 考
	幅a	幅b	厚	孔径1	孔径2	重量	形状 (平面/側面)	色調/透明度	気泡の形状/ 方向	端面	孔の内面	
1	6.65	6.17	3.52	2.31	2.15	0.14	隅丸方形	濃青色	気泡筋/孔に平行	研磨	平滑	一部欠損
2	4.91	4.35	3.7	1.73	1.74	0.09	隅丸方形	濃青色	孔に平行	研磨	平滑	
3	4.77	4.75	6.35	1.96	1.73	0.25	円形	濃青色	孔に平行	研磨	平滑	
4	4.85	4.3	3.91	2.01	1.08	0.12	隅丸方形	濃青色/低	孔に平行	研磨	平滑	
5	7.4	6.04	3.25	3.42	3.25	0.17	楕円形	濃青色/高	孔に平行	研磨	平滑	
6	6.19	5.77	4.17	2.64	3.24	0.19	六角形	濃青色	孔に平行	研磨	平滑	端面に砂粒
7	3.85	3.24	2.46	1.33	1.05	0.04	円形	濃青色/高	孔に平行	研磨	平滑	
8	6.18	5.32	3.36	1.91	1.86	0.13	隅丸方形	濃青色/高	孔に平行		平滑	
9	7.36	7.2	3.69	3.19	1.94	0.22	円形/ 算盤形	濃青色/高	斜め/散在		やや荒	
10	3.53	3.13	2.66	1.66	1.61	0.04	楕円形	濃青色	孔に平行	研磨	やや荒	端面に砂粒
11	5.13	4.62	3.59	1.86	1.9	0.11	五角形	濃青色	孔に平行	研磨	平滑	
14	7.4	7.35	4.12	3.27	2.22	0.24	隅丸方形/ 算盤形	濃青色	斜め		やや荒	
15	4.89	4.96	4.01	2.15	2.09	0.10	円形	淡青色	孔に平行	研磨	平滑	
17	5.9	5.65	3.17	2.55	2.53	0.18	隅丸方形	濃青色/高	孔に平行	研磨	平滑	側面に縦の刻みをもつ
18	4.75	-	5	-	-	0.18	隅丸方形	濃青色	孔に平行	研磨	平滑	一部欠損
19	7.28	6.75	3.95	2.35	1.96	0.27	隅丸方形	濃青色	孔に平行	研磨	平滑	側面に縦の刻みをもつ
20	3.29	3.15	1.96	1.6	1.56	0.03	円形	濃青色/高	孔に平行	研磨	平滑	
21	5.71	5.52	5.2	2.75	2.5	0.19	隅丸方形	濃青色	孔に平行	研磨	平滑	
22	3.62	3.23	1.31	1.81	1.79	0.02	楕円形	濃青色/高	-	研磨	平滑	
23	3.46	3.28	1.59	1.84	1.78	0.03	円形	濃青色/高	孔に平行	研磨	平滑	
24	4.82	4.62	3.54	2.06	1.79	0.15	四角形	濃青色	孔に平行	研磨	平滑	
26	5.46	5.32	3.51	2.25	2.05	0.10	五角形	濃青色	孔に平行	研磨	平滑	
27	3.8	3.62	1.83	1.67	1.61	0.03	円形	濃青色/高	孔に平行	研磨	平滑	
28	5.44	5.43	3.28	1.89	1.78	0.11	円形	淡青色	孔に平行	研磨	平滑	

VI-2表 1号方形周溝墓出土ガラス小玉観察表

番号	法 量 (mm)						色 調	備 考
	幅a	幅b	厚	孔径1	孔径2	重量		
12	3.31	3.27	[8.36]	1.64	1.09	0.15	赤褐色	鉄石英/片側折損
13	2.88	2.8	[9.93]	1.3	0.89	0.13	赤褐色	鉄石英/片側折損
16	3.21	3.19	[5.98]	1.1	0.87	0.12	赤褐色	鉄石英/両側折損
25	3.33	3.39	[7.89]	1.51	0.93	0.16	赤褐色	鉄石英/片側折損

( ) は現存値を表す

VI-3表 1号方形周溝墓出土管玉観察表

## 第5節 江戸時代以降

### (1) 遺構

#### SR1-1・SR1-2 (VI-9、10図)

遺構性格は道である。SR1-1・SR1-2は確認された範囲で、長軸19.5m、短軸9.5m、深さ1.34mを測る。調査区域のほぼ半分の面積を占める大型の遺構である。出土遺物は縄文土器、江戸時代の陶磁器の他、小銃の弾丸が出土したことから、廃絶年代は明治時代以降、射的場移転以降に行われたと考えられる。

他西側の遺構の立ち上がりと南方向へ緩やかに傾斜する平坦な底面を確認した。東側の立ち上がりは調査区外のため確認できなかった。北側のSR1-1のb-b'部分の深さは1.4mを測り、西側立ち上がりの傾斜角度は50度である。SR1-1には舌状のスロープがある。スロープの上面は凸凹しており長さ4.6m、幅は2.4mを測る。傾斜角度は30度である。南側のSR1-2部分は、深さ0.88mを測り、傾斜角度は30度である。SR1-1・SR1-2は埋没谷部分に造成されており、谷筋に位置する方形周溝墓はSR1-2の削平を受けていた。横たわって埋まっていた弥生土器はすべて側面が削平されていた。c-c'セクション部では、遺構底面の盛土は約0.2mの厚さで、黒ボク土を主体としローム土を含む締まりのある盛土が確認された。上面には轍痕が確認された。SR1-1・2はロームブロック、ローム土、褐色粘土、黒ボク土を含む土で埋め立てられていた。

SR1-1とSR1-2の間は下水管と高圧電気ケーブルのため遺構の繋がりを確認することができなかったが、SR1-1とSR1-2の立ち上がり部分は東西に5mずれている。また、SR1-1とSR1-2では遺構立ち上がりの傾斜角度が異なる。

工学部武田先端知ビル地点SR1と農学部総合研究棟地点01 SR1、工学部全径間風洞実験室地点SR2・SR9と『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』の藩邸を東西に区画する道が重なる。これらの遺構は、遺構と道の位置関係、規模から絵図の道と推定した。『明治16年陸軍参謀本部測量原図』によれば、現在の浅野地区と北側住宅地は警視庁用地、西側の住宅地は「東京共同射的会社」の射場である。工学部全径間風洞実験室地点周辺は窪地で、射的の的を納めたと考えられる「監的場」が建設されている。江戸時代の道は同図には描かれていないため、明治16(1883)年までに埋め立てられている。しかし、SR2・SR9は江戸時代の道と重なること、道の底部から靴底が出土したことから、明治9年の射的場建設時、道底部の段差を埋め窪地を東側へ拡張「監的場」が建設された推定した。工学部武田先端知ビル地点SR1も工学部全径間風洞実験室地点SR2・SR9同様、江戸時代の道を「監的場」窪地としたと推定していたが、SR1-1は一部が射場の出入り口(SR2)東側防護壁の地下にあり、北側は「監的場」窪地だけでなく窪地外に広がっている。SR1-2は遺構の立ち上がり部分に沿って柱穴列SB150・SK153・SB155・SB156・SB161・SB164が一行に並んでいる。絵図の道は直線に点線が重ねられている。直線に点線を重ねる表現は、建物のある敷地に認められることから塀と推定されることから、柱穴列は江戸時代の道に沿って建設された塀の可能性もある。SR1は江戸時代の道、潰れた小銃の弾丸が出土したことから「監的場」窪地、射場建設に伴う採土坑、射場廃絶に伴う土坑などいくつかの可能性が考えられる。

#### SB44・SB66・SB102 (VI-11、12図)

SB44・SB66・SB102は柱穴列で3遺構が1.8m(1間)間隔で並ぶ。SB66・SB102では栗石を検出し

た。柱穴列の軸は、南北の軸から58度東に傾く。

**SB63** (VI-11, 12図)

遺構性格は杭穴である。断面形が長方形であることから杭が打ち込まれていたと考えられる。

**SB64** (VI-11, 12図)

遺構性格は杭穴である。遺構断面は逆凸型で、土坑を掘削し杭を打ち込んだと考えられる。

**SK87** (VI-11, 12図)

遺構性格は土坑である。遺構の調整は粗雑で凸凹しているため植栽痕と考えられる。

**SB94・SB98・SB101** (VI-11, 12図)

SB94・SB98・SB101は杭穴で3遺構が1.8m(1間)間隔で並ぶ。SB94・SB101は土坑を掘削し杭を打ち込んだと考えられる。杭を打ち込んだ部分の平面形は長方形である。杭列の軸は北西方向へ48度傾く。

**SB95・SB96** (VI-11, 12図)

SB95・SB96は杭穴で2遺構が1.8m(1間)間隔で並ぶ。断面形は両遺構とも長方形を呈する。

**SK7** (VI-13, 14図)

SK7の遺構性格は土坑である。平面形は長方形、断面形は階段状を呈する。陶磁器類等のごみが廃棄されていた。

**SE6・SK123** (VI-13, 14図)

SK8の遺構性格は井戸である。土層断面は外側のローム土を主体とする層と黒色土を主体とする層の2層に分かれる。外側の層は井戸枠外側の埋め土、内側の層は井戸を廃絶する際の埋め土である。SK33・SK123等周辺の遺構は井戸に関連する遺構と考えられるが遺構性格を明確にすることができなかった。

**SB19・SB20・SB21・SB26・SB29・SB30・SB76・SB83** (VI-13, 14図)

SB19・SB20・SB21・SB26・SB29・SB30・SB76・SB83は杭穴列でSB29・SB83を除く6遺構が1.8m(1間)間隔で並ぶ。遺構の平面形は不整長方形で断面形は逆凸形と長方形である。SB83を除き遺構底部の標高はほぼ同じである。遺構軸は北西方向に55度傾く。

**SK17・SB22・SB67・SB69** (VI-13, 14図)

SK17は植栽痕で平面形が不整形、底面は凸凹している。SB22・SB67・SB69は杭穴列で3遺構が1.8m(1間)間隔で並ぶ。遺構の平面形は不整形で断面形は長方形である。遺構底部の標高はほぼ同じである。遺構軸は北西方向に53度傾く。杭穴列SB27・SB70・SB82・SB85・SB104・SB124と並行し、SB67とSB124、SB22とSB104、SB69とSB70が南北に並ぶ。両杭穴列の間隔は0.9m(半間)である。

**SK10・SK13・SK28・SB27・SB70・SB82・SB85・SB104・SB124** (VI-13, 14図)

SK10は植栽痕で平面形が不整形、断面形が凹型を呈する。SK13は土坑である。SB27・SB70・SB82・SB85・SB104・SB124は杭穴列で6遺構が1.8m(1間)間隔で並ぶ。遺構の平面形は不整形で断面形は長方形である。遺構底部の標高はほぼ同じである。遺構軸は北西方向に53度傾く。杭穴列SB22・SB67・SB69と並行する。

**SK32** (VI-13, 14図)

遺構性格は土坑である。

**SB51・SK52・SB53** (VI-13, 14図)

SB51・SB53は柱穴列で2遺構が1.8m(1間)間隔で並ぶ。SB53では栗石を検出した。遺構の平面

形は不整形である。遺構の底面の調整は雑で凸凹している。SK52はSB51・SB53の同軸状に位置し、遺構形状、規模が同じである。遺構軸は北西方向に53度傾く。SB51とSB54、SB55とSB53が南北に並び、両柱穴列の間隔は0.9m（半間）である。

#### SB54・SB55（VI-13、14図）

SB54・SB55は柱穴列で2遺構が1.8m（1間）間隔で並ぶ。栗石を検出した。遺構の平面形は不整形である。SB55は断面が長方形に調整されているが、SB54底面の調整は雑で凸凹している。SB51・SB53柱穴列と並行する。

#### SR2（VI-15、16図）

SR2は射場の出入口でスロープが地下へ続いている。遺構の東側は、調査地点周辺で行われた削平のため失われているが、路面に並べられた角材を固定した杭がD5グリッドで確認されている。出入口は確認された範囲で長軸10.8m、短軸2.98m、深さ1.75mを測る。遺構断面はb-b'部分で逆凸形、出入口の傾斜角度は12度である。江戸時代の陶磁器の他、小銃の弾丸が出土したことから、廃絶年代は明治時代以降、射的場移転以降に行われたと考えられる。『明治16年陸軍参謀本部測量原図』よれば、出入口の両側に防護壁があり、等高線から復元された出入口の傾斜角度は10度、SR2の傾斜角度に近い値である。

覆土は射的場移転後の埋め土層（1～9層）と10～12層の舗装層に分かれる。舗装層の観察と検出状況からスロープの舗装は2段階にわたって行われている。1段階目は角材が並べられた路面で、角材は腐食によってなくなっているが、角材の間が硬く突き固められていたため角材の跡は空洞になっていた。スロープの底に掘削された幅1m、深さ0.2mの溝に長さ0.9～1mの角材を0.5m間隔で並べ、太さ0.05mの杭で固定。角材の間をローム土、粘土を用いて突き固めている。堆積の観察ではラミナ状の堆積が確認されており、土と水を使用して出入口の舗装が行われたと考えられる。路面には滑り止めの砂が撒かれている。2段階目は、1段階目の路面を埋めて舗装している。ローム土、粘土を用いて突き固められている。1段階目同様、堆積の観察ではラミナ状の堆積が確認されており、土と水を使用してスロープの舗装が行われたと考えられる。舗装の厚さは約0.2m、滑り止めの砂が路面に撒かれている。出入口の舗装に用いられた角材の幅は、0.9～1m、0.5m間隔で並べられていた。

#### SK5（VI-15図）

遺構性格は土坑である。平面形は不整形である。磁器製のアヒル形をした容器と「湯沢温泉 高半旅館」の墨書がある土製の猫形容器などのごみが廃棄されていた。

#### SK72（VI-15、16図）

遺構性格は植栽痕である。平面形は不整形円形、断面形は逆凸形である。

#### SK73（VI-15、16図）

遺構性格は土坑である。平面形は不整形長方形を呈する。遺構底面は凸凹している。

#### SK144・SK145・SK148・SK158・SK160・SK162・SK166（VI-17、18図）

これらの遺構性格は植栽痕で浅野侯爵別邸の遺構群で別邸の門を入った前庭にあたる部分に集中して検出した。平面形は不整形円形を呈し遺構の調整は雑で断面形は逆凹で中央部が盛り上がっている。

#### SB150・SB153・SB155・SB156・SB161・SB164（VI-17、18図）

SR1-2の立ち上がり部分で遺構に沿って検出したことから、駒込邸を東西に区分する道に沿って構築された塀の可能性も考えられたが、明治時代以降の調査地点を含む広範囲で行われた削平によって塀の跡が削平された可能性が高いこと。調査区北西側で検出した杭穴列の軸と変わらないことから、植栽痕同様、浅野侯爵別邸の遺構と考えられる。

SB150・SB153・SB155・SB156・SB161・SB164は柱（杭）穴列で、SB161・SB156を除く4遺構は1.8m（1間）間隔で並び、杭の痕跡が底部で確認された。遺構の平面形は不整形で断面形は長方形でSB161・SB156を除き遺構底部の標高はほぼ同じである。遺構軸は北西方向に46度傾く。

**SB134-1・SB134-2・SK175（VI-19、20図）**

SB134-1・SB134-2・SK175はL字状に並ぶ。これらの遺構はSR1-2を掘削して構築された遺構である。『明治四十二年調家屋台帳』（青木家文書）の浅野侯爵別邸図面と『昭和十一年三月彌生町會事務所作成 向ヶ岡彌生町二・三番地略圖』（青木家文書）から、これらの遺構は浅野侯爵別邸の基礎と考えられる。SB134-1は栗石を配置し硬く突き固めた上にブロック状の大谷石を2段重ねている。石材の寸法は0.9m（3尺）×0.3m（1尺）、厚み0.24m（8寸）である。0.9m×0.3mの寸法は現在も使用されている大谷石の規格である。石材の表面には斜線状の工具痕（ツルハシ痕か）が残る。SB134-1とSB134-2は3.2mの間隔がある。SB134-2は谷跡に位置する。栗石は谷跡の黒色土を地山まで掘削してから配置されている。硬く突き固めた上にブロック状の大谷石を1段重ねている。上部は攪乱されたため、何段かの石材は失われたと考えられる。石材の寸法は0.45m（1尺5寸）×0.3m（1尺）、厚み0.24m（8寸）である。石材の表面には斜線状の工具痕（ツルハシ痕か）が残る。SK175はSB134-1と並ぶ遺構である。

**SB171（VI-19、20図）**

SB134-1・SB134-2に切られる。遺構性格は土坑であるが遺構がどう使用されたかは明確にできなかった。1層は固く突き固められている。1層上面に東西に並ぶ不整長方形の窪みが並ぶ。

**SK187（VI-19、20図）**

遺構性格は植栽痕である。



VI 工学部武田先端知ビル地点

遺構No.	グリッド	種別・性格	昭和11年	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)
1号主体部 (SK186)	G5	主体部		1.54	1.13	0.30
1号-1 (SD172)	H4・5	周溝		2.50	0.90	0.52
1号-2 (SD174)	G5,H5	周溝		3.20	0.74	0.39
1号-3 (SD149)	G5	周溝		3.59	1.07	0.67
1号-4 (SD181)	G4・5	周溝		2.52	0.82	0.68
2号-1 (SD180)	G4・5	周溝		3.25	0.90	0.34
2号-2 (SK173)	G5	土坑		3.57	1.78	0.49
SR 1-1・2	C1-3,D1-4,E1-4,F2-6,G3,F4-7,G4-6	駒込邸道、監の場窪地		19.50	9.50	1.34
SR 2	A4・5,B5,C5,D5	射場出入口		10.80	2.98	1.75
SD 3	C6	土管溝		-	-	-
SK 4	D5	土坑	役宅	2.11	0.58	0.50
SK 5	B4	土坑	役宅	修正	修正	-
SE 6	D4・5	井戸	役宅	1.40	1.18	1.7mまで掘削
SK 7	D5	土坑	役宅	修正	修正	1.50
SP 8	D5	土坑	役宅	1.10	0.85	0.17
SK 9	D5,E5	土坑	役宅	0.80	0.54	0.15
SK10	C4,D4	植栽痕	役宅	1.98	1.44	0.33
SK12	D4	土坑	役宅	0.54	0.53	0.18
SK13	D4	土坑	役宅	0.86	0.45	0.04
SK14	D4	土坑	役宅	0.60	0.50	0.19
SK15	C4	土坑	役宅	0.60	-	-
SK16	C4	植栽痕	役宅	1.25	1.00	0.48
SK17	C3・4,D3・4	植栽痕	役宅	1.60	1.55	0.27
SP 18	D4	小穴	役宅	0.26	0.21	0.15
SB19	D4	柱穴	役宅	0.42	0.41	0.49
SB20	D4	杭穴	役宅	0.52	0.34	0.82
SB21	C4,D4	杭穴	役宅	0.50	0.39	0.65
SB22	C4,D4	杭穴	役宅	0.51	0.36	0.53
SK24	C4	土坑	役宅	0.52	0.38	0.12
SB25	C4	杭穴	役宅	0.47	0.28	0.56
SB26	C4	杭穴	役宅	0.53	0.31	0.75
SB27	C4	杭穴	役宅	0.39	0.31	0.50
SK28	C4	土坑	役宅	0.48	0.27	0.15
SB29	C4	杭穴	役宅	0.48	0.30	0.66
SB30	C4	杭穴	役宅	0.80	0.29	0.62
SK31	C5	土坑	役宅	0.62	0.40	0.81
SK32	D4,E4	土坑	役宅	1.83	1.05	0.84
SK33	D4・5	土坑	役宅	2.07	1.27	0.20
SK34	D4	土坑	役宅	0.45	0.33	0.32
SK35	D4・5	土坑	役宅	0.70	0.46	0.59
SK36	D5	土坑	役宅	0.58	0.54	0.58
SK37	C4,D4	土坑	役宅	1.01	0.44	1.09
SK38	C4,C5	土坑	役宅	1.08	0.95	0.75
SK39	C4,C5	土坑	役宅	0.50	0.40	0.28
SD40	B4・5,C3-5,D3-5	土管溝		-	-	-
SD41	D5・6,C5	土管溝		-	-	-
SP43	C3	小穴	役宅	0.24	0.22	-
SP43	C2	小穴	役宅	0.25	0.26	0.17
SB44	B2,C2	礎石	役宅	0.56	0.48	0.25
SK45	B4,C4	土坑	役宅	2.10	1.85	0.29

VI-4表 遺構一覧表(1)

遺構No.	グリッド	種別・性格	昭和11年	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)
SK46	B4	土坑	役宅	1.21	0.57	0.23
SK47	B4	土坑	役宅	1.15	0.41	0.41
SK48	B4	土坑	役宅	0.50	0.40	0.25
SK49	B4	土坑	役宅	0.39	0.25	0.33
SB50	B3・4	柱穴	役宅	0.50	0.38	0.52
SB51	B3	礎石	役宅	0.70	0.67	0.24
SK52	B3,C3	土坑	役宅	0.80	0.62	0.17
SB53	C3	礎石	役宅	0.82	0.70	0.23
SB54	B4,C4	礎石	役宅	0.77	0.72	0.20
SB55	C3	礎石	役宅	0.64	0.56	0.11
SK56	C3	土坑	役宅	0.38	0.32	0.13
SB57	C4	柱穴	役宅	0.35	0.35	0.54
SK58	C4	土坑	役宅	0.66	0.37	0.23
SK59	C3	土坑	役宅	0.47	0.41	0.17
SK60	C3,D3	土坑	役宅	0.70	0.65	0.20
SB63	C3	杭穴	役宅	0.39	0.41	0.15
SB64	C3	杭穴	役宅	0.32	0.25	0.36
SB66	B3	礎石	役宅	0.51	0.50	0.23
SB67	D3	杭穴	役宅	0.45	0.35	0.31
SK68	C4	土坑	役宅	0.51	0.49	0.25
SB69	C4	杭穴	役宅	0.42	0.30	0.60
SB70	C4	杭穴	役宅	0.45	0.41	0.56
3P71	D5	小穴	役宅	0.32	0.23	0.26
SK72	B6,C6	土坑	役宅	0.72	0.57	0.32
SK73	C5・6	土坑	役宅	0.94	0.50	0.60
SK74	C5・6	植栽痕	役宅	1.15	1.05	0.42
SB75	B5,C5	杭穴	役宅	-	-	-
SB76	C5	坑穴	役宅	0.45	0.40	0.14
SB77	C5	柱穴	役宅	0.80	0.28	0.54
SB78	C5	杭穴	役宅	0.38	0.27	0.18
SK79	C5	土坑	役宅	0.39	0.30	0.17
SD80	C5	溝状遺構	役宅	2.05	0.38	0.26
SK81	C5	土坑	役宅	0.35	0.23	0.16
SB82	C4	杭穴	役宅	0.36	0.30	0.51
SB83	C4	杭穴	役宅	0.41	0.26	0.34
SK84	C4	土坑	役宅	0.30	0.25	0.24
SB85	C4	杭穴	役宅	0.31	0.24	0.47
SB86	C4	柱穴	役宅	0.40	0.30	0.52
SK87	C2・3	土坑	役宅	1.61	0.85	0.26
SB88	C2	杭穴	役宅	0.31	0.29	0.54
SK89	E6	土坑	浅野別邸	0.50	0.24	0.36
SB90	C5	杭穴	役宅	0.45	0.42	0.64
SK91	C2	土坑	役宅	1.10	0.51	0.32
SB92	B5,C5	杭穴	役宅	0.33	0.29	0.27
SB93	D3	柱穴	役宅	0.44	0.41	0.36
SB94	C2	杭穴	役宅	0.31	0.30	0.70
SB95	C3	杭穴	役宅	0.29	0.22	0.30
SB96	C3	杭穴	役宅	0.23	0.18	0.23
SB98	C3	杭穴	役宅	0.52	0.31	0.42
SB99	C3	杭穴	役宅	0.27	0.20	0.31
SK100	C2	土坑	役宅	0.30	0.28	0.20

VI-4表 遺構一覧表(2)

VI 工学部武田先端知ビル地点

遺構No.	グリッド	種別・性格	昭和11年	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)
SB101	C2	杭穴	役宅	0.35	0.30	0.62
SB102	C2	杭穴	役宅	0.54	0.52	0.12
SB104	D4	杭穴	役宅	0.42	0.34	0.69
SK105	C4	土坑	役宅	0.70	0.37	0.37
SK106	C4	土坑	役宅	0.60	0.54	0.25
SP107	C5	杭穴	役宅	0.26	0.25	0.34
SK108	C5	土坑	役宅	0.69	0.32	0.45
SK109	C6	土坑	役宅	0.48	0.46	0.13
SK110	C6	土坑	役宅	0.60	0.52	0.11
SK111	D5	土坑	役宅	0.48	0.44	0.09
SK112	D5	土坑	役宅	0.33	0.24	0.05
SB113	D4	柱穴		0.25	0.23	0.38
SB114	E4	杭穴	役宅	0.30	0.21	0.73
SK115	E5	土坑	浅野別邸	0.25	0.25	0.24
SB116	D4,E4	杭穴	役宅	0.30	0.24	0.80
SK117	A4	土坑	役宅	0.40	0.25	0.23
SK118	A4	土坑	役宅	0.35	0.34	0.13
SB119	E5	杭穴	浅野別邸	0.45	0.39	0.52
SK120	C5,D5	土坑	役宅	0.40	0.33	0.30
SK121	C5	土坑	役宅	0.46	0.37	0.14
SB122	D3	杭穴	役宅	0.36	0.34	0.36
SK123	D4・5	土坑	役宅	0.90	0.62	0.71
SB124	D4	杭穴	役宅	0.35	0.35	0.43
SK126	B4	土坑	役宅	0.49	0.39	0.18
SK127	B4	土坑	役宅	0.92	0.30	0.08
SK128	B4	土坑	役宅	0.50	0.31	0.16
SK129	B4	土坑	役宅	0.41	0.28	0.16
SK130	C4	土杭	役宅	0.29	0.22	0.32
SK131	C3	土坑	役宅	0.32	0.08	0.30
SK132	D5	土坑	役宅	0.06	0.45	0.12
SK133	C5	土坑	役宅	0.40	0.35	0.18
SB134-1・2	G6・7,H6	基礎	浅野別邸	-	-	-
SK135	G6	土杭	浅野別邸	0.42	0.21	0.32
SB136	G7	土杭	浅野別邸	0.32	0.30	0.67
SK137	G7	土坑	浅野別邸	0.56	0.41	0.24
SK138	F6	土杭	浅野別邸	0.36	0.33	0.18
SK139	F6	土杭	浅野別邸	0.28	0.24	0.11
SB140	F6	柱穴	浅野別邸	0.34	0.25	0.38
SK142	F5	土坑	浅野別邸	0.87	0.46	0.69
SK143	E6	植栽痕	浅野別邸	0.90	0.90	0.20
SK144	E6,F6	植栽痕	浅野別邸	1.72	1.18	0.21
SK145	E6,F6	植栽痕	浅野別邸	1.17	0.85	0.16
SK146	E5,F5	土坑	浅野別邸	0.27	0.27	0.18
SB147	E5・6	杭穴	浅野別邸	0.52	0.45	0.42
SK148	F6	植栽痕	浅野別邸	1.05	0.90	0.22
SB150	F5	杭穴	浅野別邸	0.59	0.48	0.46
SK151	E6,F6	植栽痕	浅野別邸	0.84	0.67	0.26
SK152	F6	植栽痕	浅野別邸	0.76	0.76	0.28
SB153	F6,G6	杭穴	浅野別邸	0.55	0.53	0.33
SK154	F6	土杭	浅野別邸	-	-	-
SB155	F5・6	杭穴	浅野別邸	0.50	0.45	0.40

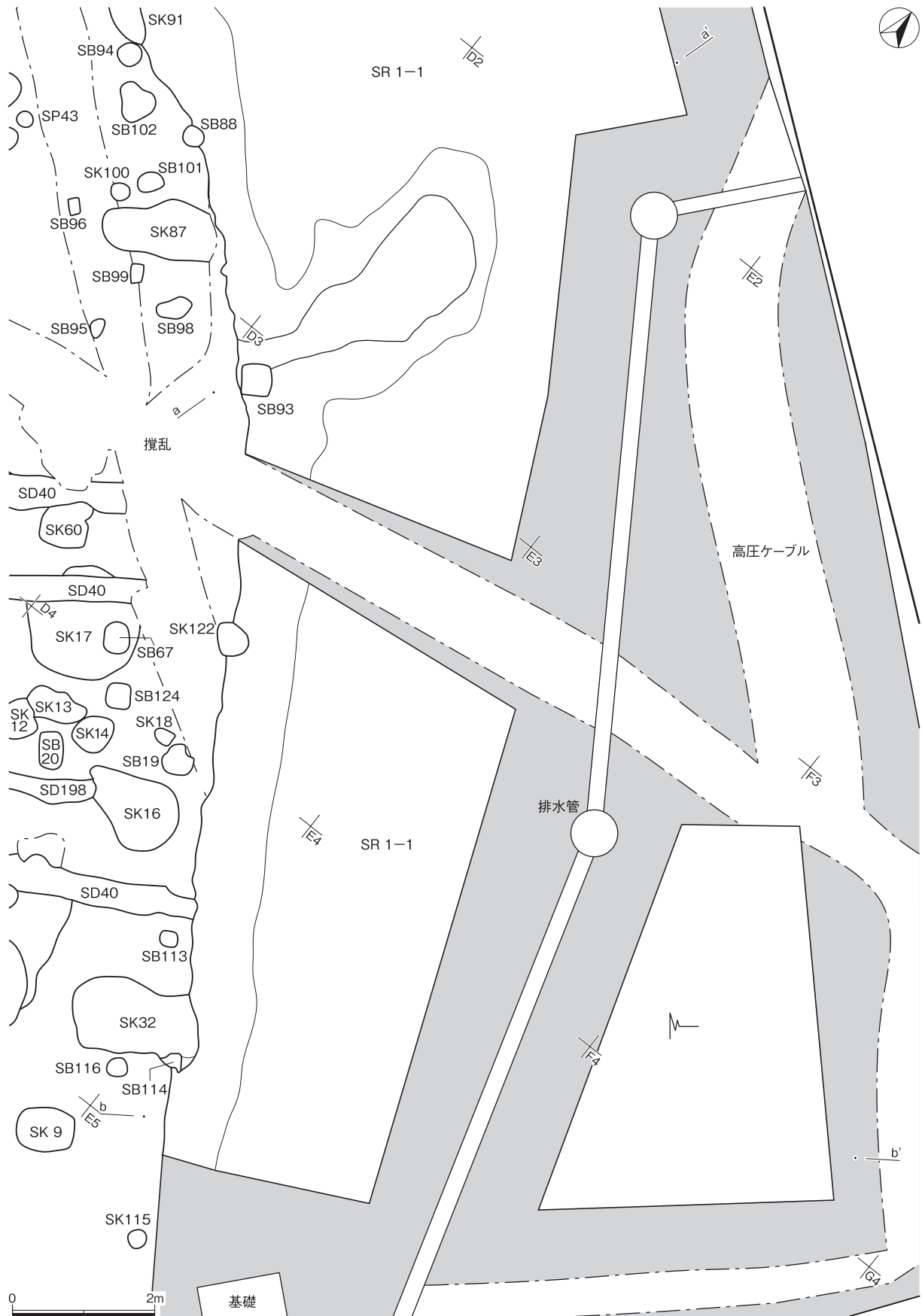
VI-4表 遺構一覧表(3)

遺構No.	グリッド	種別・性格	昭和11年	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)
SB156	F5	杭穴	浅野別邸	0.30	0.29	0.27
SK157	F6	植栽痕	浅野別邸	0.38	0.37	0.19
SK158	E6,F6	植栽痕	浅野別邸	1.04	0.80	0.13
SK159	E6	植栽痕	浅野別邸	0.26	0.14	0.48
SK160	F6	植栽痕	浅野別邸	2.27	1.85	0.17
SB161	F5	杭穴	浅野別邸	0.41	0.36	0.24
SK162	F5	植栽痕	浅野別邸	1.70	1.03	0.29
SK164	F5	土杭	浅野別邸	0.39	0.33	0.38
SB165	F5	植栽痕	浅野別邸	0.45	0.25	0.26
SK166	F5	植栽痕	浅野別邸	1.24	1.04	0.08
SK167	F5	植栽痕	浅野別邸	0.34	0.33	0.14
SK168	E5,F5	植栽痕	浅野別邸	1.27	0.43	0.24
SK169	F6	土坑	浅野別邸	1.07	0.52	0.34
SB171	G6・7	庭園関連遺構	浅野別邸	4.30	1.15	0.67
SK175	G7	土杭	浅野別邸	1.26	0.56	0.42
SK176	G7	土坑	浅野別邸	2.59	1.64	0.90
SK177	E7,F7	土坑	浅野別邸	0.69	0.60	0.11
SP178	G7	小穴	浅野別邸	0.34	0.29	0.32
SK179	E6,F6	植栽痕	浅野別邸	0.88	0.46	0.21
SK182	G7	土坑	浅野別邸	0.22	0.16	0.32
SK183	F6	土坑	浅野別邸	0.40	0.22	0.11
SK184	F6	土坑	浅野別邸	0.32	0.29	0.20
SP185	F5	小穴	浅野別邸	0.26	0.18	0.21
SK187	F7	植栽痕	浅野別邸	2.94	1.71	0.10
SK188	G6	土坑	浅野別邸	0.65	0.27	0.19
SP195	C6	小穴	役宅	0.56	0.55	0.13
SK196	F7,G7	土坑	浅野別邸	0.22	0.19	0.19
SK197	E6,F6	植栽痕	浅野別邸	1.05	0.78	0.06
SD198	C4	溝状遺構	役宅	3.95	0.35	-
SK202	G7・8	土坑	浅野別邸	0.73	-	-

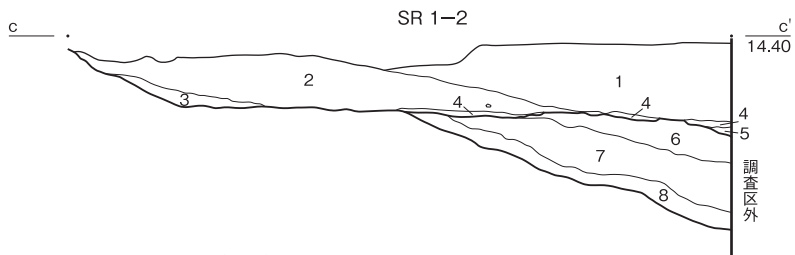
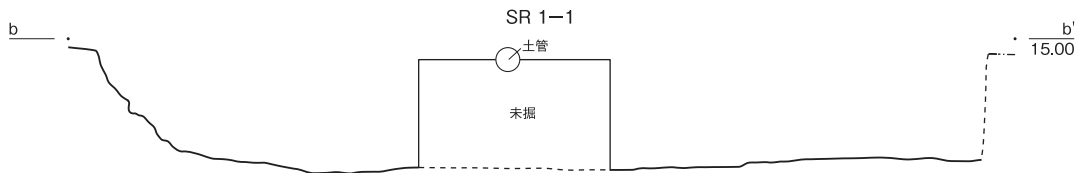
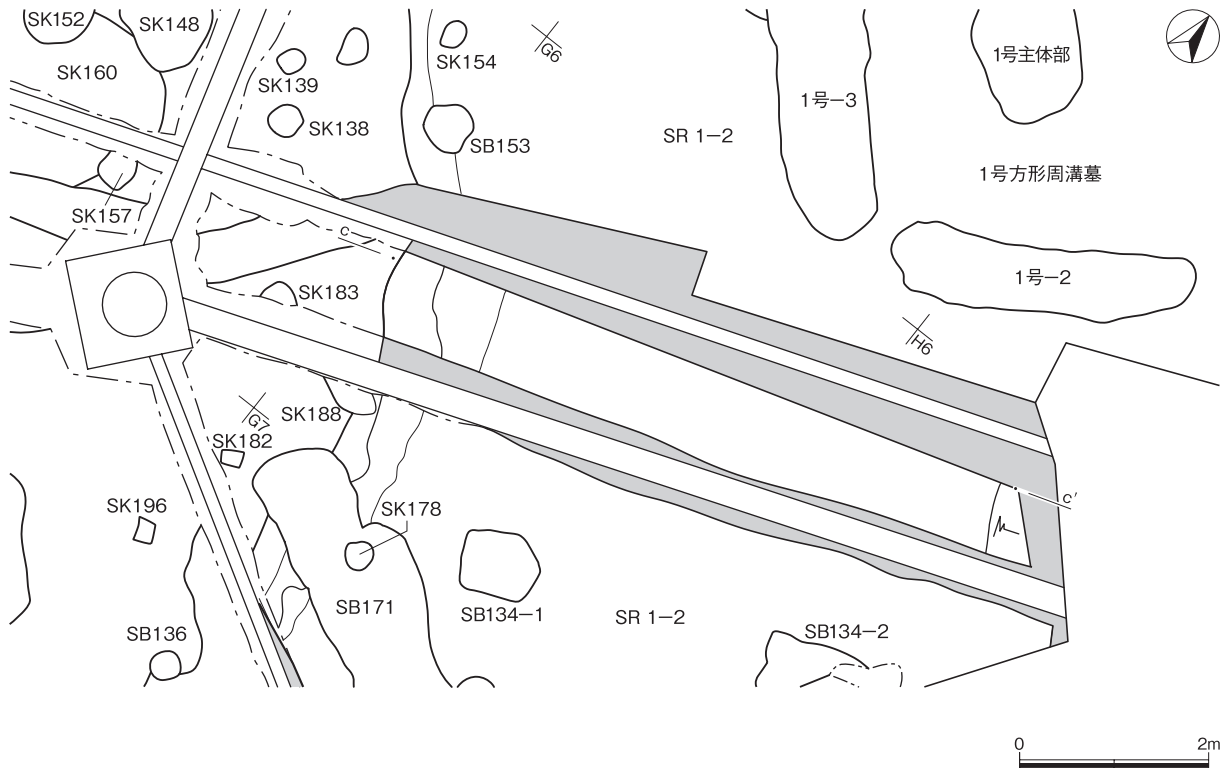
「浅野別邸」は明治時代以降の遺構で浅野侯爵別邸の区域に分布する遺構

「役宅」は明治時代以降の遺構で浅野家役宅の区域に分布する遺構

VI-4表 遺構一覧表(4)

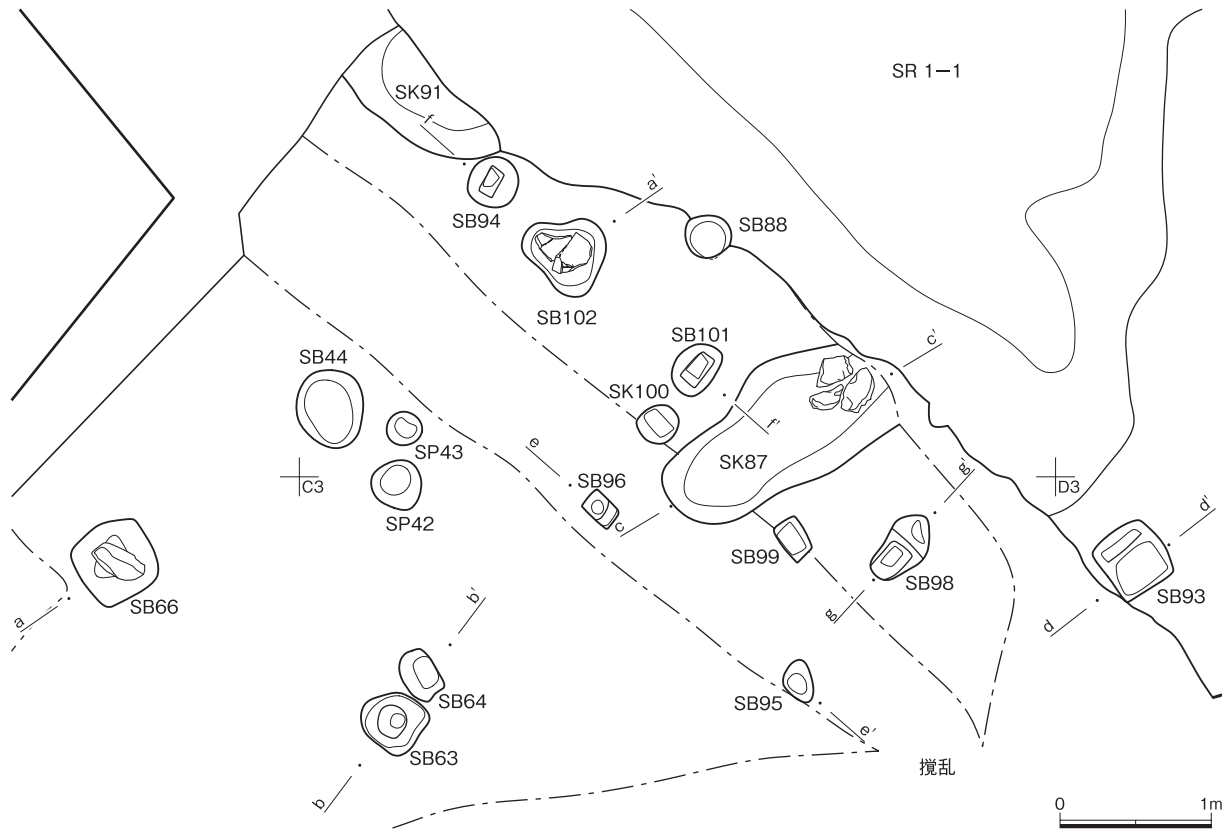


VI-9図 SR 1-1

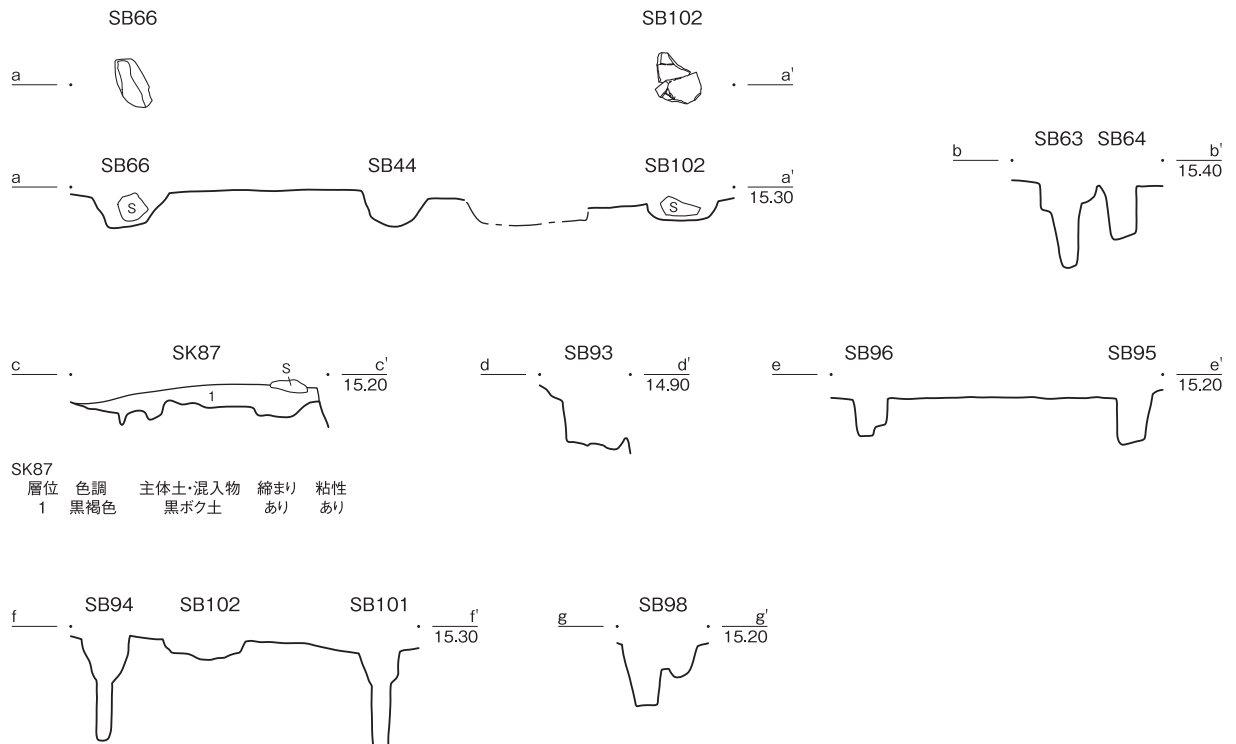


層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性	備考
1	茶褐色	ローム土ブロック、褐色粘土	あり	あり	SR1
2	暗褐色	ローム土、黒ボク土	あり	あり	SR1
3	暗褐色	ローム土、黒ボク土	あり	あり	SR1
4	黒色	ローム土、黒ボク土	あり	あり	SR1
5	暗褐色	黒ボク土	あり	あり	谷跡
6	暗褐色	ローム土、黒ボク土	あり	あり	谷跡
7	黒色	ローム土、黒ボク土	あり	あり	谷跡
8	暗褐色	ローム土、黒ボク土	あり	あり	谷跡

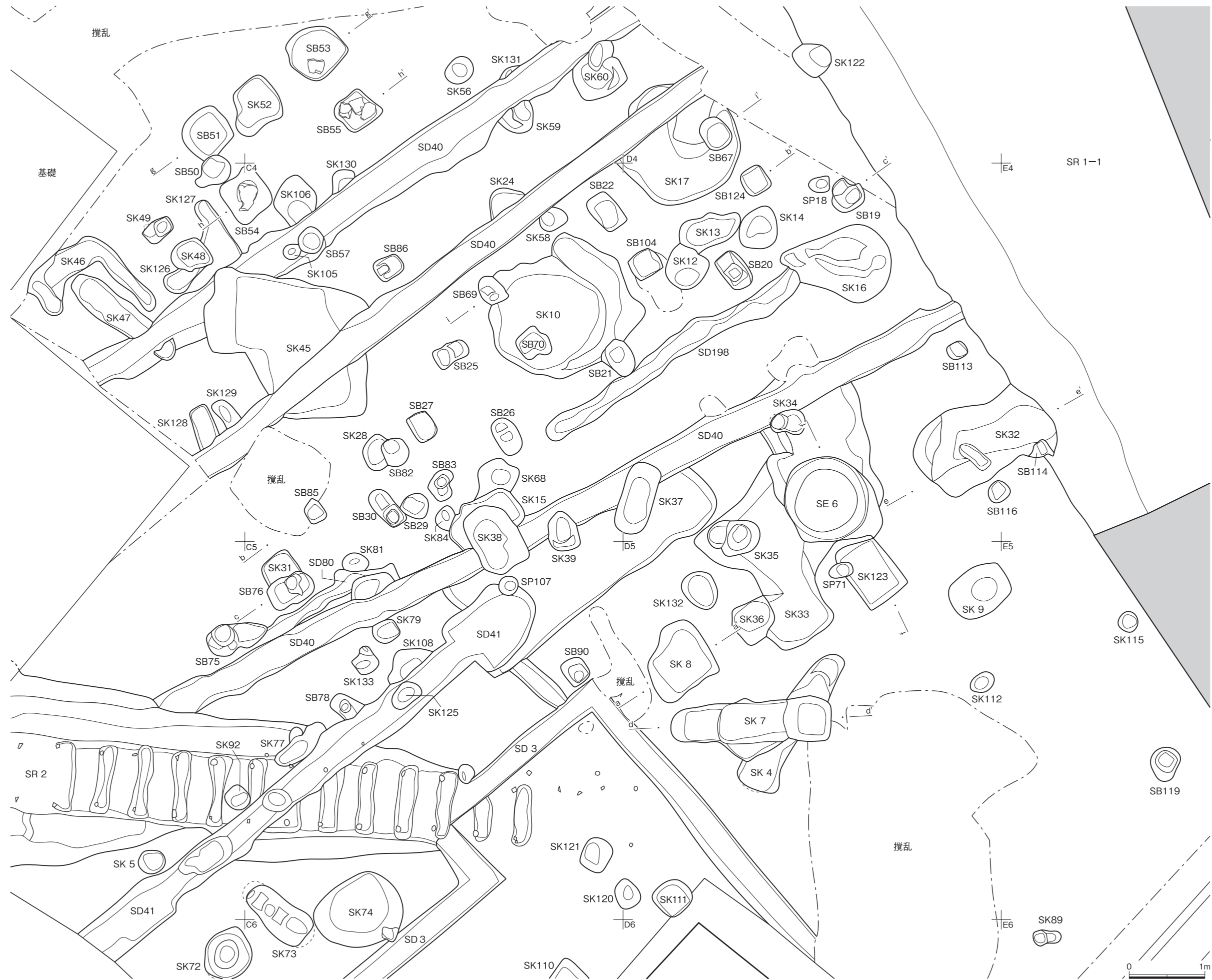
VI-10図 SR 1-1(1). SR 1-2



VI-11図 B~D-2.3 grid

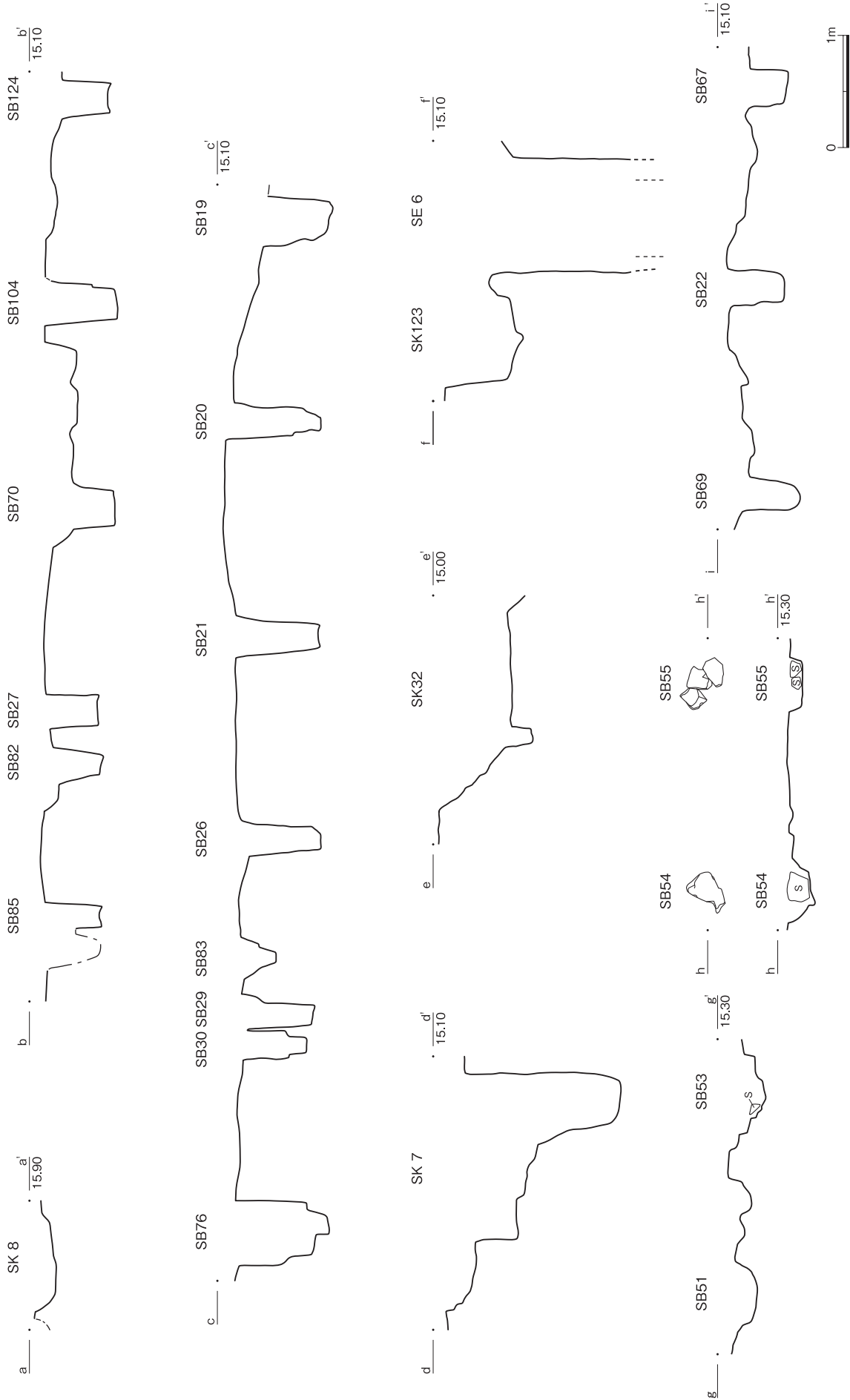


VI-12図 SB44.SB63.SB64.SB66.SK87.SB93.SB94.SB95.SB96.SB98.SB101.SB102

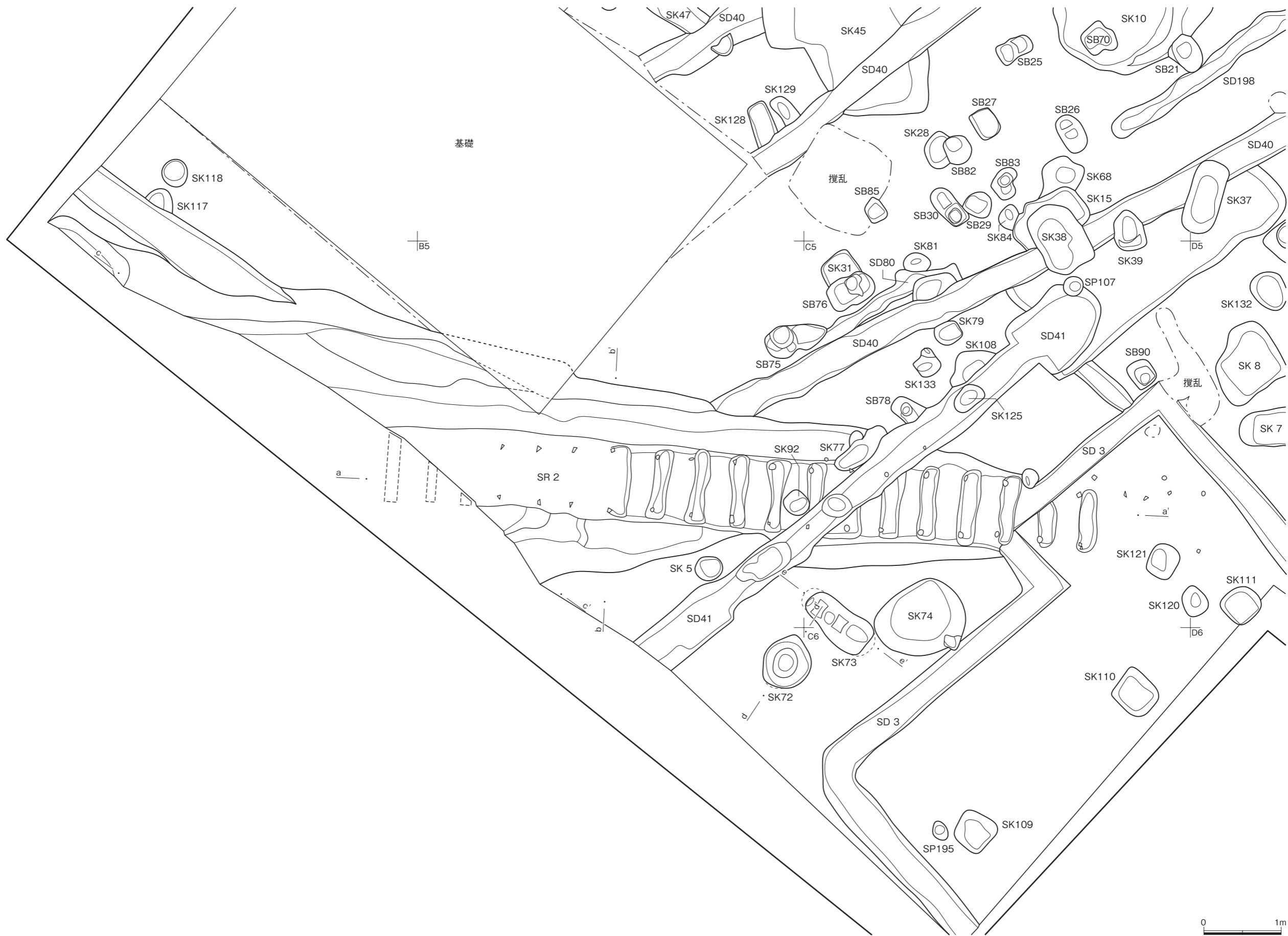


VI-13図 B~E-3~6Grid





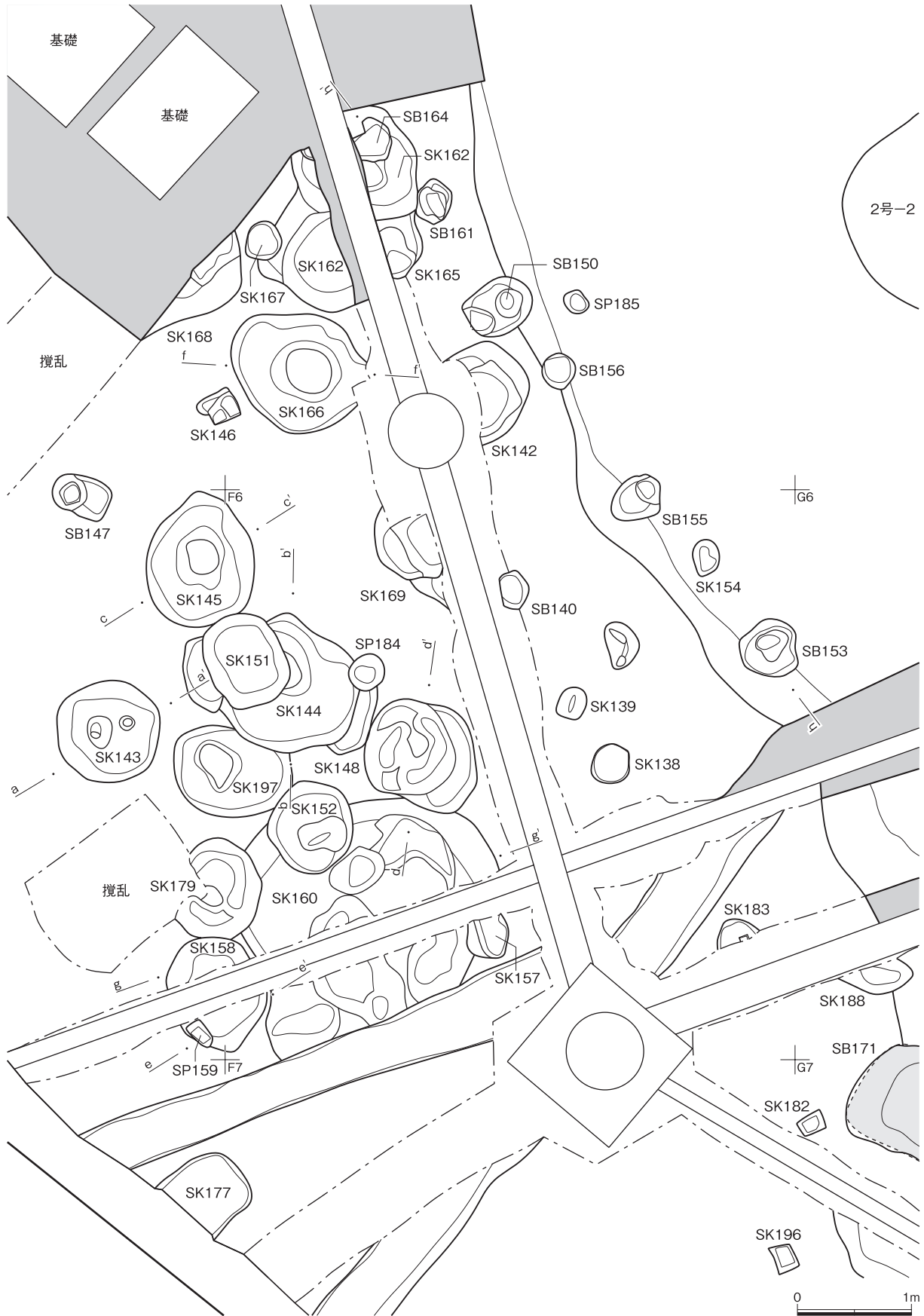
VI-14 Ⅱ SE 6. SK 7. SK 8. SB 19. SB 20. SB 21. SB 22. SB 26. SB 27. SB 29. SB 30. SK 32. SB 51. SB 53. SB 54. SB 55. SB 67. SB 69. SB 70. SB 76. SB 82. SB 83. SB 85. SB 104. SK 123. SB 124



VI-15 Ⅹ A~D-4.5. B-6. C-6Grid

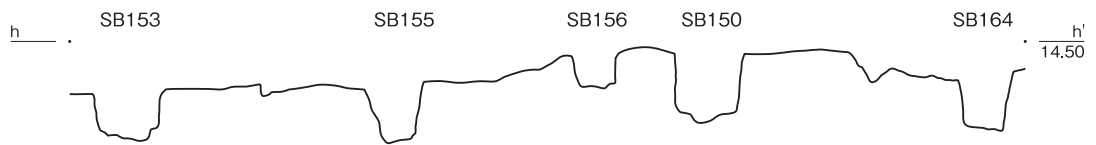
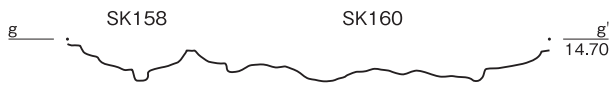
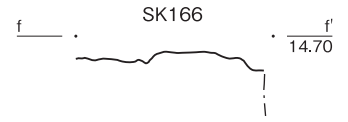
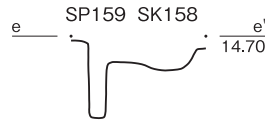
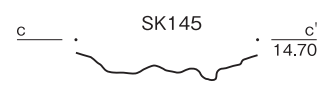
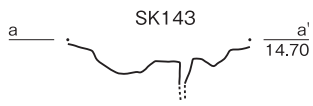


VI-16図 SR 2, SK72, SK73

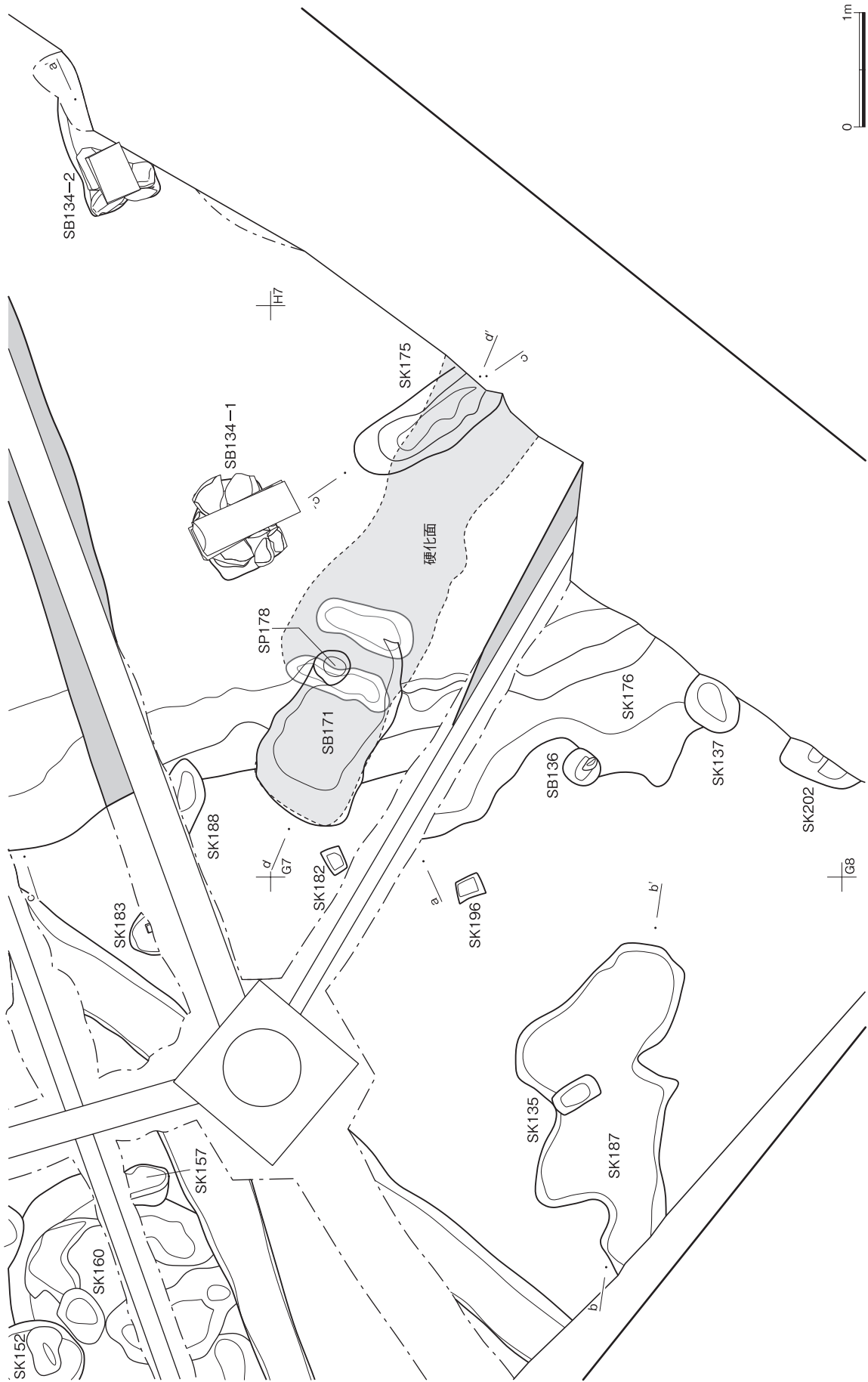


VI-17図 E~G-5~7Grid

VI 工学部武田先端知ビル地点

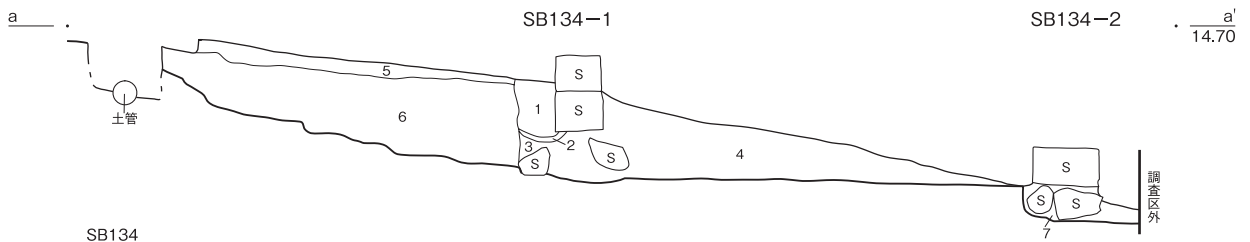


VI-18 図 SK143. SK144. SK145. SK148. SK158. SP159. SK160. SK166. SB153. SB155. SB156. SB164



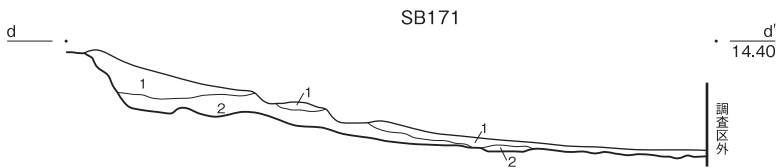
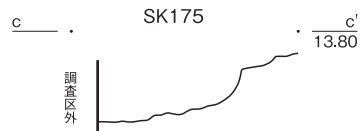
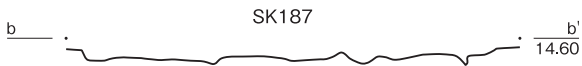
VI-19 図 F~H - 6.7 Grid

VI 工学部武田先端知ビル地点



SB134

層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性
1	暗褐色	ローム土、黒ボク土	あり	あり
2	暗褐色	ローム土、砂	あり	あり
3	暗褐色	ローム土、黒ボク土	あり	あり
4	茶褐色	ロームブロック、黒ボク土	あり	あり
5	茶褐色	ローム土、黒ボク土	あり	あり
6	茶褐色	ロームブロック、黒ボク土	あり	あり
7	灰色	礫、砂	なし	なし



SB171

層位	色調	主体土・混入物	締まり	粘性
1	茶褐色	ローム土	やや硬質	あり
2	茶褐色	ロームブロック、黒ボク土	あり	あり



VI-20図 SB134. SB171. SK175. SK187

## (2) 出土遺物

本地点からはコンテナ総数、約32箱の遺物（磁器・陶器・土器・その他）が出土している。磁器・陶器・土器の分類基準は「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類（1）」（東京大学埋蔵文化財調査室1999）を参照しているが、本地点の遺物は分類範囲外の遺物が多く、分類の記載が無いものが多い。遺跡における分類は数量分析により様々な文化・時代の様相を浮かび上がらせる手段である。そのためにはある一定以上の数量（便宜的に推定個体数100個体以上）を必要とするが、本地点においては全体的に遺物量が少なかったため、推定個体数100個体以上の遺物量を有する遺構が無く分析することができなかった。数量分析ができなかったため、大まかな年代観を出し検証した。

本地点は水戸藩駒込邸（中屋敷）以降、明治9（1876）年から明治21（1888）年に射的場、その後昭和16（1941）年まで浅野公爵別邸と隣接する住宅地、昭和23（1948）年までに東京大学敷地となった場所である。SR1-1・2、SR2は浅野公爵別邸と隣接する住宅地であった以前の射的場に関連する弾丸であろう。これ以外の遺物が出土した遺構は住宅地にあたる部分から検出されたものである。土産物・貯金箱・歯ブラシ・インク瓶・ガラスのおはじきなど一般的な生活の様子が見られる。遺構の年代も上記の年代に収まるものである。ACC地点（巻頭例言を参照）SX2は浅野公爵別邸からの廃棄物が含まれると考えられているが、こちらは洋食器が多数検出されており興味深い。

### SR1（VI-21図）

小銃の弾丸が出土した遺構は、SR1、SR2である。両遺構で26点の弾丸が出土した。弾丸の種類は、弾丸胴部が六角形になったウィットウォス（Whitworth）型の弾丸、弾丸胴部に逆溝のあるミニエー（Minie）型弾丸、弾丸底部が凹んだ円筒弾がある。弾丸のほとんどが着弾等により潰れていた。弾丸12点についてはPIXE法による材質分析を行った。解析の結果、分析試料は鉛製であった（註1）。

弾丸の種類、銃種の推定等については、磯村照明氏（ジャパン・カートリッジ・コレクターズ・アソシエーション附属弾薬研究センター）、峯田元治氏（日本銃砲史学会）にご教授いただいた。出土した弾丸類には、六角形の銃腔をもったイギリスの前装式小銃ウィットウォス（.45口径）、前装或いは改造後装管撃式エンフィールド（Enfield）銃、（.577口径）、フランスの後装ニードルファイア式シャスポー（Chassepot）小銃（11mm口径）、或いは後装管撃式マンソー（Manceaux & Viellard）小銃（12mm口径）等の弾丸と考えられ（註2）、当時の日本としては比較的近代化した銃器類を使用して、警視隊員の訓練を実施していた可能性がある。ライフルマーク（施条痕）が残る弾丸は、陸軍、海軍が使用した弾丸と推定している。明治13年、国産初の小銃十三年式村田歩兵銃（11mm口径）が制定されるに伴い、陸軍兵士は村田歩兵銃を使用した。海軍兵士は別に海軍部が制定した、ピーボデー（Peabody - Martinn）小銃（11.15mm口径）を使用した（註3）。ライフルマーク（施条痕）が残る弾丸は、村田歩兵銃とピーボデー小銃制定以降の射的演習と射的大会に使用された弾丸と考えられる。射的場は、明治9（1877）年建設を開始し、10（1878）年1月完成し演習が開始される。2月に始まった西南戦争の終結以降、射的場では射的会が度々行われ、明治天皇の行幸が行われる。射的場の機能は西南戦争終結に伴い変化したと考えられ、出土弾丸は射的場の機能の変遷を示すものと考えられる。

SR1から出土した弾丸はすべて小銃の弾丸である。出土弾丸15点中、5点を図化した。弾丸の直径は最大径である。

1はウィットウォス型の弾丸で先端部分が潰れている。断面形は六角形で、弾丸底部に凹がある。



直径12mm、残存部の長さ30.2mm、重量28.95g。2はウィットウォス型の弾丸で先端部分が潰れている。断面形は六角形で、弾丸底部に凹がある。直径11.9 mm、残存部の長さ26.4mm、重量32.23g。3はウィットウォス型の弾丸で先端部分が潰れている。断面形は六角形で、弾丸底部に凹がある。直径11.9 mm、残存部の長さ31.1mm、重量33.84g。4はウィットウォス型の弾丸で、先端部と底部が潰れている。断面形は六角形で、弾丸底部に凹がある。直径12.5mm、残存部の長さ26.5mm、重量33.85g。5は側面に6条のライフルマーク（施条痕）が残る。断面形は円形で、弾丸底部に凹がある。直径9.6mm、残存部の長さ24.9mm、重量17.2g。

#### SR2 (VI - 21 図)

1は軒棧瓦と推察されるが軒平部のみで軒丸部を欠損しており、軒平瓦の可能性を残す。瓦当面はほとんど欠損しているが、卷雲文状の蔓の先端がかるうじて確認される。金子氏の論考によればいわゆる「東海式」とされる一群に分類される（金子2007他）。瓦当面の周縁右端に「一徳・・・」と刻印される。四文字あるようだが全ては判読出来ない。瓦当と筒部の接合面にカキヤブリが施される。表面特に紋様区内に雲母が顕著である。表面は黒色、胎土は灰白色を呈する。表面は風化せずよく残る。前述の江戸式の一群に比べ胎土は密である。

SR2から出土した弾丸はすべて小銃の弾丸である。出土弾丸11点中、3点を図化した。2は弾丸底部が凹んだ円筒弾で底部が潰れている。断面形は円形で、弾丸底部に凹がある。直径13.9mm、残存部の長さ30.5mm、重量32.4g。3は弾丸底部が凹んだ円筒弾で底部が潰れている。断面形は円形で、弾丸底部に凹がある。直径14.3mm、残存部の長さ27.3mm、重量31.37g。4は完形の弾丸である。側面に5条のライフルマーク（施条痕）が残る。断面形は円形で、弾丸底部に凹がある。直径10.95mm、長さ30.5mm、重量27.15g。

#### SK5 (VI - 21、22 図)

1・2は磁器。1は染付小坏。器高は低く、やや腰が張っている。底部は蛇ノ目高台ではあるが、中心部に向かって、挟れており底部刻印「五平」。墨書「う」あり。2は香炉・火入れ。コバルト。脚部は二足残存。三足と思われる。口縁部肩脇に連続陰刻文が巡っている。内面にも釉が掛けられている。脚部先端のみ無釉。

3は土製の猫形をした容器、4は磁器製のアヒル形をした貯金箱である。3の猫型容器の頭部は蓋となっている。型押し成形で内面に指頭圧痕が観察される。蓋の受け部分は削って作出し、内側は補強しナデ調整している。器壁は厚く表面は磨き調整している。目、口、耳は型抜き後丁寧に調整と彩色を施し、髭や斑点は描き彩色している。底部内側の胴部との立ち上がり部分は細かく指で押圧し補強している。見込み部分にはゆるいクロクロ目が観察される。足と尾は貼り付けである。身の前面は朱色で温泉マーク、背面には墨書二行で「湯沢温泉 高半旅館」とある。高半旅館は現在でも営業している旅館で、昭和7（1932）年には与謝野晶子、鉄幹夫妻、昭和9～12年には川端康成が滞在し小説「雪国」を執筆した宿である。土産物であろう。4のアヒル形貯金箱は外国向けの貯金箱である。二枚型の型押し成形で、頭部には幅7mm×長さ32mmの開口があり、底部には径15mm程の穿孔が施されている。彩色は朱、青、黄、黒が確認される。底部には「扇に月丸紋」を囲むように「FAN BRAND MADE IN JAPAN」押印されている。

5はガラス製インク瓶。色調は無色透明。背が低く安定している。コルク栓。内面にインクが付着している。口唇部から底部まで左右に成形の型痕が見られる。肩部陽刻「PILOT」「6oz」。底部「5」。パイロット社製。昭和2（1927）年発売開始。

パイロット社製の6ozガラス製インク瓶は昭和2（1927）年に発売されたため、この時期以降の遺

構であることがわかる。

#### SE6 (VI-22図)

1～3は磁器。1は、手描き碗。イッチン掛け。コバルト。小振りの腰張り碗。胎土は密で光沢がある。扇面文。高台内に1本圈線が巡る。2は手描き碗。金色・朱色の上絵付け。胎土は密で光沢がある。高台脇2重圈線。3は色銅版転写皿。胎土は光沢がなくボソボソとしている。高台内・高台脇にそれぞれ1本ずつ圈線が巡る。

4は瀬戸・美濃系陶器。TC-30に分類される。餌入れ。

5・6はガラス瓶。5は口唇部から底部まで左右に成形の型痕が見られる。色調は無色透明。6は化粧品の瓶。口唇部はすぼまっている。型痕は底部際から口唇部の下約1.6mmのところまでで、口縁部とは別作りになっており、口縁部にも左右に成形の型痕が見られる。色調は無色透明。

7は歯ブラシ。骨角製品。材質は家畜哺乳類（ウシもしくはウマ？）の長骨緻密質部分。一般的には牛骨を使っていたようである。植毛孔が縦に3列あけられている。孔は貫通していない。ブラシが植えられている面の柄部分に「\_\_\_\_歯刷子 小學生用」と刻まれている。接合部はないがおそらく1本のブラシであろう。「歯刷子」の名称が商品名としてつけられたのは大正3（1914）年ライオンの「万歳歯刷子」が最初とされている。商品名は読み取れないが大正3年以降のものであることがわかる。

#### SK7 (VI-22、23図)

型紙摺りの磁器が無く銅版転写の磁器のみであることや、ガラスのおはじきが検出されていることから明治期後半以降の遺構であると思われる。

1～7は磁器。1は染付端反碗。幅広高台。腰が張り斜め方向に立ち上がっている。口縁部外反。内外面に模様あり。2は上絵付け碗。高台はやや幅広。ベロだし・だるま・鈴が描かれている。3は上絵付け碗。小槌と小判が描かれている。4は銅版転写皿。釉にむらがあり、部分的に肥厚しているところもある。銅版模様も内面の立ち上がり部分は不明瞭なところが多い。粗雑な作りの皿である。見込み松竹梅。5・6は銅版転写合子である。5は身。高台脇削り。6は蓋。7は銅版転写蓋。

8～13はガラス製品である。8・9はガラス瓶。無色透明。8は気泡等の混入は無いが底部に皺が見られる。口縁内側に1.2cm幅でガラス蓋の合わせ部分の擦痕がある。内面底部付近に白色の固形物が残留している。9は全体に気泡が見られる。口縁内側に0.8cm幅でガラス蓋の合わせ部分の擦痕がある。10～12はガラス製の石蹴り遊びに用いる道具である。いずれも、凹型に入れたタネを凸型用具で押す型押し成形（プレス加工）である。底面には縮れ状の型痕がみられる。中央文様の縁堤の幅は均一ではない。10は群青色透明で、気泡が確認される。やや歪んだ円形で中央の文様は花が陽刻されている。11は青色透明で、気泡が確認される。中央の文様は家紋の割り菱が陽刻されている。12は薄青緑色透明で、細かな気泡が多く確認される。中央の文様は松葉に梅花が陽刻されている。13はガラス製のお弾きで、深緑色透明で大小の気泡が多数確認される。『日本のおもちゃ遊び』（斉藤良輔が1972）によると、ガラス製のお弾きは明治後期から大正時代になると登場してくるとしている。

14・15は骨角製品。14は箸。材質は家畜哺乳類（ウシもしくはウマ？）の長骨緻密質部分。上部に黒色で「奈」の文字が見られ、それよりやや下方に赤色の跡が残る。先端部欠損。15は歯ブラシ。材質は家畜哺乳類（ウシもしくはウマ？）の長骨緻密質部分。一般的には牛骨を使っていたようである。ブラシ部分は、はめ込み式になっている。はめ込み部分の片側欠損。植毛孔が縦に4列あけられている。孔は貫通していない。

16はU字型の髪留め。セルロイド。黄色半透明。

17は「MITSUISHI [H.S.FIREBRICK]」の刻印がある耐火レンガである。「FIREBRICK」は耐火レンガ、「MITSUISHI」は、岡山県「三石」と考えられる（水野信太郎解題1991『日本窯業史総説（『日本近世窯業史』復刻版）第1巻』柏書房株式会社発行pp.129 - 131）。レンガの寸法は22.5×(-)×6cm（残存部）、重量は2,220gである。胎土は白色で、直径1mm程度の白い石粒が含まれ、表面は赤く変色している。右側面と後側面が割れ、左側面を除きコンクリートが付着している。後面のコンクリートには、赤褐色のレンガ片が付着していることから、本資料は、耐火煉瓦として使用したものを、別の用途に転用したと考えられる。大正期の耐火レンガについて、竹内清和著『耐火煉瓦の歴史—セラミック史の一段面—』（内田老鶴堂1990第2版）によれば、「大正10年4月、官制により工業規格統一調査会が設置され、昭和16年4月までに520件の日本標準規格（JES）が制定されている。JES第10号「耐火煉瓦」は大正13年3月27日決定、同14年9月18日告示された。この10号の内容は耐火煉瓦の定義をSK26以上のものとし。並型標準寸法を215×115×65mmとした。寸法公差を長さおよび幅において±1.5%、厚さにおいて±2.5%とし、耐火度試験の方法を示している。並型の標準寸法については問題が多く、昭和15年6月18日決定、同17年3月18日改正により230×114×65mmとなった。」（p.97、SKは耐火度、JIS規格でも同寸法）とある。しかし、当時の事情について竹内氏の引用した高橋義郎の調査報告によれば、「（前略）斯くの如き情勢下に規格を定めることは余程困難な点があったと想像する。（中略）耐火物に関してはJES10号のみで規格としては何等発展をみせず並型の規格の如きも有名無実であった（中略）」（p.100）とある。高橋報告には、主な並型の寸法が示されており、新たな規格が受け入れられなかったようである。

東京型 7.5×3.6×2（寸）、英国型 9×4.5×2.5（吋）、3吋英国型 9×4.5×3（吋）、純独逸型 240×120×70（耗）、独逸式東京型 230×110×60（耗）

出土遺物は、JES第10号「耐火煉瓦」の寸法に該当しないが、並型の寸法をセンチに換算すると、1寸を3cmで換算した場合「東京型」の寸法にはほぼ合致する。高橋報告には「シャモット煉瓦は東京型で800匁内外（高比重換算2.02）」とある。重量は耐火度によって異なると考えられるが、破損状態の重量が2,220gで規格の範囲内であったと考えられる。現在も「東京型」として、JIS規格型の227×110×60mmの耐火レンガが製造されており（三石耐火煉瓦株式会社開発部 高見茂樹氏による）本資料の製造年代は明確にできなかった。

#### 表土（VI - 23～28図）

遺跡北側で近現代以降の遺物集中区が確認されており、それを表土としてとり上げた。型紙摺りや銅版転写の磁器などから現代の遺物まで幅広い時期の陶磁器が検出されている。型紙摺りは明治10年代から始められ、明治30年代以降次第に銅版転写にかわられていく（新宿区遺跡調査会 1996）。型紙摺りや銅版転写の磁器、昭和初期や第二次大戦後の陶磁器など僅かなまとまりを持ちつつ検出されている。統制番号が付されているものも一点確認されている。

1～18は磁器である。1～3は碗である。1は型紙摺りの碗である。コバルトで4分割に型紙摺りされている。菊・青海波。見込み松竹梅。2は銅版転写の碗である。内外面共に模様が付けられている。3は色銅版転写の湯飲みである。4は型紙摺りの蓋である。内外面ともコバルトで3分割に型紙摺りされている。5は中央部が窪んでおり、托子。高台内銘有り。

6～17は坏である。6は見込みに「近衛歩兵 高木泰三」と書かれている軍坏。近衛歩兵は、明治24（1891）年近衛師団が編成される。天皇や皇居の警護に当たりながら各地の戦いに参戦した。昭和20（1945）年の第二次世界大戦終結により解散。全国から徴兵された中から選抜された。7は金彩

で見込みに「住友銀行 廣島支店竣工記念」と書かれている。昭和3（1928）年に場所を移転しておりその時の竣工記念か。8は金彩で見込みに「京都 本願寺」と書かれている参拝記念か。9は金彩で見込みに「金婚」高台内に「西村」と書かれている。10～12は3個組み物か、金彩でそれぞれ異なる和歌が書かれている。13は金彩で見込みに円の中に鷹の羽を二枚重ねたいわゆる「丸に違い鷹の羽」の家紋が描かれている。「丸に違い鷹の羽」は浅野氏の家紋ではあるが、上方には上絵で「天目山」と書かれている。天目山は山梨県にある武田氏が滅んだ場所であり、いくつかの寺や温泉もある。観光地の土産物であろう。14は「宗吾霊 参拝記念」千葉県成田市にある鳴鍾山東勝寺宗吾霊堂に参拝した記念。義民佐倉宗吾が訴状を掲げている図が上絵で描かれている。15は見込みに赤十字が入られている。高台内は○に「ハ」の刻印が刻まれている。16は口縁部が外反している。見込みに金彩で「慶」と書かれている。17は金彩で外側口縁部に「□京寺町超□寺東□再□□」と書かれている。18は洋食器のカップ&ソーサーのカップ。丸で囲まれた「KISUSUI」の金色の裏印あり。菊水製陶社製のカップではないかと思われる。口唇部に銀色で1本線が巡らされている。

19～23は陶器である。19は小坏。底部に「清山」の銘有り。20は褐釉インク瓶。コルク栓。胎土は灰白色で高台脇に面取りが施されている。肩から頸部に掛けて「く」の字状に屈曲している。口唇部には注ぎ口が付けられている。ここから小さい入れ物に移し替えて使われていた。篠崎インキ製造株式会社の陶器製12oz（約2合）インク瓶。胴部下半に「Shinozaki s. Champion Ink TOKYO」の刻印あり。同社では、他にガラス製インク瓶「RIGHT INK」を製造している。東大構内の遺跡ベンチャープラザ地点（東京大学埋蔵文化財調査室2008）遺構外一括からは同社の陶器製24ozインク瓶が検出されている。12oz瓶と同じ大きさの同様の刻印が押されている。21はミッキーマウス顔型の蓋付き容器である。蓋にあたる部分の成形法は型押し成形で身を受ける部分は別の粘土を貼り付けている。身の底面は型打ち成形、側面は別の粘土を貼付し成形している。蓋を受ける部分と高台は無釉である。蓋には上下中央に径4mmの穿孔が施され、身と蓋の内面は指頭押圧痕が確認出来る。彩色は黒と朱色の二色である。底面には二行で「意匠登録 第六二九〇三號」と押印され、左となりには凹凸の少ない印で「〇〇登録」と陰刻されている。ミッキーマウスは1928年製作された『蒸気船ウイリー』に登場し人気となり、日本には翌年1929年に当時の阪和電気鉄道会社の「天恵の楽園」のパフレットに用いられ人気をえるとある。出土したミッキーマウスの顔の表現は1930年代のものと思われる。「意匠登録62903」とあるため、昭和7（1932）年頃のものであろう。22は陶器湯たんぽ。黒釉。かまぼこ形。口部分は、貼り付けられている。細かな装飾は見られない。23はガラスの化粧クリーム瓶の代替として作られた陶器瓶で統制番号が付けられている。底部に緑色で「瀬」と番号「32？」（3桁）が釉の下にゴム版で入れられている。「瀬」は瀬戸陶磁器工業組合の略であろう。口縁部にはガラス瓶のスクリュー栓の名残のような線が付けられているが、釉がもたついで間を埋めており実際には機能していなかったと思われる。

24は土製の人形。人の顔をしたもので、長髪に長い髭をつけ表情は鋭い。型押し成形で器壁は厚く口は穿孔して表現している。白の彩色痕が確認される。欠損が多く全容は確認できない。

25～27は型抜き遊びの磁器製の道具である。成形法は江戸時代のものとは異なり、裏面は中空（箱状）で表面の文様は凸形状になった型を押して成形したと思われる。表裏に指頭押圧痕はみられない。表面には僅かに彩色したあとが観察される。因みに第二次大戦後のものとは類似するが裏面は中実で平坦である。25は自転車、26は気球、27はキノコである。凹型の中央に彫られた文様は当時の流行を反映しているものが多い。江戸時代からある玩具で現在でも素材は異なるが存在する玩具である。江戸時代のものはめんがたといわれ、素焼きの土器で楕円形を呈している。東京大学構内遺跡

工学部14号館地点（御先手組）のSK140（18C後葉～19C中葉）から「鍾馗」「象」、SK337（18C後葉～19C前葉）からは「鍾馗」「烏帽子猿」が出土している。めんがたの文献資料は天保元（1830）年に喜多村信節が著した『喜遊笑覧』と嘉永6（1853）年喜多川守貞の『守貞謾稿』がある。『守貞謾稿』は享保5（1720）年に書かれた目附絵を載せている。目附絵には小売り商人十六種が描かれておりその一つに「めんがた大坂下り」と表記されめんがたを商っている絵が描かれている。第二次大戦後から1970年代前半までは型抜き遊び道具はカタ屋として子供たちに親しまれていた。

28～33はガラス瓶。28はメンソレータム。色調は白色不透明。円筒形。スクリュー栓。口唇部から底部まで左右に成形の型痕が見られる。底部に「MENTHOLATUM REC. TRADE MARK」の陽刻のエンボスがある。近江兄弟社がアメリカのメンソレータム社から日本での販売権を得て大正9（1920）年から発売された。昭和3（1928）年大阪朝日新聞の広告では「家庭常備薬化粧外傷薬」として発売している。29は柳家の化粧クリーム瓶。色調は白色不透明。スクリュー栓。口唇部から底部まで左右に成形の型痕が見られる。底面に柳家の商標（源氏香図文）が陽刻のエンボスで付されている。柳家は1615年創業の老舗。1920年から近代化粧品を作り始める。30は色調は白色不透明。横向きに口が付けられている。口の下の窪んだ部分の中央部に成形の型痕が見られる。僅かに表面に底部に「Odol」脇に「R328」の陽刻のエンボスあり。社名などは入っていない。形態の似ているもので、色調は緑色透明で「◇」（ヒシエス）「Odor」の陽刻のエンボスが入っているものがある（MIHO MUSEUM 2006）。この瓶自体もおそらく三共商店の口内消毒薬ではないかとしているが、デザインをまねた養毛剤「ヨーモトニック」の可能性もあるとしている。三共商店の口内消毒薬ならば大正5（1916）年から昭和12年頃のものであろうとしている。31は牛乳瓶。1合瓶。色調は無色透明。機械栓。口縁部の下部に窪みが2カ所あり金属が残っている。なで肩で首が長い。口唇部下から底部まで左右に成形の型痕が見られる。瓶には全体にゆがみや、僅かにあわみみられる。「無菌全乳」「弥生舎」の文字が陽刻のエンボスで付されている。汐留Ⅲ遺跡から出土している牛乳瓶と生産者名以外の形態や「無菌全乳」の文字など非常に酷似しており、同じところで制作された瓶かもしれない。牛乳は当初量り売りで大きなカンから柄杓で汲んで配られていた。明治22（1889）年頃からガラス瓶の使用が始まった。明治33（1900）年にはガラス瓶が義務づけられ、大都市では口に紙を巻いて販売されていたものから機械栓が主流となっていった。この機械栓も大正末頃には王冠栓になっていった（桜井2006）。また、明治24年に「牛乳営業取締規則」で「純乳」と「脱脂乳」の種類別を表示するよう義務付けられたが、明治33（1900）年には、牛乳の種類が「全乳」と「脱脂乳」に変更された。この瓶には「全乳」の文字が付けられており、明治33（1900）年以降に作られたものであることがわかる。また、大正10（1921）年に度量衡法により、内容量の表示が義務づけられているが、この瓶には内容量の表示がないため大正10（1921）年までのものである可能性が高い。本地点の近くに、「弥生舎」と名付けられ、射的会の表彰、酒宴が催された迎賓施設がありそれに関連するものではないかと考えられていた（原 2006）。しかし、この弥生舎は増改築されて明治20年代には浅野侯爵邸となったことがわかっている。この牛乳瓶の方が年代的に新しく、名前の関連性は不明である。32はビール瓶（?）。色調は茶色透明。肩部の形態は「いかり肩」で、首部が細く長い。高さ24.7cm。口縁部に筋が入る。底部は大きく窪む。33は色調は青色透明。全面に気泡が見られる。胴部には横方向の成形痕がみられ、口縁部には偏りが見られる。口唇部は押しつけて平らにしている。底部には大きな「星」の陽刻のエンボスが見られ、ほぼ中央に位置している。

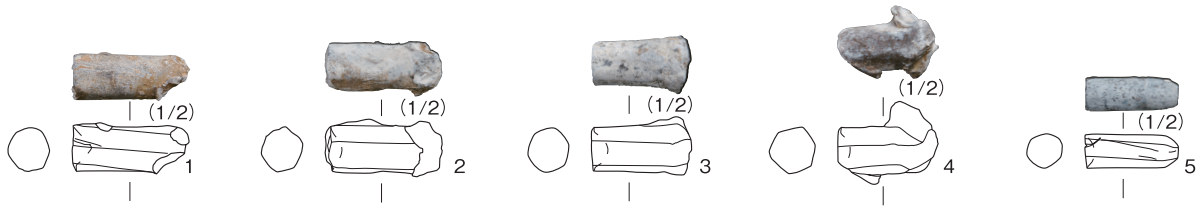
34は歯ブラシ。材質は家畜哺乳類（ウシもしくはウマ）の長骨緻密質部分。一般的には牛骨を使っていたようである。長さ14.5cm。植毛孔が縦に4列あけられている。孔は貫通していない。上端部に

銅製の釘が打ち込まれている。ブラシが植えられている面の柄部分に商標のようなものが刻まれているが不明。

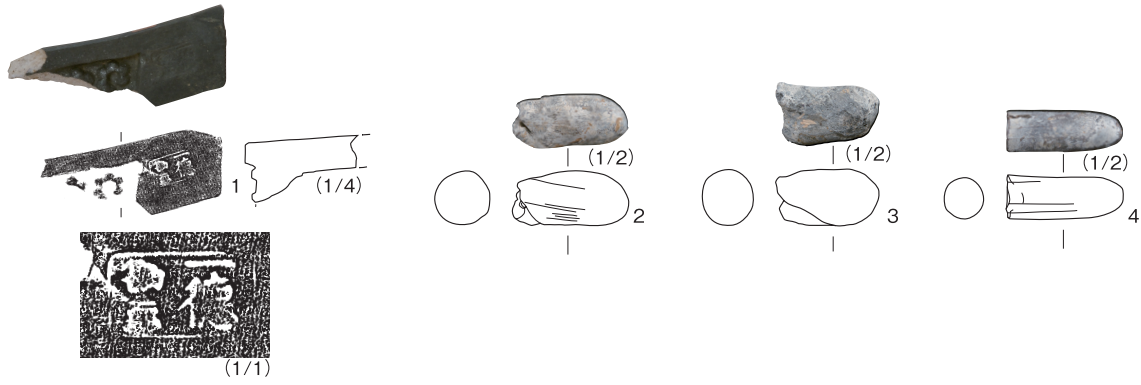
35～40は瓦。35は鬼瓦。中心部を残し両側を欠く。円の中に鷹の羽を二枚重ねたいわゆる「丸に違い鷹の羽」の紋様をあしらう。羽根には小さな渦巻きが確認される。「丸に違い鷹の羽」は浅野氏の家紋であり、特に江戸時代浅野本家は羽根に渦巻きが入っていたという（武家家伝HP）。家紋部は上端が前に飛び出し斜めに接合される。平面観はT字状を呈し、裏には紋様部と垂直に接合する突出部が設けられる。突出部には横方向に穴が貫通する。また突出部の付け根には左右一対の縦方向の穴が設けられこれは奥で横につながっている。縦方向の穴は深さ約1.5cmで段をなすが、これは棒状工具を用いて穿孔した痕跡と推察される。何れも屋根に固定する際に紐をかけ緊縛するための穴だと考えられる。裏面は横ナデ、突出部は縦ナデ整形される。また江戸期の瓦と同様に角は何れも面取りされているが、整形は荒い。表面は黒、胎土は灰褐色を呈する。36は菊丸瓦。破損のない唯一の完形品である。丸い紋様部には三本の横線を引くいわゆる「丸に三つ引き」の紋様をあしらう。この紋様は浅野家の家紋の中には認められず、この遺跡から出土した意義は詳細に検討される必要がある。上下は判断し難い。平面観はT字状を呈し、裏には紋様部と垂直に接合する長めの突出部が設けられ、固定する際の緊縛用と推察される穴が横方向に貫通する。穴は片方からのみあけられている。角には面取りが施される。紋様部の表と側面は黒色、裏面と突出部は灰褐色を呈する。37は軒棧瓦と推察される。軒丸部のみだが裏面に軒平部と接合されていた痕跡を残す。8個の連珠がある三つ巴文。同じ向きの三つ巴文は同じTS表土からもう2点出土している。上下端が飛び出しややひずんだ形状をしている。表面には転写された斜め方向の範傷が明瞭に見られる。他の瓦資料と比べ雲母は顕著でない。瓦当表面は黒、裏面は灰白色で、胎土は灰色を呈する。38は軒棧瓦。軒丸部、軒平部ともに無紋。軒丸部は他の三つ巴文の軒棧瓦と比べ二周りほど大きい。丸くふくらむことなく、平坦ないわゆる石もち軒棧瓦である（坪井1977）。また側面の面取りが丁寧に行われ、凸面との間に稜をつくる。断面を観察すると筒部の胎土は密ではなく空隙が目立つ。表面には雲母が顕著である。表面は黒色、胎土は灰色を呈する。39は軒棧瓦と推察されるが軒平部のみで軒丸部を欠損しており、軒平瓦の可能性を残す。加藤氏の分類にある江戸式の範疇に含まれる紋様だと判断されるが、この資料に見られる中心飾りは上端が二股に分かれ、加藤氏や金子氏の分類に取り上げられていない。中心飾りの蔓部はK、子葉は1に分類される。他の瓦資料と比べ雲母は顕著でない。表面は黒色、胎土は白灰色を呈する。同範資料が同じTSA表土からもう2点出土している。40は棧瓦。完形ではないが大型の破片である。全体的に風化する。裏面広端寄りに櫛書きによる横方向の溝が11本確認される。また「○部5号」と読める刻印が施される。表面は磨きが施され、狭端部凸面側は角張らずなだらかに成形されている。棧部と平部の境もなだらかに成形されている。色調は表面が黒色、胎土は褐色で、芯が灰色を呈する。

#### 註

- 1 原祐一、小泉好延、中野忠一郎、松崎浩之 2006 「武田先端知ビル建設に伴う発掘調査で出土した弥生時代のガラスと明治時代の弾丸のPIXE分析 付編—浅野地区の史跡と文京区弥生の歴史」 東京大学大学院工学系研究科原子力国際専攻、東京大学大学院理学系研究科地球惑星科学専攻、AMS研究会『第9回AMSシンポジウム』 pp.35 - 40
- 2 磯村照明 2003 『幕末期から明治初期に輸入使用されていた弾薬類』 J.C.C.弾薬研究センター pp.10 - 20
- 3 Ken Elks 1981 『Japanese Ammunition 1880～1945』 Collector Cartridges pp.4 - 5



SR 1



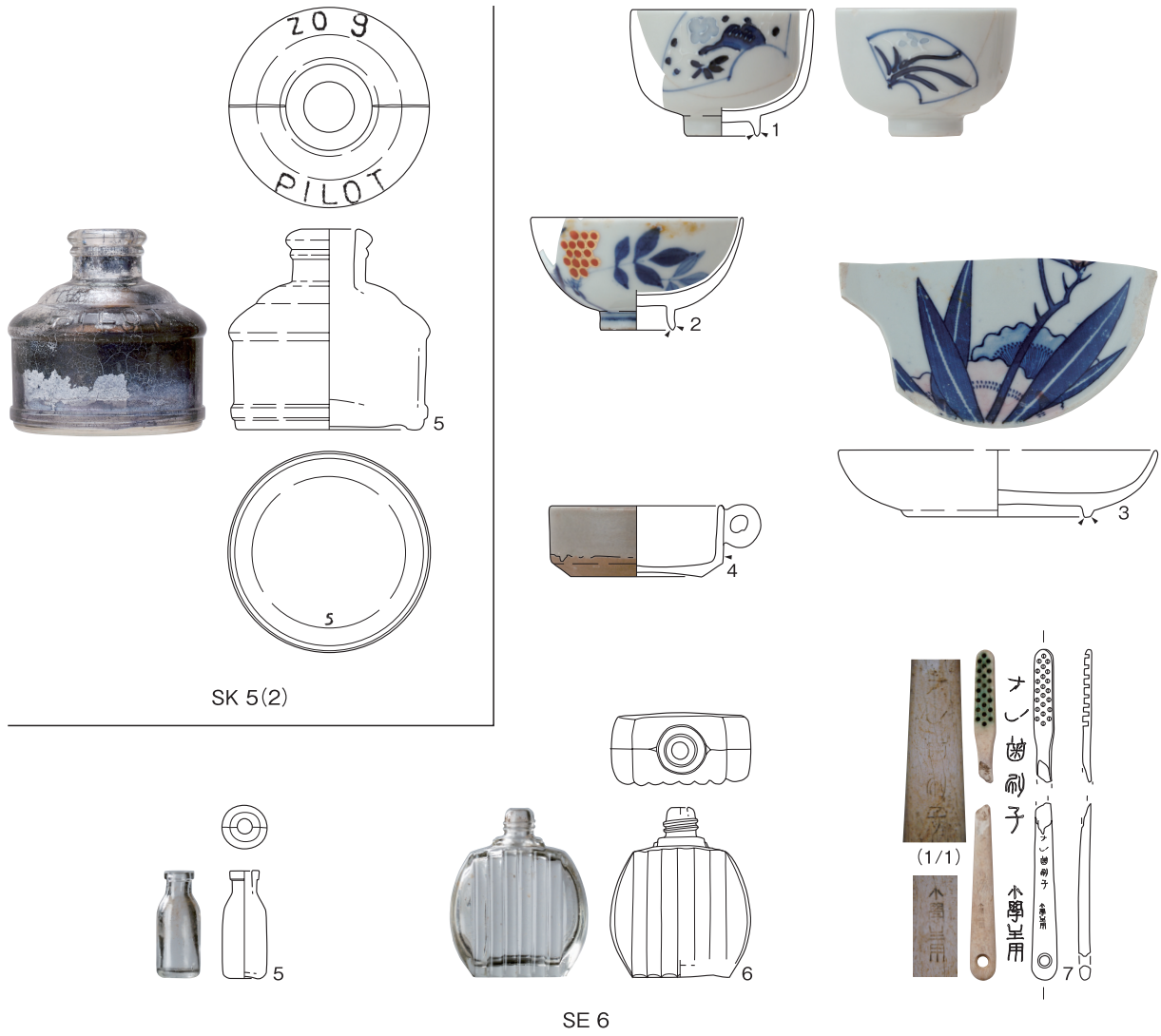
SR 2



SK 5(1)

(1/1)

VI-21図 SR1.SR2.SK5(1) 出土遺物

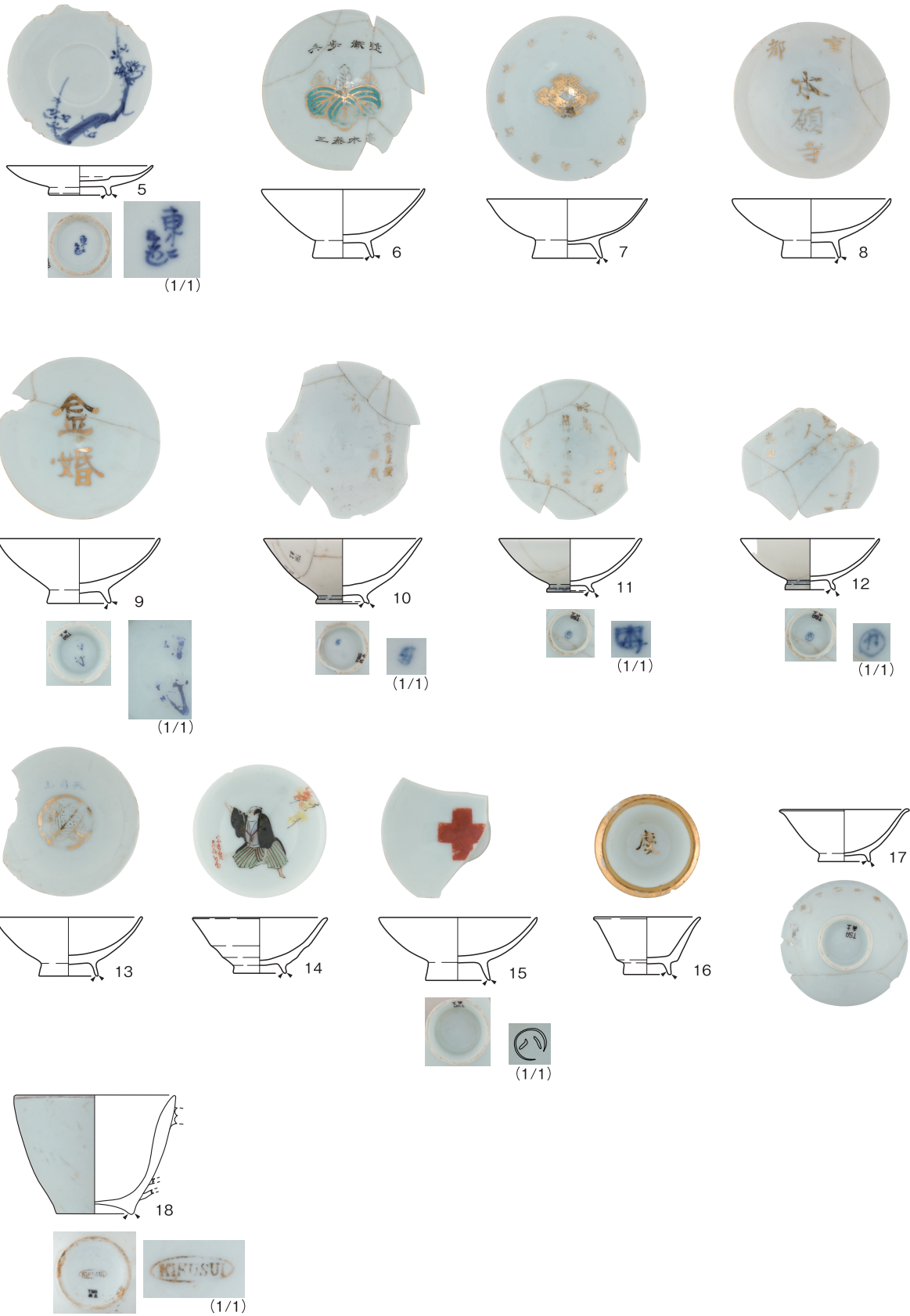


VI-22図 SK5(2).SE6.SK7(1) 出土遺物

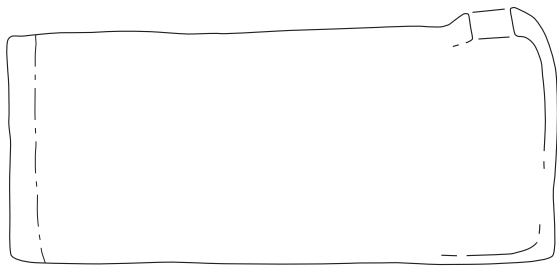
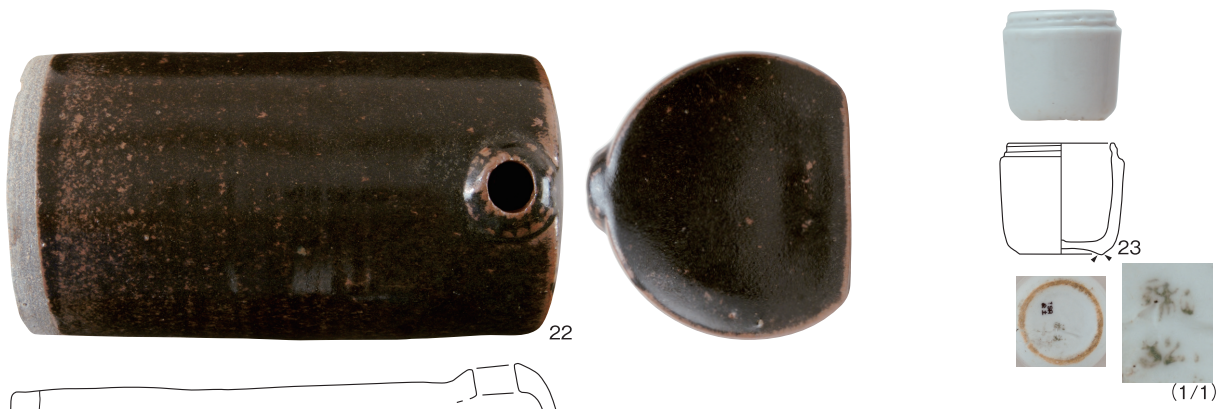
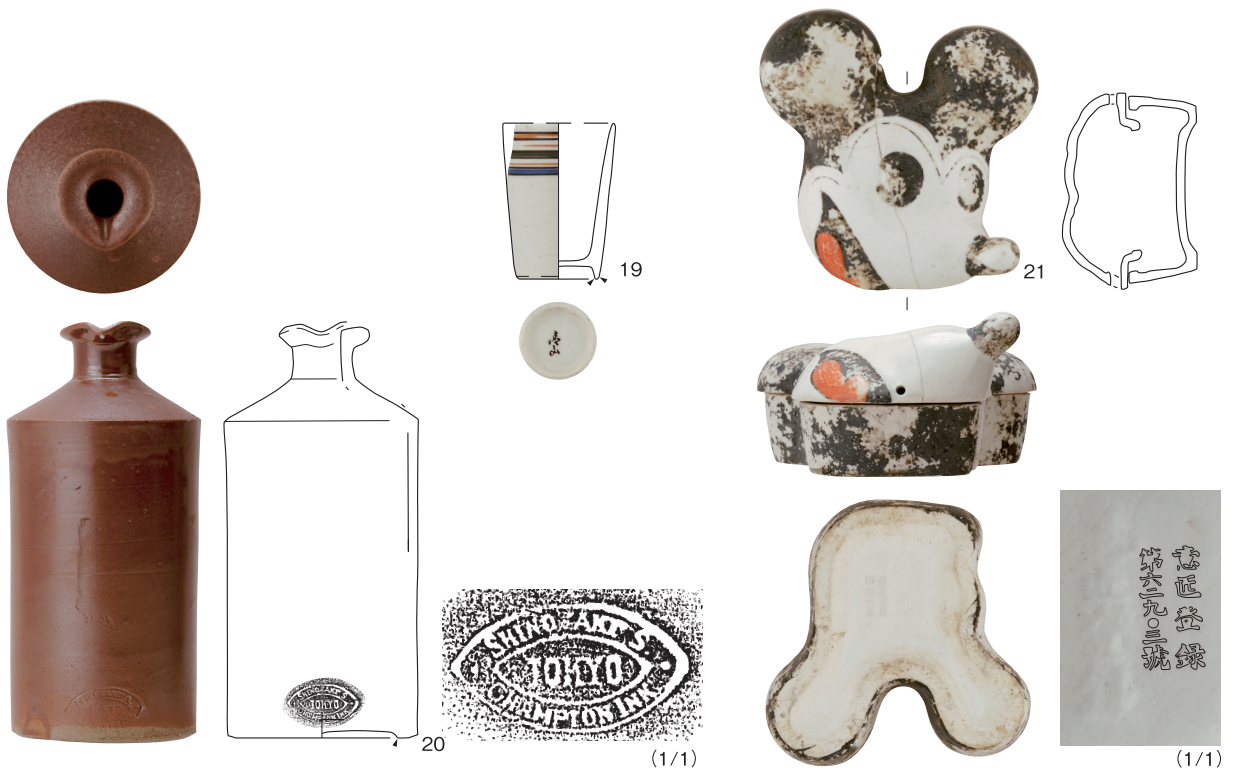




VI-23図 SK7(2).表土(1) 出土遺物

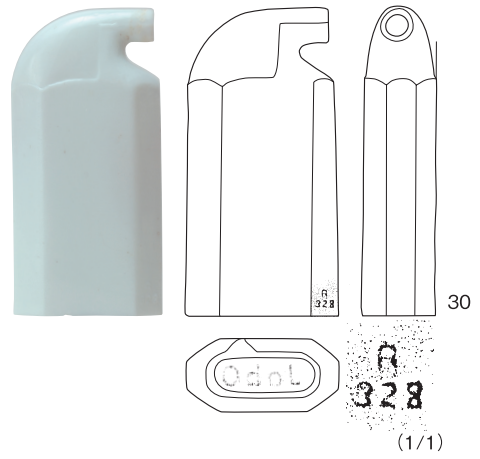


VI-24図 表土(2) 出土遺物



0 10cm

VI-25図 表土(3) 出土遺物



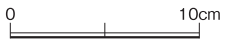
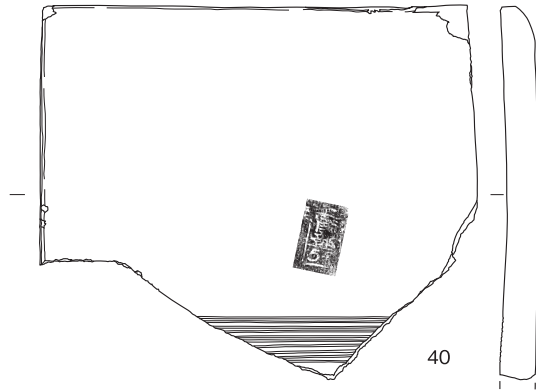
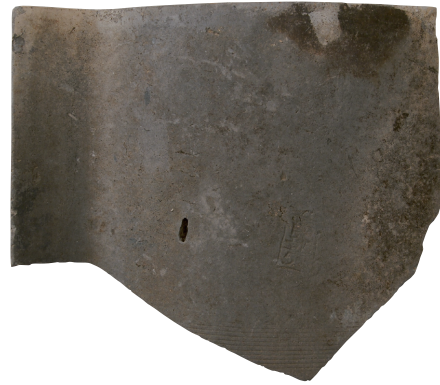
(x3)



VI-26図 表土(4) 出土遺物



VI-27図 表土(5) 出土遺物



VI-28図 表土(6) 出土遺物

## 第6節 動物遺体

武田先端知ビル地点より出土した動物遺体の内、魚類遺体の同定作業は野々村が中心に行った。その他の動物遺体の同定作業及びその後の報告の執筆までの一連の作業は阿部が行った。分析の結果、本調査地点から出土した動物遺体は、13群53点である（VI-5表・6表）。これらの資料は、すべて現場にて肉眼で確認のできたもののみを任意に採集したものである。なお、SK4から貝類が4種6点、魚類が1種1点出土している他は、すべて表土より出土したものである。

### 貝類遺体

貝類遺体は、5種7点が取り上げられている。その内、イタボガキの右殻1点のみ表土から出土し、それ以外はSK4より出土している。SK4からは、アサリ、ハマグリ、ウバガイ、シオフキガイが出土しており、ウバガイ以外は江戸湾（現東京湾）の干潟もしくは内湾砂底域に生息する種である。特にアサリとハマグリは、江戸遺跡でも比較的多く出土する種である。一方でシオフキガイは、江戸においては商品価値が低く、江戸遺跡からの一般的な出土事例もアサリやハマグリが大量に出土するところに含まれることが多い。このことから、その2種のどちらかを採集した際に混獲されそのまま共に持ち込まれたものであると報告者は推測している（阿部2003）。本調査地点のシオフキガイも同様の可能性が想定される。なお、ハマグリは、殻長30mmから40mmの「中型」の個体である。

ウバガイは、現在、茨城県鹿島灘以北の沿岸域に生息する種であり、東京湾内や房総半島沿岸以南では採集することはできない。今のところ江戸遺跡内において、食物残渣としてまとまって出土した事例はない。唯一、大量に江戸遺跡で出土している事例として、新宿区坂町遺跡（1次調査）第4号遺構のものがあるが、それは食物残渣ではなく、“漆（溜）パレット”に使用されたものである（財団法人新宿区生涯学習財団2002）。なお、本資料は、内面に漆の付着がなく“漆（溜）パレット”であったとは考えにくい。“漆（溜）パレット”に用いる為に持ち込まれ、未使用のまま廃棄されたことも想定されるが、本調査地点からは左殻1点のみしか出土していないことから、詳細な検討は控えることにする。

SK4以外から唯一出土したイタボガキの右殻は、内面の蝶番部分にゴカイ類の棲管と思われるものが付着していることから、採集時にすでに死殻であったと考えられ、食物残渣ではなく、他のもの（マガキなど）を採集した際に混獲され、そのまま一緒に持ち込まれたものであると推測される。

### 魚類遺体

#### (1) 分析方法

魚類遺体の分析方法は樋泉（2003）に基づく。資料から主上顎骨・前上顎骨・歯骨・角骨・方骨・前鰓蓋骨・主鰓蓋骨・舌顎骨・椎骨を抽出して「同定用資料」とし、それ以外の部位は「同定対象外資料」とする。しかし、分類群によって、「同定用資料」以外に同定可能な特徴的な部位を有するものは、それらも適宜、同定に用いる。また、「同定用資料」のなかで、残存状況が悪く、同定することが不可能であったものは「同定不可」とする。

## (2) 分析結果

魚類遺体は、6群32点が取り上げられている。なお、スズキの右主鰓蓋骨が1点、SK4から出土している他は、すべて表土から出土したものである。

表土の資料において、同定することのできた資料は、31点中19点(61%)であった。最大個体数では、スズキ・スズキ属が最も多く7点で、同定された資料の中で38.9%を占める。次いで、マダイ・マダイ亜科が5点27.6%、ヒラメが2点11.1%出土しており、その他に、クロダイ、イシダイ属、タイ型、ハタ科がそれぞれ1点ずつ(5.6%)出土した(VI-7表)。

タイ科とスズキの資料には、包丁による切断痕が認められる。特にマダイの前頭骨は、縦(矢状方向)に切断された面を有するだけでなく、その前・後にも切断面を有することから、現在の調理方法に照らし合わせると、潮汁やあら煮にされたものであることが推測される。

## 鳥類遺体

鳥類遺体は、すべて表土から出土している。同定された資料はニワトリとキジ科であるが、キジ科と同定されたもののほとんどがニワトリである可能性がある。ニワトリ及びキジ科は、サイズでヤマドリ標本とほぼ同じサイズのもの、ヤマドリ標本より明らかに小さいもの、逆に大きいものの少なくとも3つに分けることができた。

また、両端が欠損しているために、同定することのできなかつた左手根中手骨は、少なくともキジ科ではない。

なお、鳥類遺体の計測定義は、奈良文化財研究所埋蔵文化財センター(2005)に基づいている。計測結果は、VI-8表に示す。

## 哺乳類遺体

哺乳類遺体は、表土からネコの左大腿骨が1点出土したのみである。

## 引用・参考文献

阿部常樹 2003 「近世遺跡出土の貝類遺体とその採集方法について—東京都新宿区市谷砂土原町三丁目遺跡を例に一」『奈和』第41号 奈和同人会 (p.27-48)

新宿区生涯学習財団 2002 『東京都新宿区坂町遺跡』

樋泉岳二 2003 「明石町遺跡の魚類遺体群」『東京都中央区 明石町遺跡』明石町遺跡調査会 (pp.172-180)

奈良文化財研究所埋蔵文化財センター 2005 『埋蔵文化財ニュース120 環境考古学5 鳥類骨格図譜』



軟体動物門 Phylum MOLLUSCA

- 二枚貝綱 Class Bivalvia
- カキ目 Order Ostreoida
  - イタボガキ科 Family Ostreidae
  - イタボガキ *Ostrea denselamellosa*
- マルスダレガイ目 Order Veneroida
  - バカガイ科 Family Mactridae
  - シオフキガイ *Mactra veneriformis*
  - ウバガイ *Pseudocardium sachalinense*
  - マルスダレガイ科 Family Veneridae
  - アサリ *Tapes (Ruditapes) philippinarum*
  - ハマグリ *Meretrix lusoria*

- 属種不明 gen. et sp. indet.
- タイ科 Family Sparidae
- クロダイ *Acanthopagrus schlegeli*
- マダイ *Pagrus major*
- イシダイ科 Family Oplegnathidae
- イシダイ属 *Oplegnathus sp.*
- カレイ目 Order Pleuronectiformes
- ヒラメ科 Family Paralichthyidae
- ヒラメ *Paralichthys olivaceus*

脊椎動物門 Phylum VERTEBRATA

- 硬骨魚綱 Class Osteichthyes
- スズキ目 Order Perciformes
- スズキ科 Family Serranidae
- スズキ *Lateolabrax japonicus*
- ハタ科 Family Serranidae

- 鳥綱 Class Aves
- キジ目 Order Galliformes
- キジ科 Family Phasianidae
- ニワトリ *Gallus gallus var.domesticus*
- 属種不明 gen. et sp. indet.

- 哺乳綱 Class Mammalia
- 食肉目 Order Carnivora
- ネコ科 Family Felidae
- ネコ *Felis catus*

VI-5表 工学部武田先端知ビル地点 出土動物遺体種名表

遺構名	時期	分類群		部位	左	右	数	備考
		綱	綱より下位					
SK 4	19c後?	二枚貝	アサリ	殻	左	2	①殻長29.56mm, 殻高21.96mm/②殻長32.27mm, 殻高23.90mm	
			ハマグリ	殻	左	1		
			ウバガイ	殻	左	1	外韌帯溝長: 10.16mm	
			シオフキガイ	殻	—	1	破片資料。	
		硬骨魚	スズキ	主鰓蓋骨	右	1	関節部分周辺が欠損。	
表土	近代	二枚貝	イタボガキ	殻	右	1	殻長85.56mm, 殻高110.13mm。蝶番部分にゴカイ類の棲管とおもわれるものが付着していることから、採集時には死殻であったと考えられる。	
		硬骨魚	マダイ	前頭骨	—	1	前端、後側、右側それぞれに切断痕有り。	
				基蝶形骨	—	1		
			マダイ亜科	舌顎骨	右	1	下方が切断され欠損。	
				口蓋骨	左	1	上方が斜めに切断されて欠損。さらに切断面に平行する刀傷が一条ある。	
			クロダイ	前頭骨	—	1	後側に縦に切断面がある。後半部分が欠損。	
			イシダイ属	前上顎骨	左	1	縦(矢状方向)に切断されている。右側が欠損。	
			タイ型	尾椎	—	1	椎体長15.9mm	
			スズキ	主鰓蓋骨	左	1	縦に切断され、関節部分を含む前半部分が欠損。	
					右	1	上面後方から下面前方へ約45度の角度で切断されている。前半部分が欠損。	
			スズキ属	主上顎骨	右	1		
				歯骨	左	1		
				角骨	右	1		
		ヒラメ	腹椎	—	2			
			前上顎骨	右	1			
		ハタ科	歯骨	右	1			
			角骨	右	1	後端関節付近のみ残存。		
		同定不可	主上顎骨	右	1	関節部分が欠損。		
		同定対象外	鱗棘	—	4			
			肋骨	—	1			
			不明	—	6	内4点が破片資料。		
		鳥	ニワトリ	上腕骨	左	1	遠位欠損。	
					右	1	完存。	
	左			1	近位欠損。			
	右			1	両骨端欠損。小型のニワトリ			
	手根中手骨		右	1	小型のニワトリ。直良ヤマドリ標本よりも小型。			
キジ科	鳥口骨		右	1	遠位欠損。			
	尺骨		左	1	遠位欠損。直良ヤマドリ標本と同サイズ			
			右	2	遠位欠損。直良ヤマドリ標本と同サイズ			
	大腿骨		左	1	近位から骨幹中央にかけて欠損。			
同定不可	脛足根骨		右	1	遠位欠損。			
	脛足根骨	左	2	両骨端欠損の為、同定不可。				
	手根中手骨	左	1	両骨端欠損の為、同定不可。キジ科ではない。				
哺乳	ネコ	大腿骨	左	1	成猫。両骨端が欠損。全長105mm±			

VI-6表 工学部武田先端知ビル地点 出土動物遺体一覧

遺構名	分類群	最小		最大	
		数	比率	数	比率
表土	マダイ・マダイ亜科	2	28.6%	5	27.8%
	クロダイ	1	14.3%	1	5.6%
	イシダイ属	1	14.3%	1	5.6%
	タイ型	0	0.0%	1	5.6%
	スズキ・スズキ属	1	14.3%	7	38.9%
	ヒラメ	1	14.3%	2	11.1%
	ハタ科	1	14.3%	1	5.6%
合計		7		18	

VI-7表 表土出土魚類遺体の最小・最大個体数

			GL	Bp	Bd	Dip	Did	L	
表土	ニワトリ	上腕骨	左		17.9				
		右	87.2	24.0	19.0				
	キジ科	手根中手骨	右	34.4	10.4			7.1	33.1
		大腿骨	左			14.7			
		脛足根骨	右				14.0		

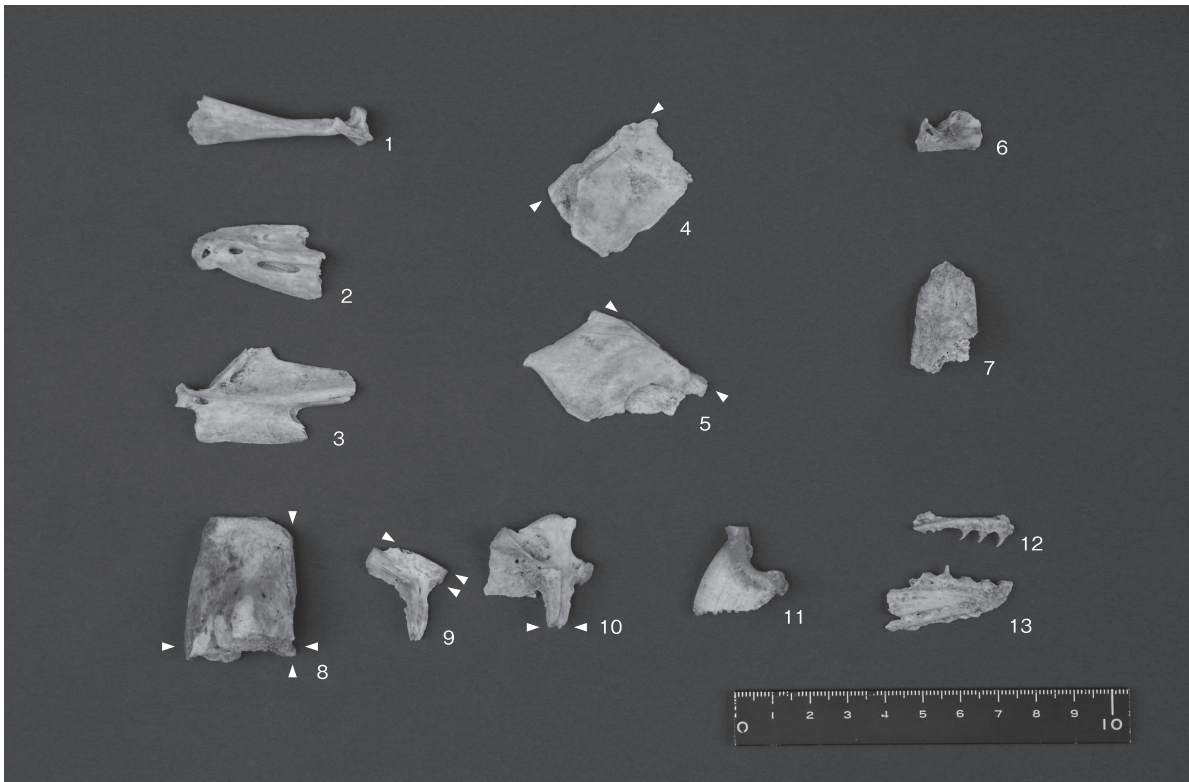
【凡例】 GL：全長， Bp：近位端最大幅， Bd：遠位端最大幅， Dip：近位端関節面最大幅， Did：遠位端関節面最大幅， L：大手中骨長（単位：mm）

VI-8表 鳥類遺体計測表



VI-29図 武田先端知ビル地点出土貝類遺体

1. イタボガキ(右) 2. ウバガイ(左) 3. シオフキガイ(右) 4. アサリ(左) 5. ハマグリ(左) (1. 表土 2~5. SK4)



VI-30図 武田先端知ビル地点表土出土魚類遺体

1~5. スズキ(スズキ属) [1. 主上顎骨(右) 2. 歯骨(左) 3. 角骨(右) 4・5. 主鰓蓋骨(4.左 5.右)] 6. ハタ科 角骨(右) (▶ ◀ 切断面)  
 7. クロダイ 前頭骨 8~10. マダイ(マダイ亜科) [8. 前頭骨 9・10. 舌顎骨(右)] ◀ ◀ 切痕  
 [12. 前上顎骨(右) 13. 歯骨(右)]



VI-31図 武田先端知ビル地点表土出土鳥類遺体

1~10. キジ科(ニワトリ) [1. 鳥口骨(右) 2~4. 上腕骨(2.左 3・4.右) 5~7. 尺骨(5.左 6・7.右) 8. 手根中手骨(右) 9. 大腿骨(左)  
 10. 脛足根骨(右)] 11. ネコ 大腿骨(左)

## 第7節 武田先端知ビル地点の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

武田先端知ビル地点は、武蔵野台地南東部の本郷台（M2面）上に位置する東京大学構内に発掘調査区が設定されている。本遺跡周辺は、古くは向ヶ岡弥生町と呼ばれ、「弥生土器」発祥の地として知られている。江戸時代は水戸藩邸、明治時代初期は警視局用地および射的場、東京共同射的会社の射的場、明治20（1887）年には浅野邸となり周辺部が宅地化した。昭和期に東京大学用地となり現在に至る。本遺跡は、2001年6月4日より開始された発掘調査により、遺構として射的場（以下SR2）の出入口が確認され、それに伴う弾頭が出土している。その他に「弥生舎」銘の牛乳瓶、浅野家家紋の鬼瓦などの近代の遺物が出土している。今回の分析調査では、SR2が廃棄されて宅地化される際の埋土の由来を検証するために、重鉍物分析と珪藻分析を実施する。また、調査区内の深掘で認められたローム層下位のシルト質粘土層および砂層から採取した土壌を対象に、その堆積環境推定を目的として珪藻分析を行う。

### (1) 試料

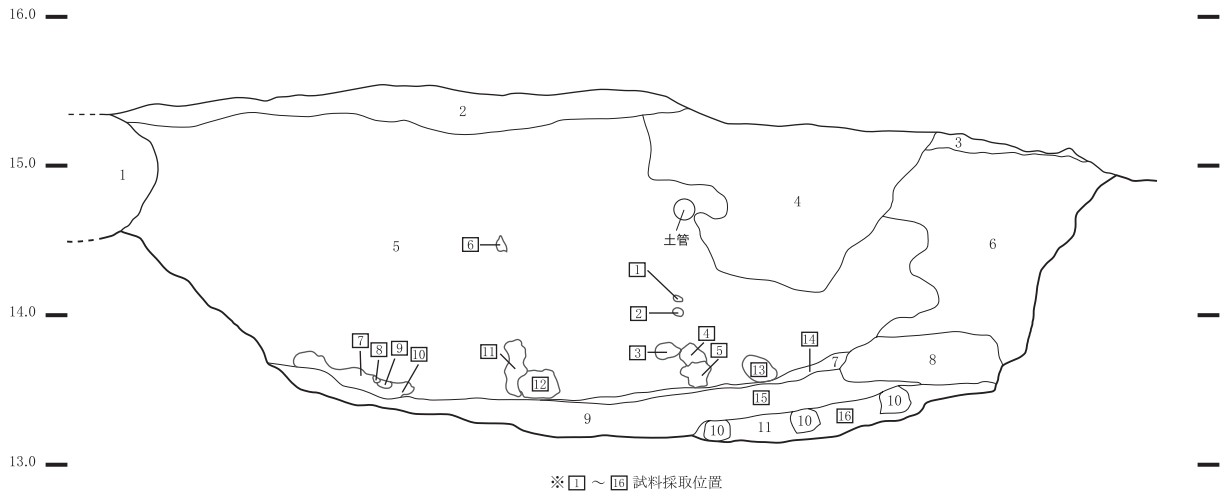
試料は、SR2の北東壁から採取した土壌16点と、深掘から採取した土壌15点である。採取試料の詳細をVI-32図と以下に示す。

#### <SR2>

SR2の北東壁では、埋土とされる堆積層が確認されている（VI-32図）。埋土は、下位からローム・灰色砂・黒ボク土母材と思われる暗灰色シルトで構成されるラミナ状の版築層（13・11層）、13層中にブロック状に含まれる暗褐色土層（12層）、灰色粗砂の薄層（11層と10層の間に一部堆積する）、黒ボク土・ロームに由来すると思われる暗褐色土層（10層）、上位の8層と類似するロームブロックを主体とする茶褐色土層（7層）、黒ボク土・ロームが混入している暗褐色土層（9層）、テフラブロックと思われるものを含む暗灰色砂質粘土層（8層下部に一部堆積する）、ロームブロックと粘土塊の充填層（8層）、4層と類似する灰色土と茶褐色土による盛土（6層）、瓦・レンガ・セメントなどで構成される層（5層）、6層と類似する灰色土と茶褐色土による盛土（4層）、ロームを主体とする茶褐色土層（2層）、レンガ・セメントを含む表土（1層）の順に堆積する。

試料は8層・8層下部に一部堆積する暗灰色砂質粘土層・11層と10層の間に一部堆積する灰色粗砂の薄層・11層・13層中から合計16点採取された。8層中からは、後述するTPと思われるブロック中から1点（試料番号1）、異なる褐灰色粘土ブロック中から各1点（試料番号2・6）、灰色粘土ブロック中から1点（試料番号4）、異なるロームブロック中から各1点（試料番号3・5・11・12・13）が採取された。8層下部に一部堆積する暗灰色砂質粘土層からは、暗灰色砂質粘土層上部と下部で各1点（試料番号7・10）、異なるテフラブロックから各1点（試料番号8・9）が採取された。11層と10層の間に一部堆積する灰色粗砂の薄層・11層・13層からは各層1点（試料番号14・15・16）が採取された。

これらの試料の中から埋土の由来を検証するために、ロームブロックと粘土ブロックを中心とした



VI-32図 SR 2試料採取位置図

試料番号1・3・5・11・15・16を対象に重鉍物分析、試料番号6・10・16を対象に珪藻分析を行う。

<深掘>

下位からXXII層～IX層の順に堆積する。試料は、最下部の灰色粘土質細砂層のXXII層で1点（試料番号15）、明灰色シルト質粘土層のXXI層から3点（試料番号12・13・14）、それより上位層では各層1点ずつ（試料番号11～1）採取された。これらの試料の中から、SR2の埋土と比較検討のために深掘下部に堆積した砂層～粘土層の由来を検証するため、深掘下部で採取された2点（試料番号14・15）を対象に珪藻分析を行う。

## (2) 分析方法

### (1) 重鉍物分析

試料約40gに水を加え超音波洗浄装置により分散、250メッシュの分析篩を用いて水洗し、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた粒径1/4mm～1/8mmの砂分をポリタングステート（比重約2.96に調整）により重液分離、重鉍物を偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定する。同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉍物」とする。「不透明鉍物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は、「その他」とする。

なお、今回は軽鉍物分についても概査を行い、特に火山ガラスの産状の確認を行った。火山ガラスの形態は、バブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破碎片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。

### (2) 珪藻分析

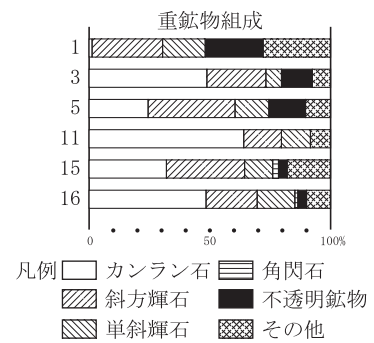
試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プレウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以

上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する。種の同定は、原口ほか(1998)、Krammer, K. (1992)、Krammer, K.& Lange - Bertalot, H. (1986、1988、1991a、1991b)などを参照する。

同定結果は、汽水生種、淡水～汽水生種、淡水生種順に並べ、その中の各種類はアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種についてはさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度(pH)・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。そして、産出個体数200個体以上の試料については、産出率1%以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の分布図を作成する。また、産出した化石が現地性の化石か異地性の化石か判断する目安として完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析にあたっては、汽水生種については小杉(1988)、淡水生種については安藤(1990)、陸生珪藻については伊藤・堀内(1991)、汚濁耐性については、Asai, K. & Watanabe, T. (1995)の環境指標種を参考とする。

試料番号	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	不透明鉱物	その他	合計
1	3	73	44	0	60	70	250
3	122	61	16	1	32	18	250
5	61	90	35	0	38	26	250
11	160	39	30	0	1	20	250
15	80	81	29	6	9	45	250
16	121	53	39	3	9	25	250

VI-9表 重鉱物分析結果



VI-33図 重鉱物組成

### (3) 結果

#### (1) 重鉱物分析

試料番号1: 変質粒である「その他」を除けば、斜方輝石が多く、これに中量の単斜輝石と不透明鉱物を伴い、微量のカンラン石が混在する。軽鉱物分中には火山ガラスは認められず、多量の斜長石により構成される。

試料番号3: カンラン石が多く、50%程度を占め、中量の斜方輝石と少量の単斜輝石、不透明鉱物を含む。軽鉱物分中には火山ガラスは全く認められない。

試料番号5: 斜方輝石が最も多く、30%程度を占め、これに中量のカンラン石と少量の単斜輝石、不透明鉱物を含む。軽鉱物分中には、バブル型、中間型、軽石型の各形態の火山ガラスが少量ずつ混在する。

試料番号11: カンラン石が非常に多く、70%近くを占める。他に少量の斜方輝石と単斜輝石が含まれる。両輝石の量比は、ほぼ同量程度である。軽鉱物分中には、極めて微量の軽石型火山ガラスが認められる。

試料番号15: カンラン石と斜方輝石がほぼ同量程度で多く、他に少量の単斜輝石と不透明鉱物および微量の角閃石が含まれる。軽鉱物分中には、極めて微量の軽石型火山ガラスが認められる。

試料番号16: カンラン石が最も多く、50%程度を占め、他に中量の斜方輝石と単斜輝石、少量の不透明鉱物および極めて微量の角閃石が含まれる。軽鉱物分中には、多量のバブル型火山ガラスが含まれる。

#### (2) 珪藻分析

結果をVI-10表・VI-33図に示す。珪藻化石はSR2の試料番号16のみで100個体以上産出する。産出分類群数は18属26種、完形殻の産出率は約50%である。以下、地点別に珪藻化石群集の特徴を述べる。

VI 工学部武田先端知ビル地点

種 類	生態性			環境 指標種	SR 2北東壁			深堀	
	塩分	pH	流水		6	10	16	14	15
<i>Cyclotella meneghiniana</i> Kuetzing	Ogh-Meh	al-il	l-ph	L,S	-	-	1	-	-
<i>Achnanthes minutissima</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	1	-	-
<i>Amphora montana</i> Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	-	2	-	-
<i>Anomoeoneis brachysira</i> (Breb.)Grunow	Ogh-ind	ac-il	l-ph	O,T	-	-	1	-	-
<i>Aulacoseira alpigena</i> (Grun.)Krammer	Ogh-hob	ac-il	l-bi	N,U	-	-	1	-	-
<i>Aulacoseira ambigua</i> (Grun.)Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-bi	N	-	-	1	-	-
<i>Aulacoseira cf. distans</i> (Ehr.)Simonsen	Ogh-hob	ac-il	l-bi	N,U	-	-	-	1	-
<i>Aulacoseira</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	1	1
<i>Caloneis aerophila</i> Bock	Ogh-ind	al-il	ind	RA	-	-	4	-	-
<i>Cyclostephanos dubius</i> (Fricke)Round	Ogh-ind	al-bi	l-bi		-	-	1	-	-
<i>Cymbella</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-	-	-
<i>Eunotia praerupta</i> var. <i>bidens</i> Grunow	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB,O	-	-	1	-	-
<i>Fragilaria</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-	-	-
<i>Gomphonema angustatum</i> (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	4	-	-
<i>Gomphonema gracile</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,U	-	-	2	-	-
<i>Gomphonema parvulum</i> Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	-	-	19	-	-
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	1	-	6	-	-
<i>Martyana martyi</i> (Heribaud)Round	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	1	-	-
<i>Navicula atomus</i> (Kuetz.)Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RA,U	-	-	1	-	-
<i>Navicula contenta</i> fo. <i>biceps</i> (Arnott)Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	-	-	5	-	-
<i>Navicula ignota</i> var. <i>palustris</i> (Hust.)Lund	Ogh-ind	ind	ind	RB	1	-	-	-	-
<i>Navicula mutica</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	2	-	22	-	-
<i>Neidium alpinum</i> Hustedt	Ogh-unk	unk	ind	RA	-	-	4	-	-
<i>Nitzschia amphibia</i> Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	S	-	-	1	-	-
<i>Nitzschia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	1	-
<i>Pinnularia borealis</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	-	18	-	-
<i>Pinnularia schoenfelderii</i> Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	-	9	-	-
<i>Pinnularia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	2	-	-
<i>Stauroneis obtusa</i> Lagerstedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	-	4	-	-
海水生種合計					0	0	0	0	0
海水～汽水生種合計					0	0	0	0	0
汽水生種合計					0	0	0	0	0
汽水～淡水生種合計					0	0	1	0	0
淡水生種合計					7	0	110	3	1
珪藻化石総数					7	0	111	3	1

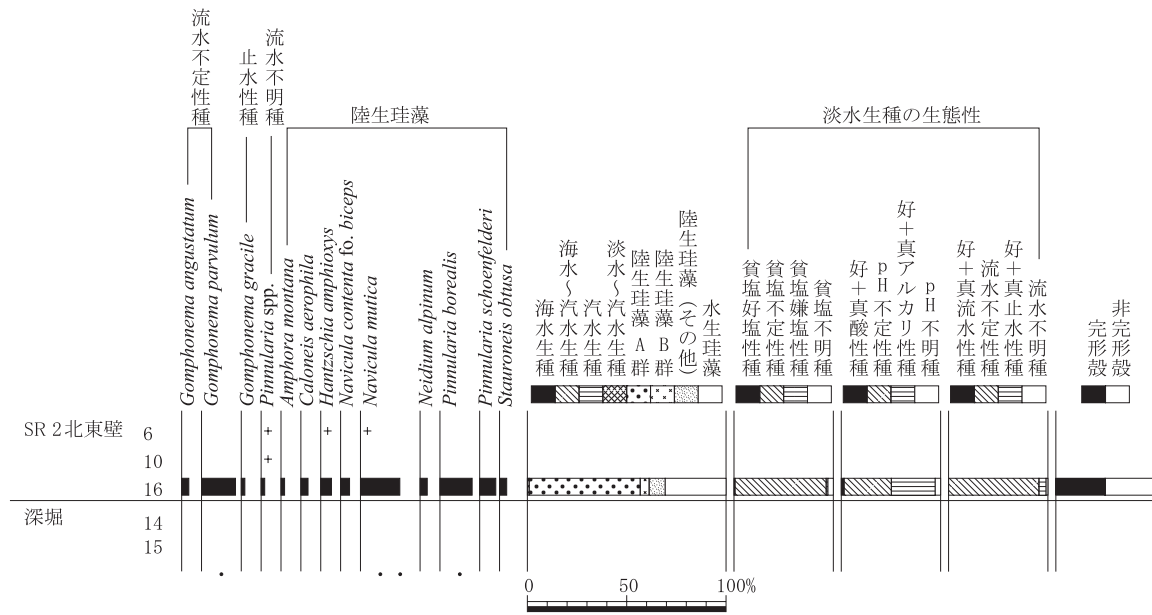
凡例

H.R.:塩分濃度に対する適応性	pH:水素イオン濃度に対する適応性	C.R.:流水に対する適応性
Ogh-Meh : 淡水～汽水生種	al-bi : 真アルカリ性種	l-bi : 真止水性種
Ogh-ind : 貧塩不定性種	al-il : 好アルカリ性種	l-ph : 好止水性種
Ogh-hob : 貧塩嫌塩性種	ind : pH不定性種	ind : 流水不定性種
Ogh-unk : 貧塩不明種	ac-il : 好酸性種	unk : 流水不明種
	unk : pH不明種	

環境指標種群

L:最下流性河川指標種, N:湖沼沼沢湿地指標種, O:沼沢湿地付着生種(以上は安藤,1990)  
 S:好汚濁性種, U:広域適応性種, T:好清水性種(以上はAsai and Watanabe, 1995)  
 R:陸生珪藻(RA:A群, RB:B群, RI:未区分、伊藤・堀内, 1991)

VI-10表 珪藻分析結果



VI-34図 主要珪藻化石群集の層位分布

海水-汽水-淡水水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水水生種の生態性の比率は淡水水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は1%未満、+は100個体未満の試料について検出した種類を示す。

#### <SR2>

試料番号16は全体の約70%を陸生珪藻が占める。陸生珪藻は、大きく優占する種はないが、陸生珪藻A群(伊藤・堀内, 1991)の*Navicula mutica*、*Pinnularia borealis*が約10~20%産出する。その他に、流水不定性種(止水域にも流水域にも生育する種)の*Gomphonema parvulum*などが約15%産出する。

なお、陸生珪藻とは、多少の湿り気のある乾いた環境に生育する珪藻であり、中でも、乾燥に耐性のある種がA群とされる。

試料番号10・6は産出珪藻化石数が0~7個体と少ない。わずかに産出する種は、陸生珪藻A群の*Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica*などの陸生珪藻を主体とする。

#### <深堀>

試料番号15・14は産出珪藻化石数が1~3個体と少ない。わずかに産出する種は、水生珪藻で浮遊性種の*Aulacoseira*属である。

## (4) 考察

### (1) 埋土の由来

東京都区部を中心とした武蔵野台地南東部における立川ローム層および武蔵野ローム層について、当社ではこれまでに多数の重鉍物分析および火山ガラス比分析例を得ており、ほぼ層位ごとにその組成の特徴が把握されている。重鉍物組成では、層位推定の指標となるのは、カンラン石・斜方輝石・単斜輝石の3鉍物間の量比関係である。また、火山ガラスの産状では、立川ローム層の最上部に認められる立川ローム上部ガラス質火山灰(UG:山崎, 1978)と立川ローム層の中部に認められる始良Tn火山灰(AT:町田・新井, 1976)の2枚の細粒テフラに由来する火山ガラスの層位的な産状が指



標となる。また、立川ローム層下部および武蔵野ローム層全層位には、火山ガラスからなる細粒テフラは認められていないので、火山ガラスをほとんど含まないという産状も層位推定の指標となる。以上のことから、今回、重鋳物分析を行った各ロームブロック試料の由来は以下のように考えられる。

試料番号1：カンラン石を微量しか含まない重鋳物組成は、武蔵野ローム層下部に認められる箱根東京軽石（Hk-TP）層の降灰層準とその上下の層位でしか認められない。現場所見でも、本試料が採取されたブロックは、断面に見られるその色調や碎屑物の状況から、Hk-TPのブロックである可能性があると思われている。重鋳物組成は、その所見と一致したことから、本試料が採取されたブロックは、Hk-TPのブロックであると考えられる。

試料番号3：火山ガラスを含まないことから、立川ローム層のIX層以下のローム層に由来する。この層位におけるローム層の中で、立川ローム層の最下部（X層）から武蔵野ローム層最上部付近（XI～XII層上部）にかけては、斜方輝石と単斜輝石の量比がほぼ同量である傾向があり、武蔵野ローム層中部付近では微量～少量の角閃石を含み、同層下部では上述のHk-TPの影響により両輝石の量比が非常に高いという傾向が認められている。本試料の重鋳物組成は、いずれの組成とも異なることから、これらの層位以外の層位のローム層（例えばIX層や武蔵野ローム層上部）に由来する可能性がある。

試料番号5：軽鋳物分中に認められた火山ガラスのうち、バブル型はAT、中間型および軽石型はUGに由来すると考えられる。したがって、本試料の由来するローム層の層位は立川ローム層最上部（III層付近）である可能性が高い。重鋳物組成も、ほぼこの層位の傾向と調和する。

試料番号11：試料番号3と同様に火山ガラスをほとんど含まないことから、立川ローム層IX層以下の層位に由来する。さらに、本試料の重鋳物組成は、上述のX層～XII層の層位の傾向に相当することから、本試料の由来は当該層位のローム層であると考えられる。

試料番号15：ローム、砂、暗灰色シルトからなる薄層の版築状の構造が認められた埋土から採取された試料であるから、得られた重鋳物組成は、これらの堆積物に由来する鋳物が混合された結果となる。火山ガラスがほとんど認められないことから、立川ローム層のIX層以下の層位に由来するローム層が使用されていると考えられるが、上述のようにローム層のみに由来する重鋳物組成ではない可能性があるため、詳細な由来は推定できない。

試料番号16：本試料も試料番号15と同様に版築状の構造が認められた埋土から採取されたものであるが、ATに由来すると考えられるバブル型火山ガラスが多量に認められたことから、使用されたロームは、主に立川ローム層のVI層～VII層にかけての層位に由来する可能性が高い。重鋳物組成も、ほぼその層位の組成を反映している。微量含まれる角閃石は、おそらく版築を構成するローム層以外の土に由来するものであろう。

珪藻化石の産状からは、試料番号16で陸生珪藻が多産することより、埋土は比較的乾いた環境下での堆積物と思われる。通常、ローム層などの火山灰由来の風成堆積物からは珪藻化石はほとんど産出しない。よって、産出珪藻化石はローム層以外の土おそらく黒ボク土に由来する可能性か、または、ローム層由来の堆積物が地表面となっている時期が比較的長く、その間に生育した陸生珪藻が検出されたことが考えられる。また、試料番号6の褐灰色粘土や試料番号10の灰色砂質粘土は、以下に示す深掘最下層と同様の堆積物に由来すると考え珪藻分析による検討を行ったのだが、珪藻化石がほとんど検出されず、同様の環境で堆積したものとはいえない。しかし、本台地基底付近に堆積する粘土に珪藻化石は含有されることが少なく、そのような点では調和する結果ともいえる。

以上の結果から、埋土に使用されているロームブロックあるいは版築のローム層は、UGを含む立

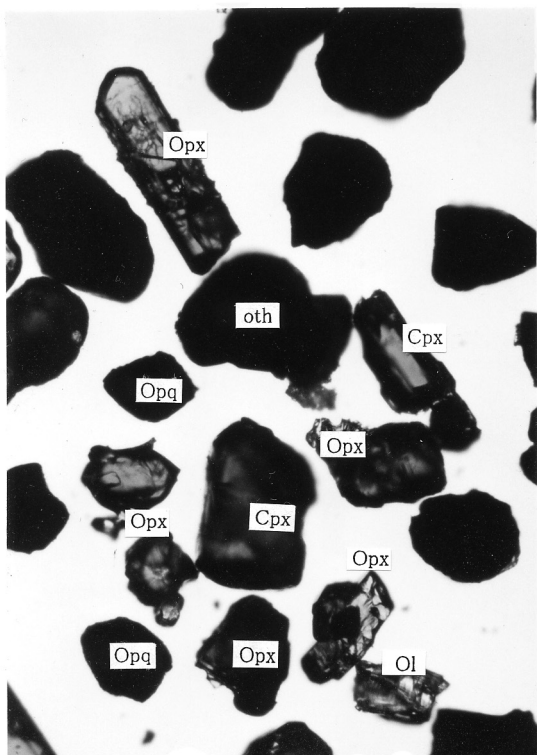
川ローム層最上部からHk - TPを含む武蔵野ローム層下部までの広い層位にわたるローム層に由来していることが確かめられた。さらに基底の粘土の利用も考えられる。このような埋土の状況は、埋積の際の工事手順や埋土の調達などに関わる何らかの事情を反映していると考えられる。現時点では、これ以上の解析はできないが、今後、文献調査等の資料の蓄積により、事情が明らかになる可能性がある。

## (2) 深掘最下層の堆積環境

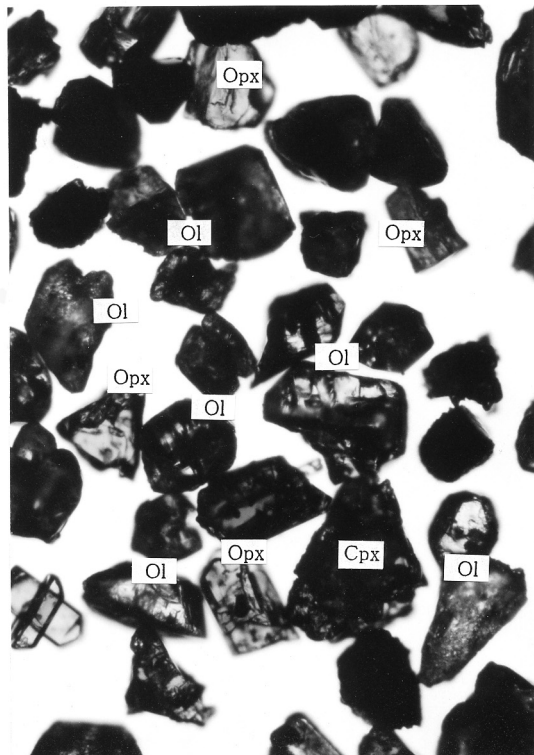
珪藻化石がほとんど産出しないことから、堆積環境の詳細は不明である。しかし、わずかに産出する種の中に、Aulacoseira属などの浮遊性種が見られる。浮遊性種は、常に浮遊生活をし、湖沼などの比較的水深のある止水域で生育する種である。よって、深掘最下部の粘土層は、台地が完全に離水する直前の低湿地に堆積したとされる粘土層である可能性がある。

## 引用・参考文献

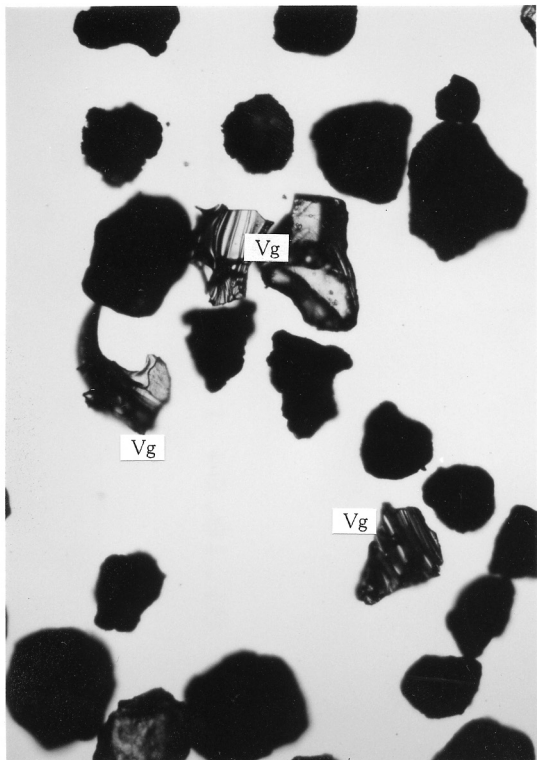
- 安藤一男 1990 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42, p.73 - 88.
- Asai, K. & Watanabe, T. 1995 Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophylic and saproxenous taxa. Diatom, 10, p.35 - 47.
- 原口和夫・三友清・小林弘 1998 埼玉の藻類 珪藻類. 埼玉県植物誌, 埼玉県教育委員会, p.527 - 600.
- 伊藤良永・堀内誠示 1991 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 珪藻学会誌, 6, p.23 - 45.
- 小杉正人 1988 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 第四紀研究, 27, p.1 - 20.
- Krammer, K. 1992 PINNULARIA, eine Monographie der europäischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA, BAND 26, p.1 - 353., BERLIN · STUTTGART.
- Krammer, K. & Lange - Bertalot, H. 1986 Bacillariophyceae, Teil 1, Naviculaceae. Band 2/1 von : Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 876p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. & Lange - Bertalot, H. 1988 Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. Band 2/2 von : Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 536p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. & Lange - Bertalot, H. 1991a Bacillariophyceae, Teil 3, Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. Band 2/3 von : Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 230p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. & Lange - Bertalot, H. 1991b Bacillariophyceae, Teil 4, Achnantheaceae, Kritische Ergänzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. Band 2/4 von : Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 248p., Gustav Fischer Verlag.
- 町田洋・新井房夫 1976 広域に分布する火山灰 - 始良 Tn 火山灰の発見とその意義 - . 科学, 46, p.339 - 347.
- 山崎晴雄 1978 立川断層とその第四紀後期の運動. 第四紀研究, 16, p.231 - 246.



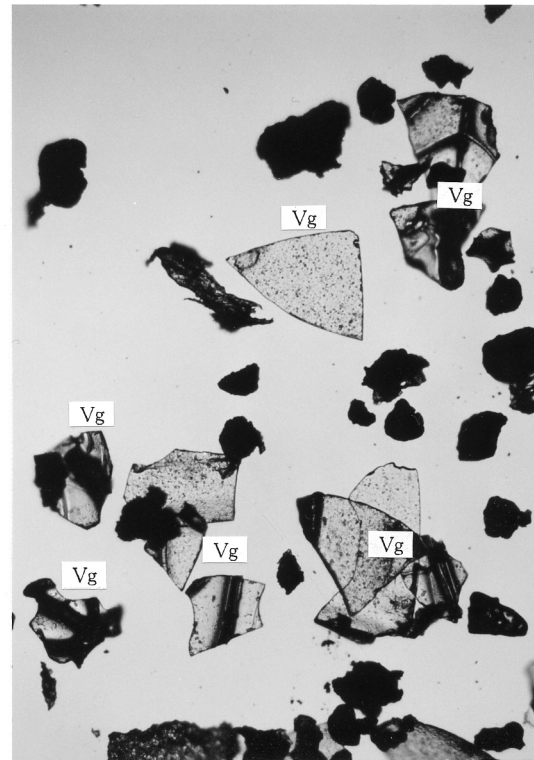
1. 重鉱物 (SR 2 北東壁 ; 1)



2. 重鉱物 (SR 2 北東壁 ; 11)



3. UGの火山ガラス (SR 2 北東壁 ; 5)

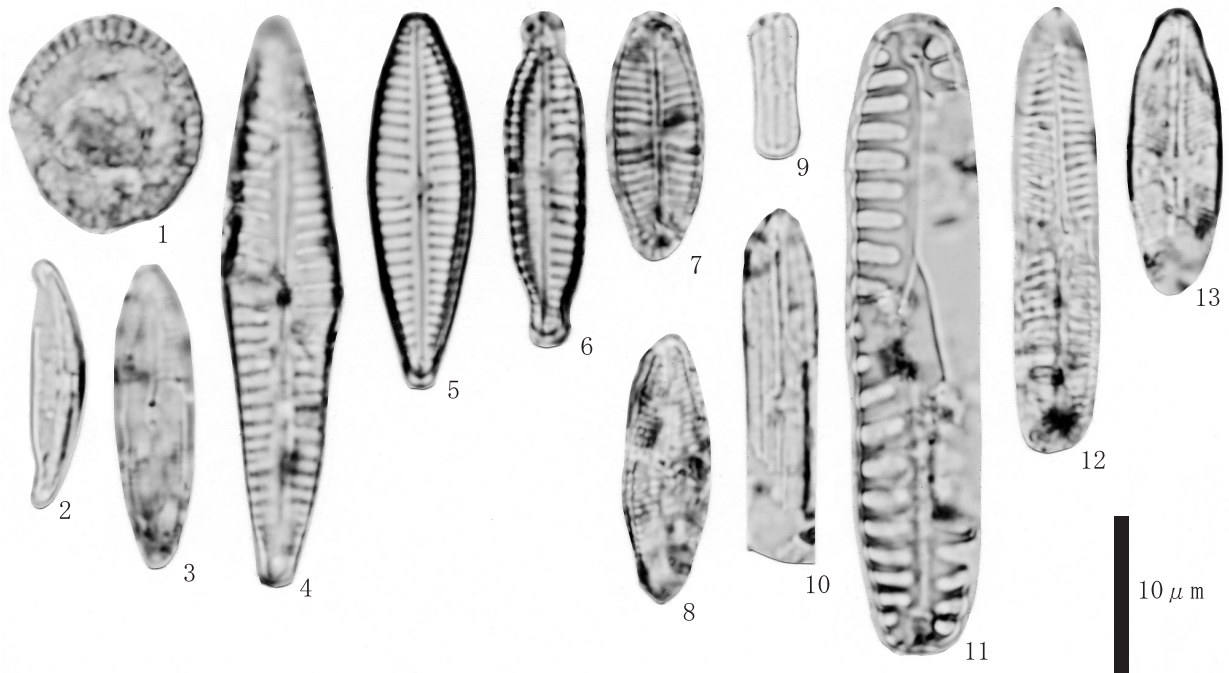


4. ATの火山ガラス (SR 2 北東壁 ; 16)

Ol: カンラン石. Opx: 斜方輝石. Cpx: 単斜輝石.  
Opq: 不透明鉱物 Vg: 火山ガラス. Oth: その他.

0.5mm

VI-35図 重鉱物・火山ガラス



1. *Aulacoseira* sp. (深堀;15)
2. *Amphora montana* Krasske (SR 2 北東壁;16)
3. *Caloneis aerophila* Bock (SR 2 北東壁;16)
4. *Gomphonema gracile* Ehrenberg (SR 2 北東壁;16)
5. *Gomphonema parvulum* Kuetzing (SR 2 北東壁;16)
6. *Gomphonema angustum* (Kuetz.) Rabenhorst (SR 2 北東壁;16)
7. *Navicula ignota* ver. *palustris* (Hust.) Lund (深堀;6)
8. *Navicula mutica* Kuetzing (SR 2 北東壁;16)
9. *Navicula contenta* fo. *biceps* (Arnott) Hustedt (SR 2 北東壁;16)
10. *Neidium alpinum* Hustedt (SR 2 北東壁;16)
11. *Pinnularia borealis* Ehrenberg (SR 2 北東壁;16)
12. *Pinnularia schoenfelderi* Krammer (SR 2 北東壁;16)
13. *Stauroneis obtusa* Lagerstedt (SR 2 北東壁;16)

VI-36 図 珪藻化石

## 第8節 工学部武田先端知ビル地点の成果

### (1) 方形周溝墓の検出、方形周溝墓の移築と土器の修復、方形周溝墓の展示

工学部武田先端知ビル地点では、埋没谷で方形周溝墓2基を検出した。1号方形周溝墓の周溝は4条でそれぞれ独立していた。周溝の覆土の上と周辺部から弥生土器、中央の土壌からガラス小玉、管玉が出土した。

工学部風工学実験室支障ケーブル地点と当地点で方形周溝墓が確認されたことにより、篠原和夫氏が予想した台地の高台に環濠集落、西側の低地に墓域が分布する弥生時代の集落の景観が明らかになった(註1)。周溝から出土した弥生土器については森本幹彦氏が土器の分析、出土状況については筆者が分析を行っている(註2)

土壌から出土した炭化材の $^{14}\text{C}$ 年代測定、土壌分析、ガラス小玉、管玉の材質分析を行った(研究編Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ参照)。ガラス小玉と管玉は、東京大学大学院工学系研究科原子力国際専攻タンデム加速器研究施設でPIXE分析法(荷電粒子励起X線分析 Particle Induced X-ray Emission)によって分析を行った。分析の結果、主成分は $\text{SiO}_2$  77~84wt% (重量%)、 $\text{K}_2\text{O}$  6~11wt%で、Na、Ca濃度が極めて低い典型的なカリ石灰ガラスで、着色成分は、紺色にはマンガン鉱物、青色には銅が使用されていた。古代ガラスの研究成果から、出土資料は主成分、着色成分ともに典型的な弥生時代のガラス材質であることが明らかになった。

方形周溝墓から出土した弥生土器はすべて側面が欠損していた。これは、横たわって埋まっていた土器が、水戸藩駒込邸を東西に区画する道の造成、もしくは明治9(1876)年の射的場建設工事によって、土器が削平されたものと考えられる。

検出した方形周溝墓は、土器の型式から「最初の弥生土器」が発見された向ヶ岡貝塚周辺で生活を営んでいた人々とのかかわりが推定されたことから、埋蔵文化財委員会で検討した結果、移築保存が決定、3次調査で追加調査と合わせて移築を行った(研究編Ⅻ参照)。弥生土器5点(工学部風工学実験室支障ケーブル地点1点含む)は今後の調査室での展示、博物館等からの貸し出しの要望に対応できるように修復し、展示用台座の製作を行った(研究編Ⅰ参照)。土器の側面の欠損は強度を考慮するとすべて樹脂で埋める必要があったが、上記の破損を「歴史的破損」として、側面の修復は行わないで強度が必要な口縁部のみ樹脂充填を行った。

調査後、工学部武田先端知ビルの建設時、工学部武田先端知ビルと低温センターの間、浅野正門から車両のゲートまでの路上に石材を用いた舗装が施された。この路面に色調が異なる石材を用いて1号方形周溝墓を検出位置に実物大で示した。平成18(2006)年には方形周溝墓の舗装横の柱に解説板を設置した。

### (2) 江戸時代

調査地点は、文政9(1826)年『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』によれば、藩邸を東西に区画する道、SR1-1・2を検出した。道の西側は「長屋と役所の区域」(西側台地 2)と「殿舎(御殿)の区域」(東側台地 5)に挟まれた支谷3で、「切手御門」から「殿舎(御殿)の区域」に至る道と庭園を兼ねた区域に該当する(I-4図)。以上の土地利用状況から地下室などの遺構が分布する場所では



方形周溝墓の展示

修復を行った弥生土器  
(前列中央土器は風工学実験室支障ケーブル地点出土)

なかったと考えられる。明治9（1876）年の警視庁射的場の建設に伴ない、道の埋め立てと拡張工事が行なわれ、射的場移転後、周辺の削平と射的場の埋め立てが行われたと考えられる。

### (3) 明治時代

#### a. 射的場

警視庁射的場は明治9（1876）年に建設が開始され、翌年1月演習が開始される。明治15（1882）年、射的場は宮内省用地となり、同年、宮内省用地のまま東京共同射的会社の射的場となる。射的場の東側台地、現在の浅野地区と北側住宅地は引き続き警視庁用地で、明治15（1882）年「弥生舎」の建設と庭園の整備が行われ、明治17（1884）年警視庁の慰霊堂である「弥生神社」が建設される。明治20（1887）年「弥生神社」は芝公園に移転、射的場は明治21（1888）年大森に移転する。工学部武田先端知ビル地点では射的場の「監的場」が建設された窪地（SR1-1・2）、射場の出入口（SR2）を検出し、両遺構の埋め土から小銃の弾丸が出土した。窪地（SR1-1・2）は工学部風工学実験室地点と繋がる。弾丸の着弾を防ぐための窪地で、駒込邸の道の北側を埋め立て、東側に拡張したと考えられる。射的場の発射場は射場の南端、的は射場の北側、工学部武田先端知ビル西側住宅地内に置かれていた。明治7（1974）年『公文録 内務省之部一』の「警視庁射的場建築伺」（註3）は初代警視総監 川路利良が内務卿大久保利通へ宛てた文書で、射的場について「向ヶ岡彌生町一番地ノ長三〇〇ヤルト幅六十ヤルト佛式射的場建築」と記載されている。SR2の路面の幅は約1m、滑り止めのために配置された角材の間隔は約0.5m間隔で、この文書と実際の施設の寸法から射的場は尺貫法ではなくヤードもしくはメートルを単位に設計、建設されたと考えられる。射的場は西南戦争終結以降、演習場から警視庁、陸軍省、海軍省等の射的会会場へと徐々に機能を変化させていく。弾丸にはライフルマークの有る弾丸と無い弾丸が出土した。磯村照明氏によればライフルマークの有る弾丸は、明治13（1880）年の陸軍省の村田式歩兵銃、海軍兵士はピーボデー小銃制定以降の射的演習と射的大会に使用された弾丸、ライフルマークの無い資料は制定以前に使用された弾丸と推定、射的場の機能の変遷を示す資料と推定している（事実記載参照）。



SR1-1



射的場出入口 SR2

#### b. 浅野家敷地

弥生神社、射的場の移転後、現在の浅野地区と隣接する住宅地が浅野家の用地となる（Ⅱ章第6節参照）。射的場の埋め立てと宅地化が行われ、『大正十四年現在彌生號譯概畧圖』（青木家文書）では、ほぼ現在の町割りとなっている。調査地点は、浅野侯爵別邸と役宅、住宅地に位置し浅野家の家紋である「丸に違い鷹の羽」の鬼瓦が出土している。調査区北側では柱穴列、植栽痕を検出。調査区南側では植栽痕と礎石を検出した。青木家文書『明治四十二年調家屋台帳』『向ヶ岡彌生町二・三番地略圖』（昭和11（1936）年3月弥生町会事務所作成）によれば、北側の遺構群が役宅と住宅地、南側が別邸の門を入ってすぐの前庭に該当し、遺構の検出状況は土地利用状況を示している。調査区南側で検出したSB134-1・2、SB175と『明治四十二年調家屋台帳』（青木家文書）の別邸平面図（詳細はⅡ章第6節参照）について遺構軸、位置関係を検討すると、検出した基礎は赤線で描かれた別邸の「増築」部分と考えられる。

#### 註

- 1 篠原和大 1999 「V-2タイプサイトの実情-弥生町遺跡-」東京都教育庁生涯学習部文化課編集・発行『文化財の保護 第31号』
- 2 原祐一・森本幹彦 2002 「東京大学本郷構内の遺跡 工学部武田先端知ビル地点で検出した方形周溝墓と遺物」『東京考古』第20号 東京考古談話会 pp.59-70
- 3 「警視庁射的場建築伺」明治7年『公文録 内務省之部一』本館2A-009-00、公01871100、リール番号 023000-0650

報告書抄録

ふりがな	とうきょうだいがくほんごうこうないのいせき あさのちく1 じょうほうきばんせんたーへんでんしつ1ちてん・こうがくぶかぜこうがくじっけんしつちてん・こうがくぶかぜこうがくじっけんしつししょうけーぶるちてん・こうがくぶかぜかんきょうしみゆれーしょんふうどうじっけんしつちてん・こうがくぶたけだせんたんちびるちてん							
書名	東京大学本郷構内の遺跡 浅野地区 I 情報基盤センター 変電室 1 地点・工学部風工学実験室地点・工学部風工学実験室支障ケーブル地点・工学部風環境シミュレーション風洞実験室地点・工学部武田先端知ビル地点							
副書名								
巻次								
シリーズ名	東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書							
シリーズ番号	9							
編著者名	原祐一（編）、大貫浩子、阿部常樹、石井龍太							
編集機関	東京大学埋蔵文化財調査室	所在地	〒153-8904 東京都目黒区駒場4-6-1 駒場リサーチキャンパス内 03-5452-5103					
発行機関	東京大学埋蔵文化財調査室	所在地	〒153-8904 東京都目黒区駒場4-6-1 駒場リサーチキャンパス内 03-5452-5103					
発行年月日	平成21年12月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
とうきょうだいがくほんごうこうない 東京大学本郷構内の遺跡 浅野地区 （本郷台遺跡群・弥生町遺跡群） 工学部武田先端知ビル地点	とうきょうと 東京都 ぶんきょうく 文京区 やよいちよう ちよ 弥生町2丁 うめ ほん 目11番16 ごう 号	13105	47 ・ 28	32° 42' 56" ～ 32° 42' 57"	139° 45' 47" ～ 139° 45' 49"	平成13年6 月4日～8月 7日、平成 13年11月28 日～12月28 日	740㎡	事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
東京大学本郷構内の遺跡 浅野地区 （本郷台遺跡群・弥生町遺跡群） 工学部武田先端知ビル地点	武家屋敷 （水戸藩 駒込邸）、 射的場	弥生、近世、 近代	方形周溝墓、建物跡、 溝、井戸、土坑、小穴、 射的場関連施設	弥生土器、ガラス小 玉、管玉、陶磁器、土 器、金属製品、ガラス 製品、骨角製品、瓦、 動物遺体				



## 遺跡公開・講演等

年月日	種別	遺跡・史跡	講演等	参加者数
1999.1.25	遺跡見学会	工学部風環境シミュレーション風洞実験室地点		20名
2001.8.3	遺跡見学会、講演会	工学部武田先端知ビル地点	「弥生時代のガラス」(演者：小泉好延)	400名
2001.7.19	遺跡見学会	工学部武田先端知ビル地点		
2001.7.24	遺跡見学会	工学部武田先端知ビル地点		
2001.12.15	遺跡見学会	工学部武田先端知ビル地点	第3回考古科学シンポジウムで遺跡公開	200名
2002	工学部武田先端知ビル地点1号方形周溝墓公開		駒場Ⅱキャンパスオープンキャンパスで移築資料公開	
2005.3.5	講演会	文京ふるさと歴史館「平成16年度学習企画展－弥生町遺跡発見120周年記念－文京むかしむかし」	「東京大学構内における弥生遺跡の調査」(演者：原祐一)	50名
2006.4.7	史跡見学会	浅野地区史跡	浅野地区に設置された遺跡解説板の説明	8名
2007.12.2	遺跡見学会	浅野地区、弥生地区	集落研究会例会、弥生町遺跡、「向岡記」碑の案内・解説	13名
2008.1.17	授業	追分新国際宿舍新営地点、浅野地区、弥生地区	都立向丘高校2年生日本史選択授業	30名
2008.2.23	授業	追分新国際宿舍新営地点、浅野地区、弥生地区	学習院大学岩淵令治ゼミ見学会	15名
2008.2.21	授業	浅野地区他	都立向ヶ丘高校2年生日本史選択授業「東京大学浅野地区と幕末維新」(演者：原祐一)	30名
2008.10.12	大洗町の歴史と自然を楽しむ会見学会		茨城県立歴史館特別展「幕末日本と徳川齊昭」展示解説	13名
2009.2.19	授業	浅野地区他	都立向丘高校2年生日本史選択授業	23名
2009.3.4	鹿児島県鹿児島市立龍中学3年生修学旅行フィールドワーク	浅野地区他		120名
2009.3.21	日本石造文化学会史跡見学	浅野地区他		20名
2009.6.27	彰考館徳川博物館友の会史跡見学	浅野地区他		20名
2009.9.16	松戸シティガイド研修会	浅野地区		40名
2009.9.26	講演会	浅野地区他	明治大学友の会・明治大学博物館主催「日本考古学2009」 「向岡記」碑と弥生土器の発見」(演者：原祐一)	

## 保存修復・展示施設

年月日	種別	設置場所、収蔵場所
2002	工学部武田先端知ビル地点1号方形周溝墓の移築	茨城県柿岡倉庫
2006.3	工学部武田先端知ビル方形周溝墓、弥生二丁目遺跡解説板設置(協力)	工学部武田先端知ビル、弥生二丁目遺跡
2006.3	文京区、浅野地区史跡解説版設置(協力)	弥生町内
2008.8.8	「向岡記」碑の保存・展示	東京大学情報基盤センター
2008	浅野地区出土弥生土器の保存修復	東京大学埋蔵文化財調査室

資料の貸出

年月日	展示企画	貸出し資料
2005.2.12～3.21	文京区ふるさと歴史館「弥生町遺跡発見120周年 文京区むかしむかし展」	工学部武田先端知ビル地点出土弥生土器
2006.10.14～12.3	戸田市郷土博物館平成18年度第22回特別展「時は 弥生から古墳へ」	工学部武田先端知ビル地点出土弥生土器
2008.10.11～11.24	茨城県立歴史館特別展「幕末日本と徳川齊昭」	「向岡記」碑拓本、出土資料、絵図

新聞・雑誌掲載

年月日	新聞・雑誌	記事
2001.10.15	地域雑誌谷中根津千駄木	「弥生町の発掘から 遺跡調査で知る古の」 pp.16-18
2002.1.10	向ヶ丘弥生町会ニュース	向ヶ丘弥生町会ニュース第435号記事
2002.7.16	夕刊読売新聞4面	「手帳 弥生の地 貴重な遺構」
2003.12.20	朝日新聞(夕刊)4面	「現在場所考察 東京・弥生」
2005.4.26	朝日新聞25面	「文化 再考弥生町遺跡 発見から120周年 上」
2005.4.27	朝日新聞33面	「文化 再考弥生町遺跡 発見から120周年 下」
2006.7.20	地域雑誌谷中根津千駄木 其の八十四	原祐一2006「弥生町特集補遺の補遺 向ヶ岡弥生町の歴史－弥生時代と明治時代の歴史－」
2006.10.31	東京大学新聞4面	「東大地下を探る 本郷キャンパス地下遺跡編」
2007.1.12	読売新聞19面文化欄	片岡正人「弥生土器 発見地に新説」
2007.1.14	東京新聞サンデー版	西川栄明「地名は生きる 東京都文京区弥生」
2007.2.28	地域雑誌谷中根津千駄木 其の八十六	仰木ひろみ2007「弥生町特集補遺の補遺の補遺 新説弥生土器の発見場所－原祐一さんに聞く」 pp.24-26
2008.6.10	赤門学友会報 懐徳No.12	「本郷キャンパス構内その9 知のプロムナード（創立130周年記念事業） ②逍遙 本郷の風景の中に佇みながら 農の道 遺跡と先端知の道」 p.11
2008.2.22	読売新聞朝刊17面文化	片岡正人「歴史 記者ノート 徳川齊昭あつての「弥生時代」」
2008.9.3	朝日新聞朝刊22面文化	渡辺延志「「弥生」の言葉生む？徳川齊昭の碑文修復」
2009.5.19	東京大学新聞	「弥生土器発見1884@東大付近 唐代に眠る原始の記憶」



工学部武田先端知ビル方形周溝墓展示の見学  
日本石造文化学会(2009年3月21日)



工学部武田先端知ビル遺跡公開(2001年8月3日)

## 引用・参考文献

- 葵航太郎・木村一彦 2001 『オールド大倉・東陶・名陶 大正・昭和モダン食器』
- 磯村照明 2003 「会員頒布資料No.12 東京都内で出土した鉛製弾丸についての考察」倉持丸網、ジャパン・カートリッジ・コレクターズ・アソシエーション 附属弾薬研究センター発行p.10
- 伊藤博之・小泉好延・原祐一 2000 「江戸期四文銭の科学的研究」産業考古学会『産業考古学会第24回大会（2000年度）総会研究発表講演論文集』pp.21 - 24
- 伊藤博之・小泉好延・原祐一 2000 「近世の真鍮四文銭における亜鉛の研究 - 製造および亜鉛輸入文献による考察 -」産業考古学会『産業考古学会第24回大会（2000年度）総会研究発表講演論文集』pp.25 - 28
- 宇井義典 2009 「第3章 まとめ」『B-86 東京都文京区 弥生町遺跡群第2地点』株式会社裕企画、東京都文京区教育委員会pp.8-9
- 大岩基秀 1996 『小火器弾薬年表 第1巻 日本小火器弾薬年表』J.C.C.附属資料収集保管センターpp.10 - 11
- 加藤 晃 1989 「江戸時代の瓦における江戸式の展開 - 軒平瓦・軒棧瓦の瓦当紋様の変遷」『史学研究集録』十四 國學院大學日本史学専攻大学院会
- 加藤 晃 1992 「江戸瓦の変遷 - 加賀藩本郷邸出土の瓦について -」『國學院雑誌』第九十三卷第十二号 國學院大學
- 香取祐一 2000 「東京大学医学部附属病院病棟地点の土器廃棄場について」『東京考古 第18号』東京考古談話会
- 金子智 1996 「江戸遺跡出土資料に見る近世軒平瓦・軒棧瓦の地方色」『古代』第101号 早稲田大学考古学会
- 金子 智 2003 「第8節 瓦類」『東京都千代田区 東京駅八重洲北口遺跡』千代田区東京駅八重洲北口遺跡調査会編
- 金子 智 2007 「江戸の瓦」『考古学ジャーナル』2007年 1月増大号
- 喜田川守貞 1853 『守貞謄稿』（朝倉治彦・柏川修一編1992 東京堂出版）
- 喜多村信節 1830 『嬉遊笑覧』日本随筆大成別巻第9巻 1996 吉川弘文館
- 国立歴史民俗博物館 中世食文化の基礎研究 71集
- 佐賀県立佐賀上本歴史館 2005 『「大鑑・巨砲ヲ造ル」江戸時代の科学技術』p.44
- 齊藤良輔 1972 『日本のおもちゃ遊び』朝日新聞社
- 桜井準也 2006 『ガラス瓶の考古学』六一書房
- 新宿区遺跡調査会 1996 『新宿区百人町三丁目遺跡Ⅲ』
- 鈴木潔監修 2008 『オールドノリタケと懐かしの洋食器』東方出版
- 瀬戸市歴史民俗資料館 2002 『大正二年のせともの屋』
- 高野和人 1987 『『征西戦記稿』解説』1987『征西戦記稿 附録』（『征西戦記稿』参謀本部陸軍部1887（明治20年）の再販）発行所青潮社pp. (1) - (29)
- 立花実・秋田かな子 2000 「第3節 方形周溝墓の分析」『王子台遺跡 第三巻 弥生、古墳時代編』東海大学校地内遺跡調査団
- 丹波基二 1971 『家紋大図鑑』樋口清之監修 秋田書店
- 坪井利弘 1977 『図鑑瓦屋根（改訂版）』
- 東京大学遺跡調査室 1989 『東京大学本郷構内の遺跡 理学部7号館地点』

- 東京大学遺跡調査室 1990 『東京大学本郷構内の遺跡 法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡』
- 東京大学遺跡調査室 1990 『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院地点』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1990 『東京大学本郷構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館地点』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1996 『東京大学構内遺跡調査研究年報』1
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1999 『東京大学構内遺跡調査研究年報』2
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2002 『東京大学構内遺跡調査研究年報』3
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2004 『東京大学構内遺跡調査研究年報』4
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2008 『東京大学構内遺跡調査研究年報』6
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2005 『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院外来診療棟地点』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2006 『東京大学本郷構内の遺跡 工学部14号館地点』
- 原 祐一 2006 「向ヶ岡弥生町の歴史－弥生時代と明治時代の遺跡－」地域雑誌『谷中・根津・千駄木』  
(季刊) 其の八十四
- 原 祐一・森本幹彦 2002 「東京大学本郷構内の遺跡 工学部武田先端知ビル地点で検出した方形周溝墓  
と遺物」『東京考古』第20号 東京考古談話会 pp.59 - 70
- 福田 聖 1991 「方形周溝墓と儀礼－鍛冶谷、新田口遺跡12号方形周溝墓の死者儀礼」『埼玉県考古学論  
集設立10年記念論文集』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 藤本 強 1990 「第1章 調査の経過と概要 第二節 位置と環境」『東京大学本郷構内の遺跡 医学部  
附属病院地点』
- ポーラ文化研究所編 1986 『モダン化粧史 装いの80年』
- 松井かおる 1991 「型抜き遊びについて－遺跡出土メンガタから現代のカタまで－」『江戸在地系土器研究  
I』江戸在地系土器研究会
- 水野信太郎 『日本煉瓦史の研究』法政大学出版
- MIHO MUSEUM 2006 『和ガラスの心』
- 横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター編 1996 『縄文時代草創期資料集』横浜市歴史博物館
- 吉田邦夫 1997 「土製品に表面付着物について；X線分析による分布」『駒込縄手御先手組屋敷』本文  
編都内遺跡調査会
- 東都製靴工業協同組合HP 靴の歴史 (<http://www.ttkm.jp/>)
- 武家家伝HP 浅野氏 ([http://www2.harimaya.com/sengoku/html/asano\\_k.html](http://www2.harimaya.com/sengoku/html/asano_k.html))
- 神奈川県警察HP (<http://www.police.pref.kanagawa.jp/mes/mesa4913.htm>)
- 『ディズニーアニメーション大全集』2008 講談社